
雪月花日月抄

若年寄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪月花日月抄

【Nコード】

N7065X

【作者名】

若年寄

【あらすじ】

明治時代黎明期の東京にて剣術道場を営む霞三姉妹はいきなり勇者として異世界へと召喚される。

初めこそ動揺し困惑したものの、幼い頃より剣術修行によって培われた精神力は伊達ではなく、持ち前の正義感と先祖より伝わる裏稼業の心構えから異世界の危難へと立ち向かう。

ありふれた異世界召喚物であると同時に勧善懲悪の剣客物としての面も持つ物語にしたいと筆者は思っています。

正義感があっても正義を気取らず、心に狂気と悪辣さを内包しつつも決して道へと踏み外すまいと頑張る三姉妹の旅に是非ともお付き合ってください。

第壹章 見参！ 雪月花の三姉妹

私こと霞雪子^{かすみゆきこ}は怯える妹達を慰めるべくそつと腕の中に抱く事しかできなかった。

まず状況からしてよく判らない。周りを大勢の人間に取り囲まれ、私達を品定めするかのような視線に晒されている事だけが判るだけ。けど果たしてここがいったいどこなのか、周りの人間が何者なのかようとして知れない。先ほどから耳を澄ましてみても有益な情報が入ってこなかった。

「女だと?! 大司教様が命を捨てる覚悟で秘術を施されたというのに召喚されたのが……希望の勇者がこんな小娘三人だというのか?!」

ヒジュツ? ショウカン? ユウシャ?

やけにはつきりと聞こえた吐き捨てるかのような声に聞き慣れない単語を拾い上げたのが却って私を混乱させた。

“様”と敬称がつく以上、それなりの地位らしいダイシキョウという人の仕業で私達はここにいるのだろうか?

「雪子姉様……」

下の妹の桜花^{おうか}の不安げな声に私は抱きしめる手に力を込める事しかできない。なんて不甲斐無い姉なのだろう。

思わず唇を噛み締める私の腰を何度も軽く指で突く感覚に私は上の妹、月夜^{つきよ}へと意識を向ける。

(姉様、この建物は驚くことに全て石で造られています。それを金銀とギヤマンで装飾されているようです)

月夜は突く回数や速さの緩急をもって『言葉』として私に状況を教えてくれる。

私は月夜の肩を抱いた手にある一定の緩急をつけて力の加減をする。

（周りの人達がどういう人が判る？ そうね……例えば容姿とか）

（容姿ですか？ 申し訳ないのですが、説明がしにくいです。初めて見る服を着ていますので……白を基調とした体には大きめの服を着ているとしか云いようが）

月夜の小さく力が弱くなっているのは私に正確な情報を与えない事を申し訳ないと思っっているのだろう。

私は月夜の肩に置いてある手を彼女の頭に乘せた。すると月夜は私の腰にしがみついていた。やはりこの子も怖いのだろう。

これ以上妹達を怯えさせる事が忍びなく思った私は状況を打破すべく口を開いた。

「貴方達はいったい何者なのですか？ そして、ここはどこなのですか？」

私の問いかけへの返事は動揺した様子がありありと判るとよめきだった。

「本当に勇者なのか？ 勇者なら何故我々に希望をもたらす言葉を投げかけてくれない？」

どよめきの中に聞き取れた声に私はすかさず反応する。

今は少しでも情報が欲しかった。早く妹達の不安を取り除いて

やりたかった。

「ユウシャ？ ユウシャとは何の事ですか？ 私は霞雪子、この子達は妹の月夜と桜花、ユウシャと呼ばれる筋合いはありません」

「嘘だ！ 大司教様が命懸けで呼び下されたのだ！ 勇者でなければ何だと云うのだ？！」

「そうだ！ 光の魔方阵より現れたお前達……いや、貴女達は勇者でなければならぬのだ！！」

それを切っ掛けに周りの人達は私達をユウシャだユウシャだと、まるでそう思い込もうとするかのように叫び始めた。

その声は石でできていると云う建物さえも揺るがす程のものだった。大きさではない、彼らの想いが地を揺るがしていた。

「雪子姉様……怖いよ」

この異常とも云える雰囲気、いえ彼らの心の波動を感じ取って桜花が涙声で私を呼ぶ。

同じく月夜も私と桜花から離れまいと必死に抱きしめてくる。

「勇者よ、いや勇者達よ。どうか我らの為に魔將軍ヴェルフエーゴールを倒してくれ！！」

私はその言葉に呆れた。状況は未だによく判らないけど、私達にマシヨウゲンべる何某を何とかがしよとしている意図は伝わった。声から判断すると周りの人達は三十代から四十代くらいの男の人が十数人、それが私達に何者かと戦えと云ってきている。

私は思わず激昂して叫んでしまっていた。

「これは何かの冗談ですか？　ならば度が過ぎてます！　見てください、この子達を！！」

私は震える妹達を彼らからかばうように抱きしめる。
そして大切な妹達を怯えさせる人達を睨みつける振りをする。

「なんと！　勇者ともあろう者が震えているのか？！　なんとも情けない……貴方達は我らに残された唯一の希望なのですぞ！！」

眩暈がした。

恐らくは私達に戦いを強要しようとして自分達は恐らく動くつもりもないだろうに、何故こんな事が云えるのだろうか？

気が付くと私は泣いていた。悔し涙だ。

私達が、否、私はともかく妹達が何故こんな理不尽な目にあっているのか判らないし、それが許せなかった。

「勇者よ、泣いてくれるな。希望の光が涙に濡れるなどあってはならぬ！」

「黙って聞いていれば勝手な事ばか「これは何の騒ぎですか？」」

私の怒りが爆発する寸前、凜とした声に遮られる形で爆発は抑え込まれた。

同時に周りで一斉にかしづく気配がして、場は静まりかえった。静まったと云うよりむしろ清浄な気に洗われたと云った表現が合っていた。

私の心から怒りが消えている事に気付いた時、妹達から伝わってきていた怯えまでもが無くなっていった。

「おお、姫巫女様。出迎えもせず、ご無礼仕りました」

この雰囲気、気配はヒメヒコ様と呼ばれた人から発せられている事は容易に察せられた。

そのヒメミコ様はしどろもどろに弁明する男の人の言葉を無言の圧力で黙らせると、一步一步ゆっくり私達に近づいてくる。

ヒタヒタという足音に、「あ、裸足」と私は暢気な感想を持った。

「貴女達ですね？ 大司教様が命を賭して召喚されたと云う「ユウシャ」ではありません」

私は彼女を先制してユウシャという単語を封じた。

よくは判らないけど、彼女にまでユウシャと認定されるのはたまたまなく恐ろしい事ような気がした。

「私は霞雪子、そして月夜と桜花の二人は私の妹です。決してユウシャなんかではありません」

「解りました。ではユキコ様、ツキヨ様、オウカ様。まずはこの者達の無礼、貴女達を勝手に召喚しあまつさえ怯えさせてしまった事をお詫びさせてください」

ヒメミコ様が侘びた直後、大きなどよめきが起こった。

「ひ、姫巫女様、なんという事を……」

「勇者である事を否定する輩に頭を下げる事などありません！」

言葉から察するとヒメミコ様が私達に頭を下げたらしく、周りの人達の動揺が伝わってくる。

ヒメミコ様はそんな彼らに「鎮まりなさい」と一声をかけた。
一喝ではなく静かな一声。それだけで彼らは鎮まった。

「あら、そう云えば私も名乗りを上げていない非礼をしていましたね」

ヒメミコ様は私達の前でしゃがむ、いえ、跪く気配を見せて私の右手を取った。

「私は聖都『スチューデリア』の皇女にして星神教の巫女……名を『アリーシア』ウルススチューデリア』と申します」

チュツという音と共に私の右手の甲に柔らかい何かが触れる。

それがヒメミコ様……アリーシア様の唇だと察した瞬間、私の顔がにわかに火照った。

「え？ ま、まさか……く、口づけ?!」

この世に生を受けて早十八年、しかし未だにそのような行為をした覚えがなく自分で云うのも情けないけど免疫の無い私は卒倒しかけた。

私の意思がかるうじて飛ばずに済んだのは、アリーシア様に私の右手を奪われた格好の桜花が痛いくらいに私の腰を抱いているからに他ならない。

「それゆえに皆様から姫巫女と呼ばれておりますの」

私の醜態に気付いているのかいないのか、アリーシア様は穏やかな口調で自己紹介を終えた。

そして月夜と桜花にも同様に、口……洗礼を与えている気配が

伝わった。

「さあ、ここにおいてもユキコ様達に利はないと思われます。申し訳ありませんが、私の私室までご足労願えますか？」

「は、はあ……」

私は生返事しかできない。

スチューデリアなんて国に聞き覚えはないが、仮にも一国の国家元首のご息女らしい人に一介の道場師範がして良い態度ではないだろう。

しかし、頭が巧く働いてくれなかったのだ。

「では、参りましょう」

「わかり……ぎよ、御意」

（姉様）

我ながら礼節に不慣れな一（一応、作法だけは身に付けているが）自分が情けなくなってくる。

月夜の指も心なしに責めているようで私は更に恐縮した。

「まあ、ユキコ様は我が国の臣下では無いのですから、そのような畏まった言葉は私には必要ありませんことよ？」

吃音混じりの私の返事にアリーシア様は気を悪くするわけでもなく、クスクスと笑うだけだった。

「さあ、お茶とお菓子を召し上がりながら我が国の事、そして私達

の世界の事を聞いて頂ければ幸いです」

「はい、お言葉に甘えさせて頂きます」

私はようやく得られた安心感を逃さぬようはっきりと答えた。

「月夜、桜花、行きましょう」

（はい、姉様）

「雪子姉様……はい」

桜花が私に赤櫓の六角杖を渡してくれる。

「ありがとう、桜花」

私は桜花の頭を撫でた後、杖を先に出して障害物の有無を確かめながらアリーシア様の方へ一步を踏み出す。

「まあ、ユキコ様……」

「お察しの通りです」

私の瞼は常に閉じられている。そう私の目は生来光を宿していない。

『無明の雪子』の二つ名を持つ私、霞流剣術師範・霞雪子は盲目だった。

二つ名と云えば余談ながら、私の課す修行の厳しさからなのか、気性のせいなのか門下生達からは陰で『姫信長』などと不名誉な二つ名を頂戴していたりする。

アリーシア様の私室へと通された私達は以前、陸蒸気に乗って行った横浜で一度飲んだだけの紅茶となんとバタ臭い湿気た煎餅のような食感の焼き菓子を振舞われた。

私は一枚だけ頂いた後は紅茶の香りを愉しむだけにとどめた。紅茶にも口をつけていない。私は基本的に甘い物が苦手で砂糖を入れたお茶などとても飲めなかった。

「雪子姉様、このクッキーってお菓子、美味しいね♪」

ただ桜花の嗜好には合っていたようで恐ろしい勢いで食べている事は咀嚼の音で察せられた。

月夜が恐らく桜花を窘めたのだろう、「食べてる時に人を突くなんて月夜姉様、はしたないよ？」と逆に返されていた。

（姉様……）

（気持ちは解るけど何かを食べている桜花は何も聞こえないでしょう？）

（それはそうですが、長じて恥を掻くのは桜花ですし、ひいては霞家の恥に）

私と月夜は別に突き合っているわけではなく、小さく奥歯を噛み合せた音で会話をしていた。

十八の娘と十六の娘が突き合いなどお茶の席でしょうものなら、いい歳して巫山戯合^{ふざけ}う莫迦姉妹という不名誉な称号を受ける事請け合いだろう。

「あの……ユキコ様のお口には合いませんでしたか？」

その時、アリーシア様がそう訊いて来た。

ただ声は穏やかなので不安なのか不機嫌なのかは察せられなかった。

「あ、いえ……つい今の私達の状況を考え込んでしまつて……折角、お茶会を催して頂いたというのに申し訳ありません」

そう云つて私は頭を下げた。

間違つても、甘つたるい物のは苦手とは云わない。私とてそのくらしいの処世術は身に着けている。

「まあ、私とした事が……こちらこそ胸中を察せず申し訳ありませんでした」

前言撤回。

相手に頭を下げさせて何が処世術か。私はアリーシア様に対して得もいわれぬ罪悪感に襲われた。

「そうですわね。そろそろ私の世界についてお話をさせて頂きますわ」

「宜しく願います」

私はそう云いながら、私の分のクッキーを皿ごと桜花と月夜の席の間に置いた。

聞いた話を纏めると次のような事が解った。
まずこの世界は私達が住む世界とはまったく異なっていた。

世界地図を見せて頂いた月夜の説明によると、この聖都スチューデリアが中心に位置する大きな大陸、ココガメイン大陸を初め4つの大陸で構成されていた。

ココガメイン大陸はその4つの大陸の中でも一番巨大な大陸で、陸地の四割がこの大陸で占められているという。

そのココガメイン大陸から大きく西に離れた位置に存在する菱形のアジトアルゾ大陸がある。そこが問題なのだと云う。

そこにはかつて風光明媚にして天然の要塞とも呼べる険しい山や断崖絶壁に強大な軍事力を兼ね備えたスチューデリアとの同盟国フレンディアがあったらしい。

しかし突如現れた謎の軍隊ガルスデントとそれを率いる件の魔将軍ヴェルフェゴールによって滅ぼされてしまったそう。

その侵略の凄まじさは筆舌に尽くしがたいほどで、生き残った人間はほぼ皆無と云われ、女子供さえも無残に引き裂かれて死んでいったらしい。

フレーンディアを滅ぼしたヴェルフエゴールは焼け崩れたフレーンディア城の跡地に醜悪な漆黒の城を築き、そこを居城とした。そこで彼は世界中に向けて宣言したと云う。

『我は腐りかけたこの世界の浄化の為、ここを拠点として各国を、人間を攻め滅ぼす』と。

宣言を受けて、まず同盟国であったスチューデリアがアジトアルゾ大陸に軍を派遣した。

ちなみにスチューデリアの南には巨大な運河を挟んで強力な水軍を保有するカイゼントーヤという国があるそうだ

外洋へ軍を派遣する事もあって彼の国に協力を要請し、快諾を得たスチューデリアはヴェルフエゴール城を幾重に包囲する事に成功した。

いざ同盟国の仇討ちと一斉攻撃を仕掛けようとしたその時、アジトアルゾ大陸が黒い霧に覆われた。

すると兵士達の間には全身が少しずつ腐っていくという恐ろしい疫病がにわかに流行り、まともに行軍することが叶わなくなった。

その隙を突くように霧が形を成し、狼、鳥、大蜥蜴といった姿に変じて兵士達に襲い掛かった。

疫病が蔓延する中で戦えるわけもなく、スチューデリア・カイゼントーヤ連合軍は敗走を余儀なくされた。

続いてスチューデリアの西に存在する強大な騎士団や魔術師一（妖術使いの類か？）団を多数抱える軍事国家ガイラントがアジトアルゾ大陸を攻めた。

スチューデリアは進軍の準備を進めるガイラント王に再三再四、黒い霧の警戒を呼びかけたそうだが、ガイラント軍は耳を貸さずに進撃したと云う。

そして案の定、疫病を引き起こす黒い霧に進軍を阻まれ先のスチ

ユーデリアとカイゼントーヤの二の轍を踏む形で僅か半月でガイラント軍は撤退した。

私が思うに、この戦いは己が軍事力に任せてスチューデリアの忠告を無視したガイラント王の慢心が最大の敗因だろう。

そして第三陣を送る国は未だ無く、黒い霧対策に各国が四苦八苦しているのが現状だと云う。

「なるほど、この世界の状況は大まかではありますが理解できませんでした」

私は世界地図を空想しながらそう云った。

「私の拙い説明で巧く伝わるのか不安でしたが、そう云って下さって幸いです」

アリーシア様は本当にほっとした様子で答えてから話を続けた。

「世界でも指折りの強さを誇るガイラントまでもが敗北して以降、二の足を踏む我々を嘲笑うかのようにヴェルフエゴールは世界中に『楔』を打ち込んだのです」

「クサビ？」

私はその言葉に奇妙な忌まわしさを感じて鸚鵡返しに訊ねた。

「私達の世界には“悪しきモノ”を封じた禁忌の地『要』と云うモノがいくつか存在し、私達は敢えてその近くに町を、国を作り『要』を守護してきたのです。

そしてヴェルフエゴールは『要』に『楔』という忌まわしい呪具を打ち込むことで封印を弱め“悪しきモノ”を解放しようとしてい

るのです」

アリーシア様の声は苦渋に満ちていた。

「今は僅かにできた隙間から害の少ない小型の魔物が這い出てくる程度ですが、長じれば人の手には負えない、いいえ、世界をも滅ぼしかねない強大な魔物までもが甦ることでしょう」

「世界を滅ぼすって……その『楔』というものは抜くなり壊すなり出来ないのですか？」

私の問いにアリーシア様はしばらく無言だったが、衣擦れの音がらして首を左右に振ったのだろう。

ふと思い出したようにアリーシア様が慌てた様子で私の手を取った。

「も、申し訳ありません。私としたことが……」

私は思わず苦笑する。

私の目の事を忘れて、ただ首を振って見せただけだった事への謝罪だと判ったから。

「お気になさらないください。今の沈黙が否定の意味であることは察しましたし、その……云い方は悪いですが、そう気使われる方が辛いです」

「解りました。それでは、話を続けます」

私は大きく頷いて見せた。

「ユキコ様の仰るように『楔』の除去や破壊を試みた者は少なくありません。しかし触れるどころか近づく事さえも叶わなかったそうです。」

何故なら『要』の隙間から彼のアジトアルゾ大陸を覆う黒き霧と同じモノが噴き出し、近づく者は全て彼のアジトアルゾ大陸を蝕む恐ろしい病に倒れてしまうのです」

そもそも『楔』自体、下手な城くらいは軽く見下ろせるほどの巨大さで、強力な炸裂弾や大砲をもつてしても破壊が困難な代物であるらしい。

むしろ砲撃の爆発によって『要』の隙間が余計に広がってしまい状況を悪化させてしまった例がガイラントを初め、世界各地で多数報告されたそうだ。

「誰もが『楔』の破壊を諦め絶望しかけた時、私どもが教えを請うている星神教の大司教様が太陽神アポストルファより希望の神託を賜ったと仰られたのです」

私はどうしても星神教というものが気になり、掻い摘んだ説明を求めるのアリーシア様は要点だけを纏めて教えてくれた。

まず夜空に輝く星一つ一つが神で、己が宿命を授けた者一（一つの星につき一人の者が宿命を授かる）が夜の闇で迷わないよう天空より見守っていると云う考え方であるらしい。

星神教の最高神は先の話にもあった太陽神アポストルファで、彼が昼間輝き続ける事で信徒は皆安心して生活できるので他の神々は昼間は休んでいると云う。

続いてアポストルファの補佐役にして彼の妻、月の女神アルテサクセスがいて、夜の間は神々の監視をしたり自ら輝いて彼らを激励しているということだ。

星神教の教徒は日々の営みが出来るのは、昼に夜に自分たちを見

守ってくれている神々が授けてくれた宿命のお陰だと感謝し、毎朝毎晩祈っている。

また神々にも派閥があつて『獅子』『狼』『虎』『亀』『龍』『不死鳥』の6つの組に分かれている。派閥といつても互いに争いはなく、『力』の質による組分けという事らしい。

例えば『狼』の神々は『闇』と『安らぎ』を司り、『亀』ならば『水』と『癒やし』をという具合らしい。

それはさておき
閑話休題。

スチューデリアの星神教会で大司教を務めるアズメール・ガルデイゴと云う人が受けた神託とは次のようになる。

『我が子らの宿命を受けた者達では『楔』を砕くこと叶わぬ。宿命に囚われぬ者達の力を借り『楔』を砕き、『要』の傷を癒せ。『楔』砕きし者こそ勇者である』

そしてアポスドルファより勇者を導く秘術を託され、大司教が命がけの苦行の末に身に着けた秘術によってこの地に呼ばれたのが私達という事らしい。

自分達にそのような力があるとは信じられないけど、そこで私はふと疑問が浮かんた。

「私達は『楔』の破壊ないし除去の為に呼ばれた……そう解釈して宜しいですね？」

「はい、仰る通りです。『楔』さえ取り除ければ、あとは星神教の信徒によって『要』の隙間を塞ぐことができます」

「そこで感じた疑問なのですが、私達がシヨウカン……召喚ですか？あの時、私達の周りにいた人は魔將軍ヴェルフェゴールを倒して

ほしいと云っていたのですよ」

すると私の手を握っていたアリーシア様の手が震えている事に気がついた。

ついでに私の手がずっと握られたままであった事にも……

「そうです……それこそ私達が『楔』を砕く者を勇者と呼ぶ所以なのです」

アリーシア様が声までも震わせている事に大よその検討がついた。言葉にする事さえ迷っているのだらう。沈黙を続ける彼女に私は恐らく正解だと思う考えを口にした。

「あれは……『楔』はヴェルフエゴールを倒さない限り破壊は不可能なのですね？」

アリーシア様の全身が大きく震えた事で私は私の考えが正解だと確信した。

しかし彼女は黙ったきりで肯定も否定の言葉も口にしない。

「アリーシア様？　そうなのですね？」

再度静かに問うと暫くして私の頭が温かいもので覆われた。席を立ったアリーシア様が私の頭を胸に抱いたことは察せられた。

「その通りです。『楔』はヴェルフエゴール自身の呪いが籠められています。つまり彼が健在である限り『楔』の破壊は不可能なのです」

私の旋毛に暖かい雫が何度も落ちた。この雫が何であるかは今更

述べるまでもないだろう。

「ヴェルフエゴールの強さは間接的とは云え、このスチューデリアにも伝わっています。フレーンディアに嫁いでいた姉が伝書鳩を使って教えて下さったのです。」

ヴェルフエゴールはフレーンディア国の王にして最強の騎士であるアルフォリア八世叔父様をまるで火の粉を振り払うように簡単に倒してしまったそうです。

そしてお姉様の夫であるアルタロス王子さえも惨たらしい最期を遂げたと手紙にはありました。フレーンディアはたったの三日で落とされたのです」

私は話すだけでも大きな苦痛を受けているだろうアリーシア様の告白を黙って聞いていた。

すぐ近くで同情したのか桜花の囁き泣く声が聞こえた。

「お姉様はヴェルフエゴールに捕らえられ、幽閉されていましたが、何とか隙をついてフレーンディアの窮状を伝えようと伝書鳩を飛ばしてくれたのです。」

しかし満身創痍の鳩がスチューデリアに辿り着いた時には既にヴェルフエゴールの宣言が放たれ、世界中に『楔』が打ち込まれた後でした」

しばらくアリーシア様の嗚咽が続いたが、彼女は気丈にも話を続けた。

「お姉様は恐らくもう生きてはいないと思います。あの手紙は『ヴェルフエゴールから求婚を受けている。しかし彼と結ばれるくらいなら』と締められていましたから」

「ヴェルフェゴールは貴女のお姉様の仇でもあるのですね」

その時、私の心は既に決まっていた。どの道、私達には自力で元の世界に帰る方法は無いに等しいと思う。

ならばアリーシア様に月夜と桜花を託し、私一人でヴェルフェゴールに戦いを挑んでみよう。

仮に失敗したとしても彼女なら月夜と桜花に非道はしまいという打算も無かったと云えば嘘になるけど。

「アリーシア様……」

私が決意を伝えようとしたその時、月夜が私の背中を突いた。

（駄目ですよ姉様？）

私は驚いて手を月夜に向けて彷徨わせた。

月夜はそんな私の手を掴むと今度は手の甲を突いた。

（姉様の考えはすぐ解ります。私と桜花を置いていくことは許しません。私達はいつも……いつでも一緒だと誓ったはず）

月夜の『言葉』に私はあの日の事を思い出す。

あの戊辰戦争で父を亡くした日、今は亡き母の前で三国志の英雄、劉備、関羽、張飛の桃園の誓いを真似た、あの誓いを。

「雪子姉様、桜花も行くよ。それに一人でやるより三人でやる方がずっと良いよ」

桜花がアリーシア様の反対側から力いっぱい抱きついてくる。その声や様子に怯えの影は見えない。

「桜花だつて霞流の、霞家の一員だよ」

その声には先程のような怯えは感じられなかった。

この子もまたやはり剣客。霞流道場の四天王と呼ばれる四人の師範代に名を連ねるに相応しい風格がそこにあつた。

「桜花……」

私がどう言葉を投げかけたものか考えていると、抱擁を解いたアリーシア様が叫んだ。

「い、いけません！　ただでさえご迷惑をおかけしているというのに、そんな危険な事を頼むわけには参りません！」

しかし私は――多分、月夜と桜花も――小さく首を横に振った。

「いいえ、お引き受け致します。どの道、誰かがやらなければならぬ事です。ならば運命に導かれた私達が行くべきでしょう」

そう、三人で行こう。

生まれた月日は違えども、死す時は同じと誓ったあの日の為にも。

「しかし……」

「仮にアリーシア様の計らいで勇者の役を免じられたとしても、何もしなければそのまま世界の破滅に巻き込まれて死を迎えるばかりでしょう」

さっきまで私がそうして貰ったように、今度は私がアリーシア様

の華奢な体を抱きしめる。

程良く脂肪のついた彼女の柔らかい体と微かな化粧の匂い、緩やかな波を描く長い髪は優しかった母様を思い出させて郷愁にも似た切なさを感じた。

「それに私達も簡単には負けません。霞流の名に懸けても」

私はアリーシア様を解放すると赤檜の杖に仕込んだ刀身を抜いて眼前に掲げる。

「霞流剣術師範・霞雪子、霞流兵法・霞月夜、霞流目録・霞桜花、異界の友の為、我らの未来の為……」

私は人差し指を少し斬り、血を滲ませる。同じ事を月夜と桜花もしているはず。

私達は血の滲んだ人差し指同士を合わせる。

この儀式めいた仕草は別に演出ではない。否、ある意味においては演出には違いないのだけど。

私達、霞家は只の剣術道場ではない。

戦国の世から徳川の世となっても、平和な時代に適応できず悪事に走る者達がいた。世の中の仕組みを巧みに利用し、法の目を逃れて甘い汁を啜る悪党がいた。

そんな輩に泣かされている弱き人々から決して安くはないお金で頼まれて、世の悪党を闇から闇へと葬り去る刺客としての顔を持っている。

初めは道場運営の資金繰りの為に夜盗などを狩っていたそうだけど、いつしか悪党に苦しめられている人々の為と云う言い訳が付与されて、霞家当主には代々、恨みを持つ人からお金を受け取って代わりに仇 敵を地獄に墮とし、自らが死して後は依頼人の代わりに地獄へと墮ちる『地獄代行人』と云うお役目が引き継がれる事にな

った。

それは徳川幕府の御代が終わり、明治と呼ばれる今の世となつてなお続いている。

即ち、私達は勇者である以前にヴェルフエゴール抹殺を目論む刺客として動く事になる。

これは正義にあらず。

どのような相手であろうと、どのような大義名分であろうと命を奪うは悪の所業。

我ら霞家は悪である。

命を奪うは剣客、兵法家の宿命。

国を滅ぼし、数多の命を奪い、『楔』と云う呪いをばら撒く魔將軍ヴェルフエゴールの行為は正に悪と呼ぶべきもの。けれども、ヴェルフエゴールの身内の目線で見れば、彼の命を狙う私達こそが悪であろう。

正義も悪も立場が違えば簡単に入れ替わる曖昧なものであるならば、所詮、この戦いは勇者が魔^{ワル}將^{ワル}軍を殺す。只それだけと云う事になる。

なるほど、我らは呼ばれるべくして呼ばれたのだ。ヴェルフエゴールを闇に葬り、生きてきた証すら消してしまう『地獄代行人』として。

先程の互いの血を合わせる行為は、我らは血を交えた事で一つの存在となり、任務を全うするまで一丸となって当たると云う誓いとなる。

やはり演出なのかも知れない。

「八幡大菩薩よ、ご照覧あれ。我ら雪月花の三姉妹、打倒ヴェルフエゴール及び『楔』の破壊をここに誓う」

私は——私達は微笑みをアリーシア様に向ける。

「なんと美々しい……解りました。心苦しいですが、貴女達にこの世界の未来を託します。私達の未来を押し付けてしまった事、申し訳なく思います」

私の目は光を映さない。だけど私はアリーシア様が微笑んだ事は判った。

「そして、私達の未来の為に戦う決意をしてくださった事に感謝致します」

この日より私達の日常は終わりを告げ、魔將軍を殺す刺客として異世界を旅することになる。

与えられし称号は『勇者』。金づくで人を殺す悪しき一族が得るには過ぎたるモノ。

これより私達を待ち受けるは如何なる冒険なのか？

ヴェルフェゴール率いるガルスデントなる軍隊の実力は如何に？
それは次回の講釈にて。

第壹章 見参！ 雪月花の三姉妹（後書き）

二次創作の経験はありますが、本作は初のオリジナル作品です。故に設定の甘さはあると思いますので、ご指摘、ご助言がありましたら是非ともお聞かせください。

余談ながら、この作品は一時期とあるサイトに掲載させて頂いた事があります。

その為、読んだことがある方もいらっしゃるかも知れませんね。

第式章 いざ、聖剣の元へ

私達はアリーシア様の導きで城の最下層へと続く螺旋階段を下りている。

そこには秘術と共に大司教へ託された聖剣があり、それを使いこなす事ができて勇者の証とするとの事だった。

私としては使い慣れた仕込み杖の方が戦い易いのだけど、『楔』を打ち砕く為にも必要な物らしい。

「月夜、桜花、気をつけて」

地下へと下りているという事で当然暗く、等間隔並んだ燭台とアリーシア様の持つカンテラだけが頼りだった。

普段は月夜と桜花に目の代わりをして貰っているが、闇の中では逆に私が彼女らの目になった。

「もうすぐ着きます」

アリーシア様が振り返りながら云う。

お共の人はいない。聖剣が安置されてからは最下層は聖神教の巫女であるアリーシア様と勇者以外の出入りを禁じられているのだそうだ。

「……？」

私は奇妙な気配を前方に感じて歩みを止めた。

「ユキコ様？どうかありませんか？」

怪訝そうに訊いてくるアリーシア様を手で制して、私は前方へと声をかけた。

「そこにいるのは誰です？」

「へへえ、上手く隠れたつもりだったけど、流石は勇者つてところですかねえ？」

軽薄そうな声と共に階段を上ってくる気配がする。

「あ、アランドラ？ 何故、貴方がここにいるのです？ ここは私と勇者以外は立ち入りが禁じられているはず」

「フッフ、異な事を仰る。私は貴女の弟にして敬虔な星神教徒ですよ？」

弟と云う事はこの国の皇子と云うことになる。

「それでも聖剣がある限り、貴方にここを訪れる権利はありません」

「おやおや、実の弟にこの仕打ち……私は異界からはるばるお越し頂いた勇者に一目お目にかかりたいと思っただけですよ」

そう云ってアランドラ皇子は私達に近づいてくる。

月夜が『云う』には、白いズボンを穿き、金銀の刺繍が施された豪奢な上着を着た長身の美丈夫で、腰にはサーベルを差しているような。クセのある銀色の髪の毛を短く刈り、顔立ちは精悍さと軽薄さが同居している不思議な表情を浮かべていると云う。垂れがちな目尻のせいで精悍さを欠き、真横一文字に結ばれた口元が凜々しさを醸し出しているとのこと。

「これはこれは勇者殿、お初に御目文字致します。私は聖都スチューデリアの皇子、アランドラと申します」

慇懃無礼を絵に描いたような態度でアランドラ皇子が会釈したのを衣擦れの音で察した。

「お目にかかれて光栄です、皇子。何分、不調法者ゆえ至らぬところはご容赦願います。」

私は霞家長女、霞雪子と申します。後ろに控えしは妹の月夜と桜花に御座います」

「なんのなんの中々どうして堂に入った挨拶、このアランドラ感服致しましたぞ」

アランドラ皇子は止めるアリーシア様に構わず私の目の前にまで来る。

「ほう、これはこれは……」

何が、これはこれは、なのかはよく解らないけど、彼が私に興味を持った事は確か。

「この闇の中であつてなお艶やかな黒い髪、それでいて白雪の如き純白の肌を持っている……異世界とはこのような美しい民族がいるのですね。なんとも羨ましい限りです」

何とも珍妙な口調で、生まれて初めて黒と云う色を美しく思ったとおっしゃる皇子に何とも例えようもない気持ちになった。強いて云えば呆れたのかも知れない。

やがて落ち着いたのか、気が済んだのか皇子は私に向かって歩を進めながら口を開いた。

「あのヴェルフエゴールの元にするなんて勿体無い……如何です？
今からでも無謀な戦いをやめて私の元に来ませんか？」

「仰る意味が解りません」

実際は解り易すぎるくらい解るけど、ここはそれ、腹芸という事で。

「フッフ、皆まで云わせるとは野暮な人だ。貴女に是非、私の「そこまでになさい」」

私の顎にそつと手を添えたアランドラ皇子の言葉を凜とした声が遮った。

「先ほどから黙って聞いていれば勇者、いえ、私の大切な友人に無礼な言動の数々……これ以上の無体は私が許しませんよ？」

アリーシア様の言葉に私の顎から手を離し、おどけるような口調でアランドラ皇子が弁明した。

「いやですね、姉上。冗談ですよ、冗談。私は勇者殿の激励に来たのですよ」

「そうですか。冗談にしては度が過ぎていたように思いますが、勇者の激励をしたいと云う貴方の気持ちも解らなくもありません」

アリーシア様は静かに、それでも逆らい難い声で続けた。

「では、激励も終わったようですし、貴方はもう上に戻りなさい。先程も申し上げましたが、ここは私と勇者以外は立ち入りを禁止されています」

しかしアランドラ皇子はイヤに耳につく笑い声を上げて反論した。

「いいえ、戻れませぬな。これは父上からのご命令なのです。勇者が私達の未来を託すに値するか否かを見極めよ、とね」

「そ、そんな、いくら聖帝たる父上でもアポスドルファの神託を疑う事は許されぬはず」

動揺するアリーシア様をからかうようにアランドラ皇子は続ける。

「ですが、神託を受けたのはあの大神教ただ一人でしょう？彼女の言葉を疑いたくはありませんが、それが本物である証は何も無いではありませんか」

「それを証明する為に勇者に聖剣の儀を願うのではありませんか」

このままでは二人の会話は進展するどころか、二人の間に溝を作りがねない。

「アリーシア様、落ち着いて……皇子も皇族ですし儀式の立会人という形でなら面目も立つのではありませんか？」

「それはそうですが……」

「皇子も立ち会えば異存は無いのですよね？」

「それはもう、勇者の証を認めることができるのなら私も口出しは致しませぬよ」

私は皇子の云い方に奇妙な違和感を覚えた。

どうも嫌味な口調の中に私達が勇者で無い事を心の底から望んでいるように感じられた気がした。

「解りました。星神教・スチューデリア巫女頭の名においてアランドラ「フォン」スチューデリアの立ち会いを認めます」

「寛大なご処置、感謝の極み」

その言葉を最後に二人の会話は終わり、再び最下層へと歩み始めた。

私はなるべく不自然にならないようアランドラ皇子と肩を並べて歩く位置取りをした。

「如何なされましたか？」

私の接近に気付いた皇子は私にだけ聞こえるように訪ねて来た。

私はアランドラ皇子の一分の隙も見せない歩みが気になって仕方が無かった。

先程、彼が見せた軽薄な態度からはとても想像ができない動きだった。それゆえ、つい『観察』をしてしまった事を皇子に気付かれたのだろう。

「正直、私の貴方に対する第一印象は最悪でした」

私は開き直って胸の内を吐き出した。

無論、アリーシア様や妹達には気付かれないように。

「手厳しいですな」

そんな私の言葉にアランドラ皇子は怒るところか、むしろ面白がるように答えた。

「でも、先程の会話の中に感じた違和感や今の体の動きによってそれが間違っているような気がしてきたのです」

「違和感？ 私は極自然に話したつもりでしたが？」

「私の勘違いかも知れませんが、貴方の言葉に私達が勇者でない事を望んでいるように感じられたのです」

私の言葉にアランドラ皇子は一瞬立ち止まったが、すぐに私の隣まで戻ってきた。

「凶星でしたか」

「何故、解りました？ 私の言葉に隠れた勇者という称号への嫉妬に気付かれましたかな？」

「韜晦は無用に願います。貴方はもっと威徳のあるお方です。何故あのような態度を取られているのかは存じませんがね」

アランドラ皇子は小さく溜め息を漏らした。

「敵いませぬな。見破ったついでに私の願いを聞いて頂けませんか？」

「私にできる事なら」

「ありがたい。何、簡単な事です。首尾よく勇者の証を得られたのなら、まず足の速い船を求めてカイゼントーヤに向かう事になるでしょう」

私は頷く。

航行技術においてカイゼントーヤの右に出る国はないと聞いていたので道理だと思う。

「途中にある運河にスエズンという大きな街があります。そこでアンカー亭という錨のマークのある宿屋で宿泊して頂きたいのです」

私は多分、露骨に訝しむ顔をしていたらしくアランドラ皇子はこう云った。

「そ、そんな顔をしないで……大丈夫、そこは私の馴染みでしてね。コレを見せれば便宜を図ってくれるはずです」

皇子は私に何かを握らせた。それは指からの感触で星の形をした滑らかな石である事が分かった。

「貴女達の旅のペースで構いません。ですが必ずスエズンのアンカー亭で宿を取ってください。」

それと願わくば私の本性はしばらく貴女の胸の奥にしまっておいてください。私からの願いはこの二つです」

私はアランドラ皇子の様子に、何故か悪戯を仕掛けた幼かった頃の桜花の様子を重ね、なんとはなしに気づいた。

「子守は引き受けかねますわ」

「ハハハハ、私はこれでも一流派の免許皆伝ですよ」

権謀術数渦巻く政治の世界に生きる人なら、せめて腹芸を使いましょうよ、皇子……

「何故、とお訊きしても？」

「理由は二つ。一つは強くなりたいから、としておきましょう。もう一つは貴女の行く末を見てみたいと思ひましてね」

前者は兎も角、後者は理解がし難い。

「行く末も何も、今回の仕事が終われば元の世界へと帰る身ですよ」

『地獄代行人』として急に依頼を受け、突発的に道場を空ける事もある私は、道場の運営を月夜や四天王に任せる段取りを整えてはいる——整えてはいるが、今回は三姉妹揃つての留守であるから道場がどうなるのか見当もつかない。

四天王は文武に優れた有能な人材だけど、主が不在の道場を如何に切り盛りするかは難題だと思う。彼らの人望と、我が土地屋敷を狙う親類縁者共の狡猾さを思えば、遅くとも三ヶ月で決着をつけるべきだと計算している。それより遅くなれば、異世界から帰りました。土地屋敷は他人の物になってました——なんて事態になっているだろう事は容易に想像が付く。

だから、私はヴェルフエゴールの暗殺（一軍の将を相手に正面切つて戦うほど愚かではないつもりよ）を早急に済まし、その後、『楔』の破壊を効率良く行う為の段取りは星神教の総力を挙げてつけ

て貰うようアリーシア様に依頼している。

「そこまで話がついていましたか。しかも、ヴェルフエゴール打倒を前提にしているとは、何とも頼もしい限りです」

アランドラ皇子は感心半分、呆れ半分といった声色で云って、快活に笑った。

「私としては、いつまでもこの世界に残って欲しいものですが、ユキコ殿にも事情があまりのようですからな。しかし、同行の意志は変わりませんよ。そうと分かれば、やはり少しでも長く貴女のおそばにいたいものですからね」

「私の近くにいても、愉しくはないと思いますが」

「それは貴女がご自分の美貌に気付かれていないからですよ。断言します。貴女と共に歩く事ができるだけで、この世の幸せを噛み締めること請け合いですよ。いや、周囲の男達から羨望、嫉妬の視線を浴びる事になるでしょうから、ある意味においては不幸かも知れませんね」

いや、私の美醜云々の話ではないのですけどね。

問題は私の気性にあるのだけど、今はあえて云う必要は無いだろう。

「それに、皇子である貴方様にもしもの事があれば、私の首が胴体と泣き別れに……なんて事態になりかねません。異世界に呼ばれた挙げ句に処刑されては泣くに泣けませんわ」

「ご安心を。私は序列で云えば三十六番目の子、男子ならば十六番

目です。ましてや側室の子ですからね、帝位継承権など有って無いようなものです。それに旅立つ際には継承権の放棄を宣言してから決行するつもりですので、只の一介の剣士になるだけです。日頃からプレイボーイを気取っている私は城の中では厄介者扱いですからね、出て行く事を歓迎されても、哀しまれることは無いはずですよ」

ここまでの覚悟をしていたとは思っても寄らなかった。

ぶれいぼおいの意味は分からないけど、先程の軽薄な態度は、やはり、何か仔細あつての事らしい。彼がわざわざ人から白眼視されるように振る舞う理由は聞くだけ野暮だろう。

私もこれ以上は反対の言葉を慎み、同行を許す気になっていた。

「いずれにせよ。まずは勇者である事を認められなければ、机上の空論、絵に描いた餅も良いところですけどね」

「そうですね。しかしながら、アポスドルファの秘術で召喚された……即ち、選ばれた事を思えば、勇者と認められる事はまず間違いないでしょうな」

アランドラ皇子の言葉には妙に複雑な心境が混じっているようだった。

「でも、私は貴女達が勇者でない事を願わずにはいられない」

皇子の最後の呟きはとても小さく私でさえ聞き逃すほどだった。ただ私にはその言葉の意味を問うことができなかった。

「さあ、ユキコ様。もう間もなく聖剣が納められて……」

もうすぐ最下層に辿り着こうという時アリーシア様が振り返り、

その瞬間、彼女は絶句した。

そして、いきなり凄い勢いで私達に向かって駆け寄ってきた。

「な、何をしているのですか、貴方は?!」

アリーシア様は繋いでいる私とアランドラ皇子の手を引き剥がした。

杖について階段を下りる私の様子に皇子は目の事を察し、手を取って導いてくれていたのだ。

「全く油断も隙もありません……ユキコ様も怖かったでしょう? でも一声かけて下されば、すぐにもお助け致しましたのに」

アリーシア様は恐らくご自分の服の一部で私の手を拭きながらそう云った。

「ああ、ユキコ様の愛らしい御手が……なんと不浄な! 子供が出来たらどうなさるのです」

私は思わず半歩後ろに下がった。何故、半歩なのかと云うと、未だに私の手はアリーシア様に掴まれているので半歩しか下がれなかったからだ。

「あ、あの……アランドラ皇子は階段に難儀している私に手を差し延べてくださったただけでして……」

「まあ! ユキコ様の弱みに付け入るなんて我が弟ながらなんと卑劣な! ああ、そういう事は早く仰ってくださいませ。それなら私が全力でエスコートしましたのに」

こ、この人はそういう人だったのか？

何か俗に云う骨肉の争いとは違う次元でアリーシア様はアランドラ皇子を毛嫌いしているような気がする。

（姉様、安心してください。皇子様は苦笑しているだけです）

月夜、何故私が皇子の様子を気にしてるのが解るのかしら？
それ以前に恐ろしく『言葉』に刺々しさを感じるのは何故？

（それは皇子様に手を取られた姉様は赤面しながらも、どこか幸せそうに微笑んでましたから）

月夜の『言葉』に私は思わず腰が砕けそうになった。
それがいけなかった。

「ああ、ユキコ様？！ 足腰が立たなくなる程恐ろしかったのですね？ でもご安心くださいませ！ ここからは私が貴女を不浄の輩から護って差し上げますわ」

気付いた時にはもう遅かった。

私はひよいと持ち上げられ、アリーシア様に抱きかかえられていた。

「うわあ、雪子姉様、メリケンやエグレスの絵本に出てくるお姫様みたい♪」

「へ？ ……へ？」

桜花の言葉に私は間抜けな声しか出なかった。

「うふふふふ……私、これでも星神式護身術・獅子王太陽拳の免許皆伝ですよ」

「はい？」

妙に鬼気迫るアリーシア様に私は固まる。

「うふふふふ……ユキコ様の白雪の如き美しい柔肌は私が護りますわ」

「いや、その あひゃん?! ど、どこ触ってるんですか?! っ
て、誰か助けてください!」

「また始まったか……ユキコ殿、実は姉上、清純な乙女に目が無いのですよ。こうなったら私でも止める事はできません」

アランドラ皇子からの絶望的な言葉にアリーシア様が反論する。

「お黙りなさい! 純真無垢なユキコ様を不浄から護る事は星神教の巫女……いいえ、全人類が総力を結集して行すべき大偉業なのです!」

いや、私は決して純真無垢ではないと思いますよ。

自分でもかなり計算高い女と思っていますし、何より剣客として避けられぬ事とは云え、人を殺めていますから……

「それに不浄の塊である貴方に、乙女に目が無いなどという云い方で私が貶められる謂れはありません。私は純粹にユキコ様を愛しているだけです!」

今のは聞き違い……よね？」

「あ、愛……してるって聞こえたのですが？」

「ええ、私、聖都スチューデリア・第二皇女・アリーシア＝ウル＝スチューデリアはカスミ・ユキコを愛しています」

「ご、ご冗談を……それは同年代の娘達と比べたら胸が小さい事もない事はないですが、私は女ですよ？」

身長こそ姉妹で一番高い、と云うより女として絶望的に高い背を持つていながら、私より頭二つ分ほど背が低い月夜に遥かに負け、やはり頭一つ分ほど背が低い桜花よりも劣っている胸の大きさが悩みの種の一つだけど正真正銘私は女だ。

「あら、私も女ですわよ？ でもご安心くださいませ。星神教ではとかく宿命を重視しております。ですから宿命の導きに背かない限り同性結婚も認められておりますの」

私の全身からサーツと血の気が引いた。

「アリーシア様、先程私の事を大切な友人を仰ってくださいませんか？ あのお言葉、凄く嬉しかったです……」

「ええ、大切に育んでいけば、友情もいつしか愛情に変わりました」

私達、今日会ったばかりなんですけど……

「うふふふふ……震えているのですか？ 可愛い人ですね……大丈夫

夫、貴女は私が必ず幸せにしてみせます」

いや、幸せにすると云われまして……

混乱しているうちにアリーシア様の顔が近づく気配を見せた。

「さあ、聖剣の儀の前に、永遠の愛の儀式を致しましょう。これで貴女の手を穢した不浄は浄化される事でしょう」

ふ、不浄は貴女だ！

「初めて唇を捧げる人が女性なんてイヤアアアアアアアアアア」

「！！」

アリーシア様の腕の中で暴れるが、彼女の腕はガッツリ私を拘束
 して満足に動けなかった。

「はうっ?！」

だが、奇跡が起きた。思わず上に放り投げた赤檜の杖が落下してきてアリーシア様の脳天を直撃したのだ。

私は一瞬、力の抜けた彼女の腕から抜け出すと、いつの間にか大きく開かっていた胸元を合わせて一息ついた。

さらしを巻いていて良かったと心底思う。でなかったら私は殿方に乳房を見られる所だった。

「ふむ、確かに胸は小さいが、鎖骨に魅力と云うかエロスを感じるな」

大きなお世話です！

いや、云われてみれば、かつて吉原で花魁張っていたと云う母様

の昔を知っている人の話だと、私の襟元から覗く鎖骨は母様譲りの素晴らしい色気を醸し出しているらしい。

だけど、島田を結って見世に上げれば、すぐに引く手数多の売れっ子遊女になれるだろうと云われても、喜ぶべきなのかどうか悩むところだ。

もつとも、私も母様から教わったお座敷遊びは好きだったけどね？母様が生きてた頃はよく門下生も交えて、一緒に三味線を弾いたり、舞を舞ったり、虎拳をしたり、時には和歌なども詠って遊んでは父様に怒られたものよ。

怒られた理由？ 私と母様が遊ぶ時は、決まって父様が所用で家を離れている日を狙って遊ぶからよ。

仲間外れは非道いと云うけれど、父様を入れると負けた人にお酒を飲ませるなんて罰を与えるから、必ず最後は乱痴気騒ぎになって折角の御座興が台無しになるんですもの。あの場は母娘の楽しい触れ合いの場であって、遊廓では無かったのだから。

それはそうと、我ながら素晴らしい自制だと思う。この人が皇子ではなかったら、私はとくに背負い投げを決めていただろう。

「ユキコ殿？ 私の手を取って頂けるのは嬉しいのですが、少し力が入り過ぎてますよ？」

あら、自制は利いていなかったのか……背負い投げを仕掛けようとしている私がいた。

「あうっ?!」

その時、私の右足首に衝撃が走り、異様な負荷がかかった。

「ま、まだですわ、ユキコ様……」

どうやら頭を打ったアリーシア様はその衝撃で螺旋階段から足を踏み外したらしい。

だけど寸でのところで私の脚を掴み、落下せずに済んだようである。

「ああ！ アリーシア様、今お助けします！！」

私はしゃがんで私の足首を掴むアリーシア様の手を掴んで引き上げようとする。

「ユキコ様……やはり私を愛してくれていたのですね？！」

異様に興奮しているアリーシア様に私の腕の力が抜けかける。

「助かりたかったら、そういう戯言はやめてください」

「あら……ユキコ様って意外といけずさんですね」

彼女の拗ねたような声は非常に可愛らしかったのだけど、素直に可愛いと思えない自分が嫌だ。

何が嫌って、折角、こちらを信頼して下さっているアリーシア様を、女色というだけで距離を置こうとしている浅ましい自分の心を見たからだ。

私は更に力を込め、アリーシア様を引き上げる。伊達に剣術道場で師範をしてはいないと云いたいけど、彼女の体が驚くほど軽いので女の腕でも簡単に引き上げられた。

「あ、あとちょっと……アリーシア様、掴まって」

「はい」

私が左手を差し出すと、彼女はソレを掴まずに私の胸倉を、と云うより胸を鷺掴みにした。

掴めるのかですって？ 失礼な！

これでも母様に胸が大きくなる按摩というものを毎日湯船の中でして貰っていたし、母様が鬼籍に入られてからは自分の手で続けていたから、お猪口よりは大きく育っているのよ。

「「キャアアアアアアアアッ?!」」

思わず胸を庇いながら上げた私の悲鳴と、落下していくアリーシア様の悲鳴が見事に一致した。

「あ……」

「私は死なない！ この世にユキコ様がいる限り、私は再び甦る！」

やたらと良く響くアリーシア様の優雅な（そして不気味な）笑い声が続いた後、何か肉の塊が潰れるような嫌な音と踏みつけられたヒキガエルの断末魔のような声がした。

先程、もう間もなくと仰っていたけど、底に着くまでかなり間があったように感じてしまった私には、あの嫌な音と相俟って無惨な肉塊と化したアリーシア様しか想像出来ない。

「皇子……どうでしょう?」

「どうでしょうって、聖剣の儀をしなければならいのでしょうか?」

アランドラ皇子は事も無げに云って再び私の手を取るとゆっくり私を導いて下りていった。

「お待ちしていましたわ」

「……」

私達が最下層に辿り着くと、聖剣が納められているという部屋の前でアリーシア様が何事もなかったように穏やかな口調で出迎えた。

「ユキコ様？　どうかなさいまして？」

「いえ、なんでもありません」

キョトンと訊ねるアリーシア様に私は肩にかかる妙な疲労感を振り払うように答えた。

ちなみに私と皇子はもう手を離している。もう先程のような暴走はごめんだわ。

「それでは、聖剣のもとへ導きます」

アリーシア様の声と同時に巨大で重そうな扉の開くゴンゴンという軋みが広がった。

「う、これは……」

アリーシア様に導かれて入った部屋は、私が今まで感じた事のない清浄な空気に満ちていた。

私もおせっかいな（でも大切な）友人に引つ張られて様々な神社仏閣に足を踏み入れたけど、ここまで澄んだ気配は感じられなかった。

光を宿さぬこの目でも何故か広大と解るこの空間の中央に威圧感にも似た気配があった。

「ふえゝえ、大きいねえ……アリーシア様あ、あの石像は誰と誰の像なの？」

桜花の感嘆混じりの間延びした質問にアリーシア様は誇らしげに答えた。

「あの仲睦まじく寄り添う男女の像こそ星神教の最高神であられる太陽神アポスドルファとその妻、月の女神アルテサクセスのお姿を表わした物なのです」

どうやら先程からの威圧感はその像から感じられるようだった。

「妻あ？ 桜花には『お母さんと行水する男の子の図』に見えるけど……」

そつと月夜が教えてくれた事によると、この空間は円柱状で床は大理石がふんだんに敷き詰められていて、周りは白亜の壁であると云う。かなり地下を降りてきたはずなのだけど、どういった仕組みなのか太陽の光が底まで届いているそうなの。

地下水を汲み上げたのか床には水路がいくつか走り、中央には大きな溜め池があつて、その中に裸の少年を後ろから抱きしめている羽衣のような服を着た慈愛の笑みを湛えた女性の像が建っているそうだ。

「ええ、それも正解です。星神教に伝えられている神話では、まずこの世界で最初に太陽が生まれたとされています。その頃は太陽以外の存在はなく、孤独に耐えかねた彼は自分以外の存在を欲し、最初に作ったのが対となる存在、月なのです」

その後も太陽は自らの体を材料に眷属たる星々を作り続け、気付いた時には妻である月よりも体が小さくなってしまふ（つまり、この世界の月は見た目、太陽よりもかなり大きく見える）。仕方なしに太陽は月に母性を与えて、彼女を妻だけでなく、同時に母ともしたらいいけど、それはそれで寂しい人生に思える。

確か古今東西の神話の中には人の歴史を元にした寓話が多分に含まれているらしいと聞いた事があるので、もしかしたら星神教の創始者か或いは過去の偉人に自分の母を妻にした人がいたのかも知れない。或いは単純にどのような存在にも母親が必要と云う教訓である可能性もある。

「そして二柱の像の足下に設えられた台座に突き立てた剣、これこそがアポスドルファから授けられた聖なる二対の剣、『サンシヤイン』と『ムーンシャドウ』です」

私は——私達はこの二振りの剣の存在感に圧倒されていた。

月夜の説明では、『サンシヤイン』は透明で真っ赤な両刃の剣で柄には金や紅い宝石のような物で装飾されたものだそうだ。

そして『ムーンシャドウ』は真っ黒な片刃の剣で刀身は三日月のように反っており、柄は銀と蒼い宝石で控えめ且つ上品な装飾が施

されていると云う。

「この二振りの剣を台座から引き抜く事ができれば勇者として認められたということになります」

なるほど、解りやすい。

岩の台座に突き立てられた剣を抜けば合格、勇者の資格が無ければ抜く事は叶わない。

「では、ユキコ様……始めてください」

私は頷くと、月夜と桜花に導かれて台座に登り、『サンシャイン』と『ムーンシャドウ』を同時に掴んだ。

（南無八幡大菩薩）

生前、父が信仰していた軍神に心の中で祈りながら力を込めて引き抜こうとした。

「そ、そんな……」

いくら力を込めようと揺らそうとしてみても剣は元から台座の一部であったかのようにピクリとも動かなかった。

「なんとユキコ殿は勇者ではなかったのか？」

アランドラ様は驚愕というより、どこか喜びに近い声色で云う。

「あのような美しい女性を凄惨な戦いの旅へ向かわせる訳にはいかないからな」

「そんな……ユキコ様？　動きませんか？」

アランドラ皇子の呟きはアリーシア様の言葉が重なった為、聞き取ることは叶わなかった。

「はい……私では全く動きません」

私の声は自分でも解るくらい苦渋に満ちていた。

（姉様、今度は私……）

月夜の『言葉』に素直に従い後ろに下がる。
すぐに月夜が台座に登り、聖剣の儀を始める。

「ああ、ツキヨ様も……」

アリーシア様の声にも苦渋が混ざっていた。
もし次に試す桜花が勇者ではなかったら……そんな思いがこの場に満ちた。

「じゃあ、最後に桜花が行くね」

桜花が剣を拵んだ瞬間、『サンシャイン』からなんと暖かな気配が伝わってきた。

「おお！　『サンシャイン』がその名を示すように日輪の如き輝きを！――」

アランドラ皇子の驚愕の声が響く。

桜花こそ勇者の資格があるのかと誰もが思った時、意外な言葉が聞こえた。

「ううゝん……桜花も抜けないよお」

「何ですって?!」

アリーシア様の悲痛な叫びが耳朵を打つ。

「うん、全然動かない。派手な方は凄い光ってるけど、それでもビクともしないよ?」

「それでは三人とも勇者ではない?」

この胸に去来する絶望感と無力感に私は言葉を失った。

『フハハハハハハハ!! 勇者の噂を聞き付け、はるばるアジトアルゾ大陸から馳せ参じたというのに、なんとも拍子抜けさせられたぞ!!』

「誰?!」

私は太刀を佩くように杖を帯に挟んで周囲の気配を探る。

『これは申し遅れた。拙者は魔將軍ヴェルフエゴール閣下の側近が一人『豪腕のスタローグ』!! 『楔』を破壊する勇者の始末を命じられた男よ!!』

地響きと共に台座が揺れ、まるで突然その場に現れたかのように巨大な気配が生まれた。

「なっ?! 台座の影から巨人が?! 古の魔族が使つとされる『影渡り』の秘術か!」

アランドラ皇子が剣を抜く気配をみせながら叫んだ。

『グフフフフ!! 影を媒介とし、影から影へと瞬時に移動する『影渡り』が秘術だと? この程度の術は魔族にとっては児戯よ! 秘術などと云ったら莫迦にされるわ!!』

スタローグは全身からガチャガチャと金属がぶつかり合うような音を立てながら皇子を嘲笑う。

(姉様!)

「月夜? お願い、大まかでいいからスタローグの事を教えて!!」

いつの間にか背後にいた月夜に説明を求める。

(巨大です。アランドラ皇子も相当背が高いですが、彼はその三倍はありそうですね。全身を黒い甲冑で包み、兜も面具が填められて隙間が少ないです)

説明を聞きながらも私は襷がけをして戦闘の準備を始める。

(今のところは素手ですが、背中に巨大な棍棒を背負っているので、それを使った力技を使ってくるかもしれません)

「ありがとう!! 月夜は桜花を連れて下がっていて!!」

私は唯一持ち歩いている防具『鬼鉢鉄』を額に巻く。『鬼』と書かれた金具の裏にはいくつか突起があり、それが眉間を圧迫する。私はそこに意識を集中させると、想像の中で月夜の説明によって生まれた空想のスタローグと目の前にいる本物のスタローグの気配を重ね合わせる。

すると、脳裏にスタローグの容姿が朧気に浮かび、背負っているという棍棒を手にした様子が『視』えた。

この映像が間違っていた事はほとんどない。精々が細かな表情くらいだ。

「待て！！ お前の相手はこの私だ！！」

私の声に脳裏に浮かんだスタローグが振り返る。大丈夫、今日も相手の動きが手に取るように解る。

この能力こそ、盲目である私が剣術道場の師範でいられる理由。私はこの能力を『心の眼』と名付けた。

『なんだ？ 勇者になり損ねた女か！』

小莫迦にした口調でスタローグが私を一瞥する。

「そう、私は勇者にはなれなかった。『楔』も私には砕けない……だが！」

私は今まで閉じていた両の瞼を開く。

そこには、いつも桜花に、「綺麗だから見せて」とせがまれている緑色に輝く瞳があるはずだ。

「魔將軍ヴェルフェゴール打倒を諦めたつもりはない！！ 霞流剣術師範・霞雪子！ 推して参る！！」

私は腰を落とし、体を前に傾けつつスタローグに向かって駆けた。

「ユキコ殿?! 無茶だ、貴女の目は!」

皇子の制止の声を無視して私は更に速度を上げたのだった。

ついに私達とガルスデントとの戦いが始まった。
しかも初戦にして相手はヴェルフエゴールの側近を名乗る実力者だ。

果たして勇者となれなかった私に勝機はあるのか?
魔族と呼ばれる者たちは如何なる術を操るのであるのか?
それは次回の講釈にて。

第式章 いざ、聖剣の元へ（後書き）

次回から戦闘になります。

三姉妹は最強でこそありませんが、剣術道場で鍛えられた剣客であり、雪子に至っては刺客稼業で実戦経験も豊富です。なのでそれなりに強いです。

その技量が異世界でどこまで通用するのは次回をご覧ください。

第参章 電流出陣

我が霞流に『松風』という技がある。

鍛え上げられた俊足をもって相手の脇を駆け抜けて背後を取る技だ。

無論、敵もむざむざと背後に回られるような無様はしない。

故に真っ向から突進すると見せかけて直前に速度を殺さずに進路を変えたり、必殺の気配を錯覚させるほどの斬撃を捨て太刀にするといった相手の虚を突く工夫が必要となる。

そして何より武器を構えた敵に向かって真っ直ぐに突き進む胆力こそがこの技の肝なのだ。

『小娘！ 自ら死を選ぶか！！』

スタローグが巨大な棍棒を接近する私に振り下ろす。

私は僅かに横に跳んで予想上の棍棒の軌道から抜けつつ、着地の踏み込みを利用して更に加速した。

「ぐっ！」

予想を超えた衝撃の余波が私の背を襲うが、なんとか堪えて走り抜けスタローグの股下を滑り込んで背後に回った。

私の『松風』が巨人に通用したのだ。

恐怖は無い。相手の姿が見えない私は、戦闘において相手に臆する事はまずない。

「霞流・『膝崩し』！！」

本来、滑り込んだ低姿勢のまま片膝立ちに振り返って相手の膝の

裏を横薙ぎに斬る技なのだけど、スタローグは呆れる程巨大なので私は跳び上がりつつ六角杖の仕込みを抜いた。

自分でも怖いくらいに気分が高揚しているけど、頭はあくまで冷静を保ち続ける。

『ガア?! お、オノレい!!』

跳びながらの抜き打ちなので威力はやや落ちてしまっているが、スタローグの甲冑の隙間を抜けて膝の裏に痛手を与える事は充分できた。

スタローグは片膝を地に着けて膝の裏をかばう。しかし、それが私の目的だった。

「霞流・『兜潜り』!!」

膝についてスタローグの頭の位置が下がるのを見逃さず、再び跳んで甲冑の首の隙間に躊躇いなく刃を突き立てる。

そこはいわゆる『盆の窪』と呼ばれる部分で、私は渾身の力を込めて深く突き刺してスタローグの延髄を貫いた。

群雄割拠の戦国時代より伝わる我が霞流剣術は当然鎧武者の相手をする事を想定して試行錯誤した末に編み出された剣術。

それゆえにスタローグのように全身甲冑に身を包んだ相手は、霞流にとって相手の方から重りを担いで動きを鈍くしてくれているようなものだ。

「延髄は急所中の急所……終わりよ。筑後（現在の福岡県南部）は刀鍛冶・真典甲勢しんけんこうぜいが作、大真典甲勢二尺六寸（約八〇センチメートル）の大業物で送られた事を地獄の獄卒達に自慢すると良いわ」

私が刃を抜くとスタローグの体はゆっくりと前のめりに倒れてい

った。

スタローグの体から飛び降りた私は、血振りをくると杖の中に刃を納め、ゆっくり眼を閉じながら大きく息を吐いた。

「こ、これがユキコ殿の実力……これで勇者に選ばれなかったとは」

皇子の言葉はどこか強張っていた。しかし、それは無理も無いと思う。

私は段々と気持ちが鎮まっていく、いえ、どこか冷めていくのを感じながら言葉を紡ぐ。

「いえ、だからこそ選ばれなかったのではないのでしょうか？」

そう……そうだった。

私は決して勇者に選ばれるはずが無い。勇者の資格すら無い事を失念していた。

自嘲の笑みが口の端を吊り上げる。

「「ユキコ様（殿）」？」

アリーシア様とアランドラ皇子が同時に私の名を呼ぶ。その声は僅かに震えていた。

「お二人とも私の本性をお察しになられたものではありませんか？だから、私にかけられるお声が強張る……」

私は多分、酷く歪んだ笑みを浮かべている事だろう。

「私は他者の命を奪う事に……躊躇いが持てないのです」

「ユキコ様……」

アリーシア様の哀しげな声が耳を打つ。

「アリーシア様、私は……」

私の言葉は、背中に与えられた強い衝撃によって遮られた。

『姉様、ダメです……これ以上、その事を云ってはいけません。放つておくとお互に限りなくご自分を卑下されるのが姉様の一番悪い癖です』

「月夜……」

「ツキヨ様、その声……」

私の腰に抱きついた月夜の老婆の如く潰れた声に、私とアリーシア様は言葉を失う。

これこそが月夜が指の突く動き、歯の音で『言葉』を紡ぐ理由。月夜は本来なら誰もが嫉妬するほどの美しい声を持っていた。しかし二年前、ある“忌まわしい事件”のせいで自ら毒を飲んだ。

幸い発見が早くて命は助かったものの月夜の喉は潰れ、今の老婆のような『声』になってしまった。

「ごめんなさい……月夜」

私は自ら封印した『声』を使ってまで私を諫めてくれた月夜に返す言葉を持たず、ただその体を抱きしめて謝罪と感謝を全身で伝える以外何もできなかった。

「ユキコ様？」

アリーシア様の声に私の体がビクリと震える。

「私達はユキコ様の事は何も解りません。当然ですわね、私達は今日お会いしたばかりなのですから」

アリーシア様が月夜ごと私の肩を抱く。

そこから彼女の温もりを感じて私は何故か泣きなくなつた。

「ですが、ユキコ様が信頼できる方ということは解りますわ。何故なら今のユキコ様の命がけの戦いを見れば、貴女の戦いが人を守る為の戦いという事が判りますもの」

「違います！ 確かにスタローグと戦おうと決心したのは妹達や貴女達を守る為でした！ でも戦っているうちに私は……戦うことが愉しくなっていたのです」

私の言葉は段々弱くなっていく。

いつもそうだった。剣術の試合でも初めは清々しい気持ちで竹刀を打ち合っていた。

それがいつしか相手を打ちのめしたい衝動へと摩り替わっていく。

数年前、目録を賭けた兄弟子との仕合。

「一本！ 待て！！ それ以上はいかん！！ 待てと云うに、お前は既に一本取っているのだぞ！！」

制止の声。後ろから羽交い絞めにされる拘束感。相手を打てない苛立ち。罵声。血の臭い。

「貴様は誇り高き霞流を殺人剣にするつもりか？！」

鋭く走る痛み。熱くなる頬。頭を揺さぶられて朦朧とする意識。云いようの無い高揚感と憎悪。

「霞流は元々戦場で編み出された殺人剣だ！！」

誰かの叫び。重くなっていく体。

ああ、遠くで桜花が泣いている……

「目が見えなくて何が悪い！！」

仕合の発端となった言葉。強く食い縛った上下の歯。口腔に広がる血の味と臭い。

「やむを得ん！ 許せ！！」

衝撃。

痛み？ 胸が痛い？ 息ができない？

あ、意識が……意識が遠のいて……い……く……

私はいつしか堪えていたはずの涙がとめどなく溢れていることに気が付いた。

「私は勇者どころか、アリーシア様に友と呼ばれる資格の無い浅ましい女なのです」

「ユキコ様、貴女は他者の命を奪う事に躊躇いが持てないと云われましたが、ユキコ様は望んで死を与えられたのですか？」

アリーシアの問いに私はギクリと体を硬直させてしまった。

「いえ、私も初めから敵を屠るつもりで剣を振った事はありません。しかし先にも申しましたが、途中で戦いが愉しくなり、気分が高揚し気が付けば相手が再起不能に陥っていた事など珍しくなく、この手で斬り捨てた命の数はもう既に両手の指では数えられません」

私の告白に流石のアリーシア様も呆れただろう。

もしかしたら、私を友と呼んだ事すら後悔しているのかも知れない。

「では、命を奪った事実の後悔をした事は？ 罪の意識はありませんの？」

嗚呼、この御方はなんと残酷な事を訊くのだろう。

私の心は後悔や罪の意識に後押しされた絶望や恐怖に日々苛まれて
いると云うのに……

この時の私は自分本位の浅ましい怒りのあまり、アリーシア様の
声に侮蔑も嘲りもない事に気付いていなかった。

「アリーシア様、私の心は既に壊れているのです。『戦い』が『怒
り』を生み、『怒り』が『憎しみ』を生み、『憎しみ』が『暴力』
を生むのです。私は剣の道を通じて人の道を説き、人を導く立場に
ありながらこのような衝動を内に飼っている救いようのない女なの
です」

ダメだ。折角、月夜が諫めてくれたというのに再び自嘲の言葉が
口から出ることを抑えられない。

「えい♪」

「は？」

私は一瞬、何が起こったのか判らなかった。

涼風が私のお尻を撫ぜた事で道着の袴が床に落ちたと理解できた
時には悲鳴を上げていた。

「な、なに?!」

「えへへへ♪ 吃驚した？」

私の後ろで桜花の笑い声がした。

「お、桜花！ 貴女の仕業なの?!」

私は慌てて袴を着けながら桜花に怒鳴りつけた。

「だって月夜姉様に怒られてもずっと沈んだ顔のまんまなんだもん。約束したでしょ？ 雪子姉様は「自分で自分を苛めない」って」

私はハッと桜花の声がした方を向いた。

そう、いつでも一緒だと誓いを立てたその日、私達は誓いを強めるために、それぞれ自分の決めた約束もしたのだ。

桜花は「剣術の稽古で泣き言を云わない」、月夜は「霞家の者が悪に染まりそうになった時には体を張って歯止めになる」と。

そして私は日頃自虐的な発言が目立ち、それは道場主としては良くない事なので、「自分を苛む事を禁じる」と約束をした。

「だから今のは雪子姉様への罰」

私は桜花の愉しげな笑い声に自分の心の弱さを改めて痛感した。

「ありがとう、桜花」

私は多分、自然と微笑んで、桜花の頭を撫でた。

桜花は腰まである髪を全て後ろへ流しておき、お洒落のつもりなのか前髪を数条ばかり前に垂らすという難しい髪型をしているので、たまにどう撫でたものか考えさせられてしまうのが難点だけだ。

「でも、もうちょっと他の罰を考えられなかったかしら？ 近くに殿方もいらしたのに……今は道着だから腰巻も着けてないのよ？」

「姉様、痛い……それに、その笑顔、凄く怖い」

私の撫でる手に多少力が籠もっていた事くらいはご愛嬌の範疇だ

ろう。

ただ怪我の功名と云うべきか、私を苛んでいた鬱屈した気持ちは幾分和らいでいた。

「ゆ、ユキコ様？」

「はい？」

「その、オウカ様の頭をこれ以上揺ると大変な事になりそうなのですけど……」

アリーシア様の云いたいことはよく判る。けど私はあえて惚けた。

「私は頭を撫でているだけですよ？」

「わ、私の目にはオウカ様の頭を掴んで前後左右に大きく揺さぶっているように見えるのですが……」

アリーシア様に云われて私は桜花の頭を撫でるのをやめた。そう私はあくまで桜花の頭を撫でただけ。

私は呆気に取りられたアリーシア様と皇子の前で自らの両頬を思いっきり叩いた。

「不快な思いをさせてしまい、申し訳ありませんでした。アリーシア様、アランドラ皇子」

私はお二人に頭を下げた。

もう大丈夫。月夜と桜花のお陰で私は立ち直っている。
するとアランドラ皇子が私の手を取った。

「ユキコ殿、いえ、貴女達三姉妹はとても強いんですね。三人とも互いを必要とし、互いを支えあい、互いを慈しみ合っている」

「いいえ、私達は弱いです。だからこそ三人で力を合わせなければ生きていけないのですよ」

私はこの世界に来たばかりの時のように月夜と桜花を抱きしめた。妹達の体温が私の冷酷な心を溶かしてくれるようで心地良く、それが嬉しい。

「フフ、それこそが強さですよ。確かに聖剣の儀は失敗しましたが、貴女達の強さはヴェルフエゴールさえも敵わないでしょう」

「そうですね。私は、いえ、私だけではなくそこにいるアランドラも貴女達の絆の強さに希望の火を心に燈さずにはおれません」

「希望？」

私は勇者でなかった私達に落胆せず、そのような事を云う二人を不思議に思う。

「はい、ユキコ様はたった今、人の手で魔族を倒せる事を証明して下さいました。平坦な道ではないでしょうが、私達にも勝利の道があると知りました」

アリーシア様は何を思ったのか私の手を取って、ご自分の胸に押し当てられた。

「ユキコ様、貴女の苦しみは私程度の矮小な者には想像すらできません。確かにユキコ様は敵を屠る事に躊躇いはありませんでした。」

しかしです。ユキコ様がその事を悔いて恐れている事は私にも解りますわ」

私の掌にアリーシア様の温もりと鼓動が伝わってきて、何故か安心感を覚えた。

「我ら星神教とて五千年という長い歴史の中で血や死と無縁だったわけではありませんわ。むしろ他教の信徒を悪魔崇拝者として迫害し、土地から追い立て、哀しい事です。が虐殺まで行ってきた暗黒の時代があつたのです。しかし、その事が他ならぬ太陽神アポスドルファの逆鱗に触れ、星神教徒は滅ぼされる寸前まで大地震や洪水、干魃といった神罰を受けたそうです」

言葉も無かった。

この慈愛の心そのものといったアリーシア様が巫女を務める星神教にも過ちの時代があつたなんて想像すらできない。

「アポスドルファは許しを請う人々の前に金色の炎のような鬘に覆われた恐ろしいライオンの姿に化身して顕現なされ、『我を恐れる前に自らの罪を恐れよ。悔いよ』と叱責し、『太陽の光も星々の瞬きも誰にも平等に降り注いでいる。汝らは特別ではない』と諭されたそうです。これによって、自らの過ちを大いに恥じ自らの行為に恐れた祖先達は以来他教とも手を取り合い、罪を償うべく人々を正しく導くようになっていったのです」

アリーシア様は私を抱き寄せると耳元で、もうお気づきになられましたか、と囁いた。

「我ら星神教は自分達が正しいから教えを説いているものではありません。自らの罪を恐れ、再び同じ過ちを繰り返さないように最善を

尽くしているのです」

私は金槌で頭を殴られたような衝撃を受け愕然とさせられた。私なんて自分の内側に潜む『狂気』に怯え立ち止まってしまっていると言うのに、星神教の信徒達は自らの罪に真正面から向き合っていて償い、その上で幸福に至る道を模索している。

星神教、見事なり！

我、いかに剣の修行を重ね、数多の悪党を屠ろうと、未だ彼らの境地に達せずや！

私は後世へ連綿と受け継がれていく罪から星神教の信徒達が解放される日が来る事を願わずにはおれなかった。

「強い宗教なのですね。アリーシア様が信仰なさっているのが分かるような気がします」

不意に私の頭をアリーシア様に撫でられた。

私も月夜や桜花の頭を撫でることはよくあるけど、自分の頭が撫でられるのは何年ぶりだろう？

「思った通りですね。やはりユキコ様は強い方です。いいえ、それよりも……」

その言葉の前には、私は涙を堪える事なんて出来なかった。

「貴女はとても優しくて良い子です。私はカスミ・ユキコと友になれた幸運を生涯アポスドルファに感謝を捧げ、誇りにしていきますわ」

私の額に柔らかく温かいモノが触れた。

普段の私であつたならすぐさま赤面し、卒倒していたはずだけど、

今に限っては嬉しく思っても、何故か恥ずかしさは微塵も感じなかった。

「太陽神アポスドルファよ。我らに希望をもたらした心優しき剣士に幸福を与え給え」

遅いですよ。私にとっての幸福は既に月夜と桜花、そして貴女から既に頂いています。

『グフフフフ！！ では、その希望とやらを拙者が砕いてくれよう！！』

突然の声に私達は一斉に振り返る。

「スタローグ！！」

『今のは確かに効いた……だが、魔族はこの程度では倒せぬわ！！』

迫りくる殺気に私はアリーシア様を突き飛ばして同時に倒れこんだ。

「ありがとうございます。ユキコ様」

「いえ！ それより状況を！」

私は再び鬼鉢鉄を額に巻いた。

「し、信じられません……スタローグの兜が、ガントレットが、脛当てが……すべてバラバラになって襲ってきます！」

「何ですって?!」

驚愕する私を嘲笑うようにスタローグの声が轟く。

『さあ、ニンゲンよ！ 絶望の中で逃げ惑うが良い！ 我が切り札『マリオネット・アームズ』から逃れた者はおらぬ!!』

殺気の群れが私に向かって迫ってくる。

私は跳んで殺気の一つを足場にして更に跳んだ。

「チツ！」

私は殺気の群れから距離を取ると意識を眉間に集中する。

かつて体験した事のない攻撃に私の想像力が追いつかず、脳裏に像を作ること出来なかったけど、おおよそスタローグの位置は掴めた。

「せいっ！」

真横から迫る鋭い殺気に気づいて、それに合わせて大真典光勢を振るうと甲高い音を立てて何かが落ちた。

「これは……矢？」

『そうらそうら！ 矢だけではないぞ!!』

背後に生まれた巨大な殺気に半ば無意識に跳ぶと、元いた位置から重たい物が落ちたような音と同時に衝撃が届いた。

「そうきたか！ バラバラになった体を『影渡り』で変幻自在に飛

ばす事もできるなんて！」

私に状況を伝える為だろう、少し離れた場所からアランドラ皇子が叫んだ。

「いつたい、どんな仕組みで！」

私は立ち上がりながら悪態をつく事しかできなかった。

『グフフフフ！！ 逃げる逃げる！ ほれ、そこに行くと危ないぞ！！』

四方八方から襲いかかってくる巨大な拳、矢、火炎に私は翻弄される。

深手こそ負ってはいないものの少しずつ傷つけられていく状況に、最早、勝機がないと悟った私は諦めるよりなかった。

「月夜！ 後の事は任せたわよ！！」

私は月夜の返事を待つことなく迫り来る殺気の一つへと駆け出した。

『グフフフフ！！ 自棄を起こしたか、ニンゲン！！』

私が向かっていた殺気が恐ろしい勢いで突っ込んできた。

「そう思う？ なら貴方の負けよ！！」

私は迫り来る殺気を出来得る限り引き付けてから横に跳んでかわす。

間を置かずに私の真横で床を重たい何かが決る音と衝撃が走った。

「雪子姉様、行ったよー!!」

桜花の言葉を受けて私は近くにいるアランドラ皇子の気配に向かって走り、彼を突き飛ばして伏せた。

刹那後、背後で凄まじい爆発音と爆風が起こり、私と皇子を弾き飛ばした。

「うぐ！」

予想以上の爆風に私は誤って舌を少し噛み切ってしまったけど、皇子は怪我を負った様子は感じられなかった。

「ゆ、ユキコ殿……い、今は」

アランドラ皇子が半ば呆然とした様子で云う。

「先程の爆発は月夜の作った炸裂弾です」

先程の私の作戦はまず私が囷になってスタローグを引き付けて寸でのところであわす。

そして攻撃直後でこちらに対応仕切れない状況を作り、死角にいた月夜が手製の炸裂弾を投げて敵を討つ。

これぞ戦国時代より伝わる霞流の兵法『火術の型・不知火』。卑怯と云うなかれ、生き残る為なのだから。

「炸裂弾?! ツキコ殿はいったい……」

月夜は幼い頃から体が弱く剣術の稽古はおろか基礎体力作りの鍛

鍊にすら耐えられなかった。

しかし、天はそれを補って余りある明晰な頭脳を彼女に与えた。私や桜花が修練に明け暮れる外で、月夜は霞家に伝わる兵法書や古文書を解き明かし、火術や投毒術を始めとする兵法の奥義をこの世に復活させ吸収していった。

無論、炸裂弾も奥義の一つに過ぎず、月夜は常にその身に火術や暗器を仕込んで有事に備えている。

本当ならスタローグは私一人で倒し、切り札たる月夜の炸裂弾はまだガルスデントには秘しておきたかったのだけど仕方がないわね。」「なんと凄まじい……スタローグのガントレットがあんなにも崩れて」

『お、おのれ、ニンゲンがあー！』

激昂したスタローグの殺気が一斉に襲い掛かってきた。

「これは……？」

私は迫るスタローグの殺気に乱れと云うか、違和感を感じた。

「なるほど、そういう事ね」

カラクリを見抜く事ができた私は皇子に後ろに退くように云うと再び殺気の一つに向かって駆け出した。

「月夜！ 五つ数えた後にスタローグ達の中央に音の大きな炸裂弾を――！」

最早、スタローグを『視』る必要はない。

仮に影から影へと渡るといふ不可思議な術を使おうとも恐れるに足らない。

「五……」

『潰れるオ！！』

私の真上から殺気が降ってくるが難なくかわす。

「四……」

私は月夜の炸裂弾で潰れた籠手を掴むと殺気の一つに向かって投げる。

大陸に伝わる気功術を手がかりとして、曾祖父が編み出した特殊な呼吸法により人の持つ潜在能力の一部を一瞬だけ引き出す『闘鬼の術』を持つてすれば容易い事。

「三……」

『ぐおう？！』

高速で飛んでいた為か、かわし切れず殺気の一つに籠手がぶつかった大きな音がした。

「二……」

『いかん！ 何という事だ！』

殺気の群れが一箇所に集まる。

「……………」

『大丈夫か？ まだ飛べるか？』

『なんのこれしき！！』

気遣う言葉のやり取りに私の中で推理が確信に変わった。

「今！」

私は固まっているスタローグに背を向けると全力で駆けた。
背後で爆発音が起こり、弾き飛ばされた巨大な気配の一つを横っ
飛びにかわした。

「勝負あり、ね」

私は先程よけた物体に近づいていく。手を触れ、撫で回した感じ
でそれが巨大な脛当てだと判った。

「出てきなさい」

脛当ての中に手を入れると、ぬめつとした肉のようなものが詰ま
っていた。

構わず腕を進めていくと、人の手と思しきモノに触れたので引っ
張り出す。

「ごめんなさいね……………これは……………」

引き出したモノの全身を撫で回すと、弓を持った小柄な男の子だ
と知れた。

「これがカラクリね」

「そうみたいだね」

同じくバラバラの巨大な防具の中から人——魔族を引っ張り出しているだろう桜花が私の推理を肯定した。

先程、激昂したスタローグの気配は一つ一つが違って感じた。つまりスタローグは一人ではなく数人の魔族が鎧の中に入って操っていたのではと疑いを持った。

そこを一箇所に集めて、破壊力はないけど音だけは凄まじい炸裂弾（月夜曰く、『失神雷』という名）で気絶させたという訳。

この広い空間でも耳鳴りがするほどの音だ。狭い鎧の中にいた彼らには堪らなかっただろう。

（決まりましたね。『火術の型・不知火・絶』）

「ええ、よくやってくれたわね。月夜がいてくれて良かったわ」

私は気を失っている魔族の少年に膝枕をしながら隣に座った月夜の頭を撫でた。

「手強い相手だったわ。よもや初日で月夜の火術を披露する事になるなんてね」

私は膝の上の少年の顔を撫でた。私は触れる事で大体の造作を知ることができる。

世間で美人と評判の月夜の顔を基準にすると、とても整っていてかなり幼い顔立ちをしている事が分かった。

「お見事でした。僅かな情報で敵の技を見抜き、もっとも効果的な方法で倒す。これほどの人物は初めて見ました」

「いえ、今日の勝利は平時であろうと万全を期している月夜の手柄です」

アランドラ皇子の称賛を月夜に向ける。

（そんな、私は常に矢面に立たされている姉様の戦いに茶々を入れているだけです）

恥ずかしいのか、いつもより早い月夜の指の動きがくすぐったくて私は思わず笑みを浮かべてしまった。

しかし、聖剣の事を思い出してしまい笑みが引つ込んだ。

「それより聖剣の儀は残念でした」

「それは仕方ありませんね。しかし、いつかは勇者の資格を持つ者が現れて聖剣を使いこなしてくれるでしょう」

アランドラ皇子は優しくな声でそう云ってくれた。

「キャア！」

突然上がったアリーシア様の悲鳴に私達は何事かと振り向いた。

「ゆ、ユキコ様……」

「アリーシア様?!」

苦しいなアリーシア様の声には私は思わず声が裏返った。

『お、おのれ……ユキコと申したな？ 貴様のお陰で拙者の面目は丸潰れだ！』

「この声はスタローグ？」

慌てる私の背に月夜の指が滑る。

（姉様、髭を生やした巨漢がアリーシア様を拘束しています。しかも、右手には短刀が握られ、アリーシア様の喉元に……）

私は少年の頭をそつと膝から降ろすと、立ち上がってスタローグと対峙した。

『その通りよ！ スタローグよ！ まさか『マリオネット・アームズ』をあのような方法で破られるとは不覚であつたわ！！』

スタローグの憎悪をのんだ声が響き渡る。

『あ、兄者！ 何をなさるおつもりか？』

初めて聞く妙齡の女性と思しき声に、私はスタローグの仲間の魔族であると察した。

『知れた事！！ 最早、我らはヴェルフエゴール閣下に合わせる顔がない！ ならば、せめて星神教の巫女頭と勇者、そして聖剣を道連れに果てるのみ！！』

そう云うやスタローグから妖気が漂い始めた。

『やめよ、兄者！ 汚名は武功で雪げば良いではありませんか！』

『もう遅い！ 我らがスタローグ家の奥義『マリオネット・アームズ』が破られ、父の形見の甲冑も破壊されたのだ。貴様もスタローグ家の一員ならば生き恥を晒さず共に散れい！』

状況はかなり不味い。恐らくスタローグはなんらかの方法で我々を道連れに死ぬつもりだろう。

アリーシア様を人質に取られ、相手は今にも炸裂弾のように爆発しそうな雰囲気だ。

如何にこの危機を打破すべきか、私は必死になって考えていた。

『我が体内に残る全ての魔力を暴走させ、全てを無に還してくれるわ！』

スタローグから溢れる妖気はますます強くなっていく。

「待ちなさい！ ここにはまだ幼い貴方の仲間がいるのよ？」

私は足元にいる少年を指す。

『フン、見縊るなよ？ 戦場に出る以上、そやつも死を覚悟してるわ！』

駄目だ。既にスタローグの声には狂気が宿っている。

「せめてアリーシア様だけでも！」

私はスタローグに向かって突進するが、妖気に阻まれ進めなくな

つてしまう。

身を焦がすように熱いの、同時に凍えるほどの冷たさも感じる不思議な壁がそこにあった。

『グフフフフ！ ユキコよ、我らは死して魔界に名を遺すぞ！』

「キャアアアアッ！」

妖気の渦に弾かれて私は遙か後方の壁に叩きつけられた。

「グッ！」

衝撃と同時に内臓まで痛めたのか、大量の血を吐き出してしまった。そのまま倒れ、近くの水路に頭から落ちるなんて無様を晒す。

「ユキコ殿！」

すぐさまアランドラ皇子に水路から引き上げられたものの、かなりの痛手を受けたせいで、ろくにお礼も云えない有様だった。

遠くなりつつある意識の端で、アランドラ皇子が何度も私の名前を呼んでいるのが聞こえる。

「貴っ様アアアアアアアアアアアアッ！」

次の瞬間に聞こえた叫びに私は頭を抱えなくなった。

むしろ、そのまま気絶できたらどれだけ楽だったか……

「よくも雪子姉を！ スタローグ！！ テメエが今ので誰を敵に回したのか教えてやる！！！」

「お、オウカ様？」

桜花の豹変振りにアリーシア様が素つ頓狂な声で叫んだ。
そう、今の叫びは桜花が上げたものだった。

否、桜花の『兄』か『弟』になるはずだった者の叫びと云うべきか。

「雪子姉を傷つける野郎は例外なく潰す！」

「久々に出たか、巴の怒りが……このややこしい状況で」

私は額に手を当てて嘆息した。

アリーシア様を拘束し、我々を道連れに自爆しようするストーリー。
グ。

最悪の状況の中で轟く怒りの叫び。

それはこの状況を打破する救いの手となりうるのか？

桜花の姿でありながら『弟』と呼ばれた巴とは何者なのか？

それは次回の講釈にて。

第参章 電流出陣（後書き）

初戦闘です。戦闘シーンは難しいですが、書き甲斐がありますよね。

それと今回は雪子の持つ狂気を出してみました。

彼女の持つ狂気とは暴力衝動と破壊衝動。

主人公にしてヒロインが持つものではありませんが、それを如何に克服するのが彼女の生涯をかけた命題であり修行でもあります。

第肆章 勇者覚醒

私はアランドラ皇子の肩を借りてなんとか立ち上がることができた。

「ユキコ殿・・・オウカ殿はいつたい？それにトモエとは？」

私は全身の痛みより精神的な疲れで膝を笑わせながらアランドラ皇子へと顔を向けた。

「桜花、そして巴は元々双子としてこの世に生まれてくるはずでした」

そう、我が霞流道場掛かり付けの医者の見立てでは、霞家の末子は双子として生まれるということだった。

しかし、生まれてきた子はただ一人、さては老医師の見立て違いかと思われた。

その医者の名は順庵じゅんあんと云うのだけど、その知識の乏しさと技術の拙さから、藪やぶ以前の筍しゅんとして筍庵しゅんあんと渾名されているような老人であったので、誰もが呆れたものだった。

門下生達は口を揃えて、怪我をすれば月夜の手当の方が早く治るし、病気になれば私の鍼やお灸の方が順庵のインチキ薬より効果的と云う。

あら、私？

実は私にも双子の兄がいて、私なんかじゃ足下にも及ばないほどの達人だったの。

当然、道場は兄様が継ぐものだと思っていたので、私は子供の頃から剣術修行の傍ら、盲目でも独立して収入を得られる鍼灸や按摩の勉強をしていた時期があったのよ。

もつとも、その兄様は明治五年に起きた銀座の大火に巻き込まれて亡くなってしまい、結局、兄様に次いで霞流剣術の奥義を究めていた私が道場を継ぐ事になったのだけどね。

さて、順庵ははつきり云って、祖父の代からの付き合いでなければ即刻縁を切りたいと、私をしてそう思わせる無茶苦茶な医者なのだけど、桜花の双子に関してだけは彼の見立ては間違っていないかった事になる。

「どうも母の胎内で一人になってしまったらしいですよ。未だに信じられないのですが」

それが知れたのは、桜花が九つの時で、私は近所でも評判の悪い士族崩れの子息達に目の事でからかわれていた。

最早、その程度の擲掄に慣れていた私は無視を決め込んだ。

しかし無視された事が彼らの癪に障ったらしく、一斉に石礫を投げつけてくるようになった。

仮にも私は剣術道場の娘にして門下生、たかだか数人に石を投げられたといつてかすりはしないのだけど、その日は違った。

どこに隠れていたのか悪童がわらわらと集まってきた。四方八方からの石礫に私は対処しきれず一つ、また一つ当たってしまった。

その時、たまたまお使いに出ていた桜花がその場に現れた。

「貴様らあああああッ！！」

私は初め、その声が桜花のソレとは判らなかった。
しかし悪童を打ちのめす者の「よくも雪子姉を！」とか「雪子姉の仇だ！」だの声に漸く私は救い手が桜花だと悟った。

やがて微かに聞こえてくる悪童達の呻き声に洒落にならないものを感じ、私は桜花の手を取って一目散に逃げた。

ややあつて人気のない場所まで逃げ切った私は助けられたお礼を云い、次いで先程の喧嘩のやり過ぎた部分と男言葉を寤めた。

「うん、解ってるけど雪子姉があんな目に遭わされて黙ってられるかい」

と桜花は悪びれずに云った。

私はその時、奇妙な違和感を感じた。声は確かに桜花のモノだったけど、気持ちいつもより低いように感じたのだ。

「桜花？ 貴女、桜花……よね？」

私は桜花の顔を擦る。間違いなく桜花の顔、桜花の髪だった。

「そんなことより雪子姉、大丈夫か？」

桜花は困惑する私の腕を取って撫で回す。途端に鈍い痛みが走り、私は顔を顰めた。

「あ、こんなに痣が……アイツら女の肌になんて事を！！ 額も血が出てる……」

すると桜花は私の頭を抱いて額に舌を這わせた。

「ちょ、ちよつと桜花?!」

私はあまりのことに驚いて桜花の胸を押して彼女を離そうとした。その時、いくら当時の桜花の胸が幼さゆえに平らだったとは云え、女としてあり得ない固さがある事に気が付いた。

「桜花? 貴女、胸が……」

「あー、バレちゃったか……うん、もう隠せないよな。ちよつと軽率だったか」

桜花はまず驚くかも知れないけど最後まで聞いて欲しい、と前置きしてから言葉を紡いだ。

「雪子姉、俺が……俺と桜花が本来双子として生まれる筈だった事は知ってるよな？」

確かに俺達は双子だった。けど俺はお袋の腹の中で桜花の体の中に取り込まれちゃったんだ。何でかは解らないけどな。

やがて俺は完全に桜花と一体化して一人の霞桜花としてこの世に生を受けた。俺自身、信じられないけどさ」

「話自体、驚いたけど、その口振りじゃまるで母様のお腹の中にいた時から物心がついてたみたいなんだけど?」

「うん、その頃から俺は意識があったんだって……予想より驚いてないんだな?」

桜花、いえ、『弟』の言葉に私は思わず苦笑する。

「いえ、十分驚いてるわ。でも大切な家族が秘密を打ち明けようとしてるんだもの、必要以上に驚いてたら失礼じゃない」

私は『彼』の体を抱き寄せる。普段の桜花とあまり変わらないと思ってたけど、やはり肩はしっかりしてるし腰のくびれも無くなっていた。

「雪子姉……話を続けようか。生まれてからも俺の意識は消えることとはなく、桜花と肉体を共有する生活が始まった。

もつとも見かけは桜花のものだったから俺はあくまで『表』に出ずに俺なりの人生を愉しんでいたよ。例えば桜花の見聞きしたものとかね。

でもホラ、桜花って時々トンチンカンなところがあるだろ？ だから俺はたまにだけどアイツに助言を与えてやつたりもしてたんだ。助言と云っても桜花の見聞きした事だけが俺の全てだから大した事はできないし、本来桜花が覚えているべき事を代わりに覚えてただけだけどな」

云われてみれば確かに桜花は稀に高い知識を披露し、驚く私達に、「桜花には“天の声”が聞こえるんだよ」って得意げに云っていた。それに『彼』の云う通り、桜花は物覚えが悪い。頭は悪くないのだけど興味の無い事（特に勉強）には苦手意識も働いて覚える気力が見受けられない。

しかし桜花の知覚したものだけが人生の全てだと云う『彼』は貪欲に知識として取り込んだ。だから月夜の講義さえも『彼』にとっては娯楽だった。

「で、これが重要なんだけど、俺が『表』に出ることは今回が初めてじゃないんだよ。それも一度や二度じゃない。

初めは怒りが切っ掛けかなと思ってたんだけど、考えてみるとそ

うじゃないんだ。普段の生活で腹が立つことがあっても滅多に『表』出ることはなかったからね。

切っ掛けは多分、さっきの莫迦共のように雪子姉や月夜姉に危害が与えられている場合に限るんだよ。今だってアイツらのした事にはハラワタが煮えくり返ったしな」

その言葉に私は頬が緩むのを抑える事ができなかった。今まで桜花の裏方に徹していたこの『弟』はずっと私達を護ってきてくれていた。

そう思うと益々頬が緩み、段々『彼』が愛おしくなってきた。

「貴方はずっと私達を護ってきてくれていたのね」

私はずっと抱いていた『彼』を更に力いっぱい抱きしめた。

「雪子姉？　俺が気持ち悪くないのかよ？」

「莫迦を云わないで、私にとって家族は何物にも代え難い宝よ？　気持ち悪いなんてあるはずないじゃない」

「いや、でも俺が『表』に出ると……」

『彼』は私の腕の中で身を振る。

「そう云えば貴方が『表』に出ると体も男の子になっちゃうの？」

「うん、そうみたいだ　だから道着ならともかく女物着てる時、『表』に出るのはちよつとな。」

桜花は褌が嫌いだし、今は腰巻だからスースーと落ち着かねエしさ」

「ふむ……」

私は少し興味が湧いた。

「ぬあ？！ ど、どこ触ってんだよ？！ 雪子姉はそっちの方面は奥手だと思ってたのに！」

「あ、ごめんなさい。でも好奇心が抑えられなくてつい……」

確かにいくら『弟』とはいえ、今は無いと自分でも思う。少々図に乗ったと反省しつつ手を離す。

「それはそうと貴方にも名前が必要よね。今から貴方をこの世に括る為にも名前をつけて良いかしら？」

私が居住まいを正して『彼』に云うと少なからず驚いたようだった。

「良いのかい？ 俺が名前を貰っても」

「勿論よ。もともと元々双子だった貴方達の為に二つの名前を用意していたのだけだね。実際には数え切れないくらい候補が在ったんだけど。」

女の子の方は母様が姉妹を『雪月花』としたかったようで『桜花』と名付けた。で、男の子には父様が霞家の嫡男に相応しい名前を考えていたわ。

その名は『巴』。我が家の家紋から取り、そして私達雪月花の三姉妹が離れ離れにならないよう守り抜いて欲しいという願いも込められた名前」

「巴……巴か。ちょっと女の子っぽい感じもするけど嬉しいよ。ありがとう！」

『彼』、巴が嬉しそうに抱きついてくる。

私は桜花が再び『表』に出るまでずっと頭を撫で続けていた。

「それでは今、スタローグと対峙しているのはオウ力殿ではなく『弟』のトモ工殿という事ですか？」

アランドラ皇子は半ば信じられないといった響きの言葉で問いかけてきた。

「ええ、姉の私が云うのもなんですが、巴は相当強いですよ。私でも竹刀なら三本中一本は取られるくらいですから」

なんだ、竹刀稽古かと莫迦にされては困る。

木剣稽古、真剣稽古、なるほど竹刀よりも重量はあるし、緊張感も生まれるだろう。けど、それが有効なのは素振り稽古や型稽古などの基礎であって、打ち合いの稽古となればどうだろう？

真剣は云うに及ばず、木剣で打ち合いなど熟練者であっても気を抜けば大怪我をする。ましてや仕合ともなればもっと激しさを増して死人すら出る事もある。

中には、そうした緊張感無くして剣の道が極められるかと云う意見もあるだろう。

けど、何故竹刀が発明されたのかも考えてみて欲しい。恐らく考案者は稽古や仕合で大怪我をしたり、命を落とすなど話にならないと思ったのではないだろうか？

事実、袋竹刀を考案された新陰流・上泉信綱様はそのようにお考えだったようだし、直心影流は更に発展させて竹刀と防具を考案し、他の流派が型稽古に明け暮れる中、いち早く竹刀による打ち込み稽古を導入したと云われている。

理由は簡単、木剣よりも安全に相手に打ち込めるからだ。結論として、本気で打ちかかることができるという事は、限りなく実戦に近い動きができる事に他ならない。

もう分かったでしょう？

巴は実戦形式ならば三回に一回は私に勝てるだけの实力を持っている。

そう巴は強い。私は、『心の眼』を使っても対処しきれない稲妻の如き高速の籠手打ちを放つ巴を思い出していた。

ソレは速いだけではない。もし真剣で放てば相手の腕を斬り飛ばし、木刀で打てば防具を着けたところで骨折を免れないほどの威力もある。

しかも巴は相手の呼吸を読み、僅かな隙を見逃さず針の穴を通すが如く精密な狙いで相手の籠手に襲い掛かる。

相手を倒すのではなく制する。

腕を破壊し命を奪うことなく確実に相手の戦闘力を削ぐ優しさと非情さを併せ持つこの技を私は『鬼泣かせ』と名付けた。

私は霞流師範として、巴にこの技を練り上げて自分だけの必殺剣になるまで昇華するように命じていた。

「ヒメミコ様、すぐに助けてやるからな!!」

巴がそう云った直後、周囲の空気がピンと張り詰めた。

「おお、トモエ殿が『ムーンシャドウ』を手にとると刀身から黒い煙が！！ 否、まさかアレは“闇”？！」

どうやら巴は聖剣を使おうとしているらしい。

しかも桜花とは逆に『ムーンシャドウ』が反応を示しているようだった。

「テメ、とつとと抜けやがれ！！ このままじゃお前まで爆発に巻き込まれて終わりだぞ？！」

「ああ、オウカ様？！ 神から授かった聖剣をそんな足蹴にしないでくださいまし！」

さっきから妙に打撃音が耳を打つと思ったら、巴が聖剣に蹴りをいれているらしかった。

「いい加減にしろよ！ 雪子姉と月夜姉の命がかかってんだ！！ 桜花！ お前も寝てないで手伝え！！」

次の瞬間、辺りは沈黙に支配された。

耳が痛くなるほどの静寂は永遠に続くかと思っただけ、ソレは一瞬の事だった。

「おお……おお……おおおおおおッ！！ 遂に、遂に聖剣が抜けた！ 今まさに勇者がここに誕生した！！」

アランドラ皇子の興奮した声に私は理解できた。

先程、『サンシャイン』が反応を示しても桜花に抜けなかった理

由が。

桜花は多分、『サンシャイン』には認められていたのだろう。しかし相方の『ムーンシャドウ』には認められなかったので抜けなかったのではないのだろうか？

逆に巴は『ムーンシャドウ』に認められたものの『サンシャイン』に認められなかった。

でも私には感じる、桜花と巴が同時に覚醒している事を。

それぞれ聖剣に認められていた『二人』が『表』に出ることで初めて聖剣が使えるようになったのだろう。

「アリーシア様、今助けるわ！！」 『月影』、スタローグの妖気を
「！！」

はて？ 今の口調はいつたい？

桜花も巴もこんな喋り方じゃなかったはずだったけど？

それに『月影』とな？

『ぎゃあああああッ！！』 せ、拙者の魔力が消滅する？！』

「凄い……これが聖剣の力！ ユキコ殿、『ムーンシャドウ』がスタローグの魔力を吸い込んでいます！！」

云われてみれば、スタローグの妖気が完全に消滅している事に気がついた。

「この『月影』の力は“闇”！！ 世に溢れる悪しき魔力を斬り、取り込むことができる！ 更に悪しき力を浄化して我が物にする！！」

不意に桜花（それとも巴？）から暖かな波動が伝わってくる。

「そしてもう一振りの聖剣『日輪』の力は“光”！！世に仇為す
“悪しきモノ”を滅ぼす力！！更には『月影』が浄化した魔力も
“光”に変換して使う事も可能！！」

「ま、待つて！ このまま聖剣の力を振るえば姉上まで！！」

アランドラ皇子の制止の言葉を無視して桜花から激しい波動が迸
つたのを感じた。

『ぬ……ぬおおおおおッ？！ 消えるッ？！ 拙者の体が消
えていくッ！！ なのに何故、恐怖を感じぬ？！ 何故、心が安ら
ぐのだ？！』

その言葉を最期にスタローグの気配がこの場から、否、この世か
ら消えた。

「凄まじい光でしたわね……」

「あ、姉上？！ ご無事でしたか！」

「え？ ええ、あのスタローグを倒した光に私も包まれましたが、
どこにも傷はありませんし、むしろ以前より体調が優れているよう
です」

アリーシア様はそう答えた後、私の所まで駆け寄った。

「流石は神より授かりし聖剣ですね。勇者にしか使う資格を与えら
れないのも頷けます」

「ええ、俺も驚いてる。これ程の力を秘めているとは思わなかったわ」

音からして先程の二の轍を踏まないよう、桜花がスタローグ一家を縛り上げている事が察せられた。

「ええと……貴女はオウ力様なのですか？」

「それともトモ工殿ですか？」

お二人の問いに彼女が答える。

「俺は桜花と巴であって、そのどちらでもないわよ」

「どういう事？ 私は桜花か巴か判じる事もできないまま近づいていった。」

「貴女は本当に桜花？ それとも巴？」

私は思わずそう呟いてしまった。

何故なら今の彼女は私より頭一つ分ほど高い身長で、駆け寄った私を抱きしめて迎えたから。

しかも私は彼女（？）の大きな胸に顔を押し付けられている状態だった。もしかしたら月夜よりも大きいかも。

「だから、そうであってそうでないの。俺は聖剣を振るえるように作り変えられたのよ。その名も『^{ひまわり}聖』」

「作り変えられたって！」

私は思わず激昂しかけた。

勇者になることは覚悟していたけど、まさか都合よく体を作り変えられるなんて。

「あー、勘違いしないでね？ 俺がこの姿になるのはこの二振りの聖剣を同時に使わなければならない状況になった時だけだから。普段は元の桜花と巴になってるわ」

「そうなの？」

「そうみたいね。聖剣の話だね？」

桜花、いえ、巴、否、聖の話だと聖剣を掴んで心の奥で眠る桜花を無理矢理起こした巴はついに聖剣を引き抜くことができたと言った。次の瞬間、『二人』どころも知れぬ光しかない不思議な空間に生まれたままの姿で漂っていたそうだった。

驚く『二人』の前に聖剣が突然現れた。

ちなみに桜花はその時、初めて巴の存在を知ったそうだけど、持ち前の明るさの為か、今まで助けてくれた“天の声”の正体と知ったからかすなりと彼を受け入れたそうだった。

聖剣には意思があり、ソレが自らの所有者を決めるのだと云う。

『サンシャイン』は桜花の心に自分と同じモノを感じ所有者に選ぶとしたけど、『ムーンシャドウ』は違った。

『ムーンシャドウ』には桜花の明る過ぎる心が自分の所有者に相応しくないと感じたらしい。巴の場合も桜花とは逆だけど理由としては同じだった。

聖剣は二振りだけど、その剣の力ゆえ勇者は一人である必要があった。しかし『サンシャイン』は巴の、『ムーンシャドウ』は桜花の心が苦手だった。

聖剣はそれぞれが対魔族戦の切り札になり得るが、今の桜花と巴

では同時に二振りが使えない。

そこで聖剣はある意味、物凄く頭の悪い結論を出した。

「それで何？ “光”と“闇”の力を振るう事が出来る、つまり両方の資質を持つ勇者を作り上げようって話になったの？」

「その通りだけど、桜花と巴も融合は反対はしなかったわよ？ 一時的なモノと聞いたし、何より姉貴を早く助けたいって気持ちが強かったもの」

そう云って聖は私をより一層強く抱きしめたので呼吸が苦しくな
って暴れた。

それに聖は体が大きくなったせいかな道着に体が入りきれなくなっ
ていてしまい胸元が大きく肌蹴ている。

その為、私は直接胸に顔を押し付けられる格好になってしまった
のでもの凄く恥ずかしかった。

「それで俺もここまでするんだから、と云って聖剣に改名を申し出
たのよ。

長ったらしくて呼びにくかったから『サンシャイン』は『日輪』、
『ムーンシャドウ』は『月影』って具合にね」

「『日輪』と『月影』ね。なるほど私もその方が呼び易いわ……っ
て、悪いんだけどそろそろ離して？」

私はなんとか聖を見上げるように顔を上げて云うと、彼女の体が
小刻みに振るえ始めた。

「あ、姉貴……もう一回云って？ 今度は目を開けて」

「え？云ってる事の意味が……」「早く！」　は、はい！」

情け無い事に聖の気迫に負けて私は瞼を開けて離すようお願いした。

「ぐ……これ程とは……」

だから訳が解らないんですけど？

「いつも見上げてた姉貴が今、俺の腕の中で顔を真っ赤にさせて上目遣いをお願いする！！今日は俺の人生最高の記念日よ！！」

よ、余計締め付けてどうするの？！

「あらあら、まさか妹さんが恋のライヴアルになるなんて思ってもみませんでしたわ」

アリーシア様も変な事を云わないでください。らいばるって言葉の意味は良く解らなかったけど、“恋の”と付くからにはろくな事はなさそうだった。

『そろそろコントをやめて貰いたいものだが……』

莫迦騒ぎをしている私達を嗜める女性の声がした。

思うに自爆しようとしていたスタローグと口論していた女魔族の声だったような気がする。

私達の意識がそちらに向いていた隙に月夜が聖の腕の中から私を解放してくれた。

でもね、月夜？　何故貴女も私の頭を胸に抱くの？

貴女の背丈で私の頭を抱かれると物凄く腰に負担がかかるのだけ

ど？

いやいや、頬擦りされてもどう反応すれば良いのか……

と、云うより大切な妹なのに貴女に対して殺意が……この胸、私に対する苛め？

『我々の処遇を決めて欲しいのだがな？』

女魔族は恐らくじゃれ合う私達に苛立ちを感じているらしく憮然としてそう云った。

私は月夜の腕から抜け出す——い、意外と力があるのね？——四苦八苦の末に抜け出すと女魔族の前に来てしゃがんだ。

「そうね、私の一存じゃ決められないけど、多分、すぐに解放って事になると思うわ」

『なっ！ 巫山戯ているのか、貴様は！』

彼女は激昂して叫んだ。

気持ちは分からなくはないけど、唾を飛ばさないで……

「ユキコ様？ 確かにいきなり解放はないと思うんですけど？」

「アリーシア様、彼らには『影渡り』の術があるのですよ。たとえば牢に繋いでも影がある場所ならばすぐに抜け出せるのではないですか？」

私がそう指摘するとアリーシア様を始め、魔族の面々も驚いたように、あつと声を上げた。

そうですか。皆して『影渡り』の事を失念していましたか。魔族までも……

「ならば下手に捕らえて、逃げられてですよ？ お城の中で暴れられたり、街で憂さ晴らしをされたら流石に洒落にならないと思いませんか？」

あまりの事に思わず泣けてきそうになってきたのを堪えて話を続ける。

「もしかしてこの国に『影渡り』を封じる方法がありますか？ もし、あるのだしたらその心配も杞憂になりますか？」

「いいえ、残念ながらその様な術はありません。そもそも魔族に関する記録自体古過ぎて、存在そのものが疑問視されていたくらいなのですから」

アリーシア様は申し訳さなそうに答えた。

「ですから、どうせ逃げられるのならば、いつそ何も無かった事にして解放した方が彼らの怒りもスチューデリアには向かないでしょうし、この国も面子が保てるでしょう？」

『き、君は意外と腹芸が上手いな？』

聞き慣れない男性の声に私は誰何の声を向ける。

『これは失礼。私はスタローグ家次男マーストと云う』

ついでなので他の魔族にも自己紹介をして貰った。

まず先程、聖の聖剣により倒された髭の巨漢が彼らの長兄でカイゴーと云った。

生まれた順で続けると今、代表で話していた女魔族が長女テーシヤとなる。

革製の鎧と足の付け根まで切り詰めたズボンという姿で、私と同じくらい高い背をした貞淑さと凛々しさが同居する美女との事。少し長めの髪を髪留めで纏めているような。

次に瘦身の次男マースト。しなやかな四肢は痩せぎすと云うより、無駄な筋肉が無い事が見て取れるらしい。本人にはサーベルを遣わせたら魔界一と自慢された。

続いて戦闘中、月夜の炸裂弾でこの世を去った三男のエント。

そして次女の特オちゃん。私の顔を見るなり『兄様の仇！』とか『殺さなかった事を後悔させてやる』と元気なお嬢さんだった。背は低いけど私の倍は生きているらしかった。

最後に私が脛当てから引きずり出した少年、末っ子のアンリ君。私が挨拶をするとは何か『あう』だの『えう』だの意味の分からない返事をされた。体の線が細い割りには、鉄製の弓を背負っていた事から腕力はあるのだろう。

あまり似ていない兄弟らしいけど、全員の共通点として銀色の髪と青白い肌、人のものとは似ても似つかぬ長く尖った耳を持っているような。

ちなみにカイゴーは甲冑の胴体部分、テーシャは兜、マーストとエントは籠手、テオちゃんとアンリ君は脛当てに身を潜めていたと云う。

そして甲冑の中にあつた肉塊のようなものは、装着者を保護する緩衝材であると同時に、互いの魔力を繋ぎ合わせて甲冑を操る触媒であるらしかった。

『さて、先程の件に話を戻したいのだが……』

「はい？」

私はテーシャの前に座ると先を促した。

『解放の申し出の事だ。解放された所で素直に逃げると思うか？
先程の貴様の話ではないが、街で暴れるかも知れんぞ？』

「その可能性も考えたのだけど……その恐れは無いと思うわ」

断言する私にテーシャはしばし絶句した。

『何故、そんな事が云える？ 根拠は？』

「少なくとも貴女が誇高い人だと思ったからよ。自爆しようとしていたお兄さんに、生きて武功で汚名返上すれば良い、と云っていたしね。」

そんな貴女が解放されて、すぐ街やお城に攻撃するような真似はしないと思うし、そう信じたい。私の云った事は外れかしら？」

私がそう問うとテーシャは盛大に溜め息を吐いた。

『確かに、兄者とエントを倒されて貴様らが憎くないと云えば嘘になる。

だが、敗北した後すぐ解放されて、その上非戦闘員を襲うなど恥の上塗りは出来ん。

それにヒジリと云ったか？ あの勇者が兄者を止めてくれなかったらアンリ、兄者が一番可愛がっていた末弟ごと滅ぶところだった』

その事については感謝している、とテーシャは頭を下げる気配を見せた。

「なるほど、確かに良い子みたいね」

私はアンリ君の頭を撫でると、彼はまたも『あう』と意味不明な言葉を発した。

『アンタ、何、顔を青くしてんのよ？　コイツらはカイゴー兄様とエント兄様を殺したヤツらなのよ！』

私に頭を撫でられて顔を青くするとは、余程私が怖かったのかと思っただけ、どうやら違うみたい。

何でも魔族は血の色が青いそうで、羞恥なり、怒りなり、人ならば顔が赤くなるような事態になると、魔族の場合は集まった血で顔が青くなるらしい。

ちなみに魔族は血の気が引く様を、顔色を白くすると表現するそうなの。
うな。

『あ、青くなんかなくてないよ、テオ姉さん！　それにカイゴー兄さん、あんな安らかな顔で死んでいったんだ、敵討ちなんて望んでないよ、きつと』

アンリ君はまだ声変わりをしていないのか、綺麗な高い声をどもらせつつもテオちゃんに反論している。

でも強い子、お兄さんの死に様をちゃんと見届けて、しっかりと受け止めている。

しかし……

「カイゴーが、貴方のお兄さんが仇討ちを望んでいなかったか、それは私にも貴方にも判らないわ」

『……え？』

アンリ君は驚いたように声を上げた。

「貴方は強い子ね。お兄さんの死をきちんと受け入れて……でも、憎しみの炎が貴方の心を気付かないうちに蝕んでいるのかも知れない」

『そ、そんな事！ カイゴー兄さんはいつも、軍人となつたからには死について考えておけ。自分が死ぬ事。仲間が死ぬ事。自分が敵を殺すという事もだ、と云っていた。だから、僕が死ぬ事も兄弟が死ぬ事も覚悟はできてた！』

「貴方の覚悟は解つたわ。でも心は判らない。生きているんだもの、心は常に動いているわ」

私はアンリ君を腕の中に抱いた。

『あつ』

きつと、この子の口癖なのだろう。

何故か、体が硬直したかのように動きを止めたアンリ君は気にしない事にして、私は話を続ける。

「憎しみという感情は、激しい感情は遅れて芽生える事もあるの……私も同じ、頭で分かっているけど心が抑えきれない事もあるのよ」

『ゆ、ユキコさん……でしたっけ？ 今のはどういふ……？』

私はアンリ君の唇に人差し指を当てて言葉を止める。

「もしもの話よ。もし貴方の中に憎しみが芽生えたら約束して？ 決して他者には向けないで……その怒りは私だけにぶつけないさ」

え？

私、何か変な事云った？

「ゆ、ユキコ様……そんな透明な笑顔で、殺してと何故、云えるのですか？」

「そ、そうですね。その笑顔は美しすぎる。美しいが故に私は恐ろしい」

アランドラ皇子、恐ろしいと言われても困るのですけど。

「特別な事ではありませんよ。武士道論書・葉隠という書物は武士道を究めるには朝夕繰り返し死を覚悟する事が肝要であると説いています。武士道というのは死ぬ事と見つけたり。生と死の二つのうち、いずれかを取らねばならない時、私は迷わず死ぬ方を選ぶというだけの話です。全ての終わりは全ての始まりでしかありません。ならば、死すべき時に死なぬは恥晒しなだけ……生き恥だけは晒したくはありませんので」

カイゴーの事を悪く云えませんか、と自嘲気味に云うと誰かに抱きしめられた。

いったい、私は今日一日で何回抱きしめられているのだろうか？

『貴様は兄者とは違う。兄者を、故人を悪く云いたくはないが、自爆という手段で勝者を巻き込む事は武人として恥すべき行為だ』

「テーシャ……さん？」

いつの間に拘束を抜けたのだろう？

『なるほど、私達は兄者の暴走を止めてくれたという意味でも貴様に感謝せねばならんようだな』

「では、恨みとか憎しみとかそういう感情無しで戦ってくれるのね？」

私の言葉に彼女はしばらく沈黙した。絶句したとも云うかも。

『ハハ、なんて女だ、貴様は。おまけに目に光が無いとはな』

「気付いていたの？」

『ああ、貴様は確かに話す時は必ず相手の方を向いている。

しかし、目を瞑っていても分かるほど微妙にどこかズレていたからな……

ハハ、敵わぬよ。盲目でありながらこれ程の剣技を身に着け、盲目故に我らの『マリオネット・アームズ』を見破ったのだな。いかな、私は貴様の事を気に入ってしまったよ』

テーシャは抱擁を解くと、私の真正面で傳く気配をみせた。

『よかるう。私は、我らスタローグ家はカスミ・ユキコとの戦いにおいて非戦闘員は傷つけない事を誓おう』

続いて鞘から鋭利な剣を抜くような音がした。

『ああ、このマーストも勇者以外の者には手を出さない事を魔王陛下より賜わったこのサーベルに懸けて誓おう』

次いで、高音で綺麗な声による宣言がなされた。

『ふん！ 弱っちいニンゲンを苛めたって面白くも何ともないわ！
だから、アンタ達とだけ遊んであげる！』

最後に声変わりをしていない男の子の声がした。

『ぼ、僕も一生懸命修行して強くなって、いつか、またユキコさんに挑戦したいと思います！ 勿論、他のニンゲンには手を出しません！』

スタローグ家の面々は私の周りに集まってワイワイ騒いでいる。
罵声が飛んできても不思議はないのに、彼らの口から出る言葉はどれも人を貶めるものではなく、むしろ敬意を払ってくれているのが感じられた。

「ええと……なんで好意的なの？」

私の呟きはスタローグ家の面々に届かなかったが、答えは意外な所から返ってきた。

（姉様……貴女はどこまで人を惑わせば気が済むのですか？）

私の腰を叩くような『言葉』に戸惑いを覚える。

「つ、月夜？ 惑わすって人聞きの悪い事を……」

（知りません！）

「痛ッ！」

月夜は私のお尻を軽く抓んで捻ると、不機嫌そうに私から離れていった。

何だったのかしら？

『ユキコよ』

「はひ！」

突然、テーシャに手を取られて思わず声が裏返ってしまった。

外国人と違って、握手をする習慣の無い生粋の日本人たる私には心臓に悪い一日だ。

『兄者とエントの弔いが済めば、私達は再び貴様達の前に敵として現れるだろう』

「そうなるわね」

甘いのは自覚している。

けど、数多の命を奪って生きている私にとって、殺さずに済む相手ならば、極力手につけないようにしているのは情け以外にも理由がある。

見逃す——命を救う行為は、奪った命に対する代償行為に他ならない。

早い話が自己救済が目的なのだ。

私が剣術指南の傍ら鍼医をしているのも、病人が可哀想だ、早く治してあげたいと思うと同時に、人を助ける事で人を斬ってしまった罪悪感を薄れさせ、自分が押し潰されないようにしているだけだ。医は仁術——という基本理念を根源から覆す最低な動機がそこにあった。

結局、自己憐憫が前提にある情けなのだろう。

『だから今の内に、今だけしか云えない事を伝えておこう』

しかし、テーシャはそんな私に気付いていないようで、相変わらず真摯な口調で続けた。

その様子に、私は猛烈に嫌な予感がしてきた。

『私ことテーシャⅡスタローグは貴様に、カスミ・ユキコに尊敬をもって接しよう。敵同士でもあつても、な?』

直後、私の手の甲にチュツと音を立てて柔らかくて温かいモノが触れた。

それが何か気付いた時、私の顔は恐ろしい勢いで熱を運び、意識が遠のいていった。

しかし、意識が完全に途絶える直前、獲物を狙う獣の如き殺気が私を覚醒させた。

「テーシャ！！」

半ば本能的だった。テーシャを突き飛ばした私の左腕に灼熱が宿った。

「くっ!」

私の左腕を鋭く長い何かが数本貫いていると察した瞬間、打撃音と共に私の胸に衝撃が走って後ろへと弾かれた。

[illegible]

獣の唸り声のような音は、先程まで私が立っていた所から聞こえ

てきた。

いったい何が？

弾き飛ばされた時、左腕を貫いていた何かは抜けてくれたけど、
抜け方が抜け方だったから傷口は大きく抉れ、容赦なく私に激痛を
与える。

『え、エント！ 貴様、まさか自分をアンデッドと化したのか！』

マーストの悲痛な叫びが襲撃者の正体をエントであると教えてく
れた。

しかし、エントは先程の戦いで月夜の炸裂弾で命を落としたはず！
それにスタローグ家の人達から伝わってくる哀しみと絶望の声……
恐らく今のエントの状態はカイゴーの自爆よりも悪い状況である
らしい。

『エント兄様！！ やめて！ 戦いはもう終わったのよ！！』

テーチちゃんの慟哭がこの日最後の戦いを知らせる銅鑼となった。

未だ終わらぬスタローグとの戦いはついに決着の時を迎える。
死してなお戦い続けるエントを解放すべく『地獄代行人』の裁き
の一太刀が闇を裂く。

不死身の敵を前に如何に立ち向かうのか？

自ら地獄へ落ちようとするエントの行く末は？
それはまた次回の講釈にて。

第肆章 勇者覚醒（後書き）

四話にして漸く勇者が覚醒しました。

随分と異色な勇者ではありますが、たまには異形の勇者もありなのではと思っています。

さて、スタローグ家との戦いはまだ続きます。

ですが次回で一応の決着がつきます。

第五章 秘剣『野分』

月夜が私の腕を取り、手際よく手当をしてくれる。

彼女もまた剣術道場の娘、狼狽えず冷静に対処してくれるのはありがたい。

「月夜、状況を……私の傷の具合も含めて」

（まず腕の傷ですが、今、血止めの薬を塗って、包帯代わりに私の襦袢の袖を裂いて巻きました。無茶をしなければという条件付きではありますが、姉様の腕前でしたら戦闘は可能です。でも、後ほどきちんとした手当をさせて下さい）

我が妹ながら、迅速かつ適切な応急処置のお陰で楽になった腕をさすりながら続きを促す。

（敵、エントですが、鎧越しとはいえ私の炸裂弾を受けたにしては傷が浅すぎます。流石に身に付けている物はボロボロで裸同然ですが、膝裏まで届く銀色の髪が少しも焦げていないのが不気味です。両手足の爪が異様に鋭く伸びていて、ほとんど凶器と化しています。実際、姉様の腕を傷つけたのは彼の爪です）

なるほど、刃物にしては傷口がズタズタになっていると思っただけど、まさか爪だったなんて……

（エントの目は姉様に向けられています。今はスタローグ家の人達と聖、アランドラ皇子がエントを取り囲んでいます。が、いつ囲みを抜け出すか分かりません。早急に対策を講じなければならぬではないでしょうか！）

対策と云われても、炸裂弾の直撃を受けてなお無傷でいられる怪物相手に使える手段なんて私が教えて欲しいくらいなだけと……

「いったい、どうなってるのよ？　まるで獣みたいになってるわよ！」

『くっ！　エントは優れた死靈術師ネクロマンサーでな、とりわけ動く死体作成にかけては魔界でも他の追隨を許さぬ腕を持っているのだ。エントの奴め、恐らく死の間際に自分自身に術をかけて生ける屍と化し、暴走しているのだろう！』

聖の焦りを含んだ声に、テーシャの答えは今にも泣き出しそうな子供を思わせる哀しみがあつた。

「アンタ達、止められないの？」

『無理だ！　エントの操る死体は完全に制御され、術者の命令には絶対的な服従をし、かつ高い成功率をもって遂行する能力の高さに定評があつたのだ。今のように対象が自分自身、しかも当の術者が死んでいるとなると、これからエントがどうなるのかおおよそ見当がつかない。ましてや、きちんと術をかけていたのかも怪しい。単純に『敵を倒せ』とだけ命令して術を施したとしたら、こちらの動き次第では最悪我ら兄弟までも標的にされかねん』

テーシャの声は哀しみだけでなく、徐々に焦りや恐怖も混じってきている。

無理もない。味方のはずの弟が暴走して、いつ自分達に牙を剥いてもおかしくない状況だ。

『更にだ。もう気付いていると思うが、エントの体が綺麗すぎると思うだろう?』

「こんな時に身内自慢? 確かに女と見紛うほどの切れ長の美形だし、傷一つない綺麗な体してるけどさ……あ、その唐辛子（隠語）は小さくて可愛らしいわね」

『どこを見ているか! 私が云いたいのには爆弾で殺された男の死体とは思えぬだろうという事だ! エントは美意識の高い奴でな、どんなに能力が高くて外見が醜く腐った死体は使いたがらない男なのだ。だから、奴の術は死体を操ると同時に生前に近い状態へと修復する機能も付与される。つまり、エントの屍は高い戦闘能力に加えて、ある程度の自己修復能力があると考えた方が良さだろう』

「いや、情報はありがたいんだけど、何故、敵である俺にコイツの事を教えるのよ?」

聖の疑問ももつともだと思う。確かに私もスタローグ家には友情めいた気持ちが芽生えてきている自覚はあるし、向こうもこちらに好意的な感情もあるだろう。しかし、それでもエントの力を教えて貰える理由にはならない。

『云ったであろう? エントは暴走していると……見よ、あの浅ましい獣けだもののような目を。獲物を狙う誇り高き狩人たる獣けものの目ならまだ良い。だが、今のエントの目はただ暴力に身も心も奪われた人面獣けだもの心のソレだ。だから止めて欲しいのだ。エントがただの暴力者に堕ちてしまう前に……情けない話だが『マリオネット・アームズ』で魔力を使い果たした我らでは足止めすらできぬ……』

これは小さかった。

道に迷い、心細くなって今にも泣き出しそうな子供のような細かい声だった。

しかし、私にははっきりと聞こえた。聞こえた以上は応えなければならぬ。

『誰か弟を助けて』

ただ純粹に使命を果たす為だけに、自ら外道に堕ちる覚悟をしてしまった弟を助けて欲しいと願うテーシャの心が『視』えてしまった。

「お引き受け致しましょう」

『ユキコ？』

半ば涙声のテーシャが不思議そうに声を上げた。

「勇者と聖剣を滅ぼす使命を全うせんが為に、自らを怪物と化した弟御の覚悟はご立派なれど、このまま外法に身を任せては地獄へと堕ちましょうや……」

私は太刀を佩くように杖を袴の帯に挟み、左手の指を開いたり閉じたりして痛みを確認する。

大丈夫。この程度の痛みならばお役目の最中は耐えられる。

「健気な弟御を地獄に行かせるは忍びない哉。ならば代わりに地獄へと堕ちましょう。外法の術をばバツサリ断ち切り安らかなる冥福を捧げましょう」

私が聖に顔を向けてゆつくりと頷くと、云わんとする事を察した

のかスタローグ家の面々に、合図をしたらエントから離れるように指示を出した。

「憐れ『死人返り』となった弟御の地獄行、肩代わり致しましょう」

『地獄代行人』のお役目は、何も正面から悪を斬ってきた訳じゃない。

世の中にはいるもので、死す事で徳川幕府、今ならば明治政府に悪影響を及ぼす権力者。

裏で悪い事をしていても、表では善行を積む事で人々から慕われている者共。

―即ち悪として葬ってはいけない悪の存在がごまんといた。

そんな力業の使えぬ悪に霞流は戸惑ったが、それならばと知恵を絞り、我が霞流の祖・霞籐右衛門が山中での荒行の過程で友誼を得た山伏から伝授された外法を用い、標的に神罰が下ったように見せかけたり、善人だった者が妖魔に取り憑かれて悪行に走り、ソレを謎の剣士が倒したとして始末したりと人智を超えたモノの祟りとして標的を仕留めるようになった。

腰に差した大真典甲勢二尺六寸、先祖代々、そういった人の世に蔓延る悪を妖魔の形にして斬り捨てて九百と七十と七……

悪に苦しめられてきた人々、斬り捨てられた悪どもの恨み辛みを吸い続けて最早、妖刀と呼ぶに相応しい存在となっていた。

「第十五代目霞家当主・雪子……地獄行、代行致し候」

私は体を居合腰に沈めて杖の先端に右手を添えた。

「今！」

剣の合図と共に、スタローグ家の気配がエントから離れた。

そう察した時には、既にエントの気配が目前まで迫っていた。

「せい！」

私は矢のように飛んで来る殺気の先端に合わせて『車輪』を放った。

『車輪』とは霞流居合の基本中の基本で、文字通り自分の体を軸として車輪を描くが如く抜き付けて前面の敵を薙ぎ払う技だ。

また基本故に応用技も多く、この技を完全に自分の物にして使いこなす事ができるようになった門下生は例外なく上達が早い。

『グロロオウツ?!』

手応えを感じたと同時に、エントは憎悪を含んだ叫び声と共に後ろへと跳躍した。

『なっ?! 山猫を思わせるエントの攻撃を防ぐどころか迎撃するとは!』

『見事だ、ユキコ! 今の斬撃でエントは右手の五指を失った! 自己修復を終えるまでの間は攻撃力が幾分削がれるはずだ!』

テーシャとマーストの驚愕と賛辞に私は軽く頷くことで返した。しかし、自己修復か……戦闘中に傷が癒えるとはなんとも厄介な話ね。

私は素早く二尺六寸を杖の中に納め、エントとの間合いを測る。すると、私の気持ちを察したのか聖が彼らに声をかけた。

「エントの操る屍を倒す術はあるの?」

『ああ、勿論あるぞ。エントの作る動く死体の秘密は血液にある！詳しくは流石に我ら兄弟にも教えてはくれなんだが、奴は自らの血に術を施し、ソレを屍に注入することで操り人形へと変えるらしい。即ち、奴の血を屍から抜くことで術を弱められるだろう』

抜くって目の前にいるのがエントその人なのだけど……

それに死体を斬ったところで出血なんてたかが知れてる。

いえ、人一人から全ての血を抜くなんて不可能に近いだろうに……

愚痴をこぼしそうになった私を先制するように今度はテーオちゃんに答えてくれた。

『アタシはよくエント兄様のお手伝いをしていたから知ってるけど、兄様の作る動く死体は生者と同じように心臓が動いてて血液を循環させているわ。理由は二つ、血液を循環させることで術を施したエント兄様の血を屍の全身に行き渡らせるという意味。もう一つは任務中、死体だってバレないようにっていう生者としての擬装ね』

だから、大動脈を斬れば生きてるかのように一気に血が噴き出すはずよ、と得意げに云うテーオちゃんに私は思わず、でかした、と大声を上げた。

『いきなり大声出さないでよ。吃驚するじゃない！ほら、折角、修復中で大人しくなってたエント兄様も驚いて威嚇の唸り声を上げてるじゃない！』

私は苦笑しつつ謝罪して、すぐに笑いを引っ込めた。
再び居合腰に構えてエントとの間合いを測り直す。

「……秘剣『野分』^{のわき}を遣う」

私の弦きが聞こえたのか、月夜と聖から息を呑む音が聞こえた。今から遣おうという『野分』は私が自分専用に独自に編み出した技であつて、霞流に伝えられているものではない。ましてや、門下生に教えられるような技でもない。

私の能力『心の眼』は確かに盲目である私に敵の位置、動き、心理を教えてくれる。

しかし、『心の眼』は極限まで高めた集中力を必要とする為、長期戦では遣えないという弱点がある。

それ故に私は一つの結論に達した。勝負を一瞬で終わらせる事、即ち一撃必殺と。

桜花や巴は勿論、月夜にさえも見せた事のない必殺の秘剣……いずれ、再び敵としてまみえるだろうテーシャ達にも見られる事になるけど、それもやむなし。

仮に『野分』が彼らに看破されようとも、霞流にはまだ三つの奥義が残っている。

霞流剣術の基本技、応用技を究め、更に自分の体格や動きの癖に合わせた工夫を凝らして独自の進歩ができるようになって門下生は目録を許される。そこで、初めて三奥義の存在を明かし、道場に住み込みをさせ、通常の稽古が終わって中位、下位の門下生が帰った後に奥義伝授の修行に入る。

もっとも、奥義伝授は本人が必要としなければ無理に教えるつもりはない。

剣の腕があれば世の中を渡れる戦国の世じゃあるまいに、激動の幕末もとうに過ぎ去った新時代においては剣術など廃れる一方で、今じゃ精神修行か護身術程度になりつつあつて奥義の遣いどころなんて無いに等しい。

そもそも、霞流道場は荒稽古でも知られていて、当道場の目録は他道場の免許皆伝に匹敵すると云われているから、目録で満足してしまう門下生が多くなってしまっているのが現状なのだけだね。

ああ、いけないいけない、戦闘中だったわ。

日本の剣術の未来を嘆く前に、今はお役目を務めなくては……

私とエントとの間合いはおよそ四間（約七・二メートル）。

いくら居合が両手持ちより間合いに利があるにしても離れすぎていると思うでしょう？

でも、これが『野分』を仕掛けるには丁度良い距離でもあるの。

「エント。己の主の為、己に課せられた任務の為、誇りを失おうとも外法に身を委ね死して尚も戦わんとする貴方に敬意を払い、我が不敗の剣をお見せするわ」

私は居合腰のまま上体を前に傾ける。

すると、エントは私が勝負をかけようとしている事に気付いたのか、唸り声を止め先程とは打って変わって静かな殺気を全身から放出し始めた。

『え、エント兄さんとユキコさんの気配が変わった？ いったい、何が始まるうとしてっているんだろう？』

「姉貴はいまだ誰にも見せた事のない秘剣を遣うらしいわ。エントも姉貴の勝負の気迫を察したようね……上体を低くして素早く跳ぶ構えを取っているわ」

アンリ君と聖の遣り取りを聞き流しながら、私は摺り足で間合いを詰めながら、時折右肩を下げて、「抜くぞ！」と云わんばかりに挑発してエントの警戒心を煽る。

「いざ尋常に……」

私が一歩大きく前に踏み出すと、ソレに触発されたのかエントの殺気が大きくなった。

「勝負！」

ほぼ同時に私は駆け、エントが跳びかかってきた。

「ユキコ様！」

アリーシア様の叫びと同時に私は跳躍し、突き出されたエントの左腕と交差するように大真典甲勢二尺六寸を抜き付けた。

「おお！！ 野の草を吹き分ける疾風の如き秘剣は正に『野分』！！」

私達が擦れ違つて着地し、間髪入れずに振り返ると、アランドラ皇子の眩きが聞こえた。

「……『死人返り』を倒したり……妖魔九百七十八斬、南無八幡大菩薩」

血振りをくれて杖に刃を納めた瞬間、エントの立つ位置から鳥の囀りに似た哀しげな息の漏れる音が聞こえ、遅れて風が唸るような恐ろしげな噴出音が続いた。

この血の噴き出す音が幼い頃、野分の夜に布団の中で怯えながら聞いた風の音に似ていた事から私はこの秘剣に『野分』と名付けた。私とエントが擦れ違う瞬間、私の剣はエントの首筋を捉え、逆にエントの爪は袴の左側を浅く裂き、左腿に少し血が滲む程度の傷を受けたに過ぎなかった。

秘剣『野分』とは敵の呼吸、太刀筋を読み、相手の間合いの外から跳躍しながら上体を伸ばし、抜き付けた腕、剣先を伸ばす事でのなりの遠間から仕掛ける事が出来る。

しかも、この秘剣の狙いは相手の首筋にある重要な血管であり、更に捻るように斬るので僅かな傷でも大出血を起こして私の勝利は確定する。

無論、外せば無防備な体を空中に晒す事になるので、間合いの取り方、相手の行動を先読みする勘がこの技の肝である事は云うまでもないわね。

四間以上の間合いは、跳ぶ為の助走だけでなく、敵の動きを『視』て、行動を先読みする為の猶予を作るのに必要なものだ。

これが、私の出した結論である一撃必殺の完成形の一つになる。

『グロロロロウ……』

エントから苦しげな声が漏れる。

噴き出す血と風が絡まるような音から、気管まで斬り裂いていた事が分かった。

「介錯を仕る」

徐々に出血の音が小さくなっているのに動く気配がないのは、傷を癒しているのではなく、体内の血が尽きかけているからだろう。

私はエントの苦しみが長引かないよう首を落とす為に、彼の背後に回ると二尺六寸を振り上げた。

霞家も昔は極秘に切腹の介錯を請け負っていた事もあるので、切腹者の首を喉皮一枚残して落とす技術も伝えられている。それは抱き首と云って、首を完全に落とす事で周りに血を散らさない為の所謂、介錯人としての礼儀ね。結構、難しいのよ？

ちなみに何故、極秘だったのかと云うと、切腹の介錯は首を一撃で落とす熟練者でなければ務まらず、介錯の失敗は武芸の不心得として大いに恥とされた。だから、家中に腕の立つ者がいない場合は、他家に気取られぬよう腕の立つ介錯人を雇う必要があった。

『エント、もうすぐだ……もうすぐユキコが楽にしてくれるぞ』

テーシャの涙声が聞こえたのか、エントはゆっくりと意味を持つ言葉を紡いだ。

『あ、姉者……僕は負けたのか？』

『エント！ 正気に戻ったか！』

テーシャは安堵と哀しみが入り混じったような複雑な声色で、私との勝負の結果を伝えた。

『ああ、自らをアンデッドにしてまで任務を完遂しようとする気迫は見事であったが、相手が悪かった……だが、誇るが良い。お前を倒したユキコは尊敬に値する剣士だ』

テーシャは、大真典甲勢を振り上げていた私の手を下ろすとエントの元へと導いた。

『このユキコはな、地獄に堕ちようとしていたお前を命がけで止めてくれたのだ。いくら感謝をしても足りぬぞ』

エントの近くにいたのか、マーストはそう云っては私の手の上に恐らくエントのモノと思しき手を重ねる。

死体にしては意外と温かいエントの掌は男の人とは思えぬほど滑らかで、まるで絹織物に触れているようだった。

『そうか……ありがと……いや、この場合は、すまなかった、かな？』

「否、感謝も謝罪も不要よ。貴方は命だけでなく誇りさえも引き替えにして任務を達成しようとしていた。主の為とはいえよくぞ……その忠誠心には私も尊敬の念を抱いたわ」

『優しいんだね、君は……外道に堕ちた僕にそんな言葉をかけてくれるなんて』

エントの手に僅かながら力が籠もった。

気が付けば、西洋刀サーベルを思わせる凶器と化していた爪は人のソレになっていた。

『君は不要と云ったけど……あえてもう一度云うよ……ありがとう』

そう言葉にしたきり、エントはもう喋ることはなかった。

急激に冷たくなっていくエントの手とテーチちゃんの泣き声で、私は漸く彼が解放されたのだと悟った。

「テーシャ……」

『なんだ？』

私の呼びかけにテーシャは嗚咽を堪えながら答えた。

「フレーンディアに帰還したら、ヴェルフエゴールに私の言葉を伝えて貰えないかしら？」

『伝言だと？ それは構わないが、何と伝えるつもりだ？ もしや宣戦布告か？』

テーシャの戸惑ったような声に、私は苦笑して首を左右に振った。けど、それも面白いかも知れない。

「私がアジトアルゾ大陸に乗り込むまでに、厠の扉を精々頑丈に作り直しておきなさい。最後はきつと、そこにブルブル震えながら逃げ込む事になるのだから、と」

「つ、伝えた後で我々が閣下のお怒りに触れそうで、できれば断りたいのだが……」

「いやね、冗談よ」

元々、宣戦布告などするつもりはなかったし。

ただ、忠誠の徒たるカイゴーとエントの死に様を、せめて上役であるヴェルフエゴールには褒めて欲しいと伝えて貰いたかっただけよ。

「そ、そんな下弦の月を思わせる恐ろしげな笑みを浮かべられては冗談には聞こないのだが……」

あら、いつの間にか口の端がつり上がっていたわ。

「テーオもアンリも怯えるので、その歪な笑みはやめてくれ」

失礼な話だ。

とりあえず私は手で口元を糺すと、エントのそばで正座をする。

「手にかけて者の義務として、私達もエントとカイゴーの菩提を弔わせてもらつわ」

『そうか、兄者達も喜ぶと思う。ありがとう』

異世界の、しかも魔族の弔いに般若心経もないので、私は何も云わずに二人の冥福を祈った。

『敗れた戦場にこれ以上は留まれぬ。我らはアジトアルゾ大陸へ帰還するでしょう』

祈りが済むと、マーストが帰還の旨を伝えてきた。

長兄であるカイゴの死により次兄のマーストが家長となるらしく、エントの遺体を運搬する段取りを立派に指揮している。

アリーシア様の厚意で純白の布でエントの遺体を包んだ彼らは例の『影渡り』の準備を始めた。

その際、テーシャがどこから出したのか、パンを一斤取り出してスタローグ家と私達、霞家の人数分に切り分けて配る。

『我らは糧を分け合う兄弟なり。笑いも涙も分かち合う家族なり。我らが絆よ、永遠たれ』

促されるまま口に入れ、咀嚼して飲み込むと、テーシャが先の宣言をした。

何でも魔界と呼ばれる魔族の世界では食べ物分け合う事は神聖な行為とされているらしい。

日本でいう杯事のようなものだろう。

『今、この時より我らは何人にも侵されぬ絆を得た。ユキコよ、我らは敵であると同時に家族となったのだ』

テーシャの声は神官のように厳かに響いた。

なるほど。兄弟分どころか家族となる儀式だったのね。

随分と惚れ込まれたものだけど、不思議と迷惑とは思わなかった。

『今後、我らが貴様らを討つ事になれば、我々は万人に誇れるスタローグの家族として貴様らを葬ろう』

面白い。

この愛情深き宣戦布告に私も応えなければ嘘だ。

「ええ、私達が勝った時も貴女達の事は素晴らしき霞家の一員として葬る事を約束するわ」

交わされている言葉は物騒極まりないものであるが、雰囲気のせいか不思議と静謐な空間を作り出していた。

『では、さらばだ。我ら以外の者に殺されてくれるなよ、家族よ』

「ええ、いつでも待っているわ。他の魔族に出し抜かれないでね、家族よ」

その後、スタローグ家は自らの影の中へと消えていった。

こうして異世界での初戦闘は終結した。

戦績はガルステントでも名の知れた武将を二名討ち果し、上々と云えるだろう。

そして『地獄代行人』の報酬として得難い家族を得た。

今後、スタローグ家とは互いを尊敬し合う敵として長い付き合い合いとなるに違いない。

私はこの奇妙な絆で結ばれた縁を心の底から嬉しく思うのだった。

翌日、聖剣に選ばれし勇者となった私達は聖都スチューデリアの聖帝と謁見する事となる。

そして旅立ちの際、私達、雪月花の三姉妹をこの世界へと召喚した大司教と邂逅する。

聖帝とは如何なる人物なのであろうか？

大司教を前に私達の胸に去来する感情とは何か？

それはまた次回の講釈にて。

第伍章 秘剣『野分』（後書き）

漸くスタローグ家との戦いに決着がつけました。

考えてみたら、まだ旅立ってもいないのにいきなりボス戦が始まったようなものでしたね。

もっとも霞三姉妹だって上限がレベル50のRPGなら雪子はレベル40、月夜はレベル36、桜花ならレベル30でスタートするようなものだったりしますが。

第陸章 旅立ちの前に（前書き）

今回からもう一人の主人公、月夜の視点です。

第陸章 旅立ちの前に

私こと霞月夜は悩んでいます。その悩みの種は今、私の横で安らかな寝顔で眠り続ける最愛の姉、雪子の事です。

私は姉様に対して深い愛情と感謝の意を持っています。しかし同時に云い様の無い程の申し訳無い気持ちと遣る瀬無い気持ちもあるのです。

嗚呼、姉様。姉様。私の姉様……私の為に、いえ、私のせいでの白雪のような美しい手を紅く染めてしまった姉様。姉様の『罪』は私の『罪』。

嗚呼、姉様。私の愛しい人よ。貴女は私に微笑んで下さるけど、その笑顔は本心からなのでしょうか？私は貴女の為に何が出来るのでしょうか？

私に出来る事は姉様の代わりに我が手を血に染める事だけ。貴女を穢そうとする者を貴女から引き離す事だけ……たとえ私の身が穢されようとも……

嗚呼、姉様。姉様。私の姉様……あの日、穢れた私さえも桜花と等しく愛して下さる姉様。口が裂けても云えないこの想い。

お慕い申し上げます、姉様。

私達は今、大勢の女性に囲まれて服を着替えさせられています。昨日、聖剣の儀を成功させ、勇者の称号を得た私達は本日、この

国の国家元首たる聖帝陛下に謁見することになったからです。

私は青を主体とした絹のドレスに銀の髪飾り（ティアラと云うそうです）を頭に載せられています。当然、着物に仕込んでいた火術の奥義は全て取り外されて少し心許ないです。

お化粧をしてきている人の邪魔にならないよう視線を巡らせると、やや憚然として道着を脱がされている姉様を見つけました。

その背中には大きく抉られたような傷が二つ肩甲骨にありました。いつこのような傷が出来たのかは私にも解りません。本人も忘れているようです。

両親にいつか傷の事を訊ねてみた事がありましたが、二人とも言葉が濁すばかりで教えてくれず、とうとうお墓にまで秘密を持って行ってしまいました。

そして、あらかじめ手伝ってくれている彼女らに、姉様には傷の事を触れないよう云い含めてあるので、誰も騒ぐ人はいません。僅かに息を呑む音は聞こえましたけど。

姉様は髪を解かれると丁寧に櫛を通された後、綺麗に編み上げられて後頭部に纏められました。

次に純白のドレスを着せられ、様々な宝石をちりばめた髪飾りや首飾り、指輪までされるがままに装着されていきます。

感心したのはここまで宝石を身に着けているのに嫌味や下品さを感じさせない事でした。

むしろ宝石の方が姉様の引き立て役になってると云う表現が合っていました。

「うっ……このピッタリした“ぱんてい”って下着、落ち着かないんですけど……」

姉様の困惑した声に周りの女性たちはキョトンとしています。

無理ありません。姉様に限らず、腰巻やあるいは何も着けない事に慣れている私達にはこの下着は馴染まないのです。

昔、男の子達に混じって子供神輿に参加した時に締めた褌を思い出してしまいました。

「お化粧なんて母様の葬儀の時に軽くして以来よ」

苦笑する姉様の顔は既にお化粧が終わっていました。

（ね、姉様……）

なんと云うか、お化粧された姉様は下手な華族様のご令嬢よりも美しく、まるでお姫様みたいでした。

私は思わず口が半開きになり、しばらく呼吸を忘れるほど姉様に見惚れてしまいました。

「うわぁ ♪ 雪子姉様、綺麗 ♪ 絵本のお姫様なんか比べ物にならないよ ♪」

何故か、桜花だけカーテンで仕切られた場所に着替えさせられていたのですが、桜花は今、カーテンの隙間から顔だけを出して姉様を絶賛しています。

「もう！ 桜花、お世辞なんか云つても何も出ないわよ？」

「お世辞じゃないもん。雪子姉様は自分がどれだけ美人か解つてないよー！」

私も桜花の意見に賛成です。いくら盲目とは云え、世間の噂くらい耳に入るでしょうに。

「霞流道場に過ぎたるもの二つありき。名刀・大真典甲勢二尺六寸

に麗しの女師範」

こんな戯れ唄まであるのですけどね。

「はいはい、私の事より桜花の方も準備は終わったの？」

姉様の言葉を受けて、本日の主役たる勇者・霞桜花の勇姿を拝見する事にします。

「終わってるよ」桜花の服は姉様達とはちよつと違つただけだ」

こ、これはまた姉様の時とは違う意味で私は絶句してしまいました。

水色を主体とし、豪奢に金糸・銀糸の装飾が施された礼服とズボン、そして深紅のマント。

これは男性用の正装、それこそ絵本の王子様のような格好でした。良く見ると桜花の腰には例の聖剣が差してあります。

「桜花、コレ気に入っちゃった」

桜花は帽子を被ると胸に手を当てて優雅にお辞儀をして、ニコリと微笑みます。

「さあ、参りましょう。お姫様達」

急に表情を引き締めて私達に手を差し延べる桜花に内心ドキリとしましたが、恐らく巴の入れ知恵だろう事は容易に察せられました。

「ふふ、本当に愉しそうね？ 王子様になりきっちゃって」

姉様は優雅に微笑まれると桜花の手を取って立ち上がりました。その様子に、いつも道場で厳しい修業を課して門下生達から陰で『姫信長』の仇名で呼ばれていた凄腕の剣客の面影は見えません。

「ユキコ様、ツキヨ様、オウカ様、準備は整いました?」

その時、控えめなノックの後にアリーシア様の声が聞こえてきました。

「はい、三人とも準備終了しております」

代表で姉様が答えると、失礼しますと前置きしてからアリーシ様が入室されました。

アリーシア様は初めてお会いした時と同じ服装に、豪奢な肩当のついた純白のマントというお姿でした。

普段のアリーシア様はお姫様としての公務の他、星神教の巫女頭を務められているのでどちらのお仕事もできる服装をされているとの事。

ちなみに言葉で表すなら、艶やかに黒光りする首から股間まで覆う不思議な作りの肌着の上に、金属製の袴垂のような物と銀色の胸当てと云ったところでしょうか?

更に金の腕輪に脛当て、細々とした装飾品を付けられています。ただ先に述べた肌着は背中が大きく開き、お尻も半分以上見える程切れ込みが入っています。

私でしたら恥ずかしくてまず人前には出られない露出度なのですが、彼女は大して気にもしていない様子でした。

それ以前に彼女のお付きの巫女達はそれに輪をかけて露出が凄いのので、星神教では普通の格好なのでしょう……恐らく。

ついでにお付きの人達の肌着は、上は胸がかろうじて隠れるほど

の布を巻いているだけで、下に至っては細い褌のような物でしかありません。

（月夜姉様？ あの人達、お臍とお尻が見えちゃってるけど、お腹冷えないのかな？）

（慣れているのではないですか？ 意図は解りませんが、皆お揃いの格好ですし正式な衣装として着慣れていると考えるのが妥当でしょう）

私の腰を突く桜花の問いに私は推測しか答える術はありませんでしたが、桜花は納得したかのように生返事をする私から離れていきました。

「皆、寒そうな格好だけど、お腹が痛くならないの？」

今度はアリーシア様達に直球で疑問をぶつける桜花に、私は思わず前につんのめりそうになってしまいました。

私の答えでは満足しなかったのでしょうか。それは解りますが、もう少し遠回しに訊く事ができないのでしょうか？

「ふふふふ、そうですね。確かに私どもの服装は他の方達と比べると肌を出している部分が多いですね。でも、それには宗教的な意味がありますのよ？」

桜花の不躰な質問に対してアリーシア様はお気を悪くされる気配を見せず、微笑みながら答えを教えて下さいました。

「まず日の光、即ち太陽神アポスドルファの加護を多く得る為という意味があります。つまり日の光が当たる部分を少しでも多くする

という事ですわ。

そして……これはあまり公言する事は憚られるのですが、遙か天空におわす神々のほとんどが男性の神様と考えられているのです」

「ほえ？ 神様が男の人とその格好って関係あるの？」

桜花は興味津々といった具合でアリーシア様の次のお言葉を待ちます。

何と云いますか、私には説明の続きの予想がついてしまいました。

「ええ、神と云えどもやはり殿方です。やはり肌を出した女性を見る事が好きなのでしょうね。ですから我々、巫女達は極力肌を見せる服の着用を求められるのです」

さもありません。

私の脳裏に天岩戸あまのいわとに閉じこもった天照大御神あまてらすおおみかみの気を引くために一心不乱に裸で踊られる天宇受賣命あめのうずめのみことのお姿が浮かびました。

「ふーん……」

生返事をする桜花の肩に私は手を乗せると力を込めて掴みました。これは桜花に言葉を止めなさいという合図なのです。

桜花が次に続けようとしている言葉が容易に察せられたからです。

「この世界の神様も助平なんだね」

そんな事を口走られた日には、私達は世界中に石持て追い回される事請け合いです。

少なくともこの場にいる巫女達を敵に回す事になりかねないでしょう。

「そう云えば」

私の合図に気付いていないのか、桜花は平然と言葉を紡ぎました。

「桜花達の国だと山の神様は女の人なんだって」

私は思わず右手で目を覆ってしまいました。

「まあ、桜花様達の世界では山に神様がおわすのですね」

「うん、それで山で探し物をする時、男の人がアウツ?!」

物凄い音とともに桜花が頭を抱えて沈黙しました。

見れば姉様が右肘を下に向けた格好で仁王立ちをしていました。

「アリーシア様に何を聞かせるつもりだったの？」

ニコリと微笑まれてはいましたが、今の姉様はまさに『姫信長』の二つ名に相応しいお姿でした。

嗚呼、姉様の背後に第六天魔王と地獄の業火の幻影が見えます。

「姉様、酷……」

「あら？ お代わりが欲しいようね？」

にこやかに右肘を振り上げる姉様に桜花は頭を抱えて逃げ出していました。

実は姉様は戦いで刃が折れた時を想定して徒手空拳で戦う術を模索しています。

そこでまず考案されたのが、女性でも十分打撃力を得られる肘の鍛錬でした。

「まだ子供がコブを作って泣く程度の威力か。改良の余地があるわね」

洒落では済まされない風切り音を震わせて肘を振り回す姉様に私は唖然とするよりありません。

凶悪な空気の振動を感じながら、「霞流・目録を得た桜花だからこそコブで済んだのでは？」と思わずにはおれませんでした。

「さて、愚妹の悪巫山戯わるふざけで無為な時間を過ごしてしまいましたが、ここに来られたと云う事はそろそろ謁見のお時間でしょうか？」

第六天魔王もとい、姉様がアリーシア様に問うと、彼女は頬をヒクヒクと引きつらせながらも「ええ」と答えました。

「我が父、聖帝陛下の準備が整いましたのでお迎えに上がりました」

「わかりました。すぐに参りますわ……桜花？ 早くなさい？」

「うつ……雪子姉様、コブができちゃってるよお……」

桜花は恨みがましい視線で姉様を見上げますが、姉様はどこ吹く風のようにです。

「予定では頭蓋骨陥没だったところをその程度で済んだのだから我慢なさい」

この言葉に周囲の空気が凍りつきます。

「予定つて、雪子姉様……」

「冗談よ」

おどけるように微笑む姉様に周りの人達は安堵の笑みを浮かべていますが、私と桜花には解ってしまいました。

姉様が本気だったと云う事を。

たとえ叱る際の拳骨であろうと人に痛みを与える時は全力を出す姉様の狂気。

私と桜花にだけ気付く事ができる姉様が時折り見せる凶暴性と云う名の狂気。

穏やかな笑みの下に隠された暴君。

おまけに姉様はまだ私達の知らない隠し玉をいくつか持っているらしいと巴から聞いた事がありますし、本当に底の知れない人です。その気になれば、まさに彼の織田信長公よろしく恐怖で人を支配できる狂気の人。

屍の山を容易に積み上げる事のできる力を持つ恐ろしい人。

それが実行に移されないのは姉様の根底にあるのが“善”だからに他なりません。

“善”、いえ“人”と狂気の境目にいる姉様を“人”の側に留めるのが私達の役目なのです。

「さあ、行きましょうか」

仕込みと云う事もあって謁見の間に杖の持込を禁じられた姉様はアリーシア様に手を取られて部屋から出て行きました。

アリーシア様の腰まで伸びた波型の金髪を見つめながら桜花が呟きます。

「雪子姉様……こういう雰囲気でもアレが出ちゃうんだね」

（そうですね。でも、私達がいる限り姉様は大丈夫です）

私達は頷き会つと姉様の後を追っていきました。

「朕がこの聖都スチューデリアを治める聖帝『レオン』ジル『スチューデリア』である。苦しゅうない面を上げよ」

聖帝陛下のお言葉に私達が顔を上げると、そこには慈愛の笑みを湛えた初老の男性が玉座に腰をかけられていました。

昨日、予備知識としてアランドラ皇子から「仁政をもってこの国を栄えさせる名君」と聞いてはいましたが、確かに感じる器量が桁違いでした。

ただ好色が過ぎる一面があり、手を出した女性は貴族、軍人、侍女、平民含めて五百人は超え、子供も二百人を超えるとか……

五代将軍・徳川綱吉公の時代の大奥二千人と比べるべくもないですが、それでも半端ではない数である事には違いありません。

ただ救いと云って良いものは判じかねますが、お手付きの女性は皆すべて後宮にて養つておられ、その家族にもいろいろと便宜を図っておられるようです。

またこれも当たり前過ぎて評価するものではありませんが、たとえばその女性が気に入っても既に恋人や夫がいる場合はお手を出され

る事はないと云う事です。

「そなたらが太陽神より賜った聖剣を使う勇者であるか？」

「御意！ 名を霞桜花と申します。そしてこれなるが太陽神アポスドルファより賜った聖剣に御座います」

ふふふ、桜花に徹夜で練習させた甲斐あってなかなか様になっています。

「ほう、これはまた見事な剣である。我らの世界の平和はその剣とそなたにかかっておる。頼みおくぞ」

「御意」

その後、姉様と私が自己紹介をして、世界を取り巻く状況の再確認、激励のお言葉や様々な品を賜って謁見は終了しました。

「大儀であつた。今宵は勇者の誕生の祝いと激励を兼ねて宴を催す故、鋭気を養い明日からの旅に備えるが良い」

陛下が退場されると、謁見の間にホッとした空気が流れました。やはり私達だけでなく、周りにいた騎士や侍女の人達も緊張されていたようですね。

「さて、私達も退席しましょうか」

姉様がそう云って立ち上がると、アランドラ皇子が歩み寄って来られました。

「これはこれは麗しきお嬢さん、少し私めにお時間を頂けませんかな？」

皇子が軽薄さながらの口調で姉様の手を取ると、周囲の雰囲気ガラリと変わりました。

皆、一様に苦虫を噛み潰したかのような顔で嫌悪感を籠めた視線を私達に、いえ皇子に向けています。

「はい……その……」

「おお、これは申し遅れました。 私はこの国の……」

身振りを交えて自己紹介をするアランドラ皇子に益々険悪な空気が流れてきます。

これは勿論、昨夜の内に皇子と私達とで示し合わせたお芝居です。実はこの国の皇族の方々は旺盛すぎる色欲を持て余す人物が少なくないそうです。

それゆえ、私達が女という事もあって虎視眈々と狙う方も多いとか。

しかし、彼らには共通する性癖があつて、人妻や恋人持ちなど云い方は悪いのですが人の手がついた女性は興味を失うと云う困ったものでした。

けれど姉様と桜花の安全を保つ為にその性癖を利用させて頂くしましょう。

私ですか？ ふふふ、私はとうに穢れていますのでご心配無く……姉様と桜花は満更でもないといった仕草でアランドラ皇子と話の花を咲かせています。

独りその様子を眺めている私に一人の男性が近づいて来ました。

「彼らの話には加わらないのかい？」

アランドラ皇子より二つ三つ年齢が下に見える青年が私に話しかけてきました。

「賢明だね。あのアランドラに近づいたが最後、どんな目に遭わされるか解ったものじゃないさ」

彼は片目を瞑って見せましたが、不器用なのか瞑った側の顔が大きく引きつっていました。

「僕は王家第三百三十七子、サーレンっていうんだ」

彼は一方的に話しかけてきますが、その言葉は私の耳を右から左へと抜けていくばかりです。

そもそも下心があからさまに見える笑みを浮かべる彼に、アランドラ皇子の事をとやく云える権利は無いように思えます。

アランドラ皇子が軽薄を装う理由が解った気がしました。

つまり皇族が目をつけそうな女性は皆自分が手をつけた事にしているのでしょう。

皇子は自ら女性に目が無いと噂を流し、彼の眼鏡に叶った女性は全て手籠めにする、即ち純潔を奪われた事にして皇族の興味を削ぎ護っているのですね。

ちなみにアランドラ皇子は第三十六子、男子では十六番目であられるそうで、帝位継承権は有って無いものとして敢えて汚名を進んで被っているとの事です。

彼のお母様は元軍人で剣術の他諜報術に長けた方だそうで、そんな彼女の血を引くアランドラ皇子はまさに精悍そのもの……姉様が気になさる訳です。

「ねえ！ 僕の話聞いてるのかい?!」

青年が苛立ったように私の肩を掴むと、元々胸元が開いていたドレスがずれて私の乳房が大きく露出してしまいました。

「あっ！」

私が慥然とした表情で睨むと、彼はバツが悪そうにそそくさとその場から逃げていきました。

まったく……そう言えば彼の名前は……ヤーレン？ ソーラン？
思い出せないのならそれで良いでしょう。

私は胸元を直しながら姉様達の方を見ると、いつの間にかアリーシア様が姉様を抱きしめてアランドラ皇子に向かって怒鳴っていました。

しかし、アリーシア様は姉様より頭一つ分背が低いのにどうやって姉様の頭を胸に抱いたのでしょうか？

あ、桜花……「桜花もやってみたい」って姉様を絵本のお姫様のように抱き上げて……

姉様、長女としての威厳は台無しですが、本当に可愛らしいです。
姉様を景品とした三人の争奪戦は宴の時間まで続き、周りの侍女や騎士達はその光景に初めは呆気に取られていましたが最後には皆微笑んでいました。

「うー、お腹いっぱい」

宴も終わり、お風呂を頂いた私達は絹の貫頭衣のような寝巻きを頂き、用意された寝室でくつろいでいました。

桜花はベッドの上で仰向けになると、幸せそうな顔でお腹を擦っています。

「桜花、食べすぎよ？　いくら美味しくつてもあんなに厚く切ったビフテキを一人で三人前も食べるんですもの……横で咀嚼の音を聞いてて恥ずかしかったわ」

（そう云われる姉様も出てくる料理一品一品作り方を訊ねられて料理人を困らせていましたよ？）

私はテーブルをコツコツと突いてつい揶揄してしまいました。どうも気分が高揚しています。

私も出されたワインを甘いとは云えつついつい飲みすぎてしまったようです。

「それは作れる物なら作りたいからね。いつも行っていた洋食屋は美味しいけど値段が高めだし」

姉様は意外と西洋料理が好きです。

大蒜を大量に使った物や極端に甘い物を除けば何でも召し上がられます。

もう顔馴染みになったお店では姉様用に大蒜を控えて調理して下さるので、姉様の嗜好の幅はさらに広がっています。

思うに西洋料理は目で見て楽しむ日本の料理とは違って香りを楽しむ料理なので、その事も姉様が西洋料理を好まれる一因でしょう。

「そう云えば王様から色々貰ったよね？　見てみようよ」

桜花はベッドから飛び降りると聖帝陛下からの贈り物が入った箱に手をかけました。

「桜花、王様じゃなくて聖帝陛下よ。我が国で云えば畏れ多くも帝、天皇陛下のような存在じゃないかしら？」

「その割には気さくだったよ？ 話し方は堅苦しかったけど、「お主の様な子供に未来を託さねばならぬ情けない朕を許せ」って頭を撫でてくれたし」

柔らかに微笑む桜花に同調するように私の口元も緩みます。

あの優しげでご自分を責められているような寂しげな陛下の微笑みはどこか姉様に似ていらしたから。

「確かに為政者としては身近すぎる方だったわね。アランドラ皇子が仁政の人と評するのも解る気もする」

（若い頃、よくお城を抜け出しては綺麗な女性を捜していたと云う陛下は、同時に城下の整備や治世の欠陥も多く見つけられたそうです。その修繕が彼を仁政の人にしたのですね）

苦笑する私に姉様も、「人生、何が幸いするか解らないわね」と微笑まれました。

「ねえ！ 早く見ようよ！」

待ち切れないと云わんばかりの桜花に私達はもう一度苦笑するのでした。

「うーん……これは世界地図だね。これは各国の火薬を取り扱う組合の手形って云ってたね。月夜姉様への贈り物かな？」

「そうね、月夜が火術を使うと聞いて手配して下されたのね。他には？」

桜花は手甲のような物を取り出します。

「何だろ？ あ、説明書きかな？ あう……見た事の無い字で読めないよ」

私は桜花の手から説明書きを受け取ると、目線を走らせます。
私は本日、空いてる時間にこの世界の文字を学ばせて頂いたので、簡単な文章ならなんとか読めるようになっていました。

（この手甲は特殊な銀で作られているようです。ところどころ不明ですが、どうやら防御力が半端ではなく、その上まったく重さを感じさせない代物のようですね）

「そつなの？ あら、本当に軽いわ。何も着けてないみたい……硬さは……」

姉様は手甲を嵌めて面白そうに手を振り回した後、愛用の杖で軽く叩きます。

「うん、相当硬いわね……過信しなければ盾として使えそうね。これなら千回素振りをしても疲れる事はなさそうよ」

普通、千回も素振りをすれば手甲が無くても疲れると思うのですが……

「じゃあ、それは雪子姉様の物だね。桜花には何か無いかなあ？」

桜花は数本の細い短刀の様な物を取り出しました。

柄は真つ直ぐで黒い革製、鐔は無く刀身は私の中指くらいで怪しげな光を放っています。

（これは……失わずの短剣と読むのでしょうか？ その短刀は無くしても、気付いた時には所有者の元に戻ってくる物のようですね）

「気付いたら戻ってくるって、呪われてるんじゃないでしょうね？」

「雪子姉様、“天の声”……じゃない、巴がそういう嫌な感じはしないって」

姉様はしばらく桜花の方に顔を向けていましたが、納得されたのか棒手裏剣代わりにと桜花と半分ずつ分け合いました。

姉様は私にも持たせようとされましたが、私は手裏剣術が苦手なのでお断りしました。

「あ、まだある……んしょ！」

これは小瓶に銀色の液体が入って……まさか水銀？！

桜花が蓋を開けようとしたので慌てて止めようとしたのですが、間に合わずポンと景気の良い音を立てて蓋が開けられてしまいました。

「うにゃ?!」

桜花の奇妙な悲鳴の理由はすぐに解りました。

なんと水銀と思しきモノはまるで生きているかのように桜花の体に纏わりついていきます。

「な、何?!」

やがてソレはいくつかに分かれて桜花の急所を覆うように登って行き、そこに留まりました。

私が意を決してソレに触れてみますと、見た目はプルプルと波打っているのに表面は凄く硬いモノでした。

（これは……防具のようですね）

説明書きに目を走らせて二人に説明をしました。

（その水銀のようなモノは魔法、妖術の類で命を与えられた特殊な銀で、持ち主の意のままに操る事ができるようです）

「い、意のままに?」

涙目になった桜花が必死になって訊き返します。

（ええ、普段はそうして最低限の急所を護るように展開しています
が、試しに右手に集まるように念じてみてご覧なさい）

「わ、解ったよ! 右手右手右手……」

すると桜花の体についたモノは集まりながら右手を目指して登っていきます。

「うつ……体中を蛞蝓が這ってるみたいだよ!」

嫌悪感に身を震わせながらも、桜花は必死に右手に意識を集中させているようです。

やがて数秒も経たずに桜花の右手は銀の塊に変じていました。

（形も自在みたいです。桜花、何か形になるように念じてみてください）

「う、うん……」

桜花が目を瞑って精神を集中させると右手に纏わりつくソレは美しい刀の形に変わりました。

「うわあ！ 姉様の仕込みそっくりになったよ！」

云われて見れば、確かに見事なかます切っ先が目の前にありました。

ちなみに、かます切っ先とは文字通り、切っ先がかますのように鋭く尖った実戦刀の事を云います。

姉様は筑後の刀鍛冶・甲勢の作、二尺六寸（約80センチメートル）の豪刀を仕込み杖に改造しているのです。

「あはは、いろんな形になる！ おっもしろーい！」

桜花の手の中でソレは槍になり弓になり、様々な姿に変わり、それを見ては桜花はキャッキャッと笑っています。

なるほど、扱い方次第では強力な武器にもなるようです。

使いこなせるようになれば、戦いを有利に進めることが出来るでしょう。

「あー、面白かった♪」

やがて桜花が集中を解くと、ソレは桜花の腕を下りて彼女の急所を守護すべく纏わりついていきます。

「うひゃあ！！ また桜花の体にい！」

ソレが体を這うたびに桜花はビクリビクリと身を震わせます。

「き、気持ちわ……アン！ 気持ち悪いよお……アフ……ハン……
いやぁ……アン！」

頬を紅く染めて身を擦る桜花は何と云いますか、妙に艶やかと云うか、色っぽい。

そう、扇情的なのです。

「あう……動か……ないでえ……ハアン♪」

私は上を向いて首の後ろをトントンと叩く事を余儀なくされてしまいました。

……理由は訊かないでくださいませ。

「桜花、貸してごらんなさい」

姉様が桜花の胸に触れると、ソレは姉様の腕を伝って全身に纏わりついていきました。

「なるほど、確かにくすぐったいわね……でも、制御は簡単そうよ？」

「どーゆー事お？」

姉様の言葉に桜花はとろおんとした表情で、呂律の回らない口調で訊き返します。

「コレが自分の肌の一部と思って動かしたら、くすぐったいのが消えたわ。いえ、本当に自分の肌の一体になったみたいよ」

姉様が私達の目の前に右腕を差し出すと、瞬時に銀色の鱗に覆われてしまいました。

いつの間に加工をしたのでしょうか？

「ね？ 肌の一部と思えば『ナニかが体を這い回る感覚』は起きないから、桜花ももう一度やってみなさい」

姉様が桜花の手を取ると、ソレは再び桜花の体へと戻っていきました。

「うん……肌の一部肌の一部……」

次の瞬間、桜花の額から一角獣のような立派な角が生えてきました。

「ホントだ！ 雪子姉様の云う通りにしたら気持ち悪いのが消えたよ！ おまけにさっきより動かしやすい！」

どうやら問題は解決したようです。

しかし桜花の試運転を僅かな時間『観察』して、その身に移しただけでソレを使いこなす姉様は流石です。

「うにゃあ?!」

すると突然桜花が再び叫びました。

「ど、どうしたの?」

「あうう……と、巴が……」

「巴がどうしたの?」

桜花が顔を真っ赤にさせてモジモジと途切れ途切れに続けた言葉に、私はポカンと大口を開けてしまいました。

「あの……さっきの桜花みたいに……この銀で雪子姉様も……も、悶えたら目の保養になったのに……って」

云わなければ良いのに、桜花は良くも悪くも素直すぎます。
ほら、ご覧なさい。第六天魔王の御出ましです。

「とお~~~~~もお~~~~~うえ~~~~~」
「!!」

「はわ?! な、なんで俺が『表』に?」

どうやら桜花は姉様の気迫に当てられて気を失ってしまい、巴が強制的に『表』に出てきたのでしょうか。

「月夜?」

いきなり名前を呼ばれて私の心臓は大きく跳ね上がってしまい

ました。

「この変幻自在な銀の名前は解る？」

（な、名前ですか？）

「早くなさい？」

気のせいか、お部屋の空気が急激に冷え込んだような錯覚を覚えました。

こ、これはすぐに答えないと身に危険が……

（な、名前はホーリー・ディフェンサーです！）

「……ありがとう」

私はその時、姉様の笑顔を見るべきではありませんでした。身の毛がよだつてこの事なのでしょうね。

姉様は微笑まれながらゆっくりと巴に近づいていきます。

「あ……雪子姉？ キョウモステキナエガオデ……」

「あら、ありがとう……お礼に愉快的事をしてあげるわ」

私は耳を塞いで後ろを向きます。

私は何も見ていません。何も聞いていません。そして何も云いません。

「さあ、ホーリー・ディフェンサー？ 可愛い弟をくすぐっちゃいなさい！」

「うにゃあ？！　ちよっ！　そ、そこはしゃ、洒落にな、ならねってば！　あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！」

いったい巴はどのような目に遭っているのか……興味はあれど見
てはいけないと私の本能が告げています。

やがて巴の断末魔の叫び。いえ、それは姉様が口を塞いでくぐも
った悲鳴になっていましたが、その後巴は膝を抱えて部屋の隅で泣
いていました。

「お、お嬢にいけない……」

私は何も聞いていません。ええ、聞いていませんってば！

恐る恐る姉様の方を見れば、姉様は姉様で顔を真っ赤にさせて卒
倒されていました。

さもありなん。口付け程度で気を失う姉様がこんな物をかけられ
ては……

（この臭い、久しぶりですね）

私は姉様の頬にあるソレを指ですくい、親指と人差し指で弄びな
がら深い溜め息を吐いたのです。

明日からの旅路が物凄く不安です……

夜が明けて旅立ちの朝。

目を覚ますと既に姉様は道着を身に纏われて、仕込み杖の手入れをされていました。

足元は真新しい革製のブーツがあります。

召喚された時、姉様と私は足袋しか履いていなかった事に気づかれたアリーシア様から頂いたものです。

桜花に至っては裸足だったのでメリヤス足袋（靴下）も頂いてご満悦です。

「彼の坂本龍馬先生の気分が味わえて嬉しいわ」

とは姉様の言。

「おはよう、月夜。私達がこの世界に呼ばれて三日目、ようやく夢じゃなかったと実感したわ」

姉様はそんな事を仰っていますが、その顔は自信に満ち溢れていて現実逃避をしているようには見えませんでした。

その隣では桜花が慌てて道着の袴をつけている所でした。

「おっはよ、月夜姉様、いよいよ旅立ちだね」

袴を着け終えた桜花は二振りの聖剣を交差させて背中に括りつけます。

（おはようございます。私もすぐに準備をしますね）

私は寝巻きを脱ぐと腰巻と肌襦袢だけをつけて、荷物を探ります。まず鎖帷子を着込み、次いで全身に火術の仕掛けを施していきま

す。その上に私はローブと呼ばれる白い服を纏いました。

本当は普段着ている紺の着物が良いのですが、動きやすさを重視してこっちの方に変えてみました。

「月夜姉様、よく似合ってるよ、いつもより神秘的だね」

神秘的というのも照れくさいのですが、微笑む事でお礼に代えさせて貰います。

「朝御飯を頂いたらすぐに出発する予定だったけど、少し寄り道をする事になったの」

（寄り道……ですか？）

いったいどこへ行くのでしょうか？

「私達を召喚した大司教……アズメールさんが少し回復して短時間だけならお話ができるそうよ」

姉様はやや複雑な表情でそう云われました。

確かに私達をこのような異世界に召喚した張本人に会うとして、どんな顔をして会えば良いのか見当もつきません。

「体力を極限まで消耗させてまで、死ぬような思いをしてまで『秘術』を施した彼女がどんな人か、人となりを見るのも悪くないわね」

姉様は柔らかく微笑まれていましたが、その本心は窺い知る事はできませんでした。

「あら？ 新しい信者の方ですか？」

朝食と云うにはあまりに豪勢な食事を頂いた後、この地の星神教会へお見舞いに来た私達を出迎えたのはのほほんとした問いかけでした。

「大司教様！ 今朝方、目を覚まされたばかりなのに、ご無理をなさつては！」

私達を案内して下さったアリーシア様が一人の女性に駆け寄っていきました。

恐らく彼女が大司教アズメール「ガルディゴ」……想像以上の若さに私達は言葉を失ってしまいました。

歳は二十歳前後、中肉中背で橙色の髪をおさげにしています。顔立ちは柔和な童顔でソバカスが少しある事を見逃せばなかなかの美人です。

彼女はゆつたりとした白と青を主としたローブと纏い、子供達に囲まれてニコニコと微笑まれていました。

「あらあら、これは姫巫女様。おはようございます」

優雅にお辞儀をされる大司教様にアリーシア様の目が点になっています。

「大司教様？ 二日間も昏睡されていたのですが、お体の方は大事ありませんの？」

「まあ、二日も！」

目を丸くしてパンと手を叩くと、なんとも脱力させられる言葉が続きました。

「道理で眠気がないはずですね。日頃の睡眠不足が解消されましたわ」

（姉様……）

私の呼びかけに姉様の反応はありませんでした。

不思議に思っただ姉様の顔を見上げてみると、瞼を開かれて緑色の美しい瞳で大司教様を『視て』いました。

（ね、姉様？）

「どうしたの？」

姉様はいつの間にか瞼を閉じられて、不思議そうな表情で私の方を向かれました。

（いえ、大司教様があまりにも若々しかったので……）

（その事で月夜に後で話があるの）

姉様の『言葉』にハッと顔を見上げますが、姉様は既に顔を大司教様の方へと向けられていました。

「ところであの黒い髪のお三方はどなたですの？　このような美しい黒の髪を持つ民族は世界中どこを捜してもいないはずですけど」

大司教様の言葉から、黒髪を持つ人間はこの世界にはいないようですね。

「そうです！　彼女達は貴女の秘術に導かれ、私達の世界に召喚された希望の勇者達なのです！」

興奮気味に私達を紹介するのは宜しいのですが、聖剣に認められた勇者はあくまで桜花と巴であって姉様と私は違うのですけど……

「まあ！　希望の勇者よ！　アポスドルファの導きに引かれ、よくぞこの世界へお出でくださいました！」

正直、導きに引かれという部分に引つかかるものがあるのですが、敢えて顔には出さないようにしましょう。

「私は霞雪子、こたび聖剣に認められし勇者・桜花の姉に御座います。不躰ながら貴女様が司教様であらせられますか？」

「あら！　あらあらあら！　私とした事がなんと礼儀知らずな……申し遅れました。私は星神教・教祖様よりこの地の大司教を命ぜられているアズメール・ガルディゴと申します」

興奮して自己紹介を忘れる大司教様に姉様は自分から名乗りを上げる事でキツイ皮肉を叩きつけます。

やはり道場主をされているだけあって、その辺の礼儀にうるさい姉様には我慢がならなかったようですね。

「ご丁寧な挨拶、痛み入ります。隣に控えしは上の妹、月夜に御座います。故あって言葉を失っておりますので、私が代わりに紹介する無礼はご容赦を」

姉様の紹介に私は慌てて頭を下げます。

「私が聖剣に認められた勇者・桜花に御座います」

桜花が前に進み出て頭を下げると大司教様は桜花の前に傳きました。

「た、確かにこれはアポスドルファより託された聖剣！貴女が勇者様ですね」

興奮して桜花の手を取る大司教様を呆氣に取られて見ていると、何やら背後から冷気を感じて思わず後ろを振り返ります。

そこには全く表情を無くした姉様の緑の双眸がジッと大司教様を捉えている様がありました。

普段は下手な宝石より美しいと思って見ていた緑の瞳が、今日に限ってどこか禍々しいモノを感じてしまいました。

「と、ところでどうやって桜花達を召喚したの？ 桜花達に聖剣が使えるかどうかやって知ったの？」

矢次早に賛辞の言葉を続ける大司教様に辟易したのか、桜花は質問する事で話題を替えようとしているようでした。

「はい、アポスドルファより授けられた『秘術』はまず瞑想する事から始まります」

あからさまな話題のすり替えに気付いているのかいないのか、大司教様は妙に潤んだ瞳を湛えて桜花の質問に答えます。

「瞑想が深くなればやがて無想の境地に達します。その時、どこか光を感じるのです。それは希望の光です」

「希望の光？」

「その通りです。アポスドルファの『力』を使うに値する勇者の心の波動です。そこに手を伸ばして掴み取ったのが……」

「桜花達って事なんだね？」

私には説明が抽象的過ぎて結局概要は解りませんでした。桜花は恐らく直感的に理解できたようです。

「流石は勇者様！ 飲み込みが早いですわ！ そして、その手応えを感じた直後に私は意識が遠のいてしまったのです」

話を聞いていて、何だか掴み取り漁法の魚になった気分させられてしまいました。

「さあ、大司教様。これ以上はお体に障ります。今日はここまでにされた方が宜しいでしょう」

「そうですね。本音を云えば少々体がだるい様に感じます。ここは姫巫女様のお言葉に従って休む事にしましょう」

アリーシア様が司教様を立たせると、確かに彼女の顔色は気持

ち蒼褪めていました。

大司教様は力無く微笑まれると、桜花の首に星の形をした首飾りをかけました。

「コレは太陽神アポスドルファの祝福が籠められています。貴女の行く先に幸福があらん事を」

「ありがとう」 大切にするよ」

大司教様は今度は私達に顔を向けます。

「貴女達の心の波動は不思議ですね。強い光を感じると同時に底の知れないナニかを感じます。

でも不思議とそのナニかは不快な感じはしません。むしろ心地良い波動を感じます。その心で勇者様をお守りください」

そう云うと、彼女は私達に一礼をして子供達を伴い教会の奥へと下がって行かれました。

「面白い方でしたね」

大司教様が視界から消えると同時に姉様がアリーシア様に声をかけられました。

「ええ、彼女は知識、信仰心どれをとっても素晴らしい方ですが、何よりそのお人柄を買われて、あの若さで大司教に任命されたのです」

アリーシア様が誇らしげに答えられると、姉様の眉が一瞬跳ね上がりました。

「ところで彼女の周りにいた子供達は？礼拝客とは思えませんでしたが」

「あの子達は、あのヴェルフェゴールの侵攻から生き残った孤児なのです」

アリーシア様は哀しげな顔でそう答えられました。

「地獄と化したフレーンディアにおいて有志が子供だけでも出来る限り救おうと努力した結果があの子達なのです」

その孤児達の一部を大司教様は引き受けて私財で養っておられるそうです。

「国家滅亡という極限の中でよくぞ……アジトアルゾ大陸から魔族を一掃したあかつきには彼らを弔いたいものです」

姉様が遙か西、アジトアルゾ大陸に向けて合掌されるのを私達は倣いました。

「まあ、そのお言葉だけでも彼らは報われたと思いますわ」

アリーシア様は涙ぐみながら姉様に微笑みを向けました。

大司教様との邂逅を済ませた私達は城門に向けて歩みを続けます。門を出れば私達はいよいよ第一の目的であるヴェルフエゴール退治に向けて旅立つのです。

その道すがら姉様は私の肩に手を乗せて指でトントンと軽く叩きました。

（月夜、さっきのアズメールの事なんだけど……）

いきなり呼び捨てですか姉様……

（大司教様が如何なされましたか？）

私は姉様の腰に手を当てて、同じように指で軽く叩きます。

（彼女は信用しない方が良いわ。少なくとも油断はしないで）

私は思わず姉様の腰を掴んでしまいました。

（信用できないとは……召喚された事と関係はないですね？）

（そんな事、いつまでも拘らないわよ？ 私が云いたいのは彼女の言葉の矛盾よ）

姉様は目が不自由な分、勘が鋭い所があります。

いえ、勘と云うより洞察力でしょうか？

（彼女は初めに「どなた？」って訊いたのよ？ おかしいとは思わない？）

（それは初対面ですし、当たり前前の反応では？）

私の答えに姉様は軽く溜め息を吐かれました。

（いい？ 彼女は私達を召喚する時、「勇者としての心の波動を感じ取って、引き寄せた」と云ったのよ？ なら、初対面でも桜花の中に波動を感じ取って然るべきでしょう？）

（それはそうですが、勇者の心の波動とは数少ない特殊なモノなのではないですか？ いくら桜花が勇者でも常態で、そのような波動が起こせるとは……）

（貴女は心の波動なんて信じてるの？ 心に波なんて起こせる道理はないわ。ましてやソレを感じるなんて）

姉様の指の調子が強くなり、少し痛いくらいになってきました。

（そもそも私達が召喚された時、私達がどういう状況にいたのか忘れたわけじゃないでしょ？）

その『言葉』に私はハツとなりました。

そう、あの時は姉様と桜花が丁度内弟子達との朝稽古を終えて、揃って朝餉を食べていました。

そして急に眩暈に襲われて、気が付くとあのお城の一室に大勢の男性に囲まれていたのです。

（暢気に朝御飯を食べている状況の桜花から勇者の波動を感じたのなら、常に桜花から勇者の波動を感じてなければ嘘でしょう？）

確かに……しかも大司……いえ、アズメールは最後に私達の心の波動もどうしたと云っていました。

つまり、いつも他者の心の波動を感じると云っているようなものです。

それなのに桜花の心の波動と召喚の『秘術』の時に感じた波動の一致が彼女には解らなかったようです。

（解ったでしょ？ アズメールは心の波動なんて感じる事ができないのよ、実際は）

私は『言葉』も出ません。

（見ず知らずの、しかも見たことも無い黒髪を持つ女が三人訪ねて来たのなら、彼らが勇者かと当たりをつけて、嘘でも「貴女が勇者ですね？」と云うべきだったのよ、彼女は）

（つまり私達がこの世界に召喚されたのは？）

（偶然でしょうね。聖剣の資質も怪しいものよ？ まあ、私や貴女に抜けなくて、桜花と巴に抜けたのは案外私達の中で最強の者を選んだってところじゃないかしら？）

私は姉様の顔を見上げます。それは自嘲でもなく本気で桜花と巴を最強と思っっているように感じられました。

（ふふ、才覚を見れば桜花と巴が私を超えるのも時間の問題だというのは解るわ。何せ、去年たった13歳で霞流道場の四天王になったんですもの）

霞流道場の四天王とは師範である姉様を除いて上位に名を連ねる

四人の門下生を指します。

いずれも目録を許された師範代で、同時に中位、下位の門下生に慕われる人格も兼ね備えた人物が選ばれます。

いえ、桜花も性格はやや幼い部分がありますが、それでも後輩には慕われていますので……お子様限定ですが。

（さあ、この話題はこれでお仕舞い！やるべき事をやらないとね）

姉様の『言葉』に、私はいつの間にか城門に辿り着いていた事に気付きました。

（それと今の話は桜花には内緒ね？）

（わかりました。勘のいい巴はいずれ自分で気付くでしょうけどね）

私の返事に姉様はニコリと微笑まれて頭を撫でてくださいました。

「ここを抜ければユキコ様達の旅が始まります」

アリーシア様は城門の前で振り返ってそう仰られます。

「はい、私達、雪月花の三姉妹、これよりヴェルフエゴール退治に赴きます。吉報をお待ちください」

姉様の言葉にアリーシア様は頼もしそうに頷きます。

「そのお言葉、頼もしく思います。でも、くれぐれもご無理だけはなさらないでくださいまし」

それと——アリーシア様は背後に向かって声をかけます。

「星神教よりの支援だそうですね」

アリーシア様に促されて前に進み出たのは私と同年くらいの紫色をした髪の少女でした。

腰まで伸ばした髪を綺麗に切り揃え、それほど高くは無い背丈。なで肩の上に理知的な、悪く言えば冷たい印象を与える美貌が乗っています。

目はややツリ目がちで鼻の上に乗った小さな眼鏡の奥から紫色の瞳がこちらを見えています。

服装はピッチリとした皮の短ズボンに上半身は赤い布地で乳房を隠すだけの肌着を着用し、銀の肩当てを装着しています。

その背中には槍が括られてることからそれなりに武芸を修めているのでしょう。

「彼女は星神教会の守護騎士の一人にして、傷を癒す回復魔法の使い手メンフィス＝イルズと申します」

「勇者様、メンフィス＝イルズで御座います。メフィと呼びください。不束者ですが、宜しく願います」

メフィさんはペコリと頭を下げます。

「この世界に不案内なユキコ様達の案内人にして、治療要員として厳選された逸材です。必ずやお役に立つと私は確信しておりますわ」

アリーシア様の紹介に、メフィさんは、褒めすぎですと至極冷静に返事をしていました。

「勇者の姉の霞雪子です。治療要員とは心強い。こちらこそ、宜し

くお願いします」

姉様の挨拶にメフィさんは一瞥しただけで、「ええ」とだけ答えました。

同様に私を見る目もまるで路傍の石を見ているようでした。

「勇者様、旅は困難を極めると思いますが、私が命に代えましてもお守り致します」

メフィさんは先程、私達に向けた冷たい視線とは逆に、敬意を籠めた目を桜花に向けています。

成る程、勇者以外は眼中にありませんか。それはそれで構いませんけどね。道案内だけしっかりして頂ければ。

「それでは、アリーシア様。行って参ります」

「ユキコ様、ツキヨ様、オウカ様も息災であられますよう……カイゼントーヤには既に早馬を走らせて船の手配を依頼しておりますので」

「お心遣い、感謝致します」

姉様が一礼してお別れは済みました。

いよいよ私達の旅が始まります。

「出発」

桜花の号令と共に私達は冒険の旅へと一步を踏み出したのでした。

第陸章 旅立ちの前に（後書き）

ちよつと長くなつてしまいましたが、いい加減冒険に出発させた
かったのでここまで書き切りました。

それと今回から月夜視点で進めていきます。

つまり月夜の持つ狂気を掘り下げていくことになります。

第漆章 『弥三郎』様

城下町を抜け、外壁の門を潜った私達は広大な草原に感嘆しました。

「ここを順調に南下できれば夕刻までにはロツツァーという街に着きます。今日はその街で宿を取る予定になっております」

メフィさんは事務的な口調で説明をします。

「解りました。では参りましょう」

姉様は杖を先に出して障害物が無いか確かめながらゆっくりと一歩を踏み出しました。

「ええ、順調にいけば……ですけどね」

姉様の歩みを見つめるメフィさんの目は限りなく冷たいものでした。

結論から云えば、私達の旅は順調でした。

途中、人の様に直立して武器を使いこなす狼や一刺しで岩をも碎

く巨大な蜂の怪物に数度襲われましたが、ほとんど姉様が排除してくださいました。

私は炸裂弾で数匹の蜂を纏めて倒し、桜花も『日輪』を使って狼を倒しましたが、私達の合わせた数よりも姉様一人で排除した敵の数が多かったのは明らかです。

メフィさんは貴重な治療要員であつたので、姉様の指示で後ろに下がらせたのですが、私達はろくに手傷を負う事もなかったので、彼女を煩わせる事はありませんでした。

けど、何故かメフィさんは苦虫を噛み潰したような顔で私達を、正確には姉様を睨んでいます。

「流石、勇者様ですね。大きな痛手を受ける事無く、あのモンスター達を蹴散らすなんて！ アレらには並みの騎士では歯が立たないというのに！」

「うっん、ほとんど何もしてないよ。ホント、いつになったら姉様と肩を並べて戦えるようになるのかなあ？」

手放しで褒めるメフィさんに桜花は小さく首を横に振ると、姉様に憧れの視線を向けます。

それが面白くないのか、姉様を見るメフィさんの目が益々険しくなっているようでした。

「あら、貴女はもう十分強いわよ？ 後は実戦を積みばすぐに私を追い抜くはずよ。だから自信を持ちなさい」

姉様は慈愛の表情で桜花の頭を撫でられました。

「姉様……うん」

桜花の笑顔はまさに日輪のようで、それを見ただけで疲れが吹き飛びます。

「あれ？　ねえ、メフィさん？アレって何？」

昼下がり、怪物の襲撃も落ち着いて、のんびりと街道を進んでいくと、桜花が遙か前方を指差しました。

目を凝らすとなにやら黒い靄のようなものが立ち込めているようでした。

「アレは……あそこそが『要』、“悪しきモノ”を封じる禁断の地の一つ。そしてあの大地に突き立つ巨大なモノこそ『楔』です」

わなわなと身を震わせて説明するメフィさんの云うように、靄の中に巨大な黒い円錐状の影が見えます。

これだけ離れても威圧感を感じると云う事は近づくだけで如何なるモノを感じるか想像も尽きません。

「……っ？！」「……」

今、一瞬だけでしたが靄が形を作って巨大な人影になったように見えました。

「月夜？　今、只ならぬ気配を感じただけど……」

（姉様も感じられたのですね？　話に聞いていた黒い霧が一瞬、巨大な鬼の姿に……）

「ご覧になりましたか？　黒い霧が作り出す影こそが『要』に封じられた“悪しきモノ”の姿と云われています」

メフィさんの言葉に私達は何も云えなくなっていました。
確かに気配だけでこれ程の瘴気を放つモノを復活させる訳には
かないですね。

「成る程、想像していた以上に世界を取り巻く状況は悪いという事
ね」

姉様は真剣な表情で『要』のある方角に顔を向けていますが、私
は見てしまいました。

姉様が一瞬、まるで獲物を見つけた獣の如く愉しそくに唇を舐め
るところを……

「行こう！一刻でも早くヴェルフェゴールを倒して『楔』を砕い
てあげよう！」

「勇者様……」

使命感に燃える桜花にメフィさんは感激そのものといった表情で
見つめています。

対照的に姉様と私はヴェルフェゴールに対する義憤はあっても使
命感までは芽生えておらず、微妙な温度差がありました。

強いていえば、『地獄代理人』としての義務感があるくらいでし
ょうか？

報酬？ 無論、頂きますよ。ちゃんと聖帝陛下やアリーシア様と
契約は結んで書面にも残してあります。

前方に街が見えてきた頃には太陽が西に連なる山々の向こうへ姿を消そうとしていました。

「あれに見えますはロツツァーと呼ばれる街です。乗り合い馬車の中継基地でもあり、明日は馬車を借りて運河まで一気に進みます」

成る程、確かに遠目にも街の中で沢山の馬車が行きかっているのが見えます。

そう云えば道中、何度も幌馬車や荷馬車と擦れ違いましたね。

「……」

不意に姉様が足を止めてしまいました。

「どうしたのです？ もう街は目の前なんですから頑張ってください？」

どうやらメフィさんは姉様が単に疲れて歩みを止めたと思ったようですね。

「出てきなさい。日中は兎も角、夜まで監視されるのは御免よ？」

「何を云ってるのですか、貴女は？」

メフィさんは苛立たしげに姉様に詰め寄ります。

「それともニンゲンが怖いのか？ 魔族と云ってもピンキリね」

嘲笑まで浮かべる姉様の5間（約9メートル）前に黄昏の闇が凝縮されたような気配が生まれました。

『ふん！ 安っぽい挑発だ事……あまりにも子供染みた挑発しか出来ない貴女が可哀想だから出てきてあげたわ』

闇はやがて人の形を作り、アリーシア様より更に切れ込みを凄くした黒い革製の肌着に黒いマントをつけた金髪の女性が現れました。金髪と云っても赤みがかっていて、さながら闇の中で揺れる炎を連想させました。そして何より特徴的なのは妙に先の尖った耳です。思えばスタローグ家の人達も耳が尖っていましたね。

「出てきてあげた、ねえ……貴女の役目は諜報？ 刺客？ 前者なら既にしくじりよ。最も後者なら後者で真正面から来るなんて刺客失格だけだね」

更に嘲る姉様に魔族と思しき女性は顔を真っ青に染めてしまいました。

ややこしいですが、血の気が引いているのではなく、血液が青いために顔が紅潮すると魔族の場合は青くなるのです。

『う、うるさい！ うるさい！ うつつさーい！！ どの道、アンタ達の情報なんて役に立たなくなるわよー！！』

どうやら前者だったようですね。地団駄まで踏んでいます。

「あら？ その心は？」

「ここでアンタ達が死ぬからよ！！ 私は魔將軍ヴェルフエゴール閣下から最も信頼を得ている將軍直属の情報武官・ヴァンティス！鮮血のヴァンティス！！ スタローグ達なんかとは格が違っわよ！！」

ヴァンティスは鋭く尖った犬歯を剥き出しにして姉様に肉薄します。

それはまるで矢の様に常人では見切る事はおろか身のこなしさえ見えなかったでしょう。

「スタローグ一家の面々は尊敬すべき敵であると同時に家族よ。彼らを貶める云い方は感心しないわね」

しかし矢はおろか近距離でなければ拳銃の弾さえ叩き落す姉様に是不十分の速さだったようです。

姉様は既に抜刀して上段の構えで待ち受けています。

「がつ？！」

ヴァンティスの蟻螂を思わせる爪が姉様の喉を貫く寸前、大真典甲勢二尺六寸が彼女の脳天に落ちていました。

「あういいいいい……ま、まさかそんなぁ……そんなぁ……」

「確かに私達の情報は役に立たなくなっただわね？ 情報をヴェルフエゴールにもたらずべきモノが死んでしまっただわね」

「そん……おらそんじく！！」

姉様は力を込めていた様子はありませんでした。が、ヴァンティス

はあっさりと脳天から股間まで真つ二つに裂けて絶命しました。
ヴァンティスの顔は真つ二つになった時に潰れて元の顔が解らなくなっています。

「な……聖剣を持たないただの剣士が魔族を……」

メフィさんは驚愕と恐怖を顔に貼り付けて姉様とヴァンティスを交互に見る事しかできなくなっていました。

「聖剣？ そんなモノは私には必要ないわよ？ 大真典甲勢二尺六寸、歴代霞家当主によって九百と七十と八の妖魔の血を吸い続け……今やどんな高僧でも拭いきれない怨念が籠った妖刀よ」

姉様が血振りをくれて納刀すると、ヴァンティスの死体は急速に黒く変色して、やがて塵となって消えていきました。

「人と魔が相争う世でなければこうして殺し合うこともなかったでしょうに……哀しきは兵達ね」

先程までヴァンティスの死体があった場所に姉様は哀しそうな顔を向けると、右手を眼前に掲げて黙祷されました。

我が霞家当主の役目、この世にはびこる悪を妖魔の形にして斬り捨てる……それが如何なる重みなのか傍観者である私には想像も尽かない事です。

「さあ、早速宿に行きましょうか」

姉様は呆然とするメフィさんを置いて街の門を守る番人らしき人の方へと歩いて行かれました。

「メフィさん？ 街の案内をお願いします」

嫌に熱の籠もった目の二十歳くらいの番人に手を握られた姉様が困惑げに首だけ振り返ってメフィさんにそう云ったのでした。かすかに聞こえてくる番人の声から、彼は先ほどのヴァンティスとの戦いに興奮しているようです。

「実はあの魔族はこの辺りに現れては悪さをしていたので困っていたところだったのですよ！」

「左様でしたか……それはそれとして、手を……」

あ、姉様の声にやや怒気が混ざって……

いい加減助けないと後が怖いですし、そろそろ呆然としているメフィさんを再生させて……

「メフィさん、行こ？」

桜花がメフィさんの手を取ると彼女は漸く正気を取り戻すことができましたようです。

「ゆ、勇者様！ これは失礼致しました」

復活したメフィさんは桜花と手をつないだまま姉様のいる門へと歩いていきました。

（彼女、大丈夫でしょうか？）

メフィさんの足取りは重く、今にも倒れそうで後ろから見ていて気が気ではありません。

しかし番人と何か二、三言話して姉様を解放したところを見ると大丈夫なようです。

街に入って宿屋に落ち着いた私達は今後の行動を打ち合わせを済ませて早めに就寝することになりました。

明日は馬車を借りるとは云え、長距離を一気に進むという事で体力を温存する必要があったからです。

「では私はこれで失礼します。今夜は私が見張りをしていますので、安心してお休みください」

メフィさんはそう云うと自分の部屋に戻っていきました。

その際、姉様を大きく避けていく彼女に少なからず嫌悪感を感じてしまいました。顔には出ていなかったと思います。

「見張りなんて必要ないのにね」

姉様は苦笑してベッドの上に体を倒します。

確かに私達は変事があればすぐに起きる事ができるので見張りは必要ありません。

「折角の好意だし、彼女の好きにさせましょう」

姉様がそう仰ってから、すぐに寝息が聞こえてきました。

「姉様ってホント寝付きが良いよね」

桜花は姉様の寝顔を見て苦笑しています。

かく云う私も姉様の寝顔を夢中になつて見ていますけど……

「姉様の寝顔って相変わらず子供みたいだよね？ 剣の稽古してる時とは全然違うよ」

（当然でしょう？ 剣術とは結局は人を傷つけ、命を奪う技術、それを人に教える以上真剣になるのは当たり前です）

「そうなんだけどね。この寝顔を知ったら門下生の皆は絶対にビツクリすると思うよ？」

云われてみれば姉様の寝顔は穏やか過ぎですね。無垢な子供のようで、とても十八歳とは思えません。

すると姉様の頬を一粒の雫が筋を描いて流れていくのが見えました。

「つ、月夜姉様……これって？」

い、いけません。姉様の寝顔を見入っているうちに涎が……

私は手拭いを取り出すと姉様の睡眠を妨げないように軽く頬を拭きました。

「月夜姉様って雪子姉様の事になると変わるよね……」

お、桜花？ 何故そんな眼で私を見るのです？ 何故そんな微妙

に距離を置こうとするのですか？

「まさかとは思うけど……」

桜花は頬を引き攣らせながら姉様に布団を掛けて云います。

「雪子姉様、清いままだよね？」

どつという意味ですか。

「月夜姉様、鏡……」

桜花が差し出した手鏡に映った人物に私は目を丸くしてしまいました。

（これは誰です？）

「月夜姉様だよ……桜花、女色に偏見はないけど一応血の繋がった姉妹だからね？」

私は鏡に映る爛々と目を輝かせている自分自身に呆気に取られて桜花の言葉のほとんどが耳に入っていないませんでした。

「なんか怖いなあ」

うつ、平常心、平常心。

「今の月夜姉様の目って、いつも桜花にお団子をくれる団子屋のおキヨさんが桜花を見る時の目にそっくりだよ」

あ、あの人と同類ですか……

ちなみにおキヨさんとは桜花の顔馴染みで、何と云いますか強烈なまでに女色のケがある人なのです。

その人は桜花が大のお気に入りで、桜花に余計な知識を刷り込んで私達に迷惑をかけてくれます。

（そ、それは兎も角私達も休みましょう）

私はあの人と同列と括られた心の痛手を引き摺りながら頭から布団を被ります。

「うん、おやすみなさい」

程なく桜花の寝息が聞こえてきましたが、私はすぐさまベッドから降りると、寝間着を脱いで愛用の紺の着物を直接素肌の上に羽織ります。

（しばらく安眠は得られそうにないですね）

私は帯を締めると袖の下に妖しく光る赤い玉を忍ばせます。

（参りましょうか、『弥三郎』様？）

そう心の中で呟くと袖の中に仄かに暖かい気配が生まれました。

街は闇に覆われ、宿の中で起きているのは私の他には見張りを買
って出たメフィさんだけでしょう。

私はギリギリとゆっくり廊下を進む足音にじっと耳を傾けて
います。

『さっきは酷い目に遭ったけど、コレで汚名返上よ』

『何がです？』

私の問いかけに闇の中の気配に動揺が生まれます。

『な、アンタは？！ 年寄りみたいな声を出すから誰かと思ったじ
やない！！』

闇から現れたのは夕方、姉様に唐竹割りにされたヴァンティスで
した。

しかし私は特に驚いてはいません。何となくですが、気配が彼女
に似ていたからです。

「何事ですか？！」

部屋から勢いよく飛び出してきたのはメフィさんです。

一瞬、下半身だけ裸に見えて驚きましたが、どうやら恐ろしく布
地の面積が少ない下着を着用していたようです。

「あ、貴女はあの剣士に殺されたはず？！」

メフィさんはヴァンティスを指差したままあんぐりと口を開けて

います。

『フフン』 私があの程度で死ぬワケないじゃない？ 私はね、血の一滴さえこの世に残っていれば月光の魔力を借りてすぐに復活できるのよ！！』

ヴァンティスは私達を威嚇するようにマントを翻します。

『だから私はヴァンティス！！ 鮮血のヴァンティスと呼ばれているのよ！！』

「ぐっ……化け物め！」

メフィさんは槍を構えると間合いを取りながらヴァンティスを睨みます。

穂先はヴァンティスの喉を狙っていて、メフィさんはいつでも槍を突けるように緩急をつけて扱っています。

「私は星神教・守護騎士の一人！ 『水』と『癒し』を司る『亀』の神々の加護を受ける者！ メンフィスⅡイルズ、参る！！」

その槍の一撃はまさに疾風迅雷！

穂先は正確にヴァンティスの喉笛を貫きました。

『フーン？ 守護騎士といってもこの程度なの？』

口から血の泡を吐きながらヴァンティスが小馬鹿にした笑みを浮かべてメフィさんを見つめていました。

「くっ！ 魔族め！！」

必殺の一撃を受けても平然としているヴァンティスにメフィさんは驚愕と恐怖の表情で叫びます。

どうやら彼女は精神的に追い詰められやすい性格のようです。

『今度はこつちから行くわよ！』『プロミネンス・ボール』！！』

ヴァンティスは喉を槍に貫かれたまま何事かを呟くと、手のひらに巨大な火球を出現させました。

『すぐに勇者様に後を追わせてあげるから寂しくないわよ！！』

巨大な火の玉はメフィさんを飲み込もうとしています。

「水よ、全てを清める聖なる水よ。盾となりて我を守り給え。『ア
ブソリユートゼロ・シールド』！！」

命中の寸前、メフィさんの前に氷の盾が現れて火球を防ぎますが、力負けをして押し戻されてしまいました。

しかしそれでも火の勢いはほとんど相殺されて僅かな炎と衝撃がメフィさんを襲うに留まります。

「こ、これが魔族……」

炎で服が少し焦げてしまったメフィさんは憎々しげにヴァンティスを睨みます。

『あらあら、私の『プロミネンス・ボール』を受けてその程度のダメージで済ませた貴女の実力は賞賛してあげるわよ？』

「ふざけるな！ 魔族に褒められる謂われはない！！」

『そうよね、苦手な炎の魔法を相殺するのがやっとのアンタを褒めてもねえ？』

ヴァンティスはニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべてメフィさんを挑発します。

『私のもつとも得意とするのは精神に作用する魔法！ おかしいと思わない？ これだけ騒いでるのに起きてるのがアンタ達だけよ？』

「貴様、この宿にいる者全員を眠らせているのか？！ 魔族の魔力とはこれほどなのか……」

『この宿に限らないわよ？ この街のみんなに眠ってもらってるのよ、私』

ヴァンティスの言葉にメフィさんは愕然としてしまいました。

「魔族の使う魔法がここまでとは……勝てるの？ 我々に？」

『フフン、ようやく気づいたようね？ ニンゲンと魔族のどうしようもない実力の差ってヤツをね』

得意げにメフィさんを見下ろしているヴァンティスの背後を取るように私は少しずつ移動を始めます。

『で、アンタは不意打ちを狙ってるってワケ？』

私の気配を察したのか、思ったより視界が広いのか、ヴァンティ

スが笑いながら振り返ります。

『フフン』　どんな手を使うのか知らないけど、血の一滴があればすぐに復活できる私には無意味よ？　巨乳のおチビちゃん？』

ヴァンティスは私の胸と身長を揶揄してケラケラ笑います。

『『弥三郎』様』

私は自分の影がヴァンティスの足下まで伸びている事を確認してから一声かけます。

「な……月が南天にあると云うのに何故貴女の影は南に伸びているのですか？！」

どうやらメフィさんの評価を改める必要があるようです。この状況でこの事に気づくなんてね。

そう、メフィさんやヴァンティスは勿論、調度品や生け花も南に輝く月の光を受けて北に影を伸ばしているのに、私の影は真逆。

私の影は南に伸びてすっかりヴァンティスの影を飲み込んでいます。

『お食事ですよ……『弥三郎』様』

「『ヒイ？！』」

異口同音に発せられた短い悲鳴に私は思わず吹き出しそうになってしまいました。

あれだけ互いを嫌っていた二人がまあ息の合った事。

『何よ、コレ？！』

見て解らないのでしょうか？ 私の目には『顔』に見えますが？
はい、私の影から巨大な『顔』が現れてヴァンティスを飲み込もうとしています。

『ヒギイ?!』

『顔』から遠ざかろうとしたヴァンティスは人の形をした“闇”に拘束されています。

嗚呼、『弥三郎』様。こんな異世界まで私に付き合っ下さったのですね。

私は少々の陶醉感を覚えながら全身『闇』の男性を見つめました。

『は、放して!!』

ヴァンティスは『弥三郎』様を振りほどこうと藻掻いていますが、『彼』に力で抗するのは愚かの極みです。

やがて『弥三郎』様の『闇』から子鬼が数匹這い出てきてヴァンティスの乳房やお尻に噛みついていきます。

これは好色というのではなく単に柔らかくて食べやすいと云うつまらない理由です。

やがて『弥三郎』様はヴァンティスの頭を掴むと無理矢理頭を下げさせます。

同時に『弥三郎』様から黒い帯のようなモノと紐のようなモノが多数現れてヴァンティスを更に拘束していきます。

『何を?!』

『血の一滴でも復活するのなら……』

恐怖に身を震わせているヴァンティスを無感動に眺めながら続けます。

『一滴残らずあの世に持って行くのが道理』

私の言葉にヴァンティスは目尻を裂けんばかりに目を開かせます。

『お、お願い！　そ、それだけは……』

恐怖の為か失禁したヴァンティスに構わず『弥三郎』様は彼女を子鬼ごと巨大な『口』へと放り込みました。

『た、助け……』

『そうしたいのは山々なのですが……』

私はなんとか『口』から脱出しようとしているヴァンティスの目の前で腰を下ろして彼女を見つめます。

『生憎、貴女はしてはいけない事してしまったのでお助けするわけにはいきません』

ヴァンティスの絶望そのものといった表情に思わず自慰をしたくなるのを堪えながら、私はあくまで穏やかに宣告します。

『私の『声』を揶揄する人は……皆、『弥三郎』様の逆鱗に触れてしまうのですよ』

『口』が閉じて『頬』が恐ろしい勢いで動き始めました。

『痛い！ やめて！ 痛い！ やめて！ 痛い痛い痛い痛い痛い
イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ
イタイイタイ……』

ナニかが聞こえてきましたが、やがてソレも聞こえなくなり、ゴ
クンと大きな音を立てて『喉』がナニか嚥下しました。

ふと足下を見ると、私の影は既に北に向かって伸び、ナニか……
いえ、ナニかがいたと思ったのですが記憶違いのようですね。

いえ、確かに誰か、とても嫌な人がいたはずですが、どうも『弥
三郎』様と一緒にいるとその辺の記憶が曖昧になって困ります。

ナニかがいた証拠に床に残った青い血のようなモノを小鬼がさも
美味しそうに舐めています。

「ヒイイイイイイ……」

見ればメフィさんさんが目を皿のように見開いて私を見ています。
しかも余程怖いモノを見たのか失禁していて、床に水たまりを作
っている始末です。

まあ、彼女も十代とはいえ立派な社会人、後始末くらいは自分で
できるでしょう。

『おやすみなさい』

『声』を聞かせるのは嫌ですが、彼女はまだ私の『言葉』を知ら
ないでしょうし、あえて『声』をかけて階段を下りて外に出ました。

私は宿屋の裏手、どの客室からでも死角になっている大浴場のある離れに向かい、脱衣所で仰向けになつて帯を解きます。

『ご苦労様でした。』弥三郎様、ご褒美です』

私が袖の下から赤い玉を取り出し、おへその上に乗せると玉は妖しく光り出してそばに控えていた“闇”を照らします。

“闇”はザンギリ頭の人の良さそうな青年の姿になりました。『彼』こそが私が先ほどから呼んでいる『弥三郎』様の真の姿です。

『弥三郎』様は『彼』特有のおよそ敵を作らない柔和な顔を今は酷く哀しげに歪めて私を見つめています。

『『弥三郎』様？』

私が訝しげに『声』をかけると『彼』は哀しげな表情のまま私に覆い被さり唇を重ねて下さいました。

『弥三郎』様の舌が私の唇をこじ開けて口腔に進入してきます。私も心地よい陶酔感を味わいながら舌を『彼』の舌に絡ませます。

同時に『彼』の舌から『ナニか』が滲み出て私はソレをゆつくりと嚥下していきます。

『ソレ』は勿論唾液なんかではありませんが、愛しく思えど厭う事はありません。

思うに『ソレ』は『想い』、『無念』や『未練』ではないでしょうか？

飲み下した『ソレ』は私の体内を駆け巡り、全身を爪先から髪の毛一本一本まで苛んでいるからです。

けど、先も述べましたが、『ソレ』は不快ではありません。むしろ

る私の体の隅々までが『弥三郎』様のモノである証。

『心』は姉様に捧げましたが、『体』は『弥三郎』様だけのモノ。でも、それは仕方がないですよ。『弥三郎』様は既にこの世の方ではありませんもの。『心』では『彼』を繋ぎ止める事は叶わないのです。。

『ああ、『弥三郎』様……』

『弥三郎』様は唇を離すと先程以上に哀しげに私を見つめながら私の体に手を這わせます。

『彼の唇が動いています。ええ、判っております。『貴方』は哀しいのですね？

私の『体』を介さないと『この世』との繋がりを保てない事が……それとも私の『心』が手に入らない事が哀しいのですか？

それとも私の『体』に縛られていることが苦痛ですか？

けど、私は『貴方』の事をやはり愛しているのですよ？

『体』以外に接点は無くなってしまいましたが、それでも私は『貴方』を失いたくはない。

『フフ、酷い顔……』

脱衣所の姿見に映る私の顔は酷く歪んだ笑みを浮かべていて、死人のように青ざめていました。

けど、逆に私の『体』は火のように熱く火照っていて、『弥三郎』様を浅ましく求めて（……）います。

『さあ、『弥三郎』様……来てくださいまし……お情けを頂戴致したく……』

『女』になった私は『弥三郎』様を迎え入れます。

全身を雷に突き抜かれるが如く『彼』に貫かれた私の脳裏には二年前の事が思い出されていました。

それは『弥三郎』様が弥三郎様であつた頃の記憶…

身悶えするほどの幸福感と狂おしいまでの陶醉境の中で私の記憶がまさぐられていきます。

私の愚かな擦れ違いが招いた悲劇が弥三郎様と姉様を地獄に叩き堕としてしまう。

いいえ、それどころか、この悪人のいない愛憎劇は周囲に悲しみと絶望に撒き散らしただけで、どこにも救いはなかったのです。

永遠に愛する人を失い、愛しい人を手に入れた悲恋と呼ぶにはおこがましい地獄のお話は……

それはまた次回の講釈にて。

第漆章 『弥三郎』様（後書き）

月夜の戦闘能力は火術だけではありません。

夜になれば『弥三郎』様を使役して不死身だろうと魔族だろうと殲滅してしまいます。

夜間において敵を破滅させるという意味では雪子以上になります。

第捌章 恋慕地獄道・前編（前書き）

今回、途中で視点が変わります。

第捌章 恋慕地獄道・前編

二年前、『弥三郎』様が弥三郎様であつた頃のお話。

私は姉様と桜花に新しい着物を作ろうと反物を求めて反物屋さんを数件巡っていました。

しかし二人に似合う良い柄と色に恵まれず落胆して下を向いて歩いていたら、背に衝撃を受けて転びそうになってしまいました。

でも、咄嗟に腕を掴まれて転倒だけは避けられたのは幸いでした。見れば背に大きな風呂敷包みをいくつも背負った青年がバツの悪そうな顔をしていました。

「すまねえ。オラア東京さ初めてで、見る物全てが珍じぐつでつい余所見じて歩いでただ」

それが私と弥三郎様との出会いだったのです。

彼は月代こそ剃ってはいませんが、未だに鬚を結っている垢抜けない青年でした。

当時十七歳だったと云う年齢にしては顔立ちが幼く、初めは同い年か年下に見えたものです。

「いえ、私こそ下を向いてましたので……こちらこそ失礼しました」

「いや、ぶつがったのはオラアだし娘さんは悪がね！」

彼はそう云って頭を深々と下げたのですが、背の荷物がそのまま彼を押し潰しそうで怖かったので頭を上げさせました。

「いえ、それに転びそうになったところを助けて頂きましたし、感謝しています」

私がお礼を述べて頭を下げると今度は彼が首を横に振って私の頭を上げてくれました。

「いやいや、元はど云えばオラアがぶつがんながっただら転ばずに済んだで、礼を云われるこつちゃね！」

そう云って彼は再び頭を下げてしまいました。

その後、私達は互いに頭を下げては相手に恐縮する事を繰り返していました。

しかし私はここが天下の往来ということを失念していました。気がつけば私達は周りから好奇の目で見られていました。

「あ……こちらに」

私は彼の手を取って人だかりを抜けて、馴染みの茶店に落ち着きました。

思えば私はあの時、何故彼の手を取ったのでしょうか？ 私だけ逃げても良かったのに……

まあ、済んだ事は仕方ないとして、そのまま別れるのも薄情な気がして互いに自己紹介をする事になりました。

聞けば彼は青森から絵の勉強をするために単身東京へとやって来たそうです。

なんでも彼の故郷の近くで西洋画の個展が開かれて、そこで西洋画の魅力に取り憑かれて一念発起をして東京に出てきたとか。

そして高名な画家が来日していて東京に滞在していたそうで、この機会に弟子入りすべく上京してきたのだそうです。

「オラアの実家は恐山にあつて、おつ母はイタコやつで、そこで生活してるだ」

彼の兄弟は皆小作人になって母親を手助けしていたそうですが、彼は生まれつき病弱で農作業に耐えられなかったそうです。

腕力こそ強かったそうですが、すぐに熱を出して寝込む事が少なくないそうで、いつも兄弟に負い目を感じていたとか。

でも、彼は絵の才能がずば抜けていて、イタコをしている母親の傍らで似顔絵描きとして糊口をしのいでいたそうです。

特にイタコに“口寄せ”を依頼しにきた家族から特徴を聞き出しただけで故人そっくりの絵を描く特殊な技能を持っているそうで、それが評判だったようです。

「オラア、偉い画家先生になっでおつ母と兄弟を助けてえ。今まで不甲斐無がった分、家族に楽させでえンだ！」

私は彼の手を取って、何度も頷いていました。彼の情熱に打たれたのかも知れません。

私達はその場で別れましたが、その別れ際、私は明日もこの茶店で会いましょうと約束を交わしていました。

勿論、東京に不案内な彼を案内するためです。

思えば私はその時、既に彼に惹かれていたのでしょう。

その後、私達は暇を見つけては、示し合わせて一緒に芝居見物や神社参拝に出かけるようになっていました。

その事を私は姉様や桜花には内緒にしていました。私は姉妹といえども彼との逢瀬を知られなくなかったのです。

逢瀬……そう、私達は惹かれ合っていていつしか恋愛感情が芽生えていたのです。

出会ってたったの三月で彼、弥三郎様は私にとって特別な存在になっみつきていったのです。

そんなある日、私は弥三郎様に呼び出されて夕方、洒落た洋食屋

で落ち合う事になりました。

大事な話があるという彼の真剣な目に私はただ頷くしかありませんでした。

「お呼びだてして申し訳ありません。月夜殿」

待ち合わせのお店に着くと弥三郎様が出迎えて下さいました。

彼は洋装にザンギリ頭という垢抜けた姿で私の手を取って席へと案内して下さいます。

弥三郎様は幸運な事に上京してすぐ目的の画家に弟子入りを許され、お師匠の身の回りをお世話しながら絵の勉強をしていました。

同時にお師匠に指摘されて、まず鬚を落とし、必死に標準語と英語、伊太利亜語イタリアを身につけて、今では下手な東京の人間よりも垢抜けた近代的な美青年へと変貌を遂げていました。

「あ、いえ、ご招待ありがとうございます」

私は糊の利いたシャツにスーツという姿の弥三郎様にドギマギしてしまい、そう答えるのがやっとでした。

こんな事なら以前知人に勧められるまま作ったドレスを着てくれば良かったと後悔をしたのですが、後の祭りです。

その後、一緒にお食事をしたはずでしたが、その時の私は相当に舞い上がっていて料理を味わうどころではありませんでした。

「月夜殿……今日、お呼びしたのは他でもありません」

食事を終えて食後のお茶を楽しんでいると、弥三郎様は居住まいを正して私の顔を見つめました。

「は、はい！ 何でしょう？」

私はこの時ばかりは自分に呆れてしまいました。「何でしょう?」
は無いでしょうに……

「実は……師匠が国に、伊太利亞に帰る事になりました」

「そうですか……」

私は話の先が見えず、そのまま先を促します。

「そこで私も師匠に付いて伊太利亞に渡ろうと思っています」

「え……」

私は目の前が真っ暗になったような錯覚を覚えました。
すると、もう弥三郎様に会えなくなる?

「三年です」

「はい?」

弥三郎様は私の手を取ってそう云われましたが、私は頭が回らず
呆けた返事しかできません。

「三年後、私は再びこの日ノ本に帰ってきます。その時までには絵
で生活できるようになっています。だから……」

弥三郎様は私の顔を真っ直ぐに見つめて私に赤い水晶玉のような
物を握らせてから、言葉を続けます。

その言葉に私は涙を止めることができませんでした。

「三年後、月夜殿には私の妻になって頂きたい！」

「え……」

今度は目の前が真っ白になったような錯覚を覚えました。
そして不意に唇に何かを押しつけられた感触……

「好きです。愛しています。月夜殿、私の妻になって下さい」

「私のような者で良ければ喜んで……」

私は胸に溢れる歓喜に流され、はしたなくも弥三郎様に抱きついて今度は私の方から唇を重ねました。

「私も弥三郎様が好きです！ 愛しています！！ どうか私を妻にしてください！！」

彼も若かった。私も十四の小娘だったけど、感情の高まりを抑えることができませんでした。

翌朝、目が覚めると私は弥三郎様の洋風の下宿にいました。

私は生まれたままの姿でしばらくベッドの上で惚けていたのです。

あれは夢だったかと思いましたが、下腹部に走る疼痛とシートに落ちた赤い斑点から現実であると漸く自覚する事ができました。

「おはよう、月夜ど……月夜。その……もう大丈夫です……もう大丈夫かい？」

見るとパンが入った籠と軽いお食事の乗ったお皿を手にした弥三郎様が顔を真っ赤にさせてそう訊ねられました。

言葉がしどろもどろで何度も云い直しているのは、私が呼び捨てにする事と敬語を使わない事を望んだからです。

「おはようございます。ええ、大丈夫です。弥……旦那様」

旦那様。そう云ってから私の頬は熱くなってしまう、恥ずかしさに思わず下を向いてしまいました。

「月夜……」

弥三郎様が私の顎に手を添えて上を向かせます。

「旦那様……」

どちらからともなく、私達の唇が重なりました。

その後、弥三郎様が伊太利亜へ旅立たれる日の三日前まで、私は彼の下宿に行つては家事を手伝い三日に一度は泊まるという生活が続きました。

足繁く弥三郎様の元へ通う私に桜花を始めとする門下生達も不審がついていましたが、あえて何かを聞き出そうという気配は見せませんでした。

ただ姉様には、「それが貴女の幸せに繋がると云うのなら私は何

も云わない」と云われましたが……

その頃の私は幸せの絶頂と云えました。けど、その幸せも長くは続かなかったのです。

弥三郎様が渡航の準備に追われている中、私はいつものように彼の部屋を掃除していました。

その時、魔が差したのでしょうか。つい弥三郎様の机の引き出しを開けてしまいました。

そこには丁寧に保管された手紙が何通が入っていました。送り主は女性で住所は青森、初めはご家族からの手紙かと思いました。

しかし弥三郎様と姓が違うのです。

私は悪い予感を覚えて、罪悪感を振り切るように封筒の中身を取り出しました。

「こ、これは……」

私は絶望感に頭を掻きむしりたくなる衝動を必死に抑えて他の封筒の中身を全部開けます。

手紙の送り主は全て同じ人物、同じ住所、しかも女性……

しかも、その文面は明らかに恋文だったのです。

文字は汚く平仮名だらけで、文章も拙い。でも『彼に逢いたい』と云う気持ちは痛いくらいに伝わってきました。

そして乱舞する『いいなづけ』と『およめさん』という単語。

その時、私がどんな顔をしていたのか判りません。想像もしたくありません。

けど、判っているのは『心』……私の『心』は恠気、嫉妬なんていう言葉など生ぬるい感情で溢れていました。

純粋な怒り、憎悪。私は『たなかウメ』なる人物に自分でも吐き気を催すほどの憎しみを抱いていました。

もし、「何故、弥三郎を憎まない？」という声があれば、私は蔑んでこう答えるでしょう。

「それは殿方の勝手な云い草……『女』は『女』を怨みます」

とね。

「月夜？　こんなところにいたのか？」

私はその時、もつとも聞きたくない声を聞いてしまいました。

「恨めしや……弥三郎様」

私は彼の下宿から逃げるように我が家へと走り去りました。

家に着いた私は姉様の咎める言葉を振り切って私室の襖を開けると、愛用の文机の引き出しから一つの薬包紙を取り出しました。

私は弥三郎様と同じく生まれつき体が弱く、剣術の稽古はおろか基礎体力作りの運動にさえ耐えられない人間でした。

しかし私は姉様達が剣術の稽古をしている傍ら、土蔵にあった我が霞家に伝わる古文書を読み解き、兵法や火術を独自に学んでいました。

今、私の手の中にある薬包紙には兵法の奥義の一つである投毒術の集大成が詰まっているのです。

「オノレ、憎しや！　『たなかウメ』！！　我が魂魄、オノレの血筋末代まで祟ってくれようぞ！！」

否、やはり弥三郎様を愛するが故……たとえ仮令憎い『女』でも弥三郎様の愛する人を殺せない。

心の底では『たなかウメ』を殺して地獄に堕ちるより、弥三郎様

を愛したまま死のうと想っていたのかも知れません。

「何故……何故で御座います？ 弥三郎様……恨めしや……恨めしや、弥三郎様……恨めしいほど愛しています」

私は薬包紙に包まれた白い粉を口に入れながら未練を吐露してしまいました。

涙で霞む視界の中で姉様が私を呼んだような気がしました。

私こと吉田弥三郎は月夜殿が走り去った後、しばらく阿呆のように立ち尽くしていました。

ふと足下に目をやると封筒と手紙が散乱しているのに気づいてしまいました。

「ま、まさか月夜はコレを読んで?!」

私は取る物もとりあえず、月夜殿の後を追いましたが、しかし彼女の姿は既になく、私は焦燥を募らせるしかありませんでした。

なんとという事だ。私は彼女の家にまず連絡をするべきかと思って愕然としました。

私はこの時、彼女の家がどこにあるのか知らない事に初めて気づいたのです。

私はいつも彼女との待ち合わせに利用していた茶店に向かう事に

しました。

しかし茶店の主人も看板娘のおキヨさんも月夜殿の家を知らない
と云う。

焦燥に駆られながらも私はたまたま通りかかった官憲を捕まえて
月夜殿の家を訊ねると、逆に不審者扱いされて詰問され余計に時間
を費やす結果になってしまいました。

焦りが焦りを生み、喧騒の中で右往左往していると急に胸が苦し
くなって私は酷い咳をを繰り返していらなくなってしまいました。
した。

「こ、こんな時に喘息の発作なんて……」

私は何度も咳き込み、呼吸をする事さえまならず次第に意識を
手放していったのでした。

目を覚ますと、心配そうに私を見つめる先生の奥方様と目が合い
ました。

「まあ、ヤサブロー、目を覚ましたのね！」

奥方様はしきりに私の絵の師匠、マリオ先生の名を呼んでいるの
をぼんやりと聞いていました。

「良かった。気がついたんだね！ 君はもう四日も昏睡していたんだ」

にこやかに話しかけるマリオ先生に私は朦朧と謝罪するしかありませんでした。

そして急に意識が覚醒してマリオ先生に詰め寄ってしまいました。

「わ、私は四日も眠っていたのですか？！」

その直後、大きく咳き込んでしまい、奥方様に支えられながら先生に叱られてしまいました。

「ヤサブロー、無理をしてはいけない。何、船は昨日出てしまったが、焦ることはない。我が祖国、伊太利亜は決して逃げないからね？」

マリオ先生はウインクをしておどけて見せました。

奥方様も「体が健やかになればいくらでも機会は得られるわよ」と微笑んで下さいました。

たった数ヶ月しかいなかった私をここまで気にかけて下さる先生達に感動したのは確かですが、私は兎に角月夜殿が気になってその事を訊ねました。

すると奥方様は急に不機嫌になられて彼女を罵り始めてしまいました。

「まったく、貴方の一大事だというのにあれから全く姿を見せないんだよ！ 何があったか知らないけど、冷たい話じゃないのさ！」

私はその言葉に悪い予感を覚えてベッドから降りようと思いました。が、マリオ先生の意外と力強い手にベッドに押さえ込まれてしまい

ました。

「ヤサブロー、無理をしてはいけないと云ったはずだよ？　彼女が気になるのは仕方ないけど、今はゆっくり休む事だよ」

私は奥方様に何かの薬を飲まされると、次第に眠気に襲われて瞼を開ける事すら困難になっていました。

私が再び意識を手放そうとする直前、マリオ先生がこう仰いました。

「安心しなさい。ツキヨは私達も捜している。本当は君が目覚める前に見つけたかったんだがね？　でも、約束するよ次に君が……」

マリオ先生の言葉を最後まで聞くことは叶わず、私は意識を途切れさせてしまいました。

再び目を覚ますと、既に夜になっていて私は闇の中にいました。私は夜風に頬を撫でられながらおぼろげに視線を這わせると、窓が開いている事に気がついたのです。

いくら春とはいえ、夜風にさらされるにはまだ寒い時期。私はぼんやりとした意識のままベッドから降り、窓を閉めようとしてハッと覚醒しました。

「この窓は嵌め殺しのはず！　いったいコレは？」

私は足下に奥方様自慢のステンドグラスがある事に気づきました。そう、この嵌め殺しの窓にあった物です。

「な、何か鋭利なもので切り取られている？！」

私は例えようもない悪寒に身を震わせる事になります。

つまりステンドグラスを音も立てずに綺麗に切り取る物を持つ人物が、私の部屋から進入した事になるのですから。

何が目的かは判りませんが、侵入者は再び私の部屋に戻ってくるかも知れません。この窓から出るために……

そこで私はもう一つ重大な事を思い出しました。ここは、下宿に使っているマリオ先生の私邸は三階建て、そして私のいる部屋は三階……

窓から身を乗り出すと、地面は夜の闇に飲まれて見えなくなっていて、ソレは奈落の底を思わせて私は思わず身震いしました。

そしてさらに足場になりそうな出っ張りのない平坦な壁、また吊り下がる為の縄などが見当たらない事実には私は叫び声を上げそうになっしまいました。

いえ、今思えば悲鳴の一つでも上げれば異変を察して誰かが来てくれたかも知れませんが、後の祭りです。

「そんなに身を乗り出したら危険よ？」

突然背後から声をかけられて私の体は硬直してしまいました。

「吉田弥三郎さんですわね？」

名前を呼ばれて私は恐る恐る振り返りました。

「吉田弥三郎さんに間違いありませんね？」

私が無意識に頷くと、タンスの陰から大きな影が現れました。

「それは良かった。こればかりは人違いで済ませる訳には参りませんものね」

その時、雲が途切れたのか月光が部屋の中に差しして影を照らししました。

影の正体は剣道か何かの道着を着た長身の女性で、手には木製の六角杖が握られています。

恐怖を懸命に抑えながらよく見ると、長い髪を後頭部で縛った月の光の中に映える美貌の人でした。

目はきつく閉じられ、哀しいのか怒っているのか判りにくい表情をして私を『視』ているのです。

そう、私には何故か解りました。その閉じた瞼の下からジッと私を『視』ている事を。

「先日……」

「え？」

苦悩する哲学者のような重たい口調で彼女は私に話しかけてきました。

「先日、一人の少女の『夢』が無惨に打ち砕かれました」

「一人の少女の……『夢』？」

彼女は眉間に深い皺を刻んで頷きます。

「そう、愛しい人と結ばれたいという少女なら誰でも抱く『夢』です。しかし、その少女の『夢』は残酷な方法で砕かれました」

「ま、まさか……その少女というのは？」

私は恐怖を上回る焦燥感に襲われて彼女に詰め寄ろうとしましたが、六角杖を突きつけられて歩みを止めざるを得ませんでした。

「『夢』を砕かれた少女は恐ろしい毒を呷り……その儚い『命』さえも自ら砕こうとしました」

「ど、毒ですって?!」

私は形振り構わず彼女に縋ろうとしましたが、顎を蹴られて悶絶するだけという惨めな結果に終わってしまいます。

「幸い手当が早く、命は取り留めましたが……」

彼女は私の髪を掴むと無理矢理立たせて顔を近づけて続けます。

「あの天上の雅楽のようだった少女の美しい『声』は……」

いきなり彼女は私の喉笛に噛みついてきて、私は痛いと思う前に恐怖に駆られて叫びそうになりましたが、喉仏を噛み潰されて悲鳴にはなりませんでした。

「あの誰もが羨んだ美しかった『声』は毒に潰され、童話の魔女の

ような恐ろしい『声』に！！」

私は憤怒の表情で涙を流す彼女に、月夜殿の面影を見たのです。

「ひゅー……貴女は……ひゅー……月夜の……ひゅー……ひゅー……」

喉を潰され、私の『声』にならない『声』にそれでも彼女は頷いてみせました。

「少女の砕かれた『夢』……その代価、払って頂きます」

彼女が六角杖を左手に持つて腰に添える奇妙な構えを見せたと思えば、月光を反射して何かが煌めき、気付いた時には彼女の姿はどこにもありませんでした。

あれは夢だったかと思った矢先に切り取られたステンドグラスが目に入り、夢ではなかったのだと他人事のように思いました。

そう思ったと同時に再び彼女の声が聞こえて来ました。

「少女の『夢』の代価は……貴方の『夢』」

「え？」

聞き返そうとしたその時、ドサツという音がして足下を見ると黒い塊が見えました。

何かと思ってソレを拾おうとした時、私の右腕が無い事と落ちていた物こそが私の右腕だと気付き、私は喉の痛みを忘れて絶叫を上げたのでした。

その日の霞流道場は朝から騒然としていました。

先程、顔見知りの巡査殿が来て、姉様が白装束を身に纏って警察に出頭した事を伝えて帰っていったのです。

巡査殿の話では姉様は「人の腕を斬り落とした。その場は命までは取らなかったが、傷の具合いかんでは殺人罪になるかも知れぬ」と自ら捕縛されたとの事。

そして被害者の名前を聞いて私は今度こそ絶望感に打ちひしがれたのです。

『弥三郎様……姉様、どうして……』

毒で爛れた私の『声』は世にも恐ろしいものとなっていたのです。私はすぐにでも弥三郎様と姉様の元へ馳せ参じたかったのですが、まだ毒が抜けきっておらず全身が痺れて這うことすらできませんでした。

その遅れが後にあの地獄を生み出す事になろうとは、想像すらしていなかったのです。

明晩、私は不思議な夢を見る。
切なく哀しい別れ…そして希望の言葉。
しかし、偽りの希望は更なる地獄をこの世に齎す。
弥三郎様と私の恋の行く末は？
警察へ出頭した姉様の運命は？
それはまた次回の講釈にて。

第捌章 恋慕地獄道・前編（後書き）

月夜の過去です。

前編だけ見ると弥三郎が悪いように思えますが、真実は……

哀しい月夜の恋は次回、収束しますが、救いはあまりないかも知れません。

しかし、私はハッピーエンドを目指して執筆してますので、今後もお付き合い頂ければ幸いです。

第玖章 恋慕地獄道・中編

この日の道場は通いの門下生の姿は無く、四天王を含む内弟子衆の姿しかありませんでした。

「くっ……雪子師範、何があつたと云うのだ！ 霞流道場はこれからどうなると云うのだ！！」

道場の床を何度も叩いて悔しそうにしているのは、我が霞流道場の四天王の一人、東雲持右衛門殿しのめじえもんです。

二十四歳の若者で身の丈六尺（約百八十センチメートル）と体格にも恵まれています。

元々大身の旗本の跡取りでしたが、ご維新の煽りでお家が潰れ、今は遊郭の用心棒をしながら仕官の口を探しておられるとか。

『待ち』の戦法を得意とする粘り強い剣技の持ち主で、どのような太刀筋も絡め取るように受け止めて鍰迫り合いになったが最後、相手は押す事も引く事もできなくなるそうです。

押されれば引き、引かれれば押す。まるで磁石のように吸い付いて離れられなくなりどんな相手も最後には焦って隙を生じさせてしまふ。そこを見逃さずに相手を打ち据えるのです。

これには姉様ですら手の打ちようもないそうで、持右衛門殿と打ち合う際には鍰迫り合いだけは避けるように立ち回らざるを得ないとか。

そんな剣法の使い手である持右衛門殿の性格も剣技に似て常に泰然とされているのですが、この日ばかりは怒りとも焦りとも判然としない感情を持て余しているようです。

『全て……私のせいです』

「月夜殿！　まだ喉が治っていないのですぞ！　無理はなりませぬ！」

持右衛門殿は私の喉に濡れた手拭いを押し当てて私を諫めてくれます。

私は喉を冷やす濡れ手拭いの感触と持右衛門殿の優しさに甘えそうになるのを制して首を左右に振りしました。

「いえ、私がしっかりしていればこんな事には……」

「どのような事情がありか存じませぬが、持右衛門殿の云われる通り無理はいけませんよ。月夜お嬢様？　まだ呼吸をするだけでも喉が痛いのでしょうか？」

私は瓜実顔の美女に肩を抱かれて白湯を飲まされました。

彼女こそは霞流道場の四天王の（当時では）紅一点、雀蜂のお紅さんです。

元々は幕府方の隠密という凄い経歴の持ち主でしたが、ご維新で後ろ盾の幕府が倒れ、新時代を生きるために抜け忍になった人でした。

しかし忍びの掟と云うものは想像以上に厳しいものだったらしく、彼女を支配していた中忍に捕まり、陵辱を受けながら殺されるのを待つばかりだったと云います。

そこをたまたま出くわした父様に救われ、私達雪月花の三姉妹の世話係として雇うという名目で彼女は保護されたのでした。

初めは甲斐甲斐しく私達の世話をしていましたが、いつしか我が流派の剣に興味を持ち、見様見真似で一人稽古をしていたそうです。そこを父様に見咎められ、その技量に入門を許されてついには目録を得るに至った人材でした。

余談ですが、霞流兵法・投毒術を修める際、私に忍び時代に培っ

た毒物や薬草の知識を伝授してくださった師匠でもあります。

『いいえ、お紅さん。お願いですから私の恥を告白させて下さい』

私は白湯のおかげで幾分楽になった喉を撫でながら、弥三郎様との恋の顛末を余すことなく告白したのでした。

「お嬢様……なんと不憫な」

お紅さんは袖で目元を抑えながら私の話を最後まで聞いてくれました。

そして気づけば、持右衛門殿を始めとする男衆がいつの間にか道場から姿を消していました。

恐らく本音では男性に聞かれたくなかった私の心情を察して下さったのでしよう。

『お紅さん……姉様はどうなるのでしょうか？ 弥三郎様は助かるのでしょうか？』

私は知らずにお紅さんの胸に縋り付いていました。

嗚呼、なんと甘ったれた女よ、と誰かに罵られたような錯覚を覚えます。

しかしお紅さんはそんな甘ったれた私を罵ることなく、力強く抱きしめてくれました。

『お紅さん……』

お紅さんは何も云いません。

云いませんでした、逆に黙って抱きしめてくれた事が嬉しかった。

たのです。

その夜、私は『夢』を見ました。

私は何も無い。いえ、“闇”があるばかりの空間で一人立ち尽くしていました。

「ここは……いつたい？」

自ら毒を飲む前と変わらぬ自分の『声』にその時は何も疑問を持ちませんでした。

不意に袖の中が温くなり、柔らかな赤い光を放ち始めました。

「これは……弥三郎様の？」

私の手にはあの夜、弥三郎様からプロポーズを受けたあの日に頂いた赤い玉がありました。

「……ど……」

「え？」

「……の……きよ……どの……」

『声』は赤い玉、いえ、赤い光に照らし出された先から聞こえて来ました。

「月夜殿……月夜殿……」

「ああ……そんな……」

目の前には一番聞きたくなかった『声』が、一番逢いたかった『人』がいました。

「弥三郎……様？」

光が徐々に強くなり、やがて“闇”の中に弥三郎様の姿が現れました。

「月夜殿……嗚呼、月夜殿」

「弥三郎様あ……」

私は堤防が決壊したかのように溢れる涙を止めることができません。

「月夜殿。こちらに……さあ、月夜殿」

「弥三郎様!!」

私は弥三郎様の胸の中に今すぐにでも飛び込んでいきたい気持ちを無理矢理抑え込んで、後ろを向きました。

「月夜殿？」

「弥三郎様？ 約束をお忘れになったのですか？」

私ははしたなくも拗ねた『声』を出して弥三郎様を突き放します。

「あ……ごめん。そうだったね？ 月夜、こっちにおいで」

「知りません！」

私は振り返りたい自分を叱咤しながら握り拳を作ります。
そうしないと甘えてしまいそうだったから。

「拗ねないで？ 私はお前しかないよ？」

弥三郎様は私を後ろから抱きしめてしまいました。
うう、不意打ちとは卑怯です。

私は弥三郎様の腕を引き剥がすと振り返って拳を彼の胸に叩きつけます。

「嘘つき！ 私しかないなんて嘘！ 貴方にはれっきとした許嫁がいらっしゃるではありませんか！..！」

私の感情は爆発して弥三郎様の胸を何度も打ち据えます。
ええ、『夢』なんですから遠慮はいりません。

「嘘つき！ 嘘つき嘘つき嘘つき！！ どうせ嘘なら最後まで『夢』を見させて下さい！！ 何故、簡単にバレる嘘を！！..！」

私の拳はいつしか力を失い、最後はトンと軽く弥三郎様の胸に置いただけに終わりました。

「月夜、私には……オラアには許嫁なんいでいね！　おうめは確かに実在しでっけどオラアとアイツはそんなんでね！」

弥三郎様は出会った頃の青森訛りでそう云って私を抱きしめて下さいました。

「嘘です！！　では、何故弥三郎様はウメの、ウメさんの手紙を大切にしていたのですか？」

「おうめはオラアの妹だ！　めんこいめんこい大事な妹だ！　でもな、口減らしに売られていったんだ！」

「え……？」

弥三郎様の腕は更に力が込められました。

「妹を買つたなア女衞だ！^{せげん}　奴ア、まんだ十にもなつでねえアイツを犯しやがった！　散々鬻りモンにされて妹は壊れた！　女衞の奴ア、いけしゃあしゃあと「こりや売りモンにならねえから錢を返せ」と抜かしやがった！　オラア、その女衞をぶっ殺しちまっただ……」

寂しげに笑う弥三郎様に私も彼の腰に手を回して抱きしめました。

「ああ、月夜に法螺吹いだと云えば、オラアが人殺しだつでの隠しでた事だな」

「いいえ、大切な妹さんをそのような目に遭わされて下を向いているよりは立派です！」

私は何度も何度も首が千切れるほど横に振って弥三郎様を称えました。

そこで、ふと疑問が胸に浮かんできました。

「では、何故妹さんは、ウメさんは貴方を許嫁と？」

弥三郎様は今にも泣き出しそうな顔で私を見つめています。

私はあえて先を促さず、彼の頭を胸に抱き寄せました。

「まずは泣きましょう？　弥三郎様、貴方の哀しみを受け止めさせて下さい」

せめてもの罪滅ぼしに――私は心の中で付け加えました。

「ぐう……ぐふ……泣ぐのはなんねえ！　オラアは男だで、泣くわけには……」

「弥三郎様、せめて今くらい弱くなりましたよう？」

私は弥三郎様の頭を撫でながら、無意識のうちに昔母様が歌って下さった子守歌を歌っていました。

「ふう……ふぐう……そんなん卑怯だ！　な、涙が止まんね！」

弥三郎様は泣きました。

形振り構わず、子供のよう……湊まで垂らして……私はただただ愛しい気持ちを込めて弥三郎様を撫で続けました。

しばらく大声を上げて泣いていた弥三郎様は不意に顔を上げられました。

その顔は本当にすっきりとされていました。

「みつともねえとこ見られじまっだな」

照れ笑いをして頭をポリポリと掻く弥三郎様を可愛いと思う私は現金なのでしょうか？

「いいえ、可愛らしかったです」

つい口元を押さえてクスクスと笑う私に、弥三郎様は顔を赤くしてそっぽを向かれてしまいました。

「あー、妹な？　おウメの奴ア……」

「はい」

弥三郎様の真剣な表情に私も気持ちを引き締めます。

「壊れちまっただ妹ン世話アすんなア兄弟はみんな嫌がった。アイツの面倒見でたンはオラアとおっ母だけだった」

私は目を瞑り、無言で先を促します。

「世話しでるうちにおウメの奴、オラアの女房にしてけれって云い出しでな……兄弟だから無理だア云えながった」

ウメの心情を惟みて、何故か既視感を覚え、姉様の泣き笑いの表情が脳裏に浮かびました。

「オラアもはつきり云やア良がっただンだよなア……問題を先送り先送りしでるうちに、どこで覚えだンだが、オラアの事、『いいなづ

け』と呼ぶようになった」

そう、それが弥三郎様の机の中にあつた恋文の正体。必死に字を覚えた幼いウメが精一杯の愛情を込めた哀しい手紙。ちなみにウメが名乗つた姓『たなか』というのは弥三郎様のお姉様が嫁いだ先の姓だという事でした。

悪いのは全て私。勝手に机を覗いた私。早とちりした私。弥三郎様に手紙の事を訊かなかった私。

そして、弥三郎様を信じる事ができなかった私。

「私……なんて事を……」

私は膝から崩れ落ちて、手で顔を隠して泣く事しかできませんでした。

私だけが不幸だと思っていたのです。私だけが何でこんな目に遭うのかと……

でも違つたのです。

本当に哀しかったのは弥三郎様。一番辛い思いをしたのはウメさん。

そして私は大切な人を殺人者にしようとしている。

貴方の哀しみを受け止めさせて下さい？　せめてもの罪滅ぼし？

嗚呼、なんて馬鹿で浅ましい『女』！　本当に恨まれるべきは私！！

「弥三郎様……私はまるで悪魔のようですね？　いえ、いつの間にか醜い悪魔そのものになつていたのですね」

「月夜、そうやって自分を卑下する事は逃げると同義だよ？」

ハッと顔を上げると弥三郎様は穏やかに微笑んでいました。

「大丈夫。君のお姉さんは私が必ず助けるよ」

「え？ 助けるって、姉様は貴方の大切な右腕を斬り落とした人なのですよ？」

そう云いながらも縊るように弥三郎様を見つめる自分を浅ましく思わずにはおれません。

「酷いなあ。君と私はお互いに通じ合ってたと思っていたのに、判ってなかったんだね？」

弥三郎様は苦笑しながら左手を見せると、いつの間にか鉛筆が握られて“闇”の中に恐ろしい速さで私の似顔絵を描いてくださいました。

「私は元々左利きだったんだよ。母が厳しくてね、無理矢理右手で食事をしていたから癖にはなってたけどね」

弥三郎様は悪戯っぽく片目を瞑りました。ウインクというその仕草は彼にとっても似合っていました。

ふと、遙か遠くで光が見えたような気がしました。

「ああ、どうやら朝が来たようだね。もっと君と話をしたかったけど、これでお別れだ」

「え……？」

私は弥三郎様の仰る意味が解りませんでした。

「弥三郎様 お別れっていつたい？ 姉様を助けて下さるのでは？」

「うん、ごめんね？ でも、月夜のお姉さんを助けると云う言葉に嘘はないよ。だけど……」

弥三郎様は私に背を向けると“闇”の奥へとゆっくり歩き始めました。

「だけど……何ですか?!」

「君とはもう会えない……逢えないんだ……」

弥三郎様は“闇”の中へ消えて行こうとしています。

私は必死になって弥三郎様の背中を追いかけます。

「会えない？ 逢えないとはどういう事です？ 嫌です！ 弥三郎様、もっと『声』を聞かせて下さい！ もっと私に触れて下さい！」

私の『声』が届いていないかのように弥三郎様は歩みを止めようとはしてくれません。

「弥三郎様！ 弥三郎様！ 弥三郎様！ 弥三郎様！ 弥三郎様！ 弥三郎様！ 弥三郎様！ 弥三郎様！」

漸く私の手が弥三郎様の肩に触れようとした瞬間、私は布団を跳ね飛ばして目を覚ましたのでした。

『待つて……行かないでください。弥三郎様……』

私の目尻から涙が零れ力無く呟いていると、慌ただしく家の中を駆ける音がして私の部屋の襖をお紅さんが開け放ちました。

「お嬢様、ご無礼を！　ただ今、警察から連絡がありまして……」

「弥三郎様が亡くなられたのですね？」

体を起こすことなくそう云うと、お紅さんは哀しそうに私を見つめてから、短く肯定の言葉を発しました。

それからの私は忙しい毎を送る事になりました。

まず私は弥三郎様の下宿に向かい、彼のお師匠とお仲間のお弟子さん達にお詫びとお悔やみを述べに行きました。

彼のお師匠の奥様は私の顔を見るなり大きな音を立てて頬を打ち据えました。

しかし、どうした事か次の瞬間、彼女は私を抱きしめて泣いたのです。

「しばらくだったね、ツキヨ。私も家内と同じで君を許せない。だが、私とて、我々として木石じゃない。君の切ない女心を誰が責められようか」

彼のお師匠、マリオ先生は奥様ごと私を抱きしめてくださいまし

た。

「ヤサブローの遺言だよ。君と君のお姉さんを助ける策を遺して彼は死んだ。ヤサブローは最期まで君を想っていた。そんな彼の気持ちを無駄にはできない」

『弥三郎様……』

涙腺が緩みかけた私の頬をマリオ先生は両手で挟んで意志の強い目を私に向けた。

「ヤサブローの遺志を全うするまで君は泣いてはいけない。いいかい？ よく聞くんだよ？」

マリオ先生の示した弥三郎様の策に私は全身を震わせずにはおれませんでした。

彼の策とは、私の勘違いそのままでした。

つまり故郷に許嫁がいたにも拘わらず弥三郎様が私を弄んだという汚名を彼に着せるというものです。

そして、それを世間に公表した上で世論を喚起させて、姉様の減刑嘆願運動を起こそうというものでした。

音頭を取るのは弥三郎様の師匠であるマリオ先生。彼が中心になれば知名度も手伝って多くの署名を集めることができるだろうとの事。

巧くいけば無罪。たとえ官憲が石頭でも減刑まで持ち込めるだろうと云うのが彼らの狙いでした。

結論から云えば、予想以上に署名が集まり、嘆願運動の規模も大きなものとなりました。

何より驚いたのは青森から弥三郎様のお母様が上京されて、嘆願

運動に参加してくださった事です。

お母様は私に会うなり、「すまなんだ。すまなんだ」と涙を流して謝罪をされたのでした。

『何故、お母様が謝られるのです？ 私は弥三郎様の仇の妹、しかも発端は私の勘違いなのですよ？』

「いんや、ウメの手紙が無がったらこんな事にはならなんだべ。ウメに弥三郎へ手紙を送れって勧めたんはこの婆じゃ！ 儂こそ恨まれるべき元凶じゃよ」

そして、哀しそうに私の喉を撫でられました。

「本当じゃったら、めげえ声じゃったろうに……お前さんは充分罰を受けたじゃ……いや、受ける必要のねえ罰だったがもしんねえ」

私とお母様は後は何も云わずに抱き合って泣いたのです。

この出来事は新聞にも載り、ますます世論は高まっていったのです。

しかし、それを快く思わない人がいたのです。

その人物はあろう事か……霞雪子、姉様本人だったのです。

『何故です？ 何故なんですか、姉様……』

顔馴染みの巡査殿を挟んで番卒から聞いた話では、姉様は毎日首を丹念に洗って刑の執行を待っていると云うのです。

「私は一人の人間の命を奪った。ならば私の命で償うのは道理。それなのに減刑を望む運動が起こっているなど迷惑千万」

これが姉様の云い分でした。

「意地……ではないじゃろうなあ。恐らく雪子師範は呵責に苦しんでおられるのでしょう」

霞流道場で行われた嘆願運動の中心人物達の会合は重たい空気に包まれていました。

しばらく誰もが口を開かなかった中で、先の言葉を発したのは霞流道場の四天王、弧月坊延光和尚こづつぼうえんこうでした。

元は大きな禅寺の貫主だったそうですが、ご維新以降の廃仏毀釈の政策でお寺を追われた犠牲者です。

大抵のお坊様と同じく還俗させられたそうですが、本名を忘れられたとかで今でも法名を名乗っています。

元々は宝蔵院流槍術の名人でしたが、以前から親交のあった父様からの縁で姉様に招かれて食客となり、そのまま門下生となつたいい加減な人です。

既に還暦を過ぎていますが、その辺の若者よりもずっと元気で、血気盛んな若い門下生を蹴散らしてとうとう目録まで許された常識外れな人でもあります。

そして今もなお木刀や木槍を振り回しては若い門下生を振り回してるのです。

ただ元お坊様と云うこともあって、彼の言葉は含蓄があり、多くの霞流門下生の中でも新参の方でありながら『和尚』の愛称で長老的な存在を務めています。

ちなみに四天王の最後の一人は、姉様の双子の兄だった人で名を雪彦と云います。

兄様は姉様でさえ足下に及ばぬほどの遣い手で『稻妻』の二つ名を持つ神速の剣士でした。

本来であれば姉様が四天王となり、兄様が道場主になるはずでしたが、明治五年の銀座の大火に巻き込まれて亡くなってしまい、姉

様が道場を継ぐことになったのです。

しかし姉様が道場主になったは良いのですが、当時はまだ四天王を名乗れるだけの人材はいなかった為に桜花が目録を許されるまではと、兄様の名を四天王に連ねていたのです。

お話を戻しましょう。

私は和尚の言葉から姉様が死を望んでいるように思えてつい強めの口調で答えてしまいました。

『呵責……和尚、姉様は自分から死刑になる事を望んでいると云うのですか？』

「愚僧はそこまで云うてはおらぬわい。じゃが、彼の御仁はこの明治の世において『葉隠』を支持されておられるからのう」

和尚はお髭を撫でつけながらほふほふと笑われました。

「武士道と仏道は全く相反するものじゃが、ゴープ＝ゴータマ即ちお釈迦様は仏道の本質を『一日一生』と説かれておる。お嬢、『一日一生』とは如何に？」

『はい、死をおもんみてのお言葉かと……』『一日一生』と思えば一日は我がものとなり、心が安らぐと心得ます』

「うむ、では武士道を究めるには『一日一死』であると雪子師範は否、『葉隠』は説いておるが、さてお嬢？『一日一死』とは如何に？」

私は和尚との問答に姉様の心根が見えて泣きたくなくなってしまいました。

『武士道を究めるには朝夕繰り返し死を覚悟する事が肝要であるという姉様の口癖。死を覚悟していれば武士道は自分のものとなり……』

私は堪えていたはずの涙が頬を濡らしている事に気付かされました。

『武士が武士である事ができる。自分が自分である事ができる……姉様は人を殺めた呵責以前に自分自身の為に死のうとされているのですね？』

「そうじゃ！ 全くもって愚かの極みじゃ！ 雪子師範は家長でありながら家族を顧みず、道場主でありながら門下生を蔑ろにする不心得者じゃ！！」

和尚は立ち上がるともの凄い形相で姉様のいる獄舎の方角へ向き直りました。

「愚かなり霞雪子！ お主は武士の世が終わったこの時代に何を血迷う?! お主は士族である前に人であるという事を思い出すべきじゃ！！」

和尚の一喝は腑抜けた私達に活を入れて下さいました。

「ねえ、桜花も手伝わせて？」

見れば桜花が泣き笑いのような顔をして立っていました。

私達は桜花の心を傷つけまいとあえて嘆願運動から遠ざけていたのです

「桜花も霞家の家族でしょ？ 霞流道場の一員でしょ？ 難しいことはよく分かんないけど、雪子姉様を助ける為だったら何でもするよ！」

嗚呼、私はなんて嫌な姉なのでしょう。

今更ながら私は自分の傲慢さに嫌気が差しました。

桜花も家族なのに……桜花も桜花なりに事件を受け止めて姉様を心配していたというのに。

「そうね……ごめんなさい。貴女も姉様が心配だったんですものね？」

私はいつの間にか私の背丈を抜いていた桜花を抱きしめました。

「桜花、一緒に姉様を助けましょう」

「月夜姉様……うん！」

私達は警察に何度も掛け合い獄舎にいる姉様との面会する機会を漸く得ると、早速桜花を連れて姉様と面会をしました。

牢の中にいる姉様は逮捕前と比べてゲッソリと痩せこけていて、初めは別人と会わされたのかと思ってしまいました。

「そこにいるのは月夜と桜花ね？　しばらく会わないうちに二人とも痩せたみたいね？」

私達は姉様の言葉に思わず硬直してしまいました。

「そんな不思議そうにしないで？　ただ歩き方で何となく解ったの」

『ね、姉様もすっかり痩せてしまわれて……初めは別人かと思いましたが』

私は姉様のお姿に居たたまれない気持ちにさせられました。
横にいる桜花も同じ気持ちでしょう。

「雪子姉様、みんな心配してるよ？　桜花も、月夜姉様も、四天王や門下生もみんなみんな！　だから、せめて……せめて……」

桜花は目に涙をいっぱい溜めて牢に縋り付きます。

「死にたいなんて云わないで！　みんなの優しさを迷惑だなんて云わないで！　みんな雪子姉様が好きなんだよ？　みんな雪子姉様を助けたいんだよ？」

桜花はボロボロと泣いて姉様に訴えかけます。

「ねえ！　雪子姉様、何か云って……っ！」

桜花は急に言葉を止めてしまいました。

訝しんで姉様を見て、私は思わず呼吸を止めてしまいました。
生まれてから一度も開かれる事のなかった姉様の双眸が開かれて

いたのです。

しかも、その瞳の色はエメラルド翠玉を思わせる緑……

「月夜？ 貴女は私の心底を察しているわね？」

私は緑の双眸に射抜かれるように見つめられて、全身が震えて返事どころではありませんでした。

「私は死すべき時に死ぬ、ただそれだけよ？ 私は一人の人間の命を奪った、だから償いをしなくては……」

「S、しかし姉様は既に何度も真剣勝負を、死闘を演じられているではありませんか」

「確かに私は沢山の命を斬っている。でも、それはあくまで剣客同士の仕合の結果であり、凶賊退治の結果よ。弥三郎さんは違う。彼は剣客でも凶賊でもない」

姉様は自嘲の笑みを浮かべて、諭すように続けます。

「それに私はね、月夜？ 貴女の復讐の為に弥三郎さんを斬ったのではないの……ただ私の怒りを鎮める為に彼を斬った殺人鬼なのよ」

『ど、どう違われるのですか？ 私を弄んだ弥三郎様に怒りを覚えられたのでしょうか？ それは即ち私の復讐では？』

喉が渇き、唾を飲み込む作業すら苦痛になり、喘ぎながら問う私に姉様は口の端を吊り上げたのでした。

「いいえ、貴女の復讐なら、何故私は彼を告発しなかったの？ 復

譬ならただ斬るより彼の絵が流通しないように手を打った方が余程苦痛でしょうに」

下弦の月を思わせる姉様の“笑み”に私の全身を凄まじい悪寒が走ります。

姉様は道場主ということもあつてか様々な人脈を持っていて、確かに新鋭の画家一人落ちぶれさせるくらい造作もない人です。

「月夜？　そして、桜花？　よく聞きなさい。私の心は壊れているの。『怒り』が『憎しみ』を生み、『憎しみ』が『暴力』を生む……」

しばらく姉様の含み笑いが獄舎を支配されていました。

「私はね、いい？　昔から人を打ちのめす事が好きなの。何かを斬る事が好きなの。全てを破壊したいという衝動を自分の内側に飼っているの」

「雪子姉様……」

桜花が哀しげに姉様の“笑み”を見つめています。

「私はいつかこうなる事が解っていた。いずれ人を殺めるだろう事を……私は貴女の悲恋を利用して人を斬った唾棄すべき斬殺魔……」

私は無意識に首を左右に振っていました。

「私の罪は勿論、月夜、貴女最愛の人を斬った事。でも、それ以上の罪は、人を殺める前に自分の命を絶てなかった私の弱さなの」

姉様は慈愛の笑みを浮かべて私と桜花を見つめます。

「人を殺めておきながら自害できない惨めな殺人鬼はね、こうして司直の手を借りないと自分を罰せられないのよ。だから月夜？　もう嘆願運動はやめて？　私はもう貴女達の姉、霞雪子じゃない……最愛の人、吉田弥三郎を殺した憎き鬼なのよ！」

『それでも……それでも貴女は私達の姉様です。いつも優しく、時には厳しく私達を見守ってくださった自慢の姉様です』

「そうだよ！　雪子姉様は確かに人を殺めてしまったけど、それでも霞雪子は霞雪子だよ！　決して殺人鬼でも斬殺魔でもないよ！」

私達は泣いて牢に縋りました。

奥に座る姉様に触れる事ができないもどかしさに歯噛みしながら。

「ありがとう、月夜、桜花……でも、無理なのよ。云ったでしょ？　私は弱いとも……罪なき人を殺めた事実を受け止めて生きられるほど私は……」

姉様は再びあの下弦の月のような“笑み”を浮かべてしまいました。
た。

「だから、死なせて？」

私達は泣きながらあの“笑み”を浮かべる姉様に何も云えなくなつてしまいました。

そして、無情にも面会の時間が終わってしまい、私達は引き摺られるように獄舎から連れ出されたのです。

『姉様……本当の貴女はこんなにも弱かったんですね。貴女が『葉隠』に固執していたのは……』

私と桜花は力なく帰途についたのでした。
ただ自分の無力が哀しかった。

そして事態は明朝、急展開を迎えたのです。

予想だにしていなかった救いの手に私達は戸惑い翻弄されていく

……

傷ついていく姉様に私は為すすべもなく立ち尽くすしかありませんでした。

姉様に齎された救いの手とは？

そこにどのような目論みが隠されていたのか？

それはまた次回の講釈にて。

第玖章 恋慕地獄道・中編（後書き）

今回で過去話を終わらせるつもりでしたが、終われませんでした。
雪子と月夜の顛末は次回こそ書き上げますのでご容赦を。

第卅拾章 恋慕地獄道・後編

翌朝、私は目の前の光景を信じる事ができませんでした。

長い入牢生活ですっかり衰弱して巡査殿に支えられてはいたものの、姉様が家の門の前で立っていたのですから。

『姉様……どうして？』

「どうしたもこうしたも、君達の嘆願運動がついに実を結んだんだよ！」

姉様を支えている巡査殿が喜色満面の笑みで教えてくださいました。

「いや、あの事件を知ったさる政府の高官がね、それはもう感激して手を打って下されたのさ！！」

『さる高官とは？』

「ああ！ なんでも君達のお父上、霞主水様と幕末の動乱を潜り抜けた戦友であらせられたそうだね、タベ警察と掛け合って雪子さんを出してくださったんだ！」

興奮気味に話す巡査殿は本当に姉様を心配して下さったのでしよう。

しかし、私は何故か素直に喜ぶ事ができなかったのです。

「では、本官はマリオ先生や吉田さんのご家族にも報告して参りますので、これにて！ 雪子さん、お疲れ様でした。ゆっくり養生な

さってください！」

巡査殿は何故か私達に敬礼をして、疾風のように去ってしまいました。

『姉様……お帰りなさいませ。ご無事でなによりです』

私は上がり框に腰をかけられている姉様を労います。

「馬鹿にして……馬鹿にして……馬鹿にして……」

しかし姉様は心ここにあらずといった様子でぶつぶつと呟かれるだけでした。

数日後、私達は姉様の回復を待つて、ささやかなお祝いをしました。

流石に罪を赦されたお祝いで酒宴を開く訳には参りませんので、こぢんまりとした食事会になりましたけど近所の人や門下生の多くが参加してくださったのです。

ありがたい事に姉様を責める言葉は一言もなく、門下生も数人を除いてほとんどの人が残ってくれました。

いえ、むしろ以前より結束が強くなったような気がします。

「本日は愚行を犯した私の為にお集まり下さり感謝の言葉も御座い
ません。明日からは生まれ変わったつもりで精進しますので宜しく
願います」

姉様の挨拶が終わると歓声が上がりました。

「師範、無理して稽古に出る事はないですからね！」

「いいえ、今まで稽古に出られなかった分を取り戻すために、より
一層厳しい稽古をしますので、お付き合いを願いますよ」

中堅の門下生からそんな冗談が飛びましたが姉様にそう返られて、
場は笑い声に包まれました。

「いやあ、良かった良かった！ 本来ならば喜ぶ事は不謹慎ではあ
るが、今宵だけは仕方なし！ ようし、今から愚僧が面白き事をし
て進ぜよう！」

いつしか門下生達の隠し芸大会となり、結局は酒宴さながらの大
賑わいになってしまったのは、やはり姉様の人柄なのでしょうね。
やがて芸も出尽くして用意された料理も無くなった事から、銘々
後片付けをしたり、三々五々に散って気付いたときには私達三姉妹
とお紅さん、和尚だけとなりました。

「さて、愚僧も休むかの……そなたらも早う休まれよ」

そう云い残して和尚が床に就き、私達も休む事にしました。

「私はもう一度湯浴みをしてから寝るわ」

「では、お風呂を温め直しましょう」

「いいわ、お紅さん。初夏とはいえ結構蒸し暑いし、すぐに出るから休んでて」

姉様は断りを入れてお紅さんを下がらせると、鼻唄を歌いながら湯殿へと向かわれました。

『姉様？』

私も一度は布団に入ったのは良いのですが、お風呂に入っている姉様が気になって湯殿に向かいました。

『ね、姉様？！ 如何なされました？！』

そこで見たモノは、脱衣所で眉間から血を流して倒れている姉様の姿でした。

『姉様！ 姉様！ どうされたのですか？！』

傷がそう深くないと判った私は手拭いで姉様の顔から血を拭いながら問いかけました。

するとカッと目を見開かれた姉様に組み伏せられてしまったので

す。

『ね、姉様……』

「月夜？ ああ、月夜なのね……」

姉様は放心した様子で私を見下ろしています。

「ねえ、月夜？ 聞いてくれる？ 凄く笑える話があるの……」

私は全身の血の気が引いていくのが自覚できました。

姉様は獄舎で私達に見せたあの“笑み”を浮かべていたのです。

「私ね？ 汚れちゃいけないんですって。私は誰も斬ってないんですって。」「そもそも、吉田弥三郎とは誰だ？」「って云われたのよ？」

『え……仰る意味が……』

生まれたままの姿で眉間から血を流す姉様はケタケタと笑っています。

「笑っちゃうでしょ？ 父様は戊辰戦争の英雄……剣林弾雨を潜り抜け、刀一本で銃を持った兵士を何十人も倒した希代の英雄……だから、その娘が人殺しなんかしちゃいけない。する訳がないんですって！ あはは！ 私が斬ったのは幻か何かだろう、ですって！」

髪を振り乱して嗤う姉様に私は云いようもない恐怖に襲われました。

「今日ノ本は盤石ではない！ より強く、より多くの兵士が要る

！ その為には軍神『霞主水』は英雄でなければならぬ！ その子孫は清廉でなければならぬ！」

姉様が全身を大きく揺すって笑われるたびに、私の顔に姉様の血が降りかかります。

「軍神『霞主水』の伝説は今でも軍部で語り草になっている！ 否、今だからこそ軍神の伝説が必要！ 誇り高き軍神に続く者を増やす為に！」

姉様は急に優しい笑顔になって私の顔に落ちた血を丹念に舐め取り始めました。

「軍神の伝説は汚点があつては駄目なのよ……娘の愚行で伝説が穢れれば士気に影響を及ぼす……ねえ？ 父様ってそんなに凄かったの？ 私と同じ人殺しじゃない？」

私は姉様に何と答えれば良いのか判りませんでした。

「ねえ？ そんなに我が国の軍は脆弱なの？ 軍功を多く上げたつてだけの男の娘が犯罪者つてだけで士気が落ちてしまうの？ 伝説に頼らないと軍を維持できないの？」

姉様の声は徐々に嗚咽が混じり始めました。

「ねえ？ 英雄って何？ 軍神って何？ 十六の小娘一人、罰せられない政府が西欧列強に対抗できるの？ ねえ？ ねえ？ 月夜、答えて？」

姉様は私を組み伏せたまま私の首筋に顔を埋め、時に嗚咽を漏ら

し、時にはケタケタと常人とは思えない嗤いを繰り返していました。

「ねえ？ 貴女達の嘆願運動は無意味だったのよ？ ……元々、私はすぐ釈放されるはずだった」

『ね、姉様？ 何を仰って？』

これによって私は混乱の極みに陥ってしまいました。

「でも、貴女達は弥三郎さんとの悲恋を公表して世論を動かしてしまった。政府は焦ったわ。嘆願運動が警察を煽ったせいで官憲が意固地になってしまって、裏工作が困難になった。そればかりか闇に葬ろうとしていた弥三郎さんの存在が明るみになって、益々やりにくくなったわ。だってそうでしょう？ 弥三郎さんは私の罪そのもののだから。政府は大きく絵図面を引き直す羽目になった。政府は今度は病院に圧力をかけて弥三郎さんの死因を喘息の発作によるものにしたのよ。無茶したものよね？」

姉様はあの“笑み”で私を見下ろしていました。

「貴女達はいたずらに時間を引き延ばしただけ……お陰で私は食事を厠に捨てて餓死しようって思いついたけど、所詮は女の浅知恵、痩せはしたけどなかなか死ねなかった」

『姉様……』

私は姉様の“笑み”を見るに耐えられなくなって目を背けました。背けた先を見て、私は姉様が眉間から何故血を流されていたのか理解できました。

壁の広がる赤い滴り……姉様は何度も壁に頭を打ち付けていたの

でしょう。

「裏工作が終わった政府は「嘆願運動？　どうぞ存分にやって下さい」ってなものよ。殺人事件は消えてなくなった。あとは間抜けな小娘を牢から出すだけですもの。弥三郎さんはただの病死。私が斬った弥三郎さんは妄想の産物。狂った小娘に振り回された警察はいい面の皮だけど、顔は立つ。残ったのは弥三郎さんの汚名だけよ」

姉様はお腹を抱えて大声で笑われました。

「ねえ？　云つてみれば只の広告の為に政府も、警察もみんなみんな振り回されたのよ？　ねえ？　凄く笑えるでしょう？」

姉様はしばらく狂ったように、いえ本当に狂って嗤い続けました。しかし、不意に笑い声が止むと今まで見たこともない悪鬼のような怒りの形相で私の首を絞めたのです。

「何なのよ！　ねえ？　この国はいつの間に馬鹿しかいなくなったの？！　こんな世の中を作る為に父様は戦場で散ったの？！　ねえ？　ねえ？　ねえ！！」

呼吸ができず、意識が遠のいて死を意識したその時、姉様の手が離れました。

「ごめんなさい、月夜………こんなつもりはなかったの………ごめんなさい………ごめんなさい………ごめんなさい………」

姉様は私を解放するとふらふらと浴室へと入っていきました。

「ごめんなさい………月夜、許して………悪いのは私………許して………許

して……許して……」

しばらく姉様は立ち尽くしていましたが、ペタリと床に座り込み頭を抱えて絶叫しました。

ここが母屋から離れていたのは不幸中の幸いかもしれません。少なくとも誰かがここに来る気配はありませんでしたから。

「許して……私は……私は……貴女の大切な人を……許して……私は……私は……救いようのない殺人鬼……」

私は頭を抱えて泣き叫ぶ姉様を力の限り抱きしめました。

『ご自分を責めないで下さい。姉様に『罪』があるように私にも『罪』があります。私も多くの人を不幸にしましたから……』

「月夜……月夜……ごめんなさい……月夜……月夜……だったら、私は月夜の『罪』も背負うから……」

『ええ、私も姉様の『罪』を背負います。だから、生きましょう？ 弥三郎様を死なせた『罪』を二人で背負って……』

私達は静かに唇を重ねました。

それから互いを慈しむように、貪るように、そして『罪』を嚙り取るように全身余すことなく唇を、舌を、指を這わせ合ったのです。いつまでも……

その時、“闇”の中でじっと私達を見つめているモノに気付いていましたが、私は姉様を愛する事を優先させていたので、見られるがままにしていました。

翌日、姉様は朝から絶好調でした。

顔色も良く、生き生きとした表情で門下生に混じって素振りをこなし、何十人とも打ち込み稽古に付き合い、下位の門下生の問題点を指摘するなど疲れる事を知りません。

「勘助！ そんなタラタラとした打ち込みじゃ実戦だと死ぬわよ！
！ 定吉！ 相手が士族だからって遠慮しない！ そんなんじゃお互い稽古にならないわよ！！」

なんと云いますか、数日前まで餓死寸前だったようには見えません。

むしろ以前より力強くなっているように見えます。

「桜花！！ 何で命中の直前で勢いを殺すの？！ 何の為の面具よ！
！ 殺す気で振り下ろしなさい！ 殺す気で！！」

その姿はまさに『姫信長』。

明治に生きる第六天魔王は健在なり、ですね。

そう云えば、姉様は夜の事を綺麗さっぱり忘れていました。
私が目を覚ますと同じ布団の中でお互いに生まれたままの姿で寝ていた事実姉様は混乱されているのか、しきりに首を傾がれていたのです。

私はと云うと、かつて弥三郎様がそうして下さったように目覚めの口づけをしようとして……

「何を寝惚けているの！？ 目を覚まさない！ 月夜！！」

と、顔を真つ赤にさせた姉様に石で殴られた方がまだマシと云う拳骨を頂きました。

頭をさする私の傍らに人の形をした“闇”がいます。

『彼』は昨夜の私と姉様の傷の舐め合いをしていた時から私のそばにいました。

怖くはありません。ええ、“闇”が私にとって大切な方と云う事は判っていますから。

私は『彼』に『体』も『心』も捧げたつもりでした。

でも今は違います。今でも、いえ、前以上に『彼』を愛していますが、私の『心』はもう別の人に……

姉様。私の為に、私のせいで人を殺めてしまった姉様。

ご自分を殺人鬼と責められる姉様。姉様の壊れた『心』には私の『心』が必要なのです。

そして『彼』にはもう私の『心』は届かない。

『彼』はただの残滓、もうあの方ではない……

弥三郎様であろうはありますがありません。

私の『未練』や『妄念』の現れに過ぎないのでから……

『それでも…… 自慰の末に生まれたような『貴方』でも愛しています。ずっとそばにいてくださいましね？ 』弥三郎『様』

なんて酷い女。

己が恋慕の情の為に愛する人を死なせ、最愛の姉を殺人者にした女。

全てを地獄に堕とす恋慕の情。

それでも二人を自分のものになりたい恋慕の情、なんと浅ましきかな。

私の恋は地獄道。恋慕地獄道。

気が付くと既に夜が明けていて、『弥三郎』様の姿はどこにもありませんでした。

気怠げに上体を起こすと、おへそから赤い玉が落ちてコロコロと浴室へと転がっていきます。

追いかけて浴室に入った直後に宿の従業員らしき人物が脱衣所に入ってきました。

言葉から察するに、掃除をしに来たようです。

『流石は『弥三郎』様です』

私は赤い玉を拾い上げると頬擦りをして、口づけをします。

『折角ですし』

私は着物を脱いで濡れない場所に畳んで置くと、情事（自慰かも知れませんが）の残り香を消すべく、一番風呂と洒落込む事にしたのでした。

宿に戻るとメフィさんは部屋に戻っていましたが、廊下に大きな染みがあるのを見る限りちゃんと掃除をしなかったようですね？

仮にも騎士ならきちんと欲しいものですが、呆れながら私達の部屋に戻ると姉様と桜花はまだ気持ち良さそうに眠っていました。

いつもでしたら夜明け前に起き出して朝稽古をしているのですが、やはり久しぶりの旅の疲れと『地獄代行人』のお役目を全うすべく体力を温存させる為に少しでも体を休めたいのでしよう。

『姉様……』

二年前の事を思い出したせいか、いつも以上に姉様が愛おしく見えます。

私はあどけない顔で眠る姉様を見ているうちに、いつしか顔が間近になっていました。

『少しくらい……』

私は姉様の唇に自分のソレを重ねる事にしました。

『もう少し……』

あと僅かで唇が触れようとしたその時、突然姉様の瞼が開いて緑の双眸と目が合っていました。

「ふああ……おはよ」

『お、おはようございます』

姉様は大きく欠伸をされると、そのまま二度寝をしてしまいます。私はというと、心ノ臓が痛いくらいに鼓動を速く刻んでいる始末です。

「メフィさん、今日はゆっくりで良いって云っていたじゃない？」

『え……ええ』

「だから寝ましょう」

私はあつという間に姉様に抱きつかれてベッドの中に引き込まれてしまいました。

『ね、姉様？』

気が動転している為か、二年前を思い出した為か、私は『言葉を忘れて姉様にされるがままです。』

「もう一眠り……」

『そうですね、たまにはこういう日も良いかもしれません』

朝一番でお風呂に入った事も手伝って私も眠気に襲われて一緒にする事にします。

あまり眠れないかも知れませんが、良い夢が見られそうです。

目が覚めるとお昼過ぎでした。

しばらく私達は混乱しましたが、とりあえず落ち着いてメフィさんの部屋に行くことにしました。

するとそこはもぬけの殻で、取る物もとりあえず宿を引き払ったのは明白でした。

『捜さないで下さい。メンフィス＝イルーズ』

宿のご主人に預けられていたメフィさんの書き置きに私達は目点をにするしかありませんでした。

（如何なさいますか？）

「如何なさいますかって云われても……」

私達はしばらく途方に暮れていましたが、最後には先に進む事に決定しました。

「まあ、馬車を借りられれば自動的に運河に着くのだし、後は人に聞きながら行きましょう」

「そうだね」

私達はもう一泊して、明日こそ朝一番の馬車を借りようと落ち着

きました。

「行き先はスエズンって街にしましょうか。大きな街のようだし」

（それは構いませんが、何故姉様がこの世界にある街の事をご存知なのですか？）

「まあ、良いじゃない。そうと決まれば……」

姉様は私と桜花を腕に抱いて宿の外に連れ出します。

「出発は明日なんだし、のんびり温泉と洒落込みましょう」

「賛成」

（異議なしです）

私達は仲良く温泉に浸かって浮き世の垢を落とす事にしたのでした。

それにしても、いきなり案内人が消えるとは幸先悪い旅立ちとなりました。

でも、不安はありません。私には姉様があります。桜花があります。

そして巴がいます。

幸い、こういった仕組みが判りませんが言葉は通じるのです。やってやれない事はないでしょう。

この先、どのような困難が待ち受けているのでしょうか？
姉様が希望されたスエズンには何があるのでしょうか？

それはまた次回の講釈にて。

第拾章 恋慕地獄道・後編（後書き）

雪子と月夜の狂気を決定づけた過去はこれにて終了です。

悪人のいない殺人事件、悪意なき愛憎劇。短期間にこれだけあれば、そりや歪みますわね（汗）

この悲劇は本当に些細な事が重なって膨れあがってしまいました。月夜が弥三郎の机の中を見たのもちよつと魔が差したただけですしね。

追いつくはずの弥三郎が月夜の家を知らなかったのは、交際を姉妹に知られなくなかった月夜の乙女心の表れだし、彼の喘息の発作も不運な訳ですし。

雪子が毒を飲む月夜の未練を聞いてしまったのも偶然ですし、発端のウメの手紙にしたって実の兄を想う娘を哀れんだ母親の切ない親心からきています。

最終的には斬った雪子の罪なのでしょうけど、その償いもさせてもらえなかった雪子もまた不幸とも云えます。

これは親（筆者）の欲目かもしれませんが……

結局、雪子も月夜も救われていないし、弥三郎も命を落としただけでなく汚名を残してしまいました。

家族を失った吉田家の人々、弟子や仲間を失ったマリオ達。

みんなを地獄に叩き落としただけ。それが2年前の事件の顛末です。

そして明治政府が雪子を助けたのは、単純に僅かでも富国強兵の政策の妨げになりそうな事件を表沙汰にしたくなかっただけで、雪子に対しては、「七面倒臭いことをしやがって」くらいにしか思っています。

でも、この冒険を通して勇者・桜花だけでなく雪子も月夜も過去を振り切り、成長させるつもりですので、改めて応援のほど宜しくお願いします。

第壱拾壱章 電流空中決戦（前書き）

今回から視点は三人目の主人公・桜花です。

第卅拾壹章 電流空中決戦

今、桜花達は物凄く困ってる。

朝早く幌馬車を借りて雪子姉様が云っていたスエズンって街に向かつていたんだ。

初めは結構のんびり進んでいたんだけどね。

相乗りした吟遊詩人にいくらかお金を払って歌を歌って貰ったり、雪子姉様はギターって楽器の弾き方を教わったりして楽しい旅だったんだよ。

でも、いきなり御者が悲鳴を上げて、馬車の速度が上がった。

「何事?!」

「お、お客さん!　そ、空にま、まままま……魔物が!!」

その言葉に幌の垂れを上げると、無数の翼が生えた大きな蜥蜴が宙を舞っているのが見えた。

蜥蜴達の背中には鞍があつて、甲冑姿の人達が跨っている。

『やあやあ!　我こそは偉大なる大魔王様よりガルスデント・エアフォースを預かる魔將軍・ベルーゼフなり!』

見れば一際大きな蜥蜴の背に乗って赤い甲冑に身を包んだ人が槍を片手に名乗りを上げていた。

他の蜥蜴の背に乗っている人達の甲冑は黒で統一されているから、名乗った通りあの人が大将なんだろう。

うーん……兜に面当てがあるせいで顔は解らないけど、声の高さから女の人かも知れない。

『大魔王様に弓引く愚か者よ！　ここが貴様の死地と心得よ！』

気合い入ってるなあ……でも、いきなり将が自ら出陣するものなのかな？

「全く……大將が前線に赴くなんて兵法の“へ”の字も知らないのかしら？」

雪子姉様も同意見だったみたいで首を傾げていた。

「お、お客さん！　まさかアンタ達のせいで魔物が?!」

「彼らの云い分からすると、そうなるわね」

狼狽える御者にしれっと答える雪子姉様って本当に大物だと思う。

「じよ、冗談じゃない！　降りてくれ！！　俺はまだ死にたくない
!!!」

「降りるのは構わないけど、十中八九馬を止めた瞬間、彼らは襲って来るわよ？」

「ヒイツ?!　だ、だったら……」

御者が何かを云おうとすると、雪子姉様はニコリと微笑んで御者に近づいていった。

「まさか、飛び降りるなんて云わないわよね？　そうそう、実は私は馬の扱いに慣れていているの。馬車だって少しくらいなら操れるわよ?」

雪子姉様が何を云わんとしているのか察した御者は気の毒なくらい顔を真っ青にさせて脂汗を滴らせた。

「貴方は何も考えずにスエズンに向かいなさい。でも、約束はする。貴方の命とこの馬車の無事は私が保証してあげるわ」

「保証つて、あんな沢山の魔物からどうやって?! 連中は空を飛んでるんだぞ!!」

「喝ッ!!」

雪子姉様の一喝に御者は口を噤んでしまった。

「オロオロするな! 御者の不安は馬に伝わる! 貴方も御者としての誇りがあるのなら、そのまま馬車を走らせなさい!!」

すると御者の顔から動揺が消えて、落ち着いた表情で手綱を操り始めた。

雪子姉様の一喝はただ相手を萎縮させたり脅かすものではなく、禅僧の警策のように心を静める。

「貴方も信じるとまでは云いませんが、無事を約束します」

雪子姉様は吟遊詩人に向かって微笑むと、馬車の屋根の縁を掴んで屋根の上へとヒラリと飛び上がった。

「桜花も行くよ! 月夜姉様は二人を守って!」

(心得ました)

月夜姉様が微笑んで頷いたのを見て、桜花も急いで雪子姉様を追った。

「うわぁ！　ざっと二百！　大丈夫かな？」

改めて空の蜥蜴達を見てちょっと弱気になりかけると、雪子姉様の手が頬に触れた。

「でも、勝たないと私達に未来はないわよ。生き残る為にも勝たないかね？　ヴェルフエゴールを倒して『楔』を砕いてあげるんですよ？」

雪子姉様の微笑みはいつも桜花に自信を持たせてくれる。

稽古でへこたれそうになった時も、試合前にガチガチに緊張してた時も姉様は微笑んで力づけてくれた。

「うん、そうだよな！　こんな所で負けてられないよ！！」

『日輪』を空に掲げてフェニルクスに向かって声を張り上げた。

「我こそは太陽神の聖剣を持つ勇者、霞桜花！！　魔將軍・ベルーゼフ、そなたの挑戦を受けよう！！」

歌舞伎役者のように見得を切る桜花に何故か蜥蜴に乗っている人達が動揺する気配を見せた。

『な、何い？！　アポスドルファの聖剣を持つと云う噂の勇者がここに？！　奴を追ってまさか、勇者とかち合うとは！』

「ほえ？ 桜花達を狙う刺客じゃないの？」

『馬鹿も休み休み云え！ たかが数人のニンゲンに将自ら軍を率いて出陣するものか！！』

ベルーゼフは槍をブンブン振り回して怒鳴っているけど、あんな体勢でそんな事したら……って、云わんこっちゃない。

『ぬお？！ と、兎に角、これは都合が良い！ 裏切り者を始末するついでに勇者も葬ってくれよう！！』

なんとか手綱にぶら下がって落下を免れたベルーゼフだったけど、足をバタバタさせながらじゃいくら凄んでも全然怖くなかった。

『全軍、勇者を討ち取れ！！ あ、その前に誰か我をクリスティーヌ号の上に引き上げよ！！』

黒い甲冑の人が何人かベルーゼフの蜥蜴に飛び移って彼（彼女？）を引き上げている。

上空で『エンヤコーラドッコイショ』と音頭を取りながら引き上げ作業をしている彼らに桜花は緊張感が抜けかけた。

それにしてもクリスティーヌ……クリスティーヌか。

この西洋の童話に出てきそうな名前はどう見てもあの蜥蜴には似合わないような気がする。

どちらかと云うと、金剛とか仁王って名前が似合いそうな凶悪な顔をしているんだけどね。

「霞流『乱れ桜』！！」

そんな時、雪子姉様が上空の蜥蜴目がけて数本の短刀を棒手裏剣

に見立てて打った。

『投げる』のではなく『打つ』。

手裏剣術は大上段に構え、刀のように手裏剣を鋭い一刀両断の斬り込みに見立てて、気迫を持って打ち込む。

雪子姉様は一度に数本の手裏剣に一打必殺の威力を込めて打つ事ができる。それが『乱れ桜』と呼ばれる多勢を撃破する奥義というわけ。

『おおう?! し、鎮まれ!!』

短刀が命中した蜥蜴達は体勢を崩して、背に乗っている黒甲冑を振り落したり他の蜥蜴にぶつかって混乱を広めていった。

『愚か者! 陣を乱すな!!』

しかし、なんとかクリスティーヌの背中に這い上がる事ができたベルーゼフの号令ですぐに陣形を整えてしまった。

『ふつ、莫迦め! ドラゴンはかつては“神々の乗騎”と呼ばれた最高位の種族! そんな投げナイフ程度で倒せるものか!!』

手綱を巧みに操りながら誇らしげに云うベルーゼフに雪子姉様はクスリと微笑んで指を鳴らした。

すると数匹の蜥蜴(これがドラゴン?)が再び暴れ始めた。

『なんと?! ええい、陣を乱すなと云ったであろうが馬鹿者!!』

『か、閣下! ち、ちが……うわあああああああああああ
あっ?!』

瞬く間にドラゴン達は背中の中黒甲冑を道連れに錐揉みしながら落下していった。

その時、桜花はドラゴンの口から血と泡が出ている事に気が付いた。

『貴様、まさか?!』

「ええ、お察しの通り短刀には毒が塗ってあるわ。そう、たっぷり
と、ね?」

穏やかに微笑んでそんな事を云う雪子姉様に、桜花は流石に背筋に薄ら寒いものが走るのを禁じ得なかった。

「卑怯と思う? でも多勢に無勢ですもの、それくらいは大目に見て欲しいわね」

そう云い様、銀光が煌めいて短刀が飛んだ。

『うむう、毒を差し引いたとしても、たかが投げナイフで鉄より硬いドラゴンの皮膚を傷つけるとは……さてはマジック・アイテムか?!』

「まじっ……く? 何の事が解らないけど、これは只の短刀よ。我が霞流手裏剣術は五間（約九メートル）離れた鉄板に手裏剣を刺せるようになって初めて目録を許される」

本当は無くしてもすぐに持ち主の所に帰ってくるなんてある意味怖い妖術がかけられてるみたいなんだけどね。

兎に角、桜花も雪子姉様に続いて短刀を打った。もっとも桜花には一度に何本も短刀を打てないので、左右一本ずつになるけど。

桜花の打った短刀は二匹のドラゴンの目に突き刺さった。思った通り、皮膚は硬くても目まではそれほど頑丈じゃなかったみたい。

『しっかりドラゴンどもを制御せぬか！ うぬらはガルスデント・エアフォースに選ばれた精鋭ぞ！！』

毒に冒され悶え苦しみ、眼球を潰されて混乱するドラゴン達に黒甲冑は慌てふためいていてブルーゼフの叱責は最早意味をなさなかった。

「せいっ！」

雪子姉様の打った短刀が近くを飛んでいた黒甲冑の面当ての隙間を縫って突き刺さる。

雪子姉様は本当に目が見えないのだろうか？ ううん、見えていたとしても、そんな芸当が出来る人はそうそういないと思うけど。

『ヒイツ？！ 毒ナイフが？！ だ、誰か、毒を抜いてくれ！！』

堪らず兜を脱いだ彼に雪子姉様は会心の笑みを浮かべた。

「今、兜を脱いだわよね？」

そう問いかけた雪子姉様はいつの間にか、金具に“鬼”の一字が書かれた鉢鉄を巻きつつ、瞼を開いて綺麗な緑色の瞳を見せていた。

「う、うん……人間で云えば三十路過ぎくらいの男の人だったよ」

「ありがとう」

そう云って雪子姉様は釣り針のお化けみたいのを取り出した。
ソレは糸が繋がっていて、糸は雪子姉様の袖の下に消えていた。

「ゆ、雪子姉様……ソレって何？」

「ん？ とつても“いい物”よ？ そうね、そろそろ貴女にも霞流
兵法にある暗器術を教えるべきかもね」

雪子姉様は嬉しそうにお化け釣り針の先端に指を這わせて答えた
んだけど、なんか怖いよ。

その時、桜花は雪子姉様の手首に小さな滑車があるのを見た。
糸は滑車を通して肘の少し前に装着されたやや大きめの滑車に巻
き取られているようだった。

「じゃあ、少し行ってくるわね」

「い、行ってくるって雪子姉様？！」

「霞流暗器術『人釣り針』！！」

雪子姉様がなんだか物騒な名前の釣り針を投げると、寸分狂わず
兜を脱いだ人に向かっていった。
ややあつて……

『ハギヤホヒュヒュ！！』

釣り針は見事に彼の口の中に入って、右の頬から凶悪な“かえし”
のついた先端が飛び出していた。

「アイタタタタタ……」

あまりの光景に桜花は思わず顔を顰めて自分の右頬を押さえてしまった。

「ふふふ、空中戦が自分達だけのものと思わない事ね」

雪子姉様が愉しそうに微笑むと、糸が滑車に巻き取られて雪子姉様は宙に引っ張り上げられた。

「霞流剣術道場師範・霞雪子！ 推して参る！！」

雪子姉様はそのままドラゴンの背中に飛び移ると、釣り針を思いっきり引っ張って男の人の頬を引き裂きながら釣り針を回収した。

「ひよげ~~~~~っ?!」

雪子姉様に蹴り落とされた男の人は頬を裂かれたせいか、悲壮感から程遠い悲鳴を上げながら大地に叩きつけられた。

「ブルーゼフ、覚悟！！」

雪子姉様は次々とドラゴンの背中を飛び移りながら黒甲冑の面当ての隙間に大真典甲勢二尺六寸を突き立てる。

顔を刺し貫かれた黒甲冑達はほぼ即死したらしく、ドラゴンの背中から落ちていった。

「化け物か?!」

ブルーゼフが慌てたようにクリスティーヌのお腹を蹴ると、なん

とクリスティー又は地獄の業火を思わせる紅蓮の炎を吐き出した。
しかし雪子姉様は既に跳んでいて、ベルーゼフのそばにいるドラ
ゴンの背中に移っていた。

『ヒ、ヒイ?! 閣下! 熱い! 閣下閣下閣下閣下閣下カツカ
ツカカツカカツカカツカカカカカカカカカカカカカカカカ
て! あぢゅらま!』

炎に巻き込まれた多くの黒甲冑達が断末魔の叫びを上げてドラゴ
ン共々地面へと落ちていった。

『な、なんて事を……ユキコと申したな? 我の大切な部下を無惨
にも焼き殺した罪は重いぞ!』

焼き殺したのは自分だと思っただけど……

「勝手な事を……でも、その大切な部下を巻き込む恐れはもう無い
みたいね? 気配が遠ざかってるもの」

『何い?!』

雪子姉様の云うようにあれだけいたドラゴンと黒甲冑の姿は周
りに無く、遠い空に黒い点がいくつか見えた。

空という圧倒的優位な状況。二百という圧倒的な数の差。魔族と
人間という圧倒的な力の差。

彼らは自分達の勝利を疑っていなかったはず。

でも、そんな絶望的な状況でたった二人、うつん、雪子姉様一人
に不意打ち、卑怯打ちとはいえ逆に圧倒された彼らの恐怖は如何な
るものだっただろう?

そして、仲間の頬を釣り針で貫いて引き裂く、顔面に刃を突き立

てるなんて残酷な手段で倒された彼らの胸中にあつたものは……そして上官からの攻撃の巻き添え。

恐怖が恐怖を呼んで彼らは崩壊した。まさに空中分解、氣勢を削がれ士気はガタ落ちになつて彼らには遁走以外の選択はなかつたように思う。

まさに寡兵をもつて大軍を退ける。

月夜姉様に云わせれば、寡兵で大軍を迎え撃つ状況を作つた段階で負けなのかも知れないけど。

『あやつらあ！！ 否！ 我一人でもうぬの首を持って帰つてくれよう！ でなければ、二度と魔將軍を名乗れぬわ！！』

「じゃあ、名乗らなければいいでしょう？」

『なんと?!』

雪子姉様は自分が乗るドラゴンを操つてクリスティーヌに突っ込んでいく。

そして雪子姉様を乗せるドラゴンの顔にあるのは恐れ、恐怖の表情……

『馬鹿め！ 今度こそ丸焼きにしてくれるわ!!』

クリスティーヌが炎を吐くと、雪子姉様は二尺六寸を大上段に構えた。

「小賢しい！！ 火を吐く程度、大道芸人でもできるわ!!」

雪子姉様が裂帛の気合いとともに刃を振り下ろすと、信じられないことに炎が真つ二つに裂けてブルーゼフまでの道を作つた。

「霞流『濁流斬り』！！ 覚悟！！」

背中に叩きつけんばかりに振り上げ、その反動で振り下ろした斬撃は恐ろしい速さを生み出す。

その凄まじい斬撃は切っ先に真空の楔を生み、大気を切り裂くほどなんだ。

かつて戦国時代ではこの技で無数に飛来する矢を一刀のもとに叩き落として血路を開いたって伝説がある。

先代、つまり父様に至っては技の名前が示すように、嵐で氾濫した濁流をも斬り裂いて川底を露出させ中洲に取り残された人を救ったという逸話があったりする。

「貴様、な、何者だあ？！」

声にありったけの恐怖をこめて叫びながらもベルーゼフは鎧に足をかけて立ち上がって槍を突き出し、飛びかかる雪子姉様を迎撃する。

「霞流『兜潜り』！！」

なんと雪子姉様は迫り来る穂先を左手で掴んで、雷光のような片手突きを兜の隙間、つまり喉元に二尺六寸を突き立てた。

人間ならほぼ即死の一撃にフェニルクスの手から槍が離れた。クリスティヌの背に移った雪子姉様はそれを左手で受け止めて大地に落ちるのを防いだ。

「さあ、スタローグ家はここから反撃をしてきたわ。魔將軍を名乗る貴方はどんな芸を見せてくれるのかしら？」

『私の芸とな？　ならば見せてくれよう！！　冥土の土産にすると
良いわ！！』

痙攣していたブルーゼフは渾身の力を籠めて雪子姉様の首を絞めてきた。

「最後の手段が馬鹿力？　それでよく魔將軍なんて名乗れるわね？」

そんな反撃にも雪子姉様は嘲笑を浮かべると、兜の上から肘をブルーゼフのこめかみに叩きつけた。

『ぐあー！』

頭を、脳を揺さぶられてフェニルクスはあっさりと雪子姉様を解放した。

「期待外れもいいとこだわ……まさかと思うけど、アジトアルゾ大陸にいるヴェルフエゴールはこの程度じゃないわよね？」

あ、ついに落ちやった。口の端を吊り上げた下弦の月を思わせるあの“笑み”が……

『な、舐めるな！　私の力はこんなものではない……我が力は『暴食』よ！　この世のあらゆるものを喰らい我が力と成す！　この痛みさえも我が糧よ。殺されようと苦痛が更なる力を我に与えて蘇る！！』

「『暴食』ねえ？　殺されても蘇るところはあのヴァンティスとさほど変わらない能力みたいね……」

雪子姉様がさもつまらなそうに云うとフェニルクスは兜を脱いで睨み付けてきた。

想像していた通り、その素顔は短く切り揃えられた青い髪を持つ女性だった。

それにしてもヴァンティスって誰だろう？ どこか頭の片隅に引っかかってるんだけど、どうしても思い出せない。

『ヴァンティスとやらが何者かは知らぬが、我が『暴食』の力を見縊るでないわ！！ 我が肉体はたとえ全て灰になったとしても火と熱と痛みを喰らい蘇る！！』

その言葉に雪子姉様の“笑み”は益々強くなっていった。

「そう……そうなの？ だったら、遠慮はいらないわね？」

ブルーゼフはある意味、最大の禁句を口にしてしまったような気がする。

だって、雪子姉様はまるで自分専用の玩具を買い与えられた子供のような顔をしているから……

「いくわよ？ まずは小手調べ！」

雪子姉様は嬉々として鞍に尻餅をついていたブルーゼフの顔面に膝蹴りを叩き込んだ。

全く容赦をしている気配を感じられない強烈かつ凶悪な音が響いた。

ブルーゼフの鼻は無惨にも潰れて真っ青な鮮血が飛び散る。

『あがぐげ……』

雪子姉様は聖帝陛下から賜った銀の手甲を装着すると慈愛の微笑みを浮かべて何度も何度もベルーゼフの潰れた鼻に拳を叩き込んだ。
「どうしたの？ 不死身なんでしょう？ 早く反撃してきなさい？」

雪子姉様がベルーゼフのお腹に掌底突きを打ち込むと、彼女は口から大量の血を吐いて咳き込んだ。

「霞流『波紋』……霞流の前では甲冑など無意味よ」

多分、雪子姉様の掌底の衝撃は甲冑を通り抜けて、ベルーゼフの体そのものに大きな痛手を与えたんだと思う。

「わ……我を……鵬るか……？ 後悔するぞ……」

「あら……貴女の体内の妖気が大きくなっているわね？ それが苦痛を喰らうってことなの？」

雪子姉様はベルーゼフの口の中に手を入れて舌を引っ張り出すと、思いっきり捻り上げた。

舌は生き物にとって急所の一つ。それは魔族も変わらないようでベルーゼフは涙目になって動けなくなっていた。

「いいわ……素敵よ。痛みを与えれば与えるほど貴女の妖気が高まっていくわ！」

雪子姉様の表情が狂気を増していく。

反対にベルーゼフは痛みと恐怖で顔がグシャグシャになっていた。まさか不死身（？）の自分を恐れるどころか嬉々として殴りつけてくる人間がいるなんて夢にも思ってもなかったんだろうね。

『クヒヨ（クソ）ッ！』

ブルーゼフは雪子姉様の手にあつた自分の槍を奪い返すと、尻餅をついている状態とは思えない速さで突きを放ってきた。

「なんだ……大きくなったの妖気だけで、槍の腕前は変わらないのね？　少々早くなっただけじゃない」

けど、雪子姉様はさもつまらなそうに槍の穂先を人差し指と中指で挟むように止めてしまった。

霞流道場・四天王の一人にして宝蔵院流槍術の達人である延光和尚の十文字槍を毎日のように受けていた雪子姉様にとってブルーゼフの槍は兎戯のようなものなのかも知れない。

自分の槍をあつさり止められたブルーゼフは驚愕に目を見開いている。無理もないけどね。

『私の槍がたつた二本の指で……』

そんなブルーゼフに雪子姉様は溜め息をつく、大真典光勢を六角杖に納めてしまう。

『何故、剣を？』

その問いかけに雪子姉様は失望を隠すことなく答えた。

「終わりよ……貴女は大真典甲勢二尺六寸で斬る価値もない。その代わり、この世の地獄を味わわせてあげるわ」

雪子姉様はブルーゼフを上空へと放り上げて、自らも追うように

跳んだ。

そして彼女を逆さまにして顎を右足で踏み、更に右腕で両足を抱え、左手を絡めるようにベルーゼフの右手を拘束した。

「霞流禁じ手『地獄落とし』！！」

雪子姉様達はそのまま地上へと落下して、ベルーゼフは受け身を取ることもできずに脳天から大地へと叩きつけられた。

桜花は思わず馬車から飛び降りて雪子姉様達へと向かった。

『あぎゃ……ふふえふ……は、はふえは……』

二人分の体重に落下の衝撃を脳天に受け、顎にも雪子姉様の全体重と衝撃を受けて、ベルーゼフの顔は原型を留めていなかった。

「流石、不死身を自称するだけあって素晴らしい生命力ね。でも……」

雪子姉様はベルーゼフにトドメを刺すべく拳を振り上げる。

「トドメを刺すのは戦いの作法……覚悟！！」

雪子姉様の拳がまさにベルーゼフの顔面を貫こうとする寸前、彼女の目が恐怖と絶望でカッと開かれた。

『ヒイツ?! ヴェルフエゴール姉様ア!!!』

「え?」

雪子姉様は思わず拳を止める。

「へえ、ヴェルフエゴールって女だったの？　これは良い情報が手に入りそうだわ」

雪子姉様の“笑み”が消えて、慈愛の微笑みが浮かんだ。

「では、貴女の姉様について訊かせて貰いましょうか？」

雪子姉様はベルーゼフに膝枕をして優しい口調で訊いた。

桜花はヴェルフエゴール姉様って言葉に物凄く引つかかってたんだっただけ、その意味を思い出せなかった。

『ば、馬鹿か？　わ、我がそのような質問に答えるとても……』

不死身っぽいというのもハツタリじゃなかったみたいで、完全に砕け散っていたはずの歯が生え替わったかのように揃っていた。

まだ顔が青黒く腫れ上がっていて痛々しかったけど、それでも彼女はニヤリと笑って雪子姉様を嘲った。

「勿論、答えて貰うつもりよ？　それと貴女は大変な勘違いをしている……」

『何？　それはどういう……あぎゃあああああああああッ？！』

なんと雪子姉様は慈愛の微笑みのままベルーゼフの前歯を一本、指で摘んで引き抜いたんだ。

「私がしているのは“質問”ではないわよ？　これはね……“拷問”よ」

雪子姉様が隣の歯を一本無造作に引き抜き、ベルーゼフの悲鳴が上がった。

「あら？」

ふと桜花達の上空から影が差した。

見るとクリスティーヌがこっちに向かって急降下してくるところだった。

「桜花！ 右！」

雪子姉様の声に桜花は右に跳ぶと巨大で真っ赤な影が通り過ぎていった。

『でかした、クリスティーヌ号！ それでこそ我が最愛のドラゴンよ！』

クリスティーヌに拾われたベルーゼフは、その背中で大笑いをしている。

『これで形勢逆転だな！ 我は今までコレほどの屈辱を受けた事はない！！ 返礼に貴様にもこの世の地獄を味わわせてくれるわ！！』

ベルーゼフは槍を構えると鞍の上に立った。

『行くぞ、クリスティーヌ号！！ フォーメーションA『クリムゾン・ストライク』だ！！』

クリスティーヌはベルーゼフの言葉に応えるように咆哮を上げる

と、こちらを威嚇するように巨大な炎を空に向かって吐き出した。

「雪子姉様！」

見ると雪子姉様が杖を帯に差し、腰を落として居合の構えを取っていた。

「クリスティヌ、見事！ 愚かな主を見捨てぬ義侠心は人として見習うべきところ！ その心意気に応えよう」

雪子姉様はベルーゼフ、ううん、クリスティヌに向かって駆けだした。

『魔族に刃向かう愚かなニンゲンよ！ 今こそ我ら魔族の恐ろしさを思い知れ！！』

クリスティヌが地獄の業火を吐き出しながら雪子姉様に向かって一直線に急降下してきた。

更にベルーゼフが跳ぶ体勢を取った。恐らく炎と槍による特攻の二段構えの攻撃。

「南無三！ 飼われた相手が悪すぎた哀れな竜よ！！ せめて最強の技で葬ろう！！」

雪子姉様の全身から紫の炎のようなものが立ち上がって、紫光を放ちながら二尺六寸が抜き打たれた。

「怨念解放！！ 秘剣『霸王鬼門返し』！！」

真一文字の横薙ぎは業火を切り裂き、雪子姉様とクリスティヌ

が擦れ違う。

「妖魔九百七十九斬……南無八幡大菩薩」

雪子姉様が瞼を閉じて納刀した瞬間、クリスティーヌの口が大きく裂け、やがて首、胴体と裂けていつて最後には上下に真つ二つになつてしまった。

ご先祖様が手に入れてから今日に至るまで斬り捨ててきた数多の悪党や妖魔の怨念を吸い続けてきた大真典光勢二尺六寸は、今や妖刀と化している。

その身に箆められた怨念を開放して爆発的に破壊力を増したのが、霞家当主のみ使用を許された秘剣『霸王鬼門返し』なんだ。

桜花も初めて見たけど、巨大な竜を両断するほどの威力があるなんて思いもなかった。

しかもこの秘剣はこれで完結した訳じゃない。

名前に“返し”とあるからには返し技が必ずあるはずなんだよ。

この技がどんな完結を見せるのかは桜花にはとても想像がつかなかった。

『な、何イ?! クリスティーヌ号!!』

槍を突き出しながら落下してきたベルーゼフが驚嘆の声を上げた。

「貴女の最大の失敗はクリスティーヌに救われた時に逃げなかった事よ! やはり貴女は将の器ではない! 引き際を見失った愚か者よ!」

空中で体勢を変えられないベルーゼフを雪子姉様は真下で待ち構える。

『あ！ あ！ ああ~~~~~~~~ッ！』

恐怖の表情で落ちてくるフェニルクスに雪子姉様は再び居合の構えを取った。

「せいっ！！」

陽光をかます切っ先が反射して煌めき、ベルーゼフの槍がバラバラと輪切りにされて、彼女は無様にも地面に叩きつけられた。

「本当に貴女は斬る価値がない……精々魔界とやらで失脚しないように云い訳でも考えるのね」

『き、貴様……』

「では、機会があればまた会いましょう」

御者の気遣いか、月夜姉様の指示か、戻ってきていた馬車に向かう雪子姉様をベルーゼフは憎々しげに睨んでいる。

『待て！　せめて馬車だけでも！！』

ベルーゼフが手を頭上にかざすと、巨大な火の玉が現われた。

『広大な草原を惨めに歩くが良い！！』

『やめよ。これ以上は恥の上塗りだ』

突然、ベルーゼフの火の玉が弾け飛び、その衝撃で彼女は吹っ飛ばされてしまった。

状況を把握しようと動くまでもなく、場が重苦しい空気に支配される。

「この重圧……少なくともベルーゼフとは比べ物にならないわね」

桜花は目を疑った。

あの雪子姉様が額に脂汗を浮かべて六角杖を支えに漸く立っているような状態だったんだ。

『お初にお目にかかる……』

いつの間にか、桜花は地面に腰砕けに座り込んでいた。

この人はマズい……戦ってはいけないと本能が警鐘を鳴らしている。

雪子姉様とベルーゼフの丁度中間に現れた男の人は桜花達とは強さの次元が違っていた。

『貴殿が勇者か？ ふむ、私の殺気を受けて気を失わずにいるのは流石よ』

禍々しい悪魔の意匠を凝らした甲冑を纏い、腰には本当に振れるのかと訊きたくなるような馬鹿に大きな剣を差している。

歳は四十手前くらいで、少し頬がこけているのを見逃せば眉目秀丽と云えるかも。

やや痩せぎすっばいけど、鼻髭と鋭い眼光の御陰で貧相には見えない。

むしろ全身から放たれる威圧感のせいで巨人と錯覚する瞬間があるくらいなんだ。

『あいたたた……何をなさいますか！？ 大元帥閣下！！』

『黙れ！ 今、私は勇者と話をしているのだ』

抗議をしたブルーゼフは男の人の一睨みで口を閉ざしてしまう。

男の人は桜花達に向き直った。

途端に全身の肌が粟立つ。

『私の名はアポリュオン。魔王陛下をお守りする近衛騎士団の団長にしてガルスデント軍を統括する大元帥である』

「將軍の次は大元帥……随分と大物が出張ってきたものね」

蹲る桜花を庇うように雪子姉様が間に立ってくれた。

御陰で少し楽になったけど、それでも感じる威圧感は半端なかった。

『勘違い致すな。私は戦いにきたのではない』

アポリュオンはまるで子猫のようにブルーゼフの首根っこを掴んで持ち上げた。

『本来の任務を忘れ、わざわざスチューデリアくんだりまで出張してきたこの馬鹿者を連れ戻しに来たのだ』

『し、しかし、閣下……アレを見過ごす訳には……』

『黙れと云ったはずだが？』

ブルーゼフは口どころか全身が石になったかのように固まる。

『ではな、我らはこれにて失礼する。よもや文句はあるまいな?』

「文句も何も私達は降りかかった火の粉を払っただけ。退くと云うのであればあえて追いますまい」

雪子姉様の答えにアポリュオンは威圧感を消してニヤリと笑った。

『賢明だな。近頃は勇氣と無謀の違いが分からぬ輩が多いがそなたは違うらしい』

「ここで貴方と戦う必要はありませんからね。私達の標的はヴェルフエゴールのみ……彼の者の首級さえ取ればそれで結構。それ以外の魔族との戦いは意味がありません」

物分かりが良いのか挑発なのか分からない雪子姉様の言葉にアポリュオンは興味を引かれたようだった。

『ほう、無意味と来たか。そうよな……あくまで仮定としての話なのだが、もしこの場にて魔王陛下がおられたとしてもそう答えるか? 魔族の王を討ったとなれば、戦いは終わるかも知れぬし名声も思うがままぞ?』

「魔王を討つなどと、それこそ無意味極まりないですわ」

何を云ってるの、雪子姉様!?

ベルーゼフは大口を開けて固まってるし、アポリュオンも呆気に取られてるよ。

『私も星の数ほどの勇者を見て参ったがな。ニンゲンと魔族との共存を夢見て陛下を討つことを拒む者は稀にいたが、無意味と云い切

った者は一人としておらなんだぞ？」

「そ、そうよ！　今まで見てきたニンゲンはみんな魔王陛下を倒せば世界が平和になるって妄言ばかり云っていたのに、貴女はそうは思わないの？」

アポリュオンに同調するブルーゼフの口調が変わった。今のが素なのかな？

「無礼は承知の上で質問を質問で返しますが、魔族は頭が潰された程度で機能しなくなるような脆弱な種族なのですか？」

「そんな事はないぞ。我ら魔族の国・ガルスデントは武官・文官共に有能な者達が揃っており、魔王陛下の後を御継ぎになる皇太子殿下は文武両道に優れ、万民に慕われる名君の器をお持ちの方。万が一、否、億が一、兆が一にも魔王陛下に変事が起こったとしても魔界は盤石ぞ」

誇らしげに答えるアポリュオンに雪子姉様の口から出たのは、さもありません、だった。

「だから意味がないと申したのです。むしろ陛下を討つことで、魔王を慕う心ある魔族達の怒りを買って報復されるかも知れませぬ。こうなれば人間と魔族の間に憎悪の連鎖が生まれ、際限なき戦いが幕を開けることでしょう。私はそれを恐れます」

さりげなく、無用な戦いは避けるけど、戦えば魔王といえども勝ってみせると取れるような言葉を使うところが雪子姉様なんだよね。アポリュオンはしばらく雪子姉様の言葉を吟味するように沈黙していたけど、急に大声を上げて笑いだした。

『見事！ 見事な答えである！ 流石は魔界において名門中の名門と謳われるスタローグ家と『家族』になったニンゲンよな！ いやはや、本日は良き娘と会えたものよ。まさに本懐である！！』

「やはり閣下の目的はブルーゼフを連れ戻すことではなかったのですね？」

するとアポリュオンの顔に初めて驚きの表情が浮かんだ。

『“やはり”ときたか。そうだ。私の目的は武門の名家・スタローグ家から『家族』にと請われるほどのニンゲンと会うことにあつたのだ。実を申せば、魔王陛下もそなたらに興味をお持ちでな、流石に陛下御自ら出向くわけにもいかず、ならば私がと聖剣の勇者のひとり人を見にきたというわけだ』

うわ……桜花達、もう敵の御大から目を付けられていたのか……桜花の心境を知ってか知らずか、雪子姉様はもう脂汗が引つ込んでいて愉しそうにアポリュオンと談笑していた。

そんな雪子姉様をブルーゼフは気味悪そうに見ている。

『フツ、こんなにも愉しいニンゲンは久しぶりだ。ならば魔王陛下の御意を伝えてもよからう』

初めとは違って穏やかに笑いながらアポリュオンが云った。

『勇者とその姉妹達よ。魔王陛下の御意である！！』

魔王からの言葉なのに、何故か雪子姉様といつの間にかそばに来ていた月夜姉様が居住いを正して耳を傾けていた。

『魔王・エミルフォーンとその直轄のガルデント軍は魔將軍・ヴェルフェゴールを討つことを黙認するものとする。彼の者とその配下を討ち果たしても我らは一切の報復行動を取らぬことを誓おう!』』

「なるほど……今回のヴェルフェゴールが起こした戦は魔王陛下の命令にあらず。ヴェルフェゴール当人とその賛同者の独断というわけですか」

『聡いな。如何にもヴェルフェゴールを始めとする七人の魔將軍による……』

アポリュオンの言葉を雪子姉様が右手を出して遮った。

「貴方は魔界の欠点を口にしようとしている。それはいけない。少なくとも敵対者である私達に漏らすべきことではありません」

え？ でも、さつきベルーゼフを拷問してまで情報を聞き出そうとしてなかったっけ？

「それに私は貴方の言を丸々信じるほどお人好しではありません。貴方が尊敬すべき人であることは百も承知ですが、一度に多量の情報を流そうとしている敵の元帥を信じるとお思いですか？」

『これは私の失態だな。そうか、尊敬されても信用されるまでには至っておらなんだか。虚実を交えた情報を流してそなたらを誘導しようと思っただが急ぎ過ぎたようだな』

雪子姉様とアポリュオンは不敵に笑った。

一見、打ち解けたかのように見えて、腹の中では狐と狸の化かし

合いを演じていたのか……

桜花だったら疑うことなく、アポリュオンがいい人だって信じてたかも知れないよ。

『だが、ヴェルフエゴールを討つ許可は本当よ。同志の魔將軍は知らぬがガルスデント本国は関与しないというのは嘘偽りないことだ』

「信じましょう。大元帥ともあろう方が王の名を出して嘘をつくとは思いたくはありませんので」

『云いよるわ。その剣技、知恵、胆力、なるほどスタローグの兄弟が好みそうな娘よな』

不意にアポリュオンは一瞬だけ哀しそうに雪子姉様を見つめた。

『だが辛いな……』

「え……？」

『先程の戦いを見ていたが、そなた、あえて無造作に、残酷に兵共を殺したな？』

今度は雪子姉様が驚愕する番だった。

『仲間をあのような殺され方をされたのでは、百戦錬磨の者でも怖気づくわ。そなたが奴らが潰走するようにわざと惨たらしい殺し方をせなんだら、ガルスデント・エアフォース二百名を悉く討たれていたであろう』

アポリュオンは本当に一瞬だけ、また哀しそうな顔をした。

『一罰必戒。誰もが恐れる残忍な敵を演じれば、戦わずして敵は逃走する。しかし、そのために悪鬼のように振舞わざるをえぬそなたの心情は察するに余りある。だから辛いと申したのだ』

「見抜かれていましたか。私も修行が足りませぬ」

そう返した雪子姉様は、今にも泣きたい気持ちを苦笑の表情で必死に隠そうとしているように見えた。

『いや、その若さでよくぞと褒めたい。私もまたそなたを尊敬しよう』

アポリュオンは雪子姉様に敬礼をした。

『これで私の云いたいことは全て語った。さらばだ。真の意味での勇気を持つ勇者達よ。流石にヴェルフエゴール打倒を応援はできぬが、武運長久は祈っておくぞ』

「はい、大元帥閣下も息災で。魔王陛下にもよしなにお伝えくださいませ」

『承った。また会える日を愉しみにしておるぞ』

アポリュオンは自分の影に吸い込まれるように姿を消した。

『あわわわ……閣下、お待ちください!!』

慌ててベルーゼフも後を追うように自らの影に沈んでいくけど、頭だけ残して雪子姉様を睨んだ。

『今日の屈辱は絶対に忘れない！！ 今度、会う時までにはそのペタンコな胸に私の名を刻み込んでおきなさい！！』

その言葉を残してブルーゼフは完全に影の中へと沈んでいった。
なんて恐ろしいことを……

「ペ……ペ……ペタンコお？！ 私のどこがペタンコなの？！
ちゃんと膨らんでるわよ！！」

「ゆ、雪子姉様、落ち着いて！」

桜花は必死に雪子姉様に縋ってみたけど、無駄だった。

雪子姉様つては胸の話をするとか物凄く不機嫌になって、ず……
と怒ってるんだもん……

（姉様、冷静に……冷静にですよ？ 折角の美貌が台無しです。それに女は胸ではありません）

月夜姉様……いつも言葉はよく頭の中で吟味してから口に乘せな
さいって云ってるクセに、どうしてこういう時だけ余計な事を……

「貴女にだけは云われたくないわあ！！」

胸の大きい人にそんな事云われたら火に油を注ぐようなものなの
に……

結局、桜花達は雪子姉様の怒りを静めるのに半刻（約一時間）も
無駄にする事になったんだ。

今、桜花達は物凄く困っていた。

その後、何事も無く運河に建造されたスエズンって街に辿り着くことができた。

運河を渡ればこの国、聖都スチューデリアに別れを告げ、カイゼントーヤって国に入ることになる。

ちゃんと船を借りられれば良いんだけど、そんな心配をする前にスエズンで思いもかけない事件に巻き込まれることになったんだ。

果たして桜花達に襲いかかる事件とは？

ベルーゼフが追っていた裏切り者とは誰なのか？

それはまた次回の講釈にて。

第壱拾壱章 電流空中決戦（後書き）

遅くなりました。

ストック自体はあったのですが、ふとアイデアが浮かんで加筆しているうちにこのザマです。

今回は勇者である桜花の視点ではありますが、活躍らしい活躍はできず雪子の独壇場でした。

雪子の愛刀大真典光勢に秘められた力の片鱗が出てきましたが、本来あそこまで中二臭くするつもりはありませんでした。

ただ相手は人間じゃなく強大な魔族なので流石に時代劇よろしくバツサリ斬ってお仕舞いでは呆気なさすぎるのと、知人からファンタジーなのに剣術一本じゃ地味すぎるだろと指摘を受けてちよいと派手めになりました。

第卅拾式章 異世界での一番弟子（前書き）

異世界の住人の視点となります。

第拾式章 異世界での一番弟子

いやあ、色々とあったけどようやくスエズンに着くことができたよ。

あのガルスデント最強部隊の襲撃から生き残れたのが未だに信じられない。

おまけにアポリュオン大元帥まで出てきたときはヒヤリとしたもののさ。

多分、アポリュオンはボクに気づいていながら、あえて見逃してくれたんだろうなあ。

大体さ、二十年や三十年そこら家を出ただけで、何で裏切り者扱いされるんだよ。

そりゃ確かに黙って飛び出したのは悪かったけど、父上には連絡してただけどなあ……

あ、ボク？ ボクはしがない吟遊詩人、諸国を歩き回って面白い話を聞いては歌にしている風流人さ。

何てね！ ウソウソ、本当は全然違うんだ。

ボクは実は王子様なんだ……って、その目は信じてないね？

でも、これだけは本当さ。ボクは魔王・エミルフォーンの二十番目の子なんだ。

それが何で吟遊詩人に身をやつしてるのかって？

だって、ボクには歌とギターしか取り柄がないもの。

剣もダメ、魔法もダメ、喧嘩なんて以ての外だよ。

そのせいでボクは兄弟達からよく苛められてたものさ。

うん、ボクは兄弟の中でも誰からも必要とされない『無能』の者。家臣の中には面と向かって莫迦にする者もいるくらい『無能』で何の害もない落ち零れなんだよ。

ボクはあえてそう育てられたんだ。

魔王、つまり父上は剣も魔法も勉強さえも満足にできないボクを早々に見切りをつけて、一切の稽古、教養からボクを遠ざけた。

ボクは唯一の趣味であるギターと歌だけを許されて、あとは自堕落に『無能』になるように育てられた。

兄弟からの苛めがあることを差し引いても気楽な生活だったよ。

そう、兄弟達は事ある毎にボクを苛めた。日頃の厳しい訓練の鬱憤をいつもボクにぶつけていた。

父上も口では兄弟を咎めても特に対策はしてくれなかったさ。

でも、そんな父上もギターを掻き鳴らし歌を披露する時だけは褒めてくれた。

だからボクはそれが嬉しくて益々音楽にのめり込んで『無能』に磨きをかけていった。

ボクは自分の境遇をどう判断して良い物が解らなかった。

ただ解ったのは、誰もボクを警戒しないって事だった。みんな、ボクを見て笑ってるんだ。

兄弟も家臣も、下等な魔物までもボクを見て莫迦にしたように笑っている。

父上と仲の悪い魔界の貴族、将校までもボクには笑顔を見せるんだ。

父上は無駄を一切嫌う方なのに、存在自体が無駄の塊であるボクを容認していたのには実は意味があったんだ。

あー、やめよう！ さつきから勇者がボクの顔を見つめている。怪しまれると厄介だしね。

「お客さん、何度も云ってるけど、こりゃ法外だ！ 受け取れないよ！ー」

スエズンに着いてから御者と勇者の姉君（確かユキコだったか？）がずつと云い争っているんだ。

理由は簡単。彼女らが御者に渡そうとしているお金が相場よりも相当多いらしい。

「だから、巻き込んでしまったお詫びも含んでいって云ってるのよ」

「それは助けて貰ったから帳消しだってんだ！ 馬車代と酒手（心付け）だけ受け取っとくよ」

「貴方は出した物を引つ込めると云うの？」

全くもって付き合いきれない。要は二人とも人が良いんだね。そう云えばボクにくれたお金も今までで一番多かった気がする。

「わかったよ。そこまで云われちゃ受け取らないわけにはいかないよ。けどな、いつもこんな事してたらあっという間に路銀が尽きちまうからな？」

根負けした御者はお金を受け取ることにしたようだね。

もっとも最初に出されたお金より大分引いた額（それでも多過ぎるくらい）になってたけど。

「ご忠告、肝に銘じておくわ。ありがとう、縁があったらまた頼むわね？」

「今度は魔物の襲撃のない楽しい旅だといいけどな」

御者は苦笑してそう答えると、馬の向きを変えて馬車を進めて去っていった。

「さて、無事にスエズンに着いたのはいいけれど……」

ユキコは困ったように頬をポリポリ掻いている。

「雪子姉様？ スエズンに何があるの？」

「ええ、ちよつとアランドラ皇子に頼まれてこの街にあるアンカー亭って宿屋に泊まりたいのよ」

ユキコは勇者に星の形をした青い石を見せながら答えた。

それにしてもアランドラ皇子だって？ 彼の名はボクにとって忘れられないものだった。

自分じゃよく判らないけど、ボクは女性と紹介されたら百人中百人が信じるくらい女っぽいらしい。

そのせいで三年前、一人旅をしていた時に山の中で好色な山賊に襲われかけた事があつたんだ。

そこを颯爽と現われて助けてくれたのがアランドラ皇子だった。いきなり現われた彼はボロボロの服を着ていて、髭が伸び放題だったから最初は山賊の仲間かと思ったものさ。

でも、彼はそんな風貌に似合わない豪奢な剣を手に山賊達を全員打ちのめしてしまった。

目にも止まらぬ速さってこういうのを云うんだろう。

「大丈夫かい？　ちょっと山籠もりをしていてね、垢にまみれた手で申し訳ないけど掴まって」

穏やかなその声にボクは初めて自分が尻餅をついていることに気付いたんだ。

『ありがとうございます』

おずおずと彼の手に触れると、ぐいと引つ張られてボクは立ち上がった。

「女性がこんな夜に一人で山に入るなんて感心しないね。どうぞ襲ってください」と云っているようなものだよ」

そしてしばらく黙ったかと思えば、何度か視線を何度か上下させてからいきなり謝ってきた。

「す、すまない。綺麗な顔をしているから、つい女性と間違えてしまったんだ」

思いつきり頭を下げた彼にボクは呆気に取られていたけど、その様に誠実さが伝わってきて思わず吹き出していた。

『気にしないでください。この顔で兄弟に馬鹿にされて育ってきたので、もう慣れっこですから』

その後、彼は近くの川で体と服を洗い、髭を剃ってから根城にしている洞窟へとボクを案内してくれた。

「私はアランドラ、信じられないと思うけどこう見えても聖都スチューデリアの皇子なんだよ」

自己紹介をしてくれた彼の顔は精悍で高貴ささえ漂っていて、ボクは素直に信じる事にした。

第一、王族を詐称してもボクのような得体の知れない吟遊詩人が相手では意味がないように思えたって事もあった。

『ボク、いえ、私は……』

「そう畏まらなくても良いよ。ここには私と君しかいないからね」

そう云って笑う彼にボクは毒気が抜かれたような気持ちになったのは確かだった。

『では、改めて……ボクの名前はネムス。見ての通り、旅の吟遊詩人です』

ネムス、ボクはこの名前があまり好きじゃない。
要はネームレス（名無し）を詰めたのがこの名前だったから……

『しかし、何故皇子様ともあろうお方がこんな山奥に？』

「ああ、さつきも云ったけど目的は山籠もりでね。我が流派・牙狼月光剣の免許皆伝が間近って時に、私はどうも何かが足りないような気がしたんだ」

アランドラ皇子は自分の両手を見つめながら続ける。

「それは厳しさだと思っに至ったんだ。城の中じゃ誰も彼も私の世

話を焼いてくれてね。自分の世話もできない甘ったれに剣術は究められないと悟って城を飛び出したってわけだよ」

彼はカラカラと笑ってさっきから鍋で煮ていた物を器に盛ってボクに差し出した。

それは様々な獣の肉を煮込んだ料理でなんと云えない匂いを放っていた。

「ハハハハ、引いてるね？ 確かに見てくれは悪いけど、れっきとした獵師料理だから味は保証するよ」

いつまでも口をつけないボクにアランドラ皇子は苦笑して先に食べ始めた。

「じゃあ、私が毒味しよう……うん、少々胡椒が利きすぎた感じがするけど美味しくてきてる」

『申し訳ありません。見たこともない料理でしたので……頂きます』

ボクは意を決して何かの肉を口に入れると、何とも云えない芳醇な香りと少しきつ目の塩味が口の中に広がってなかなかの美味だった。

『お、美味しいです！ こんなに美味しい料理は初めてです！！』

夢中で掻き込むボクをアランドラ皇子が穏やかな微笑みを浮かべて見ていたことを、その時は気付いていなかった。

「そう云ってもらえると作った甲斐があったよ。私も城の中じゃ毒味が済んだものばかりで温かい料理を食べた事がなかったから、初

めてコレを食べたときは感動したものさ」

『そうですよね、ボクもこうして“外の世界”に出て温かいものがこんなに……』

そこまで云って自分の失言に気付いたボクは口を両手で覆って彼の動向を窺った。

しかし、そんなボクの様子にアランドラ皇子は柔らかに微笑んだままだった。

「さて、お腹もいっぱいになったし、後は寝るだけなんだが……もし良かったら君の歌を聴かせてもらえるかな？　ここ半月、人と会ってなかったせいかな恋しくてね」

『ええ、喜んで！』

ボクはその時、何も訊かないでボクの歌に耳を傾けるアランドラ皇子の器量に感嘆と感謝の念を覚えながら、何曲か披露した。

酷寒の大陸でお城のように巨大な樹氷を見た感動を表わした歌や、戦争で夫を亡くした婦人に片思いをしてしまった時の事を歌にしたものなどを歌った。

特に兄弟の中で唯一ボクに優しくしてくれて、ボクの歌を認めてくれた妹の歌を披露したとき、アランドラ皇子は目尻に涙を溜めて絶賛してくれた。

「いい歌だったよ。歌詞にある『あの娘』に対する君の深い愛情を感じさせる……惜しむらくは歌い手の君の声に哀しみが込められていた事か」

ボクはその時、瞠目していた。アランドラ皇子にボクが妹に対し

て抱いている邪恋に気付かれたような気がして内心穏やかじゃなかった。

もっともその妹はすでに政略結婚とある将校の息子に嫁いでいたんだけどね。

彼女は男の子を一人産んだけど、その後産後の肥立ちが悪くて儚くもこの世を去ってしまった。

「否、その哀しみを糧にしているから君の歌は素晴らしいのかな？ 強いんだね、君は」

ボクはハツとアランドラ皇子を見た。

ボクのことを強いと云ってもらったのは生まれて初めてだった。

「ああ、すまない。ただ率直にそう思っただけなんだ。気を悪くしたのなら謝る」

『とんでもないです。その……逆です』

泣いている自分を見られなくてボクは後ろを向いた。

「そうか、それを聞いて安心したよ。じゃあ、もう遅いし寝ようか？」

背後でアランドラ皇子が火を弱める気配を見せた。

『はい、おやすみなさい。そして、ありがとうございます』

山賊から助けてもらった事。食事を与えてくれた事。

そして、ボクを強いと云ってくれた事を感謝して精一杯の“ありがとう”を伝えた。

「ありがとうは私の云う言葉だよ。それじゃ、おやすみ」

翌朝、ボク達は再会を約束して別れた。

それがボクとアランドラ皇子との出会いだった。

アランドラ皇子との想い出から我に返ったボクはあーだこーだと話をしている勇者達に声をかけた。

『あの、差し出がましい事を云うようだけど、ボクはそのアンカー亭って宿屋を知ってるんだ。もし良ければ案内するけど？』

「あら、それは渡りに船と云うものだね。お願いしてもいいかしら？」

『喜んで』

ボクは一つ頷くと彼女達を街の西側へと案内する事にした。ちなみにこのスエズンは三つのエリアに分かれている。

まず地元のニンゲンが生活を営む住居区がある東区。

運河を行き交う漁船、交易船を集める港があり、市が立ち、倉庫が並ぶ商業の場である中央区。

ついでに云えば様々な商業ギルドの支部もここにある。

そしてボク達が向かっているのが、観光客相手の宿や歓楽街があり、星神教の教会とスチューデリアから派遣された兵士達の詰め所のある西区なんだ。

住民の生活区と地方の人、所謂余所者が集まる地区を、中央区を挟んでわざわざ離して作られているのは無用なトラブルを回避する為なのは云うまでもないよね？

ボク達は人混みに辟易しながら中央区を抜けて西区に向かう。勇者とツキヨがボクから離れまいと必死についてくる様子が微笑ましかった。

しかし、ボクは後ろのユキコを見て思わず愕然としかけた。彼女はまったく人を避けようとする様子もなく自分のペースで歩いている。

まるで周りのニンゲンの方がユキコを避けているかのように、彼女は人にぶつかる事なく盲目とは思えないしっかりとした足つきでボクの真後ろにいた。

「にぎやかな街ね。今度は観光で来てみたいものだわ」

活気溢れる中央区の人達の声に耳を傾けながらユキコは静かに微笑んでいた。

その微笑みは凄く透明で、さつきベルゼフ達相手に鬼神のような戦いを見せていた人と同一人物とは思えなかった。

『も、もうすぐ中央区は終わるよ。西区はこことはまた違った賑やかさを持った地区なんだ』

ボクはユキコの微笑みに動揺しつつも中央区と西区の境にある門を潜った。

「門一つ隔てただけで大分雰囲気が変わるわね」

中央区も西区も喧騒に溢れているけど、その質の違いにユキコは
感づいたようだった。

『まあね、中央区が商売で活気づいているのなら、ここ西区は遊び
がメインだから雰囲気違って感じるのも当然さ』

ボクは勇者が興味を示して指差す施設を一つ一つ説明しながら目
的のアンカー亭に向かう。

アンカー亭はスエズンの中でも中堅ところで、この街が出来た当
初から商売をしている。

特徴としては数ある宿屋の中でも魚料理が最も美味しくて料金が
安いというところだけど、本当はもっと重大な秘密がある。

それは一部の常連しか知らないことなただけ、この従業員は
捨て子や戦災孤児がオーナーに拾われて働いているということなん
だ。

つまりここを追い出されたら彼らには行くところがどこにもない。
嫌な云い方だけど、オーナーの意向はそのまま彼らの運命の分か
れ道になる。

ここまで云えばどういう事が解るだろう？

従業員達は宿泊客が望めばいつでも娼婦、男娼に早変わりするつ
て事なんだ。

いつだったか相手をしてもらった娘から寝物語に聞かされた話で
はお客を取った場合はその料金の七割も自分の物にできるんだそう
だ。

残りの三割はお客を取る部屋の維持費、雰囲気作りの為の香木や
キャンドルなどの必要経費らしい。

オーナーが云うにはいつまでも多くの孤児を養う訳にはいかない
ので、さっさと資金を貯めて独立しろとの事だそうな。

最初は話を聞くにつけ悲惨な境遇だと思ったけど、元々星神教の

連中は貞操観念が低い傾向にあるので肌を売るくらい何でもないんだらうね。

実際、それを元手に料理屋を開いて繁盛させてる者もいれば、深い仲になった客に嫁いでいった者もいる。

案外、悪くないシステムなのかもね。

『ここがアンカー亭だよ。そこそこの人気があるから泊まれるか判らないけどね』

ボクは背後を運河に面した煉瓦作りの宿屋の前に立って彼女らに紹介した。

軒先に下げられた錨のマークの看板が風に揺られてキイキイ音を立てている。

「これはネムス様、お久しゅうございます」

見れば恰幅が良く髪の生え際が頭頂付近まで後退している壮年の男が揉み手をしてボクに笑いかけている。アンカー亭のオーナーだ。実はボクもアランドラ皇子の紹介でこの宿をたまにだけ利用させてもらっている口なんだ。

ボクはユキコが持っている物と同じ青い星形の石をオーナーに見せながら勇者達を親指で指し示す。

『お久しぶり、オーナー。実は彼女らもあの御方と知己を得ているようなんだけど……』

オーナーはボクの肩越しに勇者達を見て破顔した。

「ええ、話は伺っております。いえ、むしろ好都合でございますよ」

オーナーは勇者達に近づくと恭しく一礼してから挨拶をする。

「勇者・オウカ様にユキコ様、そしてツキヨ様でございますね？
私はこの宿の愚主でございます」

「ええ、確かに私達の名です。でも、よく私達をご存知で」

「はい、それは話を伺っておりますので。早速お部屋のご案内しますと申し上げたいのですが……」

言葉を濁すオーナーにユキコ達の表情に不安が見えた。

「何か問題でも？ お部屋が空いてないとか？」

「いいえ、そういう訳ではないのですが、旅でお疲れでしょうから先にお風呂に入れて差し上げるよう云い付かっておるのです」

「はあ……それは有り難い事ですが、誰の云い付けでそのような？」

訝しむユキコにオーナーはやや焦りを見せた顔をしながらも彼女達を宿の中に押し込んでいく。

「それは後のお楽しみと云う事で、まずはごゆるりと旅の疲れを癒してくださいませ。お前達、勇者様達のお荷物をお部屋に運びなさい」

オーナーの指示で見目麗しい少年少女達が重たそうに荷物を運んでいた。

ボクが一連の動きに呆然としてみると、オーナーが振り返ってニコリと微笑んだ。

「ネムス様もおいでになられるとは私も運が良い。荷物は私どもの方でいつものお部屋に運びます故、貴方様もどうぞ湯殿に」

オーナーのお世辞に反論する暇もなく、ボクは妙齡の美女二人と新顔らしい少年に手を引つ張られて強引に湯殿へと連れ込まれてしまった。

お風呂から上がったボクは痛む腰を堪えながら騙し騙しギターの調律をしていた。

確かにお風呂では旅の疲れは取れたけど、別の事をさせられてボクは疲労困憊だった。

いや、確かに嫌いじゃないんだけど、いくらなんでも一度に三人は……

あー、何でもない、何でもない。聞き流してくれるとボクア嬉しいなあ。

その時、控えめなノックが聞こえてきた。

「突然、申し訳ありません。入室のご許可を頂けますか？」

『どうぞ』

「失礼します」

入ってきたのはオーナーの跡取り息子のフェイナン君だった。
君付けはしてるけど実年齢は三十歳らしい。

でも悪い云い方をすれば気味が悪いくらい整った顔は二十代前半の女性と云われても信じてしまうだろう。

え？ 自分の事を棚に上げてる？

いや、でもこれはあくまで客観的にフェイナン君の容姿を評価しただけだから棚上げも何もないと思うんだけどね。

ちなみにボクがウェーブのかかった銀髪を腰まで伸ばしているのに対して、フェイナン君は頭をツルツルに剃り上げている。女性と間違われない為の苦肉の策なんだってさ。

『何か用？ 晩御飯にはまだ時間があると思うけど？』

冗談混じりにそう云うとフェイナン君は真剣な表情で答えた。

「あの御方がお呼びです。勇者様も間もなくそちらに……」

『いるのかい?!』

ボクが目丸くさせると、フェイナン君は抑揚のないと云うより緊張の面持ちで肯定の言葉を発した。

『わかった。すぐ行くよ』

困惑しつつ頭を掻きながら答えるとフェイナン君は音もなく去っていった。

ただ彼が妙に思い詰めていたような感じがして気になった。

「やあ、ユキコ殿、ツキヨ殿、オウカ殿、また会えましたね。そしてネムス、久しぶりだね」

ポカンと大口を開けていたのはボクだけじゃなかった。

勇者達も絶句して目の前の青年を見つめていた。

ただユキコだけが静かに微笑んでいた。

ちなみに彼女達はお揃いのシルクの半袖ワンピースを着ている。

「なるほど、私にこの宿に泊まるようご依頼されたのはやはりこの為でしたか」

「ハハハハ、流石はユキコ殿。感付かれていましたか」

「薄々ですけどね。やはり血は争えませんが、アランドラ皇子」

そう、僕達の目の前にいるのは、聖都スチューデリアの皇子、アランドラその人だった。

『な、何故、貴方がここに？』

ボクは驚きのあまりそう訊ねるのがやっとだった。

「ふむ、確かに皇子である私がここにいるのは非常にマズイだろうね。でも、私は先日帝位継承権の放棄を正式に発表したんだよ。だ

から今君達の前にいるのはただの男。牙狼月光剣・免許皆伝を許された一剣士に過ぎない。つまりはそういう事さ、勇者殿」

アランドラ皇子はウィンクをして笑った。

「つまり私達の旅に加わると仰るのですね？」

「そうなりますね。嫌だと仰っても無駄ですよ？ 私は私で勝手に
ついて行きますから」

ユキコは呆れたように溜息を吐くと、苦笑しながらアランドラ皇子に右手を差し出した。

「これから宜しく願います。アランドラ皇子……いえ、アランドラ殿とお呼びした方が宜しいですね？」

「ええ、その方が私も気楽で嬉しいですよ。こちらこそ宜しく願いますよ」

ユキコとアランドラ……でいいか君は微笑み合いながら握手を交わした。
それにしても、ポニーテールを解いてストレートにしたユキコも
なかなか色っぽくて良い。

「それはそうと、星神教の守護騎士が一人付いていると聞いていた
のですが、どちらに？」

「それが書き置きを残して行方知らずでして……どこで何をしているのやら」

ユキコの言葉にアランドラ君は一瞬呆けた顔をした後、困惑げに

訊ねた。

「消えてしまったのですか？ まさか守護騎士ともあるう者が逐電するとは……」

「事実ですわ。私どもとしては地図もあるし、人に訊ねる口と耳をを持ち合わせていますから何とかなるだろうと先へ進むことにしました」

「いやはや……同じ星神教徒としてお詫び申し上げます」

頭を下げるアランドラ君にユキコは近づいて、そっと彼の肩に手を置いて頭を上げさせる。

「頭をお上げ下さい。私どもほとんど実害は無かったのですから」
「いやいや、その云い方だと、その逃げた守護騎士がいてもいなくても同じと云っているようなものだと思うんだけど？」

「して、我々との合流にこの宿を利用された訳は？ ただアランドラ殿の馴染みというだけが理由ではないのでしょうか？」

居住まいを正したユキコにアランドラ君は力無く笑って顔をつるりと撫でる。

「いや、全く恐るべき御仁ですな。では、一つ相談に乗って頂きたい……入ってくれ」

アランドラ君の促す声にドアが静かに開いてフェイナン君が沈痛な面持ちで入ってきた。

「この宿の四代目オーナー、フェイナンと申します」

「実は彼にはちょっと辛い事情がありましてね……云いにくかったら私が説明するが？」

アランドラ君がフェイナン君にそう訊くと、彼は自分で説明しますと断りを入れてからユキコと向き合った。

「私には十五も離れた妹がおりまして……ネムス殿はご存知ですね？」

『あ、ああ、確かフィーネちゃんだったね？』

いきなり話を振られて一瞬ドキリとしたけど何とか彼女の名前を思い出して答える事ができた。

ふうむ、ボクに一旦声をかけてワンクッション置くって事は相当云いにくい話なんだろうなあ。

「そうです。そのフィーネがこの街へお忍びで来られたさる貴族に……」

「なるほど……しかし、云いたくない事は無理に仰るべきではありません。問題はその貴族なのですね？」

「はい、私どもは再三再四責任を取って欲しいと、つまりはフィーネを嫁にと訴え続けてきたのです。初めは知らぬ存ぜぬを決め込んでいた彼らでしたが、ついに頭に血が上ったのか逆襲に……」

しばらくこの宿に來ない間にそんな事があつたのか。

でも、確かに無垢な少女の純潔が散らされるのは酷い事だけど、今までの経営内容を顧みれば如何なものかとも思っけど。

「丁度、その時私がお忍びでスエズンに来ていたので、間に入って何とか流血沙汰を防ぐことができたのですが、根本的な解決にはなっていないのです」

アランドラ君も相当尽力したようだけど、双方ともに我が強い為に和解させるのは困難を極めたと云う。

「アンカー亭の望みはフィーネ殿をその貴族に嫁がせること。貴族側は、フェイナン、すまん……戯れに抱いただけの娘を嫁に迎えることができるか、と突っぱねている」

「話し合いもずっと平行線を辿っていたのですが、つい先日向こうからある申し出があったのです」

「ほう、向こうからですか？」

ユキコは何故か袖の中に手を隠していたんだけど、ぬっと懷から手を出してシャープな顎を撫でた。

「ええ、妹を手籠めにした当人と私とで剣の勝負をして、私が勝てば妹は晴れて貴族の嫁に、私が負ければ不問にした挙げ句、名誉を傷つけた詫びをしろと」

「ふむ、時にフェイナン殿は剣を？」

ユキコは顎を撫でながら小首を傾げて問う。

「私もアランドラ様と同じ牙狼月光剣を少々……本当に少々……」

「して、相手の貴族の腕は？ 先方から決闘を申し込むということは遣うのでしょうか？」

ユキコは小首を傾げたまま右目だけを開いてフェイナン君を見る。実際は見えてはいないんだろうけど。

「相手は飛龍旋風剣という疾風の如きサーベルの遣い手。とてもフェイナンが勝てる相手ではないのです」

「それで私にどうせいと？」

ユキコは左目も開いて、じつとフェイナン君の答えを待つ。

「私を彼に勝たせて欲しいなんて無茶は云いません。私はフィーネの為に討たれる覚悟でその果たし合いに臨もうと思っています」

その言葉にアランドラ君に初めて動揺の表情が浮かんだ。

フェイナン君がそこまで思い詰めてとは思ってなかったんだろう。

「ただ貴族に平民の意地を見せたいのです。私が負けてもその貴族の心に敗北感、いえ、自分が悪かったと思わせるような戦いをしたいのです。ユキコ様が剣術道場の師範であらせられる事はアランドラ様より聞かされていました。どうか私に恥のない、見苦しからぬ堂々とした死に方をご教授ください！」

ユキコは瞼を閉じるとしばらく思案げに頭を上下させてから口を開いた。

「私も剣の道を人に教える立場にある者ですが、如何にして死んだら良いかとは初めての事でして……さて？」

フエイナン君はユキコの言葉を聞き逃すまいと必死に耳を傾けている。

「さる剣士が老後に云った言葉ですが、『一生の間修行に次第があるなり』、つまり段階があると説かれています」

「段階ですか？」

アランドラ君も興味があるのか、静かに雪子の話を聞いている。

「はい、まず『下の位は修行すれども物にならず、我も下手と思ひ人も下手と思ふなり』、初心者は修行しても上達せず、自分も他人も下手と思うものです」

「まさしく今の私ですね」

「左様、相手が名人上手ならば貴方が何年修行しても勝つことは難しいでしょう。しかしながら、恥じぬ果たし合いができるとすればです」

ユキコは閉じた目でフエイナン君を真っ直ぐに見据える。

「貴方が死ぬことを見つけていることにあります。武士道とは生と死のいずれを取らねばならぬ時、死ぬ方を選ぶ、つまり死を覚悟するのです」

ブシドウ？ その言葉は、どこか騎士道の心得みたいな響きがあった。

「何も思案する事はないのです。余計な事を考えずに突き進めば良い。貴方は既に答えを見つけているのですよ。そうですね、あとは形です」

こ、これがユキコの物の考え方なのか？
なるほど、厳しい訓練をこなしてはいても、普段はお姫様の生活をしているブルーゼフが勝てないわけだよ。

「形ですか？」

「はい、形です。今からそれを伝授いたしましょう」

ユキコは杖を大きく振り上げて見せた。

「まず左足を踏み出して大上段に構えて目を閉じます。構えたが最後、どのような事があるうとも目を開けることは許しません。開ければ私が貴方を斬ります」

「しょ、承知しました」

フェイナン君は額に脂汗を浮かべて頷いた。

「宜しいか？ その内に己の存在があやふやになっていくでしょう。『光』は無く、頬を撫でる『風』も感じず、『闇』さえも無くなります。その瞬間に剣を振り下ろしなさい」

振り上げていた腕を振り下ろす。

流石に剣術師範というだけあって、サマになっていた。

「さすれば無様な死に様を晒す事はありません。その貴族も勝負に勝って、心で負けを認めることでしょう。上手くいけば相討ちに持ち込める事もあり得ます」

ユキコはフェイナン君に向けて慈愛の微笑みを見せた。

「フェイナン殿のご武運を祈っていますわ」

「ユキコ様、ご教授ありがとうございます！！」

フェイナン君は感涙にむせびながら平伏したのだった。

「して、果たし合いはいつのですか？」

「三日後です。スエズンから北へ半日歩いた場所に件の貴族が持つ牧場があつて、そこで雌雄を決します」

「委細承知。乗りかかった船です。私もその勝負に立ち会いましょう」

ユキコがそう云うとフェイナン君が慌てたように首を振った。

「と、とんでもございません！ 勇者様達には大事なお役目があるではありませんか！ そのような気遣いは無用です」

「いえ、流石に事の顛末を見届けねば無責任極まると云うもの。それにこの子の勉強にもなりますしね」

ユキコは愛おしげに勇者の頭を撫でた。

「この子は実戦の経験が乏しい。今回の真剣勝負はこの子にとって糧となりましょう」

「私ごときの勝負が勇者様のお役に立ちますか？」

「この子次第です」

そう云ってユキコは微笑んだのだった。

それにしても、やっとスエズンに着いたというのにまたもトラブ
ルに巻き込まれるなんてね。

けど、ボクもフェイナン君に素知らぬふりができるほど薄情じゃないつもりだし、付き合うしかないか。

それによってボクもまた深みに嵌っていくなんてこの時は想像すらしていなかった。

果たしてフェイナン君はどうなっていくのか？

ユキコの胸中にあるものは？

それはまた次回の講釈にて。

第壱拾式章 異世界での一番弟子（後書き）

明記はしてませんが、異世界での弟子一号・フェイナンを得ました。

霞三姉妹はこのように剣術を通して人との付き合いを広げていきます。

第卅拾参章 電流剣術の修行風景（前書き）

今回は修行風景なのでいつも以上に地味です。
それと視点はしばらくネムス視点となります。

第拾参章 電流剣術の修行風景

次の日、ユキコが早朝から勇者とフェイナン君に稽古をつけているのを見かけた。

勇者とフェイナン君はユキコの指示に従って何度も何度も木剣で素振りを繰り返している。

何でも剣の道に近道はないそうで、毎日毎日愚直なまでの稽古の繰り返しで型が体に染みつくようになって初めて教えが血肉になるんだとか。

よくある冒険譚のように、必殺技とかの猛特訓なんてものはユキコの流派には無いんだってさ。

気の毒なのはフェイナン君で足腰がふらふらになるまで素振りを繰り返しているのに、素振りにキレがなくなってきたあの腰が流れているのだと何度も怒鳴られていた。

どうもユキコは木剣の風を斬る音で判断しているらしい。

「いくら相手から申し込まれた決闘だからって、自分の剣も満足に振り下ろせないなんて相手に失礼だと思わないの?! 素振り五十本追加!!」

「は、はひ……」

「なんだ、その返事は?! そんな情けない声しか出せなくて真剣勝負ができるか!! 素振り百本追加!!」

「は、はい!!」

道場主とは聞いていたけど、これは厳しいね。

勇者に対しても昨日見せた慈愛の微笑みはまったく見せずに厳し

い表情を見せている。

「見せ物ではない！ 貴様らは一つの事を真剣に取り組む者を笑うのか？！ そんな心根の貧しい者に見せる稽古はない！ 散れ！ 散れえええええい！！」

勇者とフェイナン君の稽古を遠巻きにニヤニヤ眺めている若者達がいただけど、ユキコの一喝で蜘蛛の子を散らすように逃げた。

それにしてもよく気付いたなあ。目明きのボクでも彼らには気付かなかったのに。

「フェイナン殿はそのまま素振りを続けるように……桜花、打ち込んできなさい」

ユキコの言葉に勇者は素振りやめると、彼女の前で一礼して聖剣の柄に手を添えた……って、稽古に聖剣を使うのかい？

「始め！！」

勇者は体を少し前に傾けて滑るように間合いを詰める。 速い！

「胴オオオオオオオオオオオッ！！」

裂帛の気合いとともに勇者の横薙ぎがユキコを襲うが、ユキコは杖で受け止めつつ車輪のように回した。

すると勇者の一撃は力の向きを反らされて、彼女はたたらを踏んだ。

「面ッ！！」

体勢を崩した勇者の面前で振り下ろされたユキコの杖が止まり、勇者は尻餅をついた。

「桜花、今の霞流『車輪』は見事だったわ。でも『日輪』は幅広の両刃剣、居合には不向きよ。そのせいで『車輪』の威力が半減してしまったのね」

「あ、そくだよね。でも、霞流は居合の技が多いし……」

「そうね、『月影』は居合には向いてるんだけど桜花には使えないしね……無いものねだりするよりも『日輪』で居合刀と変わらないほど抜き付けができるようにするしかないわね」

ユキコは自分の杖を勇者に渡して少し距離を置いた。

「桜花、大真典甲勢を貸してあげるから、今から『車輪』の型を千本抜きなさい」

「はい!!」

勇者は杖を腰に差すと、少し腰を沈めて剣を抜き放つ。

それにしても恐ろしく速い！ 構えも初めて見るし、何より威力がありそうだった。

それにあの剣も独特だ。片刃の剣はたまに見るけどアレほど鋭い剣はないだろうね。

なんと云うか、ボクの知る剣と違って『斬る』事に特化したアイテムのようだ。

「桜花、刃音がぶれているわよ！ ただ千本抜くのではなくて、一

本一本“気・剣・体の一致”を心がけなさい！」

「はい、師範！！」

どうやら勇者は稽古とプライベートを完全に切り離しているみたいだね。

普段（と云っても昨日知り合ったばかりだけど）のユキコに甘えている様子は見受けられない。

「どうも気迫が足りないわね……今度、刑死した罪人の死骸を買い取って斬らせようかしら？」

ボクは驚いて、困った様子でとんでもない事を云うユキコの顔を見た。

彼女の物騒な呟きは懸命に稽古をしている二人の耳には届いていなかったようだ。

『あ、あのユキコさん？　いくらなんでも話が物騒すぎるんじゃないかな？』

ボクは思わずユキコに駆け寄って彼女にだけ聞こえるように小声で云った。

「あら？　聞こえていたの？　でも考えようによつては必要かも知れないわ。少なくとも今のままじゃ桜花は危なっかし過ぎるし」

『どういう事？』

「知れた事。魔族を名乗る連中は人とは変わらない容姿をしているそうじゃない？　そのせいで桜花が魔族を斬る事に逡巡したらと

思うとね」

ユキコは腕組みをして嘆息した。

「勇者に選ばれたことはともかく、自身も勇者であることを自認して行動している以上、人に近い姿の魔族を斬ることなんてできません、なんて云ってられないでしょ？」

『それにしたって、他に方法はあるんじゃないかな？ 何も実際に人を斬らせるなんてしなくても』

ボクは昨日見た勇者の無邪気な微笑みを思い出して、胸がチクリと痛んだ。

なにもあの笑顔を壊さなくたって……

するとユキコはキョトンとした表情でボクの方へ体ごと向いた。

「私だって父様に命じられて刑死した人間を何度も斬らされたし、夜盗や辻斬りなどの凶賊を待ち伏せて実戦を積んだものよ？」

なるほど、ユキコの剣から感じられる凄味はその恐るべき稽古からきていたのか。

「そうね、手頃な盗賊がいれば云うこと無いんだけど……ネムス殿は心当たりはないかしら？」

まるで夕飯のおかずは何が良いかと訊くような口調で問うユキコにボクは思わず大口を開けて呆けた。

この人にとって『命』ってなんだろう？

いや、それだけの覚悟がなければ剣は究められないのだろうか？

「まあ、この事は夕食の時間にアランドラ殿か、宿のご主人に訊く事にしましょう」

ユキコはそう云い置いて素振りを続けるフェイナン君へと歩み去っていった。

ボクはユキコの背中を睨み付ける事しかできなかった。

「その調子です。フェイナン殿。ソレを維持できれば、あと百本で終わりにして結構です」

なにげに増やしてるのが怖いよね……

「刑場……ですか？」

夕食後、お茶を楽しんでいた時の事、ユキコが唐突にアランドラ君に刑場の場所を訊ねた。

アレって本気だったんだ……

「ええ、この子に据え物斬りをさせようかと思ひまして」

「スエ……モノ？」

アランドラ君は訝しむように、勇者の頭を撫でるユキコを見る。

「早い話が刑死した者の軀を桜花に斬らせるのですよ」

これにはユキコとツキヨ以外の全員が口に含んでいた紅茶を吹き出した。

「ゆ、雪子姉様?! い、嫌だよ! 何で桜花がそんな事を?」

「貴女の為よ。魔族は人に近い容姿、しかも耳が尖ってるの尖つてないのって程度で差異は少ないし、貴女は斬るのを躊躇うに決まっている」

「そ、そんな事……」

ユキコの云い分に勇者は口籠もる。

「そんな事あるでしょう? それに斬るのを躊躇して魔族を逃がすならまだ良いわ。でも、その隙に魔族が反撃してきたら斬られるのは貴女の方よ?」

ユキコの凍えるような冷たい口調に勇者は完全に腰が引けている。

「だ、だからって死体でも人を斬るなんて嫌だよ!」

「嫌だと云っても近いうちに貴女は人を斬る事になるかも知れないのよ? 良い? 躊躇えば斬られるのは自分なのよ?」

「ひ、人を斬るってどういう事なの?!」

勇者はイヤイヤをするように首を左右に振りながら涙目で訴える。

「この後、首尾良くカイゼントーヤから船を借りられるとするわね？でも、海に出てからが大変なのよ」

ユキコは砂糖を入れてない紅茶を美味しいのか不味いのか判別できない表情で口に含んだ。

「カイゼントーヤ近海には最近凶悪な海賊・クラウン・セカンド一家が出没するらしいの。だから私はアジトアルゾ大陸に向かう航海中に海賊と交戦する事を想定しているわ」

ユキコの情報に皆は啞然としている。

ボクも海賊について噂だけなら聞いていたけど、そこまで明確な情報を持っていなかった。

「ユキコ殿はいつ、そのような情報を？」

アランドラ君も引き攣った表情でユキコに疑問をぶつける。

「昨日の夜、私と月夜でこの街にある冒険者ギルドという所に行つて登録してきたのです」

「い、いつの間に……」

冒険者ギルドとはその名の通り世界中を旅する冒険者達を支援する組織で、そこに登録する事で様々な情報や特典を得られるんだ。

ギルドが設立された経緯は不明だけど、コンセプトは『今後の世界を担う若者達に世界中を旅して世の中の広さを、厳しさを学んで欲しい。そして、それを糧に成長して欲しい』というものだ。

世界中の冒険者ギルドは全て繋がっていて、遠く離れた地でも伝

書鳩を使つて情報を交換している徹底ぶりだ。つまり辺境のド田舎でも新鮮な情報を得られるんだ。

冒険者は何らかの試験を受け、クリアすることでギルドに認められて登録できる。

登録が済めばギルドから情報を格安で買うことができたり、またバックマージンこそ取られるけど仕事も周旋して貰える。

仕事の内容は日雇いの人足仕事から魔物退治、要人警護、変わったものでは好事家に自分達の経験した冒険を物語にして聞かせるというものまである。

ユキコは昨日の御者から冒険者ギルドの事を聞いていたので、早速登録してカイゼントーヤ近海の高賊の情報を得たのだろう。

「登録する際に自分達の名前の他に、徒党の名前も登録するって事だったから家の姓の霞をイスパニア語に直した『ネブリナ』にしたけど、桜花、良いわよね？」

「う、うん……何でイスパニア語なのかは分からないけど……」

良いわよねも何も事後承諾じゃ嫌とも云えないと思うんだけど。

「霞家のご先祖様が戦国時代、イスパニア人と交流があったからその名残で霞家当主はイスパニア語の習得が義務付けられているのよ」

「しかしユキコ様、この街のギルド長は堅物で有名なのですが、よく登録を許されましたね」

厳つい顔に似合わない若奥様が着るような可愛らしいフリフリのエプロンをかけたオーナーがユキコのカップに新しい紅茶を注ぎながらそう云つと、彼女はニコリと微笑んで答えた。

「ええ、確かに、女の冒険者、いないこともないが女には女の幸せつてもんがあんだろうが、と怒ってましたけど、コレを見せたら態度を変えましてね」

ユキコは杖に仕込まれた刃をオーナーに見せた。

改めて見るとぐいぐい引き込まれそうになる美しく魅力的な刀身だ。

ボクは何度もその剣に手を伸ばしたくなる衝動を抑えるのに必死だった。

その剣が欲しいんじゃないんだ。なんとその剣で斬られたくなるんだよ。

臆病なボクにそこまで思わせるほど恐ろしくも美しい剣だった。

「見たことのない造りですが見事な一振りです御座いますな。なるほどコレほどの業物を見せられてはアイツも認めざるを得ないでしょうな」

オーナーは刃を納めると、眼福に御座いました、と一礼して杖をユキコに返した。

オーナーも若い頃は世界中を巡った腕利きの冒険者だったらしいから剣の善し悪しは判るんだろうね。

昔は『斬れぬもの無き敏腕シェフ』なんて訳のわからない二つ名で知られるパーティ内のコック兼戦士だったそうで、包丁でドラゴンを捌いた事があるとか……

「ええ、それは良いのですが、こんな物を頂いてしまいました……」

ユキコはツキヨに何かを云いつけて手甲と小さな盾が一体化した物を持つてこさせた。

一方は中央に紅い炎を模した絵と周りに幾何学模様が描かれてい

た。

「こ、これは炎魔の盾?! 炎と魔力を封じた盾でして、炎系のダメージから守ってくれるもので御座いますよ!!」

オーナーは興奮したように盾を手を取った。

「間違いない本物だ! これは魔法の心得の無い者でも装備すれば中位レベルまでの炎系魔法が無詠唱で使えるようになることから、危険物として封印されていたのですよ!」

「それほどの品を何故私どもに?」

「それだけゲイン……ああ、あの石頭のギルド長の名前です。ゲインがそれだけ貴女達を気に入ったのでしょね」

オーナーは余程興奮しているのか額が汗でビッシヨリだった。

「左様ですか。でも、ギルド長は他にも気になることを仰ってました。確か、お前達なら俺が手に入れられなかった『夢』を掴めるかもな、と」

ユキコの言葉にオーナーは何故かポロポロと涙をこぼした。

「そうか、ゲインよ……お前はまだあの『夢』を諦めてなかったんだな……」

「オーナー殿?」

ユキコは小首を傾げながらオーナーに声をかける。

こついう仕草だけ見ればユキコも文句なしに可愛いんだけどなあ

……

「いや、申し訳ありません。ゲインがその盾をユキコ様に託した訳はいずれお分かりになるでしょう。ですが、今はお役目に向けて邁進してください」

「は、はあ……とりあえずこの盾も私の手甲と同じで重さを感じさせないし、月夜、貴女が使いなさい」

ユキコの言葉にツキヨは何故か齒を何度か鳴らしてから頷いた。

「さて、話が逸れましたが、肝心の刑場は近場にはありませんか？」

オーナーはしばらく気難しそうにユキコを見ていたけど、やがて溜息を吐いて地図を広げた。

「これはこの近辺の地図です。そして地図を上下に分断している青く太い線が運河で御座います」

オーナーの説明によると刑場は確かにスエズンの近くにあった。なるべく聖都から離れたかったのか、スチューデリアとカイゼントーヤの国境ギリギリに存在した。

場所はスエズンから運河に沿って西へ歩いて2日の場所だけど、馬車を飛ばせば半日もかからないだろう。

「そう云えば、明日はこの近辺を荒らしていた凶悪な盗賊団の首領が処刑される予定でしたな」

「それは良い！ それだけの大物悪党の死骸なら桜花の据え物斬り

第一号にふさわしいですわ!」

オーナーの余計な一言にユキコが嬉しそうに云うと、勇者が噛みついた。

「良くないよ!　ねえ、本当に桜花は死体を斬らなきゃいけないの?　桜花だって実戦を積んでるんだよ?!」

「桜花、自惚れないでね?　あんな異形の一匹や二匹は実戦とは云わないわよ?　私達の敵はあくまで魔族でありヴェルフエゴールなのだから」

ユキコはどこまでハードルが高いんだろう?

確かにモンスターと魔族じゃ比べるべくもないけど、それでもモンスターはニンゲンにとって充分脅威なのに。

「そうと決まれば早速、明日早朝に馬車を借りて刑場に向かうわ。オーナー殿、貴重な情報に感謝します」

「あううう……」

テンシヨンの高いユキコに対して、勇者はこの世の終わりのような顔をしている。

「話が決まったところで、少し早いけど寝ましょう」

ツキヨに手を取られて寝室に向かうユキコの背をボクとアランドラ君、そして勇者は呆然と見送るしかなかった。

次の日、オーナーが手配したのかアンカー亭の前に二頭の艶やかな栗毛の馬に引かれた幌馬車が待機していた。

「この馬車は上得意のお客様の送迎に使っているものです。これならば、ランチ前には刑場に着くことができるでしょう」

なるほど、アンカー亭の持ち物だったのか……って、オーナーが自ら手綱を引いてるよ。

「思うところがあり、御者は僭越ながら私めが務めます。それでは早速出発致しましょう」

オーナーの言葉に勇者達は幌馬車に乗り込んでいく。
メンバーは勇者達三姉妹、アランドラ君の他に何故かボクとフェイナン君まで乗せられた

「ネムス殿、ごめんなさいね？ 据え物斬りを体験した桜花は確実に精神的に参るだろうから、貴方の歌で慰めて欲しいのよ」

ユキコがボクの手を取って申し訳なさそうにそう云った。

『そういう事なら微力ながら手伝うよ』

もつ何を云おうとユキコの考えは変わらないだろうし、それなら

ボクなりに何とかしてやろうと思わなくもない。

「ありがとう」

ニコリと微笑むユキコは本当に綺麗で、ボクは吸精鬼サキユバスに魅了されたかのように一瞬、呆けた。

『い、いや、これくらい……』

ボクは熱を帯びてきた顔を冷ますように首を左右に振ってそう答える事しかできなかった。

「ところで……何故、私まで一緒に？」

昨日の素振りで筋肉痛になったのか、ぎこちない動きをしているフエイナン君の問いに答えたのはオーナーだ。

「ついでだ。お前もその据え物斬りとやらをやって明日の決闘に備えろ！」

「そ、そんな……」

フエイナン君の情けない悲鳴を合図に幌馬車は刑場目指して出発した。

凄いスピードで進む馬車の中でユキコは震えている勇者の頭を胸に抱いていた。

「桜花、怖いよね？ 私も初めて据え物斬りを体験した時は怖かった……肉に刃がめり込んでいく感触が手からなかなか消えなくて何度も何度も胃の中のモノを吐いたわ」

へえ、ユキコにもそんな時期があっただ。

いや、そういう修行を課せられてきたから今のユキコがあるのかも知れない。

「でも、私の場合は兄様がいてくれたから何とか乗り切れた。兄様も私と同じく初めてだったのに、私を護るために怖いのが気持ち悪いのを我慢して抱きしめてくれた……」

「兄……様？ 雪彦兄様？ あの優しくった雪彦兄様も据え物斬りを……死体を斬ったの？ いつもニコニコと笑って桜花の頭を撫でてくれた雪彦兄様が……？」

勇者は何か信じられない事を聞いたような驚きの表情でユキコの顔を見上げる。

ちなみにユキヒコとは、後で聞いた話によるとユキコの双子の兄で、顔立ちはユキコそっくりだったそうだ。けど数年前に大きな火事に巻き込まれて亡くなったらしい。

彼の实力はなんとユキコ以上で、剣が鞘から抜けきらない内に敵を倒すほどの腕前だったらしい。

その為、剣術家達から『稻妻』という渾名がつけられていたそう
だ。

「兄様が怖くなった？」

ユキコがいたずらっぽく微笑みながら問うと、勇者は首が千切れそうなほど勢いよく何度も左右に振った。

「そ、そんな事ないよ！　どうであれ雪彦兄様は雪彦兄様だもん！　優しくってすっごく強い自慢の兄様だったもん！」

「うん、桜花ならそう云ってくれると思った」

ユキコは嬉しそうに勇者の頭を優しく撫でていたけど、不意に沈んだ表情を見せた。

「本当に優しくて強くて頼りになる兄様だった……どうして亡くなってしまうたのかしらね？」

ユキコは口紅を差しているわけでもないのに艶やかな深紅の唇に指を這わせて、憂い顔をしている。

意図しているワケじゃないんだろうけど、この色っぽさは何なんだろう？

アンカー亭の従業員だってこんなに色気はないよ？

見ればアランドラ君と勇者、フェイナン君は真っ赤にした顔を背け、ツキヨは頭を上に向けて首の後ろをトントンと叩いていた。

「皆様、アレを！」

不意にオーナーが叫び、前を指差した。

オーナーの指が示す先には堅牢で巨大な建造物があった。

これが凶悪な罪人達の収容所にして死刑が執行される恐怖の場所

……ジャッジメント・スクエアだ。

ここで恐るべき修行が行われることになる。

それによって勇者とフェイナン君は何を得て、何を失うのだろうか？

据え物斬りを愛する妹に課すユキコの思惑がどこにあるのか？

ジャッジメント・スクエアの中で待ち受けるものとは？

それはまた次回の講釈にて。

第拾参章 電流剣術の修行風景（後書き）

未だかつてファンタジー物の修行で、勇者に死体を斬らせるヒロインがいましたかねえ？（汗）

剣客小説だと割とよく使われてたりしますが、ラノベではあまり見ないかも知れませんね。

それと私の小説でも冒険者ギルドを出してしまいました。

一応、コンセプトやあまり見られない依頼クエストを書いてみましたが如何でしょう？

第拾肆章 初めての真剣勝負

何を思ったのか、ユキコはオーナーの肩越しに前へと身を乗り出した。

「殺気ね」

ユキコが杖を握りしめながらオーナーに云う。

「流石ですな。前方の茂みに十数名……今日、刑に処される『ブレインマツシャー』ことハンムルの手下でしょうな」

「首領を助けに来た……わけじゃなさそうね」

「でしょうな。殺気は私達に向いています」

ユキコとオーナーはさも当然のように話しているけど、ボクにはどの茂みに盗賊が潜んでいるのか解らない。

ちなみに『ブレインマツシャー』なんて物騒な二つ名は、ハンムルの得物が巨大なウオーハンマーで、好んで敵対者の頭を叩き潰していた事からきている。

「如何なさいますか？」

「大事の前の小事……彼らの手前で止めてください」

そう、会話から判るように、猛スピードで走る馬車の中で茂みの中の殺気に気付いた彼らには驚嘆するしかない。

やがて馬車の速度は緩やかに落ちていき、盗賊が潜んでいると思

しき茂みの少し手前で止まった。

「ネムス殿とフェイナン殿は馬車から出ないように……オーナー殿は二人をお願いします」

「承知致しました」

ユキコは勇者を促して幌の後ろから茂みに対して死角になる場所に降りた。

「私も微力ながら助勢します」

アランドラ君も剣を携えてユキコに続いた。

その直後、茂みが揺れて人相の悪い男達がぞろぞろと現われた。

「へっ！俺達に気付いた風に止まるから変だと思ったが、伝説の『運河の七戦鬼』が一人、ファンガズ殿とは恐れいったぜ！」

盗賊達のリーダー格らしい赤ら顔で痩身の男が下卑た笑いを見せながらオーナーと対峙する。

「誰かと思えば、赤鼻のグリークか。殊勝にもボスを助けに来たって様子じゃないな？差し詰め、今日処刑されるハンムルに対するデモンストレーションといったところか？刑場の中にいるハンムルの耳に届くように派手に暴れて、「我らは健在。だから安心して死ね」と伝える腹だろう。やはり悪党には俠義なんてものはないな」

オーナーの言葉にグリークはニヤリと、解ってるじゃねーか、と凶悪な笑みを浮かべた。

「んじゃ、早速で悪いんだが……ハンムル盜賊団改め、グreek盜賊団の最初の生け贄になってもらおうかい？」

グreekが片手を上げると殺氣が膨らんで手下達が一斉に得物を抜いた。

「野郎ども！ かかれっ！！ 目の前のハゲ親父を殺れば、たんまり褒美をくれてやるぜ！！」

「本陣、オーナー殿！！ 作戦は一つ、本陣死守！！」

幌の陰からユキコが飛び出して、先頭の盜賊の腹を割った。見ればユキコは袖が邪魔にならないように紐のようなもので括つて、頭に細長い布を巻いていた。

「霞流『車輪』……」

それにしても、イアイという剣法は凄い……速いだけじゃなくて威力も既存の剣術とはケタが違っていた。

「あひい……俺の中からどんどん溢れてくるう……」

割られた腹から溢れる臓腑を両手で掻き集めながら盜賊は絶命した。

「て、テメエ！！ 何モンだ？！」

「アンカー亭の宿泊客……それ以上でもそれ以下でもないわ」

「ふざけやがって、このアマー！」

二人の盗賊がいつの間にか刃を杖に納めたユキコを前後から挟撃する。

「霞流『引き波』！」

陽光を反射して刃が抜かれて前にいる男の手首を斬った。

得物を持った両の手首が飛ぶのを無視して、すぐさま後ろに振り返りつつ振り上げた剣を盗賊の脳天へ落とす。

脳天を割られた盗賊の顔は見る間に赤く染まり、赤い中にも飛び出した眼球が浮島のように白く映えていた。

寄せては返す波のように滑らかな動きで前後の敵を討つ様は、なるほど『引き波』の名に相応しい。

「ひぎやああつ！ 俺の腕が無くなっちゃったよオ！！」

ユキコに斬られた断面から鮮血を撒き散らしながら地面を転がる盗賊は、ユキコに顎を蹴られて昏倒した。

「今更ながら恐ろしくも美しい剣ですな！」

アランドラ君もユキコの技を絶賛しながら盗賊を数人討っている。アランドラ君の遣う牙狼月光剣は右手に長剣、左手に短剣を逆手に持つスタイルで戦う。

この短剣の意味は接近戦に持ち込まれた場合、瞬時に武器を切り替える事ができるし、盾としても利用する事ができると聞いた。

更に動揺する盗賊達の背後で爆発が起こり後衛の男達が数人吹き飛ばされた。

「月夜、霞流『火術の型・殿軍砕き』、見事！ 貴女も大分正確に

狙った場所に炸裂弾を投げられるようになったわね」

ユキコがツキヨに向けて微笑むと、彼女は頬を紅潮させて目を細めた。

「桜花！ 敵陣形左翼にいる男だけ貴女が斬りなさい！」

ユキコの命令に近い指示に勇者の全身がビクリと震えた。

「桜花、これが貴女にとって初めての真剣勝負！ 斬る事を躊躇して命を落とすは愚行と心得なさい！」

勇者は不安と恐怖が入り混じった表情でユキコを見た。

「臍下丹田に力を入れて肩の力を抜きなさい。それでも駄目なら乳房の間に握り拳を押し込んで大きく呼吸なさい」

勇者は戸惑いながらも云われた通りに胸の谷間に拳を当てて何度も深呼吸する。

「大丈夫……行けます！」

そう云った勇者の顔はまだ強張っていたけど、目はもう泳いでいなかった。

「霞流・目録！ 霞桜花、参る！」

自らを奮い立たせるように叫びながら勇者は敵最左翼の男目がけて走り出した。

これも後から聞いたんだけど、人は左脇からの斬撃が受けにくい

らしい。

更には最左翼の男の腕が未熟という事もユキコは見抜いていたんだそうだ。

「イヤアアアアアアアアッ！！」

裂帛の気合を発する勇者に最左翼の男が慌てて対応する。

勇者の目は血走っていて冷静では無いことが素人目にも解った。

「霞流『車輪』！！」

「オウ力殿！ 間合いが遠い！！」

アランドラ君が叫んだ通り、勇者の切っ先は男の顔を縦に浅く裂いただけに終わった。

男の顔が歪み、眉間から左頬までパツクリと肉が開いて男は悲鳴を上げながら顔を押さえた。

「うああああああ・・・」

男の指の間から鮮血が噴き出し、あっという間に顔面を真っ赤に染めていく様を見た勇者は張り詰めたナニかが切れたかのように叫んだ。

勇者は理性を失ったかのように聖剣を振った。

剣術の動きじゃない、棒で殴りかかるようなムチャクチャな剣だった。

「ぎゃっ！」

勇者の斬撃に顔を押さえていた両手ごと男の喉が裂けた。

鳥の囀りに似た物哀しい息を漏らしながら男は勇者を睨んでいたが、やがて後ろに倒れて動かなくなった。

勇者は息を荒げながら男を見ていたけど、死んだ事が理解できたのかその場にへたり込んだ。

気が付けば盗賊達はグリークを除いて全て倒れ伏していた。

そのグリークは無言でユキコと対峙している。

「畜生めがッ！ 可愛い子分達を！」

グリークの顔に怒りが浮かんだのは一瞬のことで、すぐさま酷薄な無表情になった。

他の盗賊はともかくグリークには薄気味悪い迫力を感じる。

旅人を殺戮しては金品を奪う世界で生きてきた男の獰猛さがそこにはあった。

「霞流剣術師範……霞雪子」

ユキコは杖を腰に差してアイイの構えを取った。

「昔は虎山流地伏剣をかじってたが……今は我流よ。俺は赤鼻のグリーク、一応それなりの賞金が俺の首に懸かってるぜ。精々、がんばりな」

虎山流地伏剣。聞きかじった話だと低い体勢からの攻撃が得意という特殊な剣法だったはず。

その証拠にグリークは幅広で両刃の長剣をダラリと下げて、地面に水平にして、自身も身を沈めた。

「ク……」

なんとユキコの口から苦悶が漏れた。

「グreekの剣は下段より脇に引きながら敵に向かって踏み込み、間合いに入った時に上へと斬り上げる剣です。それゆえにグreekの体は異様に低くなります。大抵の戦士なら上から斬り下ろすのがセオリーですが、これだけ低く構えられると目測を誤り切っ先が空を切る事でしょう。そうなったが最後です。グreekは敵に空振りさせておいて腕か膝を斬り上げるのです。それがグreekが工夫を重ね、多くの旅人を斬り殺してきた恐るべき殺人剣なのです」

オーナーの説明にボクは思わず呻いた。

ユキコもグreekの剣を見抜いたからこそ呻き声を上げたのだらう。

「……秘剣『野分』」

ユキコは呟きながらじりじりと間合いを詰める。

同様にグreekも低い体勢のまま間合いを詰め、時々切っ先を沈めてユキコを挑発している。

「恐らくユキコ様はグreekの間合いの外からご自分の間合いへ一気に行くおつもりですな。奴の技を破るにはそれしかありませんまい。そして当然、下段から斬り上げるには剣を返さなければならぬ事もユキコ様はご承知でしょう。その僅かな間が勝負の分かれ目となるでしょうな」

『ユキコさん……』

ボクの呟きが合図になったかのように両者が駆けて一気に間合いを詰めた。

ユキコの体がグリークの左側に大きく跳んだ。

「せいっ！」

気合とともにユキコの剣が抜かれた。

切っ先だけではなく、ユキコの腕、そして上体までもが一本の矢のように伸びた。

アイイは剣を片手で持つ為、両手持ちよりリーチが伸びる。

けどこの技は上半身全てを使うので、更に遠くから敵を斬る事ができるんだ。

「秘剣『土砂崩れ』……！」

グリークの剣が返されて地滑りのような斬撃がユキコを襲うが、切っ先はユキコの足をかすめただけに終わった。

両者は擦れ違って、瞬時に振り返った。

「……『野分』……『土砂崩れ』を破ったり。南無八幡大菩薩」

ユキコの静かな宣言と同時にグリークの首筋に赤い線が走った。数瞬遅れて首筋から勢いよく血が噴き出した。

ユキコの剣がグリークの首の血管を斬った証拠だ。

「な、何で俺は濡れて？ 血か？ 俺の血が首から出てるのか？」

グリークは自分の出血に気付いていなかったらしい。

「ぐあ！ 今まで破れたことのない『土砂崩れ』が……」

グリークは首筋を押さえて女の含み笑いのような音を出した。

裂かれた気道から漏れる息と噴き出す血が絡み合って鳴らしているんだ。

「へへ……グreek盗賊団……たったの一日で……壊滅かよ……」

グreekは何故か穏やかに苦笑して見せると、咆哮を上げながら腰砕けに倒れてそのまま動かなくなった。

「ユキコ殿、お見事でした」

アランドラ君が労いの言葉をかけると、ユキコは神妙な顔をして首を振った。

「恐るべき剣の遣い手でした。僅かでも読み違いがあれば、私の方が屍を野に晒していた事でしょう」

あのガルスデント・エアフォースを圧倒したユキコがグreekをそこまで評価して黙祷を捧げたのには流石に驚きを禁じ得なかった。

「オーナー殿、盗賊達の亡骸を運びたいので大きめの布があれば分けて下さいませんか？」

「畏まりました……優しいですね」

オーナーが幌馬車に積んであった袋の一つを開けると、純白の布が何枚も出てきた。

多分、客室用に新しく買ったシートか何かだろう。

「盗賊とは云え、勝負は勝負……戦士の亡骸を野の獣の餌食にするのが忍びないだけですわ」

そう云ってユキコは自分が血に塗れるのを厭わずオーナーとアランドラ君と手分けして盗賊達の死体を布にくるんでいった。

「桜花……しつかりなさい」

ユキコは自分が斬った盗賊の死体の前で荒い呼吸を繰り返している勇者の肩を掴んだ。

「ゆ、雪子姉様……」

返り血で顔をどす黒く染めた勇者がユキコを見上げる。

「お見事！ 一人仕留めたわね」

ユキコが慈愛の表情で勇者を抱きしめると、勇者もユキコの腰に手を回した。

二人とも血塗れなのに、ボクはその光景を美しいと思った。

「斬った……桜花、人を斬った……斬ったの……」

泣きじゃくる勇者を更に力強く抱きしめて、ユキコは子供をあやす母親の様な口調で云う。

「果たし合い、斬り合い、殺し合い……いずれも、こんなものよ」

ユキコは勇者が泣きやむまで優しく抱きしめていた。

ジャッジメント・スクエアの検問所でグリーク達との死闘の顛末を説明していると、奥で怒号と悲鳴が轟いた。

「何事?!」

只事じゃない気配に驚いていると、奥から数人の男達がやって来た。

「入り口を閉鎖しろ! 死刑囚が、ハンムルが刑場で暴れ出した!」

「何だと?!」

動揺している検問員や看守と思しき連中の脇をユキコが走り抜けた。

「オーナー殿、刑場は?」

「案内致します!」

ユキコはオーナーに手を引かれて走り去ってしまった。

「ユキコ殿!」

アランドラ君までも走り去り、思わずボクも後を追ってしまった。

息を切らしながら薄暗い通路を走り抜けると、開けた場所に出た。

「こゝ、ここが刑場……」

むせ返るような血の臭いに辟易しながら見ると、短く刈られた紅い髪 of 巨漢が数人の看守を一度に殴り飛ばしているところだった。南天からの陽の光を受けながら巨人は武装した看守相手に一步も引かずに暴れていた。

「あの外道が……いや、悪魔だ、奴は……」

足下で蹲る看守を助け起こして聞いた話だと、彼は処刑の寸前に面会があつたと云う。

面会人は彼を捕らえた『勇者』を自称するパーティで、そのメンバーの女僧侶がハンムルに教えを説こうとしたらしい。

なんでも、自分の罪業をちゃんと悔い改めさせてから死に臨ませたいとかで、云つてはなんだけど余計な世話を焼こうとしていた。

彼女は、心清らかに天召されれば神もきつと許してくださいますよ、とハンムルと二人つきりになつたそうだ。

呆れた事に仲間達も彼女に諭されて真人間に戻らない人間はいないと、生まれついで of 悪人はいないとそれを認めたと云う。

しかし彼女は知らなかった。

ハンムルの様な悪党にとってわざわざ自分を訪ねてきた女は全て自分の『女』と思つてゐることを……

ハンムルは彼女に陵辱の限りを尽くした後、このまま処刑されるのは真つ平御免とばかりに看守相手に大立ち回りを始めて現在に至っている。

「ハンムル、見苦しいぞ！　今まで数多くの人命を奪つておいて、自分の番が来たら逃げるのか！！」

「うるせえ！！　どいつもこいつも俺の事、馬鹿にしゃがって！！
こうなったら一人でも多く道連れにしてやらあ！！」

ハンムルの巨大で硬そうな拳の一撃で看守の顔は大きくひしゃげて絶命した。

素手でニンゲンをここまで破壊するハンムルに看守達は尻込みしてしまっていた。

「お、おい？！」

看守の慌てた声に振り向けば、なんとユキコが無造作にハンムルに近づいていくのが見えた。

「ハンムル殿、頬を撫でる春の風が心地ようござるな」

「あん？　何だ、テメエは？」

ユキコの穏やかな声にハンムルは振り返る。

「ただの一人の女ですよ。まずは気を静められては如何かな？　折角の春の日差しが台無しです」

穏やかに一片の敵意もなく話しかけてくるユキコにハンムルは流石に戸惑う。

「あーん？　ふざけた事オ抜かしやがって、テメエもあの尼のようにされてえのか？　あー？」

凄むハンムルにユキコは動じる風もなく、ただ静かに佇んでいる。

「いえ、誰がハンムル殿を馬鹿にしているのか気になりましてね？
誰ぞに何か云われましたかな？」

「ぐむう……」

ユキコの表情に蔑みも恐れもない。

ただ純粹に穏やかな微笑みを浮かべていてハンムルは何も云えなくなる。

「さあ、誰が貴方を馬鹿にしているのか教えてくだされ」

「ぐ……みんなよ。俺ア生まれた時から日陰者、俺は何もしてなくてもみんなから莫迦にされて生きてきたんだ」

急に大人しくなったハンムルに、周囲は戸惑いを隠せない。

「親父はろくに働きもしねえクセにいつも遊んで歩いてた大馬鹿野郎で、俺が七つの頃に変な商売に手を出した挙げ句、ヤクザ者に叩つ殺された。母親は知らねえ、顔も覚えてねえ、匂いも覚えてねえ、乳をねぶつた覚えもねえ、いねえと同じさ。だから俺は日陰者だつてのよ」

信じられなかった。

さっきまで暴れていた狂人がユキコの前では大人しくなるところか、身の上話まで……

「日陰者は日陰者同士で連む以外に生きる術はねえ……みんなから嫌われ、馬鹿にされ、捻りに捻くれて『ブレインマッシャー』の出来上がりよう。さっきの尼だって、訳の解らねえ教典読むだけ読ん

で改心しろときた。俺アああいう高みから訳知り顔で物を云う奴が一番大嫌いなんだよお！」

ハンムルは憤怒の形相で地面を殴ると足下に微かな振動がきた。動揺するボク達を尻目にユキコはやはり穏やかな口調で云う。

「はて？ 貴方のどこが日陰者なのでしょう？ では、今貴方の頬を撫でている暖かなものはどこから来ているのですか？」

ユキコの言葉にハンムルはハッと顔を上げた。

「そう、太陽の光です。貴方はご自分を日陰者と云うけど、太陽は誰にも平等に光を与えてくれるではありませんか。確かに貧富の差、有能無能の差は有りますでしょう。しかし、それでも生まれつきの日陰者などいないですよ」

「陽の光……俺は日向にいても良かったのか？」

「ええ、自分を日陰者と云う事で貴方は逃げていたのですよ。貴方と同じ境遇でも精一杯お天道様の下で生きている者はごまんといますわ」

ユキコが云っているのはアンカー亭で働いている者達の事だろう。ハンムルは縋るような目でユキコを見ている。

「逃げていたのか、俺は……眩しい世界から日陰の世界へ……」

「ええ、貴方は初めから大手を振って日向の世界で生きる権利があったのですよ。それが出来なかったのは、生まれのせいでも、周りの嘲笑のせいでもなかったのですよ」

頂垂れるハンムルの顔を上げさせてユキコは太陽を指差す。

「さあ、今は何も考えずに陽の光を、温もりを楽しまれよ。春の風を一身に受けて心を静めなされ」

「太陽……風……そうか、今は春なんだなあ……」

ハンムルが眩しそうに目を細めた瞬間、ユキコの気配が変わった。

「せいっ！」

春の日差しを反射させて銀光が煌めき、岩のような大きな体が前のめりに倒れた。

「ハンムル……次も人として生まれたなら、今度は日向の世界で生きよ」

首の無いハンムルの断面から噴水のように血が噴き出すのを見て、ボクはユキコが一刀のもとにハンムルの首を刎ねた事を悟った。

しかもただ首を斬っただけじゃない。皮一枚ほど残している。だから首は飛んでいかず、ぶら下がるように前に落ちて、その重みで前のめりになったんだ。

ハンムルは既に絶命している。けどその表情は遠目でも解るほど穏やかな表情をしていた。

「殺伐とした刑場の中において、春を愛でさせつつ逝かせるとは粹ですな」

アランドラ君が心底感心した様子でユキコを賛辞する。

「いえ、彼があまりにも見苦しかったので……」

ユキコは血振りをくると、懷から白い紙を出して刃を拭った。
その時だった。

「畜生！ ハンムルはどこだ？！」

騒動の余韻が残る中、怒号が響く。

見れば十五、六歳程の少年が怒りの形相で刑場に入ってくる所だった。

これが勇者、いや、ユキコにとって腐れ縁の始まりだった。
オウカとはまた違う神の導きで召喚された『勇者』との邂逅である。

ユキコと『勇者』との間に如何なる縁えにしが結ばれているのか？
仲間を傷つけられて怒り狂う『勇者』を前にユキコはどう動くのか？

それはまた次回の講釈にて。

第壱拾肆章 初めての真剣勝負（後書き）

勇者こと桜花が初の真剣勝負を体験しました。

剣客の宿命といえども初めて人を殺した桜花の心情は計り知れません。

人の命を断つ恐ろしさを克服するか、それとも潰れるのか、はたまた心の箍が外れて道を踏み外すのか。

それを見て頂くためにも、今後この三姉妹の物語にお付き合いくださいませ。

第壱拾伍章 もう一人の勇者

刑場にいる看守達は二重の意味で驚き戸惑っている。

まず十数人の武装した看守をもともしない凶悪な死刑囚を一刀のもとに処したユキコに感嘆させられ、そして脈絡もなく登場した光り輝くド派手な甲冑を纏った少年に彼らの思考は停止した。

「ハンムル！ よくもよくもエルエーを！！ 殺してやる！！」

クセのある黒い髪、真つ赤な瞳……ここ半年程前から噂に聞く『勇者』の特徴そっくりだった。

彼もまた異世界から召喚されて神から聖なる槍『六星』を与えられたと評判を取っていた。

そして我々魔族は、と云うより魔界・ガルスデント正規軍はたびたび彼に辛酸を舐めさせられたという。

しかしまさか、こんな刑場で勇者と『勇者』がかち合う事になるとは思わなかったよ。

「見つけ……し、死んでる？」

『勇者』は首が落ちたハンムルを見て顔を青ざめさせた。

あー、ちなみに何で彼を二重括弧付きで表わしてるのかと云うと、勇者と勇者じゃ紛らわしいからね。

「はい、ハンムル殿は私が送りました。彼は最後の最後で穏やかな心を取り戻して逝かれましたわ」

ユキコが抑揚のない声で云うと、『勇者』はギョロギョロと視線を巡らせてハンムルの生首を見つけた。

「何でだ……何でこの人の皮を被った悪魔が笑って死んでるんだよ
お……！」

憎悪に顔を歪ませた『勇者』がハンムルの生首を蹴り上げようと
右足を振り上げた瞬間、彼の体が一回転して地面に背中から叩きつ
けられた。

ユキコが『勇者』の軸足を払いつつ背負うようにして地面に投げ
つけたからだ。

「そこもとが何者かは存知上げませぬが、死者の首を蹴ろうなど、
およそ人の所業とは思われませぬぞ……！」

『勇者』の鼻先に杖を突きつけてユキコが厳かに云う。

「う、うるさい！ コイツはエルエーを、周りがお前は勇者なんだ
から何とかしろと責め立てる中、一人だけ優しくしてくれたエルエ
ーをハンムルは……」

憎悪が籠められたかのように更に赤くなった瞳で『勇者』はユキ
コを睨む。

「エルエーなる人物が誰かは存じませんが、死者に鞭打てばそこも
との名が落ちるだけですぞ？」

ユキコは『勇者』に向けていた杖を引くとハンムルの生首へと足
を向ける。

『勇者』は悔しそうにユキコの後ろ姿を目で追うことしかできず
にいた。

「皆様、部外者が囚人の首を刎ねたる非礼をお詫び致します」

ユキコは深く頭を下げた後、かろうじて首と胴を繋いでいた皮を短剣で切り離し純白の布でハンムルの生首を包んだ。

「い、いや……ハンムルは我々も手を焼いていたのです。むしろ貴女の手を煩わせた事をお詫びする」

看守達のリーダーと思しき人物がまるで夢でも見ているような表情でハンムルの生首を受け取りながら答えた。

「しかし、斧でも首を一撃で斬り落とすのは至難の業なのに、貴女の剣は……否、恐るべきはその腕前ですか」

「剣術の稽古で真剣を許されるようになった頃から、よく亡父に罪人の亡骸を斬る修行を課せられてましたので……」

「なるほど、なるほど……では、貴女のような美しい女性が場違いなこのジャッジメント・スクエアに来られたのは？」

ユキコが何を云わんとしてるのか察した看守はハンムルの首無し死体に目をやった。

「ええ、据え物斬りの修行にハンムルの亡骸を所望したいのです」

ユキコの言葉を受けて看守達にどよめきが起こった。

「いくら死体でも、罪人をここから出す訳にはいきませんな。どうしてもと仰るなら……如何でしょう？　ここでその修行を行うのは？　我々も貴女の腕前を拝見できれば見取り稽古となりますので」

「それは願ったり叶ったりですね。亡骸を街に持ち帰るのは流石に憚られますしね」

その後、ユキコの指示で囚人を使って土を練り、人の膝くらいある高さの土台が作られた。

その上に薄いマットを敷き、ハンムルの死体が横たえられた。

「半刻もかからずこれだけの準備が出来るとは思っていませんでしたわ」

ユキコの劳いの言葉にいかつい囚人達は満更でもない顔をしていた。

「では、早速……フェイナン殿、出ませい！」

腹の底から出したユキコの声にフェイナン君はビクリと震えただ、観念したかのように剣を手前に出た。

にわかに起こったどよめきに視線を巡らせると、据え物斬りに興味があるのか数人の看守が並んでいた。

そこから少し離れた場所で『勇者』とその仲間らしき人達が憎しみを籠めた視線をハンムルの死体に注いでいた。

「フェイナン殿、相手は死骸、襲ってきません。恐れずに足を斬りなさい」

「は、はい……」

フェイナン君はしばらく目を泳がせていたけど、覚悟を決めたのか目を瞑って深呼吸をしてから大きく剣を振り上げた。

「いねー！」

「イヤアアアアアアアアアッ！！」

ユキコの声に触発されてフェイナン君は気合を發して剣を振り下ろした。

ガツという骨を叩く音がして、剣は骨に阻まれてハンムルの脛の中程で止まった。

「ぐ……つええええええええええええええええ！」

手に肉を斬る感触が伝わってきたのか、フェイナン君は剣を取り落として地面に吐瀉物を巻き散らした。

「これが人を斬る感触です。これが如何に恐ろしいかを自覚できずに人は斬れませぬ。明日までにその恐怖を乗り越えなさい」

「はい……肝に銘じておきます」

嘔吐した為に顔色は悪かったけど、フエイナン君の目はもう泳いでいなかった。

「次！ 巴、出ませい！！」

「はい！」

トモエと呼ばれて出てきたのは勇者だった。あれ？ 勇者のなまえってオウ力だったはずじゃ？

よく見れば勇者は気持ち肩幅が広くなったような気がする……ど

うなってるんだろう？

「巴、二の胴（腹部中央）を斬りなさい。ついでに『月影』の試刀をします」

「師範、畏まりました」

勇者は三日月のように反り返った黒い剣を抜くと、すうっと振り上げた。

勇者の顔がさつきとまるで違う。顔立ちの事じゃない。何というか男性的な精悍さがあつた。

「二の胴、いきます」

勇者はしばらく呼吸を整えていたけど、やがて剣気が満ちたのか裂帛の気合と共に振り下ろした。

骨を断つ嫌な音がして聖剣がマットに少し食い込んで止まった。

「おお！ 人間の胴が二つに！！」

看守達は驚きの声を上げる中、勇者は気難しそうに顔を歪めて振り返った。

「巴、『月影』は如何に？」

「うーん……正直、あんまり良くない。反りが強すぎる……なまくらじゃないけど名刀とは云いがたい」

勇者は落胆したように首を左右に振った。

神から授かった聖剣を評価するには酷すぎるものだけど、命を預

ける以上はそうも云ってられないのだろう。

「なるほど、特殊な力が籠められている分、剣そのものの造りは重視されなかったのでしょうね。あとは己を鍛えるのみね」

「それは望むところだけだな」

勇者は苦笑すると聖剣に水をかけて紙で拭くと鞘に納めた。

「では、最後に久しぶりに私が据え物斬りを行います」

ユキコは杖から刃を抜くと大きく振り上げた。

「両車、参ります」

両車とは下腹部の腰骨がある部分で骨が硬いところらしい。しかもハンムルの筋肉は硬く、鎧と云っても過言ではない。

「筑後は真典甲勢が作、二尺六寸……いざ!!」

骨を断ち斬る凄まじい音がして、ユキコの剣はハンムルの胴体を両断してマットを斬り裂き、土台まで達していた。

しかも勇者が斬った場所と比べて斬り口はほとんど開いてなく、茶褐色の液体が僅かに流れ出ただけだった。

ユキコの剣の斬れ味が鋭いだけじゃない。彼女の戦慄と感動を同時に味わわせる腕前があつての事だろう。

「ハンムル……そなたの肉体は我ら三人の剣士にとって大きな前進を促すものだった。亡骸を辱めた事はいずれ地獄で詫びるが、今は感謝しよう」

ユキコがハンムルの死体に頭を下げると、勇者とフェイナン君もそれに倣った。

「お手間を取らせました。これにて我らの据え物斬りの修行は終了でございます」

ユキコが一礼すると看守や囚人達から拍手が起こった。失禁している者までいる。

やはりユキコのような美人がこれだけの技を披露したんだ、恐怖よりも感動が大きかったんだろう。

「ちょっと待て！ 首を蹴ろうとした俺の事を貶しておいて、自分達は何をやってやがんだ！」

見れば『勇者』が豪華な装飾が施された槍を構えていた。

その槍の穂先は鋭く、陽光を反射して虹のように絶えず色を変えている。

「見ての通り修行ですよ。貴方のように己の感情を亡骸にぶつけた訳ではありません」

激昂する『勇者』にユキコは穏やかに返した。

「ふざけるな！！ 屁理屈ばかり抜かしやがって！」

あくまで穏やかなユキコに『勇者』は苛立ちを隠さずに叫んだ。

「では、どうすれば貴方は納得いくのです？ まさか、ハンムルの亡骸に怒りをぶつけさせるとは云いませんよね？」

「そんな事はどうでも良い！ ユキコって云ったよな？ 俺と勝負しろ！！」

「どこをどうしたら、そのような結論に達するのは私には判じかねますが、お断り致します」

ユキコはキツパリと云い放つとボク達を促して刑場から去ろうとする。

しかし、それを許さず『勇者』は槍を構えてユキコに躍りかかった。

「俺は精霊王・フステイシアに選ばれし『勇者』！ 聖槍『六星』を神から託された『勇者』・神楽坂勇人^{はやと}！！」

精霊王・フステイシア？

確か星神教に匹敵する勢力を誇るプネブマ教の最高神だったと記憶している。

木石は云うに及ばず、万物には精霊が宿っているって考え方の宗教だ。

早い話が精霊信仰であり、自分達の日々の営みは全て精霊の賜物としているんだ。

そして精霊王・フステイシアは人間の心にある正義に宿るなんて考えがまかり通っていたりする。

本来なら、自分の悪心を自分の正義で見張れって教えなんだろうけど、稀に、我が正義はフステイシアと共にある、なんて極端な解釈をする馬鹿な信徒がいるのも事実なんだ。

そう、今まさにユキコへ肉薄せんとする『勇者』のようにね。

ユキコは慌てるでもなく溜息を吐くと、『勇者』に背を向けたまま杖を振り上げる。

「ガッ?!」

無造作に振り上げたように見えたけど、杖の先端は『勇者』の鼻を見事に捉えていた。

「『勇者』を名乗る者が背後から襲うのですか？ 人はそれを『勇者』ではなく『卑怯者』と呼ぶのですよ？」

「チキシヨウ……」

『勇者』は鼻を押さえながら憎々しげにユキコを睨む。

「……それほど望むのであれば相手をするのも吝かではないですよ？」

ユキコの全身から殺気が放たれた。いや、それは殺気なんて生易しいものじゃなかった。

一流の剣士だけが持つ剣気がまるでこの場にいる者全てを縛り上げるかのように場を支配していた。

「ぐ……これだけの殺気、今まで倒してきたモンスターや魔族とは比べものにならない……」

『勇者』は槍を構えたまま固まって動けなくなっていた。

「少々大人げない気もしますが、聞き分けのない子供を叱るのも大人の役目……宜しい、その勝負、受けましょう」

ユキコは杖を手に無造作に『勇者』に近づいていく。

「どうしました？ 勝負をするのでしょうか？」

ユキコは穏やかに云うけど、『勇者』は蛇に睨まれた蛙のように脂汗を額に浮かせたまま動けないでいた。

「お名前から判断するに、貴方も私と同じ世界より召喚された方でしょう。なればご存知か？ 新免宮本武蔵様を」

ユキコの問いかけに『勇者』はかろうじて「ああ」とだけ答えた。

「宮本武蔵様は晩年、こう仰いました。『自分が生涯無敵だったのは自分より強い者と戦わなかったからだ』と……その言葉は、自分より強い者はいないと解釈できますが、自分より強い者との戦いを避けたとも解釈できます」

ユキコが一步踏み出すたびに『勇者』の顔が強張っていく。

「今の貴方に必要な事はまさに後者……自分で云うのもおこがましいですが、貴方は蛞蝓が獅子に喧嘩を売ると同じ事をしたのですよ？」

『勇者』の顔に恐怖が浮かんだ。

足は震えて、目は泳ぎ、全身が硬直している。

「そして、喧嘩というものは、買った側に喧嘩を終わらせる権利があるのです。つまり、貴方がどんなに許しを請おうとも私が許さなければ終わりません」

優しく微笑みかけるユキコに『勇者』は眦が裂けんばかりに目を

見開かせた。

「いざ、尋常に……」

ユキコは杖を腰に差し、一気に間合いを詰めて……
斬った！

そう思った瞬間、『勇者』は後ろに倒れて痙攣した。
極度の緊張のあまり失神したんだろう。

「兵法の極意は戦わずして相手に勝つこと……戦いを避ける以上の
上策は古今を通して未だにあらず」

今、解った。

ユキコはこの事を見越して必要以上に脅しをかけたんだ。
彼女は自分達と同じく勇者としてこの世界に召喚された彼を死な
せたくなかったんだね。

ユキコは気を失っている『勇者』の頭を慈愛の表情で撫でる。

「今日の事は必ず屈辱として貴方の心に残る。それをバネにして強
くなりなさい。私はいつでも貴方の挑戦を待っているわ」

ユキコは懐から出した紙に何事かを書き込むと『勇者』の手に握
らせた。

「では、今度こそ退散させて貰うわね？」

ユキコが『勇者』の仲間達に云うと彼らは複雑な表情で頷いた。

「お待ち下さい！」

立ち上がるユキコを白いローブに身を包んだ少女が呼び止めた。
ユキコは勇者達を先に行かせると、振り返って少女と対峙した。
ボク？ いや、何となくトラブルの臭いを嗅ぎ取ったからさ、新しい歌のヒントになればと思ってね。

「何かご用でも？」

「わ、私はハヤト様と共に旅をしている僧侶・エルエーと申します。まずは先程のご無礼をお許し下さい」

エルエー……僧侶……なるほど、彼女がハンムルに……
そう云えば顔は苦痛で歪んでるし、腰もいささか引けていた。

「無礼に無礼で返した私も似たようなもの。詫びられる謂われはありませんよ」

ユキコは柔和な微笑みを浮かべてエルエーに云う。

「それで？ “まずは”と前置きするからには他にも云いたい事があるのでしょうか？」

ユキコの言葉にエルエーは目を丸くした。

うーん、役者が違う……イニシアチブは完全にユキコが握っていた。

「は、はい！ 先程の恐ろしい修行を拝見致しました……正直に申し上げますと、怖かったです。怖かったのですが、私には解りませんでした！」

「何がですか？」

ユキコは何故か急に機嫌が悪くなって、表情を険しくする。

「貴女は私達に必要な方だと云う事を！ 私達、『宿命の六星』の中にいるべき運命を貴女はお持ちです！ ですから「お断り致します」え？」

エルエーは驚いてユキコを見る。

……ボクは見るんじゃないかった。

ユキコは嗤っていた。口の端を吊り上げて、まるで下弦の月を思わせる“笑み”を浮かべていたんだ。

「何を云い出すかと思えば……要は私の剣の腕を見て仲間に取り込みたくなっただけの話ではありませんか？」

「ち、違います！ こ、これをご覧下さい！」

エルエーがユキコに向かって右手に填めた指輪を見せた。それは黒い宝石が銀の台座に収まった物だった。

「これが私達の仲間、『宿命の六星』たる証です！」

指輪を、黒い宝石をユキコに近づけると、急に強い緑色の光を放って宝石の色が緑に変わった。

「やはり貴女は宿命に導かれた希望の……ヒツ?!」

エルエーの顔が恐怖に歪んだ。

ボクはまたも見なければ良かったと後悔した。

「生憎、私には何が起こったのか皆目見当が付かないのですが？」

更に口の端が吊り上がって“笑み”が強くなったユキコは静かに続ける。

「私は生来、目に光がありません。ですからご覧みじろと云われても困りますわ」

「か、重ね重ねのご無礼をお許しください！　し、しかし……ッ！」

言葉の途中でエルエーは完全に固まってしまった。

ユキコが両目を開いて翠玉エメラルドのような綺麗な瞳を見せていたからだ。

「残念ですが、私は既に徒党を組んで行動していますの。ここは縁が無かったと諦めてくださいまし」

ユキコは瞼を閉じて表情を消すと、ゆっくりとエルエーに背を向けて歩き始めた。

「何故、それだけの力がありながら、人の為にその力を使おうとなさらないのですか？！」

「失礼な……私は既に勇者と行動を共にしているのですよ。私は極悪人ではありませんが、二人の勇者の仲間を掛け持ちするほど慈善家でもありませんので」

エルエーの悲痛な叫びもユキコは軽く一蹴した。

「しからは御免」

ユキコはもう振り返る事なく刑場を後にした。

ボクは気になって彼らを見ると、悔しさと信じられないという思いが入り混じった顔をしていた。

何となくだけど、ボクはこれから先、ユキコ達と彼らがたびたび悶着を起こしそうな予感がした。

それにしてもと思う。

父上は召喚された二人の勇者を『ニンゲン、何するものぞ』と一笑に付していたけど、やはり彼らは危険だ。

勇者オウカ、『勇者』ハヤト、確かに今は未熟だし、倒された魔族も下位の者ばかりだった。

でも確実に力を付けてきている二人だった。

そしてオウカ、いやトモエ？ どっちでもいいか……オウカは元々の素質に加えて今日、人を斬った事で剣に凄味が増すことだろう。ハヤトにしてもここ半年の実戦に加えて今日、仲間を傷つけられ、ユキコに屈辱を味わわされた事で前よりも強くなろうとするに違いない。

奇しくも二人の勇者はユキコの手腕によって大きく前進する切っ掛けを与えられた事になる。

これを脅威と云わずに何を脅威と云えと。

うん？ ボクの雰囲気が変わったって？

そりゃそうさ、だってボクは父上、魔王・エミルフォンから派遣された刺客なんだから……

え？ 無理？ 『無能』の吟遊詩人に何ができるって？

何を云ってるのさ、ボクはね『無能』だからこそ父上に信頼されてるんだよ。

ボクは確かに教養もないし、武術だってカラキシさ。だからボクは誰からも警戒されないんだよ。

うん？ その顔だと漸く解ってきたようだね？

そつだよ。ボクは歌しか取り柄のない『無能』の者だから、どんな達人も全く警戒しない。

どんな猜疑心の強い者もしばらくすれば笑って気を許す。

後はターゲットの食事の中に無色無味無臭で銀食器を使っても変色しない毒薬を仕込んで仕事は終わりさ。

ボクは今までそうやって父上の政敵を倒してきたんだ。

しかも毒は遅効性で、量を加減すれば効果が現われる時間を簡単に調節できるからボクが怪しまれる事は無いに等しい。

ターゲットは臓腑から腐って死にゆくのみだ。

ボクは兄弟から莫迦にされて生きてきた。

『毒殺なんて恥ずかしい真似ができるなんて、お前は『無能』な上に卑怯者なのだな』

そう云ってボクを嘲り罵り兄弟達……

だけど、そんな屈辱も後数日で終わる。

まずは勇者の姉にして師であるユキコを討つ！

彼女の实力はスタローグ家の兄弟達によって魔界に知れ渡っていると父上からの使い魔によって知らされた。

魔界において名門中の名門と謳われたスタローグ家の言葉だ。誰も疑わずに受け入れている。

しかも彼らはユキコに敬意を抱いていると云っているんだ。

その事実から、『カスミ・ユキコ』の名は既に魔界ではかなりのビッグネームになっている。

二人の勇者が『勇者』という称号でしか呼ばれていない事を考えると相当なものなんだよ。

ましてや、あの大元帥・アポリュオンからも一目置かれているとなれば、ユキコの首の価値は一気に跳ね上がる。

そつだよ。あのユキコを討つたとなれば兄弟達も、いや魔界中が

ボクを見る目を変えるだろう。

さっきのハンムルじゃないけど日陰者はもう嫌だ！ 莫迦にされるのはもう沢山だ！

毒を仕込むのは明日の夕食！

フェイナン君の決闘が終われば流石に勘の良いユキコも気が緩むだろう……そこを狙う！

そしてユキコの死と同時にネムスの名も殺す！

もう誰にもネームレスなんて呼ばせない。

ボクは……ボクはエミルフォン？世になるんだ！！

ボクは腹の底にドス黒い殺意を隠して翌朝を迎える。

まずはフェイナン君の決闘を見届けなければならない。

しかし、決闘の地で思わぬ事態が発生する。

恐ろしい剣の遣い手を前にフェイナン君はどうなるのだろうか？

この決闘の裏に隠された事実は如何に？

それはまた次回の講釈にて。

第壱拾伍章 もう一人の勇者（後書き）

雪子のライバルってほどでもありませんが、旅路の腐れ縁ともいうべきキャラクターの登場です。

桜花以外は半分ビジネスで勇者をやっている霞家の面々と比較する為に、ありがちな熱血馬鹿という設定にしています。

初めから完成に近い力を持ち冷静な霞三姉妹と、いきなり召喚されて大混乱の極みにありながら持ち前の正義感を胸に仲間とともに苦難を乗り越えながら強くなっていく王道的勇者の隼人との対比を楽しんでいただけたら幸いです。

第壱拾陸章 決闘の果てに（前書き）

桜花視点に戻ります。

第壱拾陸章 決闘の果てに

桜花は真つ暗な場所に一人で立っていた。

桜花以外に誰もいない。桜花の他には何も無かった。

『いい……イテエよお……顔がイテエよお……』

「な、何？」

気持ち悪い『声』が聞こえて、桜花は周りを見るけど『闇』があるばかりだった。

『イテエよお……俺の顔があ……裂けたあ……イテエよお……』

「な、何なんだよ……」

『声』は段々近づいて来るのに、『姿』はまったく見る事ができないせいで桜花の胸の奥がざわついてきた。

『イテエよお……イテエよお……顔が石榴みてえに……割れたあ……』

怖くて怖くて体が動かない桜花の右肩をナニかが掴んだ。

『イテエんだよ……テメエに斬られて……顔がイテエんだよ……』

桜花の左肩にドンとナニかがのしかかってきた。

「ヒッ……」

桜花は怖くて思わず目を瞑った。

『よお？ 何、怖がつてんだ？ 怖くないはずだろお……だって、
テメエは俺を……』

桜花はその『声』に聞き覚えがあるような気がして、勇気を振り
絞って目を開けて左肩を見た。

桜花は斜めに顔を裂かれた男の人と目が合ってしまった。

『だって、テメエは俺を殺したじゃねーか!!』

「ヒイイイイイイイイイイイ?！」

桜花は自分が手にかけて盗賊に抱きつかれていたんだ。

「うわあああああああああああああッ!！」

桜花はもうなにがなんだか解らなくなつて、ただ一目散に逃げ出
した。

けど桜花の足は変な風にもつれて上手く走ることができなかった。

『つれねーなあ？ 俺の事を殺しておいて、そりゃねーだろ?』

盗賊のからかい声が桜花を追いかけてくる。

「ご、ごめんなさい！ 桜花が悪かったから、お願いだから来ない
で!！」

恥も外聞もなく涙を零して、涙まで垂らして桜花は必死に逃げ続

ける。

けど、もどかしいほど足は動いてくれず、とうとう桜花は盗賊に捕まってしまった。

『ヒヒヒ……俺だけじゃ寂しいからよお……テメエにも地獄に付き合って貰うぜえ?』

「きゃあああああああああああッ!」

盗賊が桜花を組み伏せると、彼の顔は腐り溶けて骸骨になって力タカタと笑った。

「へん! 情けねえなあ。お前も勇者なら、そんなくらい何とかしろよ」

「ほえ?」

聞き覚えのある『声』に桜花は顔を上げた。

「まったく……でも、いい場面で可愛い『妹』を助けるつてのも『兄』の特権だよな?」

聞き覚えがあるはずだよ。だって、今のは桜花と同じ『声』だもん。

「取りあえずは、だ……テメエは消えろ!」

『ギエエエエエエエエエエエエエエエエ!』

もう一人の桜花……ううん、巴が『月影』を振ると盗賊は刀身に

吸い込まれるように消えていった。

「大丈夫か？」

仰向けのまま呆然としている桜花の目の前で巴が笑いかけていた。

「あ、ありがとう……それと」

「それと？」

桜花は目の前にぶら下がっているモノを思わず凝視しながら続ける。

「巴、何で裸なの？」

「何でって、桜花も同じ格好なんだけど？」

「ええ?!」

桜花は初めて自分が一糸纏わぬ姿をしている事に気が付いた。

「な、何で?!」

桜花は胸を両手で隠しながら巴を睨んだ。

「お前、ほとんど同じ『存在』の俺に対して恥ずかしがるなよ……
ついでに俺の知覚したものは即ち、お前が知覚したものなんだぜ？」

云われて桜花は顔が火照ってしまった。

そうだった。桜花が今まで見聞きしてきた事は全て巴も知覚して

いて『知識』として残るんだった。

つまり脱衣所の姿見で見た桜花の裸は勿論、一人でお風呂に入る時につい出来心でしてしまう、あーんな事やこーんな事も巴には筒抜けだったって事……

「あつうつつ……」

「何、一人で混乱してるかな？ ああ、さっきの質問なんだけだよ。単純にお前が俺達の服を思い浮かべてなかったただけだろ？」

「ほえ？」

「だから、今俺達がかうして話してる段階で察しろよ？」

ええつとお……思い浮かべる？ 俺達？

桜花の目の前に巴がいる……

あ？！ そうか！

「これって桜花の……『夢』？」

「そうだよ。あんまり魔されてつから、俺の『夢』をお前の『夢』に干渉させてみりゃ案の定って訳さ」

そうだった。桜花は昼間に人を……初めて人を殺めた……

「あの『盗賊』は桜花の恐怖や罪悪感の表れなんだね？」

「そついう事！ なんだ、お前も存外頭が悪くないじゃないか？」

桜花と同じ顔が人の悪い表情でキシキシと笑った。

「なんだよ！ 同じ『自分』をからかって面白い？」

「わりいわりい、そう拗ねるなって！ でも、いくらか“怖い”のが薄らいだろ？」

巴の云う通りだった。

目の前に巴がいる事。そして『盗賊』がいなくなって桜花は少し楽になっていた。

「うん、巴のお陰で少し救われた……ありがとう」

「気にすんなって」

巴は更に陽気に笑った。

「それに何も俺だけの力じゃないぜ？ 気が付かないか？ 体が温かいだろう？」

云われてみて、確かに桜花は何か温かいものに包まれているような安心感を覚えた。

「ははは、起きてみるよ？ 今、お前は間違いなく“幸せ”の絶頂にいるはずだぜ？」

巴は片目を瞑る……確かウインクつてのをして笑った。

すると急激に周りが明るくなって、まるで引っ張られるように桜花の体が上に持ち上げられた。

「そら！ お目覚めの時間だ！」

「と、巴?!」

「じゃあな! 俺はいつでもお前そばにいる。危機に陥ったらいつでも助けてやるから頑張れよ!」

遙か下で巴が手を振っている。

「うん! でも、巴も桜花の事を気にしないで、いつでも『表』に出ておいでね!」

光に包まれながら桜花も負けじと巴に手を振り返した。

目を開けると優しい笑顔の雪子姉様と目が合った。

「目が覚めたようね? 魔されてたから心配してたのよ? もっとも昼間にあんな事を経験しては仕方ないとは思っけどね」

「ほえ? はえ?」

桜花の頭を優しく撫でる雪子姉様にちよつと混乱してしまった。

「ゆ、雪子姉様……添い寝をしてくれてたの?」

桜花の頬が急に熱くなった。

巴の云つてた“幸せ”ってこの事だったんだ。

「私も初めて据え物斬りをした時や初めて凶賊退治をした時も、こ
うやって兄様が震える私を抱きしめてくれたものよ」

雪子姉様は昔を思い出すような幸せそうな、それでいて辛そうな
微笑みをして桜花を抱き寄せた。

その時、桜花の胸に柔らかいものが押しつけられたのを感じた。

「ほえ？」

視線を胸元に持つて行くと、名前の通り雪のように白い雪子姉様
の胸と桜花の胸が押し合いへし合いしていた。

その事実を理解するのに、桜花は物凄い時間を費やした。

「わわ?! な、何で桜花達、裸なの?!」

「何でって貴女に温もりを与えるためよ? 恐怖に打ち勝つには近
しい人の温もりが一番って兄様が教えて下さったから」

ゆ、雪彦兄様……

「だ、だからって裸になったら寒いと思うんだけど……」

「あら? 貴女は寒かった?」

「そ、そんな事ないよ! 凄くあったかくて嬉しかった!」

桜花の言葉に雪子姉様はニツコリと笑った。

「でしょう？ 兄様も肌と肌の触れ合いこそが相手に温もりを伝える最良の方法だって仰ってたもの」

「ま、まさか……雪彦兄様も雪子姉様に……？」

「ええ、兄様はご自分の胸に私の胸を当てられて、「よくお聞き？ 拙者の心音とお雪の心音が一つになった時、恐怖は消えるでござるよ」とそれは優しく抱きしめてくださって……」

幸せそうに雪彦兄様との想い出を話す雪子姉様はとどまる事を知らなかった。

桜花は月夜姉様が朝食の時間を告げに来るまで雪子姉様の昔語りに付き合わされる事になったんだ……

もしかして雪子姉様から色恋の噂をまったく聞かないのも、雪彦兄様に懸想してたから？

そして雪彦兄様を想うあまり他の男の人に恋をする事が無かったから、手に口づけされたくらいで気を失うほど免疫が無い人になったの？

雪子姉様の最大の不幸は近くに雪彦兄様がいた事なんだね……

だって、雪彦兄様と比べたら大抵の男の人はみんな南瓜に思えちゃうんだから……

「嗚呼、雪彦兄様……」「お雪、お雪」と私の頭を撫でてくださった甘美な想い出を胸にお雪は今日も強く生きています！」

誰か助けて……こんな雪子姉様、見たくなかったよう……

朝食後、フェイナンさんは従業員達に激励の言葉を受けながら決闘に向けて精神を集中させていた。

この場に雪子姉様と月夜姉様の姿は無かった。

何故なら二人はもう決闘の場へと向かっていたからなんだ。

理由は決闘場に罠が仕掛けられたり伏兵がいなかを調べるためだよ。

もし、それらしい人を見つけたら二人は遅疑なく殺すと云っていた。

生きるか死ぬかの戦いなら伏兵なんて卑怯でもなんでもないけど、こと決闘では許される事じゃない。

だから罠があれば二人は一切容赦をしないだろうね。

「そろそろ出発の時間だ」

決闘の時間と馬車の速度を計算してアランドラ様がフェイナンさんを促した。

「はい……しかし不思議です」

「何がだい？」

フェイナンさんの顔には全く迷いが見えなかった。

昨日、桜花は完全に動揺して無様な戦いをしたのに……

「私と相手の力の差は歴然……なのに恐怖が無いのです。むしろ清々しい気持ちなのです」

「ふむ、昨日の据え物斬りの修行のお陰かな？」

「かも知れません。たとえ今日の決闘がどのような結果になろうとも、私はユキコ様に感謝の気持ちを持って死んでゆけるでしょう」

そう云って笑う Feynman さんの顔は美しかった。

うつん、元々顔の造作は綺麗だったけど、それとは別の美しさだった。

そう云えば死んだ父様が云ってたつけ、老若男女を問わず決死の覚悟をした者の顔は美しくなるって。

「行きましょう！」

Feynman さんは剣を携えて宿の外に出る。

「兄さん」

馬車の前で金色の髪を首の後ろで簡単に結わいた女の子が待っていた。

Feynman さんの妹で、今回の事件の渦中にいる フィーネ さんだった。

「フィーネ……行ってくる。今後は父さんの云う事をよく聞いて、皆とアンカー亭を盛り立てていってくれ」

「そんな！ そんな遺言みたいな事を云わないで！！ あたしの事は良いから決闘なんてやめて！！」

フィーネさんは泣きながらフェイナンさんに縋り付くけど、やっぱり引き離された。

「そうはいかない……確かに私は弱いさ、宿の経営にかまけてろくに鍛錬をした事がない。でも、私も漢おとこなんだよ。逃げるわけにはいかない」

「兄さん……」

「大丈夫！ 私はこの世界ではユキコ様の一番弟子！ 決して無様な戦い方をしてアンカー亭の名を汚す真似はしないさ」

フェイナンさんはウインクをして気持ちの良い笑顔を見せた。

「行ってくる！ アランドラ様、勇者様、行きましょう！」

フェイナンさんは真つ先に馬車に乗り込んだ。

『ボクも行くよ。フェイナン君がどう思っているかは解らないけど、ボクは君の事を友達だと思っている。だからこの決闘を見届けたい』

次により込んだのはネムスさんだった。

この人、時々雪子姉様の事を探るように見てたから油断できないと思ってたけど、今の彼は真摯な顔をしていた。

今、ネムスさんは打算なんて全くなくフェイナンさんの事を応援しているのが判る。

だから桜花も今だけは彼を信じる事にした。

「ネムス様……嬉しいお言葉、感謝の言葉もあります。失礼なが

ら、私もずっと貴方の事を友のように思っていました」

フエイナンさんとネムスさんは固く握手を交わしていた。
なんか良いなあ……こういう時、男の人が羨ましく思う。

「では、行こうか」

二人を優しげな目でしばらく見ていたアランドラ様の言葉を合図に馬車が動き出した。

「兄さん！ ご武運を！」

徐々に遠ざかっていき、フイーネさんの輪郭がぼやけてきた時、彼女から応援の言葉が聞こえてきた。

「フイーネ！ 達者で暮らせ！」

フエイナンさんは拳を握りしめて呟くように云った。

予定より半刻早く決闘場に着いた桜花達は累々と横たわる斬殺死体や黒コゲの死体を呆然と見つめた。

そのそばで雪子姉様と月夜姉様が憤懣やるかたないといった表情で立っていて、それをオーナーさんが宥めている。

その周りを困惑げに牧人達が囲んで、ざわざわと私語が飛び交っていた。

「スエズンはアンカー亭の Feynman 殿とは貴殿か？」

声の方を見ると長身で緑色の髪をした精悍な青年が歩いてきた。
この人が例の貴族なんだろうか？

「は、はい……あの貴方様は？」

Feynman さんが戸惑い気味に訊ねると、緑色の髪の方は跪いて頭を下げた。

「この度は愚弟が貴殿の妹御に大変な無礼を働き、お詫びのしようもない！　まずはあの馬鹿者の前に私が詫びよう！　申し遅れたが、私は聖帝陛下よりこの地のを預かるブレイズフォード家の嫡男、ベルサーハル・ブレイズフォードと云う」

ベルサー様は数日前まで次期領主としての勉強の為に世界各国を渡り歩いて様々な政略を学び、己の剣技を磨き続けてきたと云う。
ところが屋敷に戻って今回の事件を知って弟の愚行に驚き、更に理不尽な振る舞いをした弟を庇う両親を見て流石に呆れ果てたと云っていた。

その証拠に彼の凜々しい顔に僅かながら羞恥の赤が見え隠れしている。

「ほう、貴殿がブレイズフォード家、期待の星と謳われるベルサー殿か。私はアランドラ、貴殿の噂はよく耳にしている」

「な、なんと?!　真にアランドラ皇子ではありませんか!　この

件に関わりありと聞き及んでおりましたが……いやはや面目も御座いませぬ」

「いや、今は帝位継承権を捨てた只の男。貴殿が礼を尽くすには及びません」

なんと云うか、アランドラ様もベルーサ様も威風堂々としていて今更ながら桜花とは違う世界の人達だと思い知らされた。

「さて、此度の元凶を引き出す前に、更に詫びねばならぬ事態が出来^{つたい}した……もう察していると思うが、そこな数体の亡骸は愚弟が用意した伏兵だ。あちらに控えしユキコ殿とツキヨ殿が機転を利かさなければ、当家は恥の上塗りをするとところであつた。お二人にはいくら感謝してもしきれぬ」

ベルーサ様の顔に憤怒の色が浮かんだけど、それは一瞬の事ですぐに元の凜々しい顔に戻った。

「それから、私からアンカー亭に申したい事があるのだが、宜しいか？」

「はい……承ります」

神妙な顔のベルーサ様にフェイナンさんも表情を引き締めて答える。

「まず件のフィーネ殿の事だが、今日の決闘の結果如何を問わず当家に嫁入りさせる事が決定した。いや、私がそうさせた」

ベルーサ様の言葉に周りからどよめきが起こった。

「ただし、決闘だけは予定通り行ってもらう必要がある。貴族から決闘を申し込んでおきながら撤回しては沽券に関わるからだ。勝手な云い分だが宜しいな？」

ベルーサ様が念を押すとフェイナンさんは無言で頷いた。

「では、早速だが決闘を始める。ベルム、出よ！」

ベルーサ様の声に一人の青年がのろのろと前に進み出た。

ベルーサ様と同じ緑の髪を持っているから兄弟なんだろう。

つまり、彼が実の兄から愚弟と呼ばれ、フィーネさんを辱めた張本人！

少し小太り……ううん、相当な肥満体で脂のせいか顔がテカテカと光っている。

そのソバカスとニキビだらけの顔は不貞腐れていた。

「こやつこそ当家の恥晒しにして、貴殿の妹御を辱めた男だ。名をベルムと云う」

ベルーサ様の紹介にフェイナンさんは一瞬、怒りに双眸が燃えたけど、すぐに落ち着きを取り戻した。

「一度ならず誅する事も考えたが、今日の決闘に勝つ事ができたならば勘当だけで済ますと申してある」

「か、勘当?!」

驚きの言葉を発したのはフェイナンさんだった。

それもそのはず、フィーネさんが嫁入りする相手が勘当されては、

彼女はいつたいはどうすれば良いのだろうか？

「ああ、その心配には及ばない。フィーネ殿を娶るのはその下衆ではない。フィーネ殿は私の妻とする」

これにはフェイナンさんもアランドラ様も驚いた。
雪子姉様までも感嘆の表情を浮かべている。

「勝たれよ、フェイナン殿。私は妹御の為に命を賭けんとするそなたと義兄弟の契りを交わしたい」

「身に余るお言葉、かたじけなく思います」

まるで古くから見知っているかのように、穏やかに微笑み合うベルーサ様とフェンナンさんをベルムは忌々しげに睨みながら唾を地面に吐き捨てた。

「審判は第三者たる私が務めまする！ 双方、異存はござるまいな？」

雪子姉様の凜とした声にベルム以外の全員が頷いた。

確かに雪子姉様は盲目だけど、それでも並の人間よりも遙かに信頼できる審判である事は桜花が一番よく知っている。

「では、双方とも出ませい！！」

雪子姉様の静かだけどよく通る声にフェイナンさんがまず前に進み出た。

「霞流……フェイナン！」

フエイナンさんが霞流を名乗るのは一昨日、半端にかじってた牙狼月光剣を捨てて霞流に入門したからなんだ。

続いて酷薄そうな細い眼を憤怒で吊り上げながら、のそりのそりとベルムが進み出た。

「ヘン！ 平民の分際でボクに楯突きやがって！ お陰でこんな目に遭ったんだ……手足を斬り落とすだけじゃ許さないならな！」

「ベルム！！ 最低限の礼儀ぞ！ 貴様も名乗らぬか！！」

ベルーサ様の叱責にベルムは一瞬、首を竦めたけど、すぐに不貞腐れた顔で小さく名乗りを上げた。

フイーネさんだけでなく、今まで少なくない数の女性を手籠めにしておきながら自分が悪いと思ってないのは桜花でもすぐに判った。ベルムの態度は不当に罰を受けているという気配がありありと見えた。

それが貴族として生まれたせいなのか、単に過保護に育てられたせいなのかは分からない。

「両者、構えられよ」

右手を天へかざしながら発せられた雪子姉様の声にフエイナンさんは大上段に構えて目を瞑り、対してベルムはサーベルの先端を突き出して半身に構えた。

こうして構えを見ると、ベルムが只のスケベデブでない事が判る。サーベルを盾にするような構えは如何なる斬撃にも素早く対応できるに違いない。

相手の一撃を払いつつ、間髪入れずに一步踏み込んで突きへと移行するための構えと見た。

しかも、ベルムの巨体は構えと併せてまるで敵に見える。

恐らく幼い頃から血反吐を吐くほどの稽古を続けてきたように察せられる。紛う事なき強敵だ。

ただ、これ程の修練を積んだ人が何故、鬼畜の所業を重ねたのか

……

「残念だよ……」

桜花は流派は違えど同じ剣の道を歩んだ者として、それだけが哀しかった。

「いざ！ 始めい！！」

雪子姉様の合図が春の青空に轟いたけど、両者はまったく動かなかった。

フェイナンさんは大上段に構えたまま必殺の氣勢を見せずに動かず、ベルムも後の先を取る構えの為に自分から動くことはしない。

「持久戦になりますな」

アランドラ様の言葉に桜花は頷いた。

「でも不思議……いくら雪子姉様にシゴかれたからと云っても、一朝一夕であんな構えができるようになるのかな？」

「確かにフェイナンからは一分の隙も見出せませぬな。あの構えの前では私とて攻撃を躊躇います」

フェイナンさんはただ剣を振り上げているだけなのに、ベルムは攻めあぐねている。

闘志も殺気もまるで感じられない。それが却って不気味で……
うっん、違うね。とても厳かで清浄な気配は一流の剣客と対峙しているようだった。

「ぐ……」

ベルムが呻き声を上げて、額から脂汗を滴らせている。
フェイナンさんの透明な気配にどう斬り込んだら良いのか判らないんだ。

やがて太陽は西に傾き始め、徐々に赤みを差していった。

「もう半刻も動いてないよ……みんな、そろそろ限界みたい」

そろそろどころか、極限まで張り詰めた緊張感に牧人達の中には
気絶しているのもいた。

ベルムは益々脂汗をかいて表情を歪めている。

対して、フェイナンさんは涼しげな気配のままピクリとも動いていない。

「はわああああああ……」

ブレイズフォード家の侍女らしい人がへなへなと腰砕けに気を失ったのを合図にベルムが動いた。

「ま、参った！ 恐れ入った……！」

「それまで！！ 勝者、フェイナン殿……！」

「はへ？」

ベルムが降参して雪子姉様がフェイナンさんの勝利を宣言すると、
当のフェイナンさんはただ気の抜けた声を出したただけだった。

「わ、私の勝ち？ 私が勝ったのですか？」

「その通り、文句なしに貴方の勝利です。ベルム殿はこの通り、負けを認めたのですからね」

ベルムは地面に座り込んで汗だくになりながら荒い呼吸を繰り返している。

フェイナンさんは未だに信じられない様子で雪子姉様とベルムを何度も交互に見ている。

「あ、あの……誠に云いくい事なのですが……」

「自分があやふたになんてならなかった……『風』は感じるままだし、『闇』が無くなるわけがない……そうですね？」

雪子姉様の言葉にフェイナンさんは勿論、桜花もアランドラ様もネムスさんまでも呆気に取られた。

「当然ですわ。目を瞑っただけでそのような境地に至れるのなら、私なんぞとつくに仙人になってますよ」

「ゆ、雪子姉様？ どういう事？」

桜花の問いかけに雪子姉様は悪戯が成功した子供のような笑顔で答えた。

「知れた事。フェイナン殿は死の覚悟ができていた。つまりは心の

持ちようが『自然』に最も近い状態だった」

「はあ、どちらかと云うと“どうにでもなれ”の精神でしたが……」

フエイナンさんは複雑そうな顔でそう云った。

「そして大上段の構え……こんな構えで後の先を取ろうなんて流派はまず無いでしょう？　だから、なまじ剣をかじっている者には隙が無いように錯覚する」

桜花は頭を金槌で殴られたような衝撃を受けた。

お、桜花も隙が無い構えだと思ってたし……

桜花の心が乱れている事に気付いているのかいないのか、雪子姉様の説明は続いた。

「いつぞやの続きです。『中の位はいまだ用には立たざれども、我が不足目にかかり、人の不足も見ゆるものなり』……中の位というのは、自分の足りない点に気付き、人の足りない点も気付く者のことを云う……徐々に剣術が面白くなってくる時期です」

「私も覚えがありますね」

「私もです」

雪子姉様の言葉にアランドラ様とベルーサ様が応えた。

「更に『上の位は我が物に仕なして自慢出来、人の褒むるを悦び、人の不足をなげくなり。これは用に立つなり』……上の位とはすべてを自分のものとし自慢し、人にも褒められる者のことを云います。自分の腕に自信を持ち始める時期です」

雪子姉様は神妙な面持ちで続ける。

「実はこの時期が一番怖い……己の剣に慢心し、驕り、下位、中位の者を貶す。まさしくベルム殿の剣がこれに当て嵌まりまする」

これにはベルムもカツと目を見開いて雪子姉様を睨んだけど、暖簾に腕押しだった。

「ベルム殿は自分の技量に満足し、その力を持って傍若無人に振る舞った……この界限では恐らく無敵でしょう。並の剣士では齒が立たない事はすぐに判りました」

雪子姉様がベルムへ顔を向けると、彼は気まずそうに顔を逸らした。

「三日前、ベルム殿の事を聞くに及んで私はそこもが上の位に位置する剣士と推測致しました。確かに素人を達人に勝たせる事は至難の業です。私でも不可能です」

フエイナンさんは何とも云えない表情を浮かべている。

「ですが、遣い手が増長慢ならばいくらでも策の立てようがありません。上には上がいる事を知らぬ井の中の蛙には未知なる技を見せるのが一番ですからね」

雪子姉様はオーナーさんが差し出した水を一口含んで続けた。

「ベルム殿、貴方は死を覚悟した者が心静かに見せた構えに戸惑った事でしょう。ましてや実戦ではあまり遣われない大上段の構えに

攻めあぐねたはず……加えて、貴方の必殺剣『飛龍の爪』は相手の斬撃を払ってすぐさま喉笛を決る『待ち』の剣法、ただ構えて心穏やかにしていただけただけのフェイナン殿の前ではまったくの無意味」

「ぼ、ボクの必殺技まで知ってたのか？」

ベルムはガクリと頂垂れた。

「知っているも何も、『飛龍の爪』の悪名はスエズンに轟いておりまずぞ。本来、自分の得意技は隠しておくもの、アチコチで自慢して回っては攻略法を編み出せと云うも同義！『上々の位は知らぬふりして居るなり。人も上手と見るなり』と云う言葉があり申す！上の上の位という者は自分の強さを表に出さずとも、人は強いと思うものです。そこもとは高貴な家柄に生まれながら、その性根の卑しさ故に婦女を拐かして犯し、乱暴狼藉を働く！悪事、千里を走ると云います。今日の敗北は天命と知りなさい！！」

「ユキコ殿……もしやフェイナンの件で相談を持ちかけた時には？」

アランドラ様の問いに雪子姉様は頷く。

「左様、道中、馬車の御者より聞いて存じておりました。ただ相談を持ちかけられた時、悪名高いベルム殿とアンカー亭を襲った不幸の元凶が同一と知って、流石に驚きましたけどね。後は素人でも『飛龍の爪』を破る策を編み出すだけ……もっとも此度の策はフェイナン殿のお覚悟とベルム殿の性格があつてこそ……何はともあれ、お見事でしたぞ、フェイナン殿」

雪子姉様は扇子を開いてフェイナンさんを褒め称えた。

「ありがとうございます！ 初めは複雑な思いでしたが、師匠の言葉聞くにつけ、剣術の奥深さの片鱗を垣間見る事ができた気がします！」

「うむ。では、今日のご褒美に残る言葉も伝授しましょう。『この上に、一段立ち超え、道の絶えたる位あるなり』ですよ。『その道に深く入れば終に果もなき事を見つける故、これまでと思ふ事ならず。我に不足ある事を実に知りて一生成就の念これなく自慢の念もなく卑下の心もこれなくして果たすなり』…… 上の上の位の上に極位の境地というものがあります。まだまだ道は深く終わりのないものと悟り、満足せず日々修行と思い、心静かに生涯励むと云うものです。剣に限らず、全ての道に通ずる言葉と云えるでしょう。私なぞこの境地に至るまで、後どれだけ年月が必要になることやら…… 真、道を究めると云う事は難しいものですわね」

そう云って雪子姉様は静かに微笑んだ。

「ふ、ふざけるな！！ イカサマだ！ インチキだ！ あんな卑怯な策を使われて負けを認められるか！！」

突然、ベルムがサーベルを振り回して叫んだ。

「見苦しいぞ、ベルム！！ まだ判らぬのか？ 貴様はフェイナン殿に負ける以前に己の慢心に負けていたのだ！！」

ベルーサ様が叱責したけど、完全に頭に血が上っているのか余計に喚き散らす始末だった。

「うるせえ！！ いつもいつも兄貴風吹かして聞いた口を利きやつて！！ テメエのせいで俺がどんな思いをして生きてきたのか解

「らねーだろー!!」

「なっ?！ 血迷ったか！ それが貴族の口にする言葉か?!」

ベルムの眼に段々と狂気が宿っていくのが解る。

怒りと憎しみを籠めてベルムはベルーサ様を睨み付ける。

「うるせえってんだよオ!! 俺が貴族? ハン! そりゃ家は貴族かも知れねーが、俺は違う! 俺は親父が気紛れに買った娼婦の腹から生まれたのよ!」

「な、なんだと……そんな訳が「あるんだよ!!」」

動揺するベルーサ様をベルムの嗔声が遮った。

「俺は餓鬼の頃からずっと不思議に思ってた……お袋が、いや、アントラの母親が俺を見る時に見せるあの害虫を見るような目……初めは嫡男ではないからだと思ってたが違ってた!! 五年前、俺は親父に呼ばれて親父の書斎に行った。だが親父はいなかった。そして見つけたんだ、親父の日記を……これ見よがしにわざわざ鍵まで外して机の上に無造作にな!! 好奇心に負けた俺は親父の日記を読んだ……いや、あれは日記なんかじゃねえ、俺の行動を克明に記録した『観察日誌』だったんだよ!! 俺は親父の実験動物だった!!」

「ベルム殿、そなたのお父上は何の為にそなたを?」

アランドラ様の問いにベルムは背筋の凍り付くような無表情を見せた。

「さつきも云ったが俺のお袋は娼婦よ。それも二目と見れねえ、ぶ厚い化粧をした五十も過ぎた因業婆アよ！ 盗む、騙すは当たり前男がなければ一晩持たず泣き叫ぶ醜い鬼婆よ！！ 親父はな……人の貴賤が『血筋』で決まるのか、『育ち』で決まるのか、それを知りたかったのよ！ だから『女』として『人』として最低最悪な婆アを下男に抱かせて俺を生ませたのさ！」

ベルムの告白にベルーサ様は顔を青ざめさせ、桜花達も絶句させられた。

雪子姉様は……月夜姉様と何か囁き合っていた。

「そして俺はブレイズフォード家の次男として育てられた。昔は良かったよなあ？ アンタとは仲が良かったし、その審判さんの云うように剣の修行は厳しかったが楽しくもあった……」

ベルムは一瞬だけ優しく昔を懐かしむ顔になった。

「だが、あの五年前……アンタが親父に命じられて世界を学ぶ為、放浪の旅に出た直後よ。あの『觀察日誌』を読まされた……解るか？ その時の俺の怒りが！ 絶望が！！」

しかし、次の瞬間には夜叉のような形相になっていた。

「五年前……云われてみれば貴方の悪い噂が立ち始めたのはその頃からだった」

フエイナンさんは呟くように云った。

「そうよ！ 俺は胸を、いや、全身を駆け巡る怒りをどこかにぶつけたかった！！ だから俺は心が命じるまま食い、飲み、奪い、人

を殺し、手当たり次第女を犯した！！ 貴族のお坊ちゃまとしてお上品に育てられた俺だったがよ……結局、下賤の子は下賤、心から欲しいのは旨い物と女！ 心が望むのは暴力と破壊！ それが俺様よ！！」

「父上はなんと恐ろしい事を……人の在り方をそのような方法で試すとは！！」

ベルーサ様もまたベルム同様、絶望を味わわされている。

これが人のする事なの？ 星神教の神様はこんな『宿命』をベルムに与えたっていうの？

「今まで好き勝手やってきた俺だったけどよ……勘当されるんじゃない、ここまてだよな？」

ベルムはサーベルの先端をベルーサ様に向けた。

「聞いての通りだ……俺は下賤、親父の望んだ通りに堕ちるだけ堕ちた……俺は貴族なんかにやなれなかったのさ……後は俺の望みを叶えるだけ」

ベルムの顔はまるで氷のように表情が消えていた。

「俺は親父の望むように踊った。今度は俺の番だ……俺の人生を玩具にしてくれた礼は……親父の最も大切なものを壊す事で返すぜ」

ベルムは殺気も殺意も見せずに、無拍子に疾風のような突きをベルーサ様へと繰り出した。

サーベルの先端はベルーサ様の左肩を貫いた。

フエインサンさんとベルムの決闘はフエインサンの勝利で幕を閉じたはずだった。

けど幕は閉じていなかった。ううん、今こそ幕が上がったんだ。人を人と思わない実験の復讐に走るベルムの怒りはどんどん加速していく。

深手を負ってしまったベルーサ様の運命は？

この兄弟の悲劇はどのような終末を迎えるのか？

それはまた次回の講釈にて。

第壱拾陸章 決闘の果てに（後書き）

まず初めて人を殺めた桜花の救済は、双子の片割れにして同一存在である巴によってもたらされました。

もつとも、それは桜花の負担を半分持つてあげているだけの話でして、本当の意味で立ち直るには桜花自身の力以外にありません。次にフェイナンの決闘は、雪子の策が決まって彼の勝利で終わりました。

しかし、悲劇はまだ終わっていません。

本性を露わにしたベルムがベルーサに襲い掛かります。

果たして彼らの未来はどうなるのか、次回をご期待ください。

第拾漆章 雪月花の三姉妹、大敗を喫する

左肩の傷を庇うベルーサ様の右手はあっという間に鮮血で赤く染まる。

ベルーサ様の顔にあるのは激痛と困惑ではなく、哀しみだった。

「な、何をする、ベルム?!」

「決まってるだろ? 復讐さ……ブレイズフォード家の嫡男、ベルーサを殺せば親父も地獄を味わうだろう? 自分が殺されるより苦痛だろうぜ?」

「やめよ! これ以上の無体はよせ!」

ベルーサ様は必死に訴えるけど、ベルムは聞こえていないかのようにならうに何度も突きを繰り返している。

「ほら、ベルーサさんよ? 反撃しねーと蜂の巣になるぜ?」

「やめよ、ベルム!! 私は兄ぞ! 弟を殺せるはずがなろう!」

「だから何度も云ってんだろ?! 俺とアンタは血が繋がってねえ!! そもそも住む世界が違っただよ!!」

ベルムの攻撃は苛烈を極めてベルーサ様の傷の数がどんどん増えていく。

今は浅手で済んでるけど、出血が激しいからいつかは力尽きて突きの餌食になってしまう。

「血筋なんてどうでも良い！！　そなたは私の弟だ！　思い出せ、昔のお前は皆に平等で優しい笑顔を見せていたではないか！！」

「昔は昔！！　もう過去へは戻れねえ！！　俺は外道よ、悪党よ！！　生まれついでにの賤民なのよ！！」

鈍重な外見とは裏腹に風のような身のこなしのベルムは華麗な舞を舞っているように見えた。

まるで雪子姉様の剣舞を見ているようだよ。

「それでも！　お前は私の弟ガハツ！！」

ベルムの回し蹴りがベルーサ様の鳩尾を捉えて吹き飛ばした。

「これで最後だ……これでアンタは終わりだ……」

ベルムは能面のような顔になって半身に構えサーベルを持った手をダラリと下げた。

「……秘剣『疾風迅雷』」

ベルムは殺意も殺気もなく無表情に呟いた。
もしかして、さっきの無拍子の突き？！

「さらば、兄上！！」

ベルムの両目が見開いて恐るべき突きが繰り出された！
速すぎる！！　もし受けるのが桜花だったら、とてもかわせそうにない！

「ベルム!!」

なんとベルーサ様がベルムの突きを左手で受け止めた瞬間、『疾風迅雷』以上に凄まじい神速の突きがベルムの心臓を貫いた。

あまりの光景にフェイナンさんとネムスさんは驚愕に目を見開き、姉様達やアランドラ様は痛ましそうに目を閉じた。

「ベルム……兄上と呼んでくれたな？」

「さ、流石はベルーサハルブレイズフォード……自慢の兄上です。よくぞ弟の非道を正して下さいましたな……」

ベルーサ様に抱き起こされたベルムは憑き物が落ちたように穏やかに微笑んでいる。

「そなた、初めから死ぬ気であつたな?! アンカー亭の事件において、いたずらに解決の引き延ばしをしていたのも私の帰国を待つの事か？」

「ち、血は繋がってなくても……長年、兄弟として過ごしたお陰ですかな……近々、兄上がお帰りになるような気がしていたのです」

ベルムは大きく咳き込んで、口から血の塊を吐き出した。

「ベルム! もう喋るな!!」

ベルーサ様の言葉にベルムは力無く首を左右に振った。

「心臓を貫かれては助かりますまい……ならば死す前にやるべき事

を……」

ベルムは懷から自分の血に濡れた金の鍵を取り出すとフェイナンさんと呼んだ。

「フェイナン殿……妹御にはむごい事をした……私が許されないのは当然の事なれど……償いだけはさせて頂きたい……」

フェイナンさんはベルムを憎んで良いのか、その死を悼めば良いのか判らないといった表情で鍵を受け取った。

「す、スエズン……中央区に、私の所有する蔵がある……それはその鍵だ……中に私の今までの非道を記した物と財産がある……」

ベルムは更に血の塊を吐き出した。顔色も土気色になり、余命幾ばくもない事が察せられた。

「それを……私に殺された者の家族や……私に犯された女性達に……分配して頂きたい……勝手な事を申すなとお思いであろうが……死にゆく者の願いです」

「ベルム様、私も本音では貴方をまだ許せません……しかしながら、それとこれとは話が別！ご安心ください。私が責任を持って貴方の償いを代行致します」

「かたじけない……」

ベルムの表情が僅かに和らいで目尻から涙が一粒零れた。

「兄上……愚かな弟にさぞ失望された事でしょう……」

「ベルム……ああ、失望しなかったと云えば嘘になる」

「兄上らしい答えです……私も『観察日誌』を読んで、それでも数ヶ月は貴族たらんと生きてきました……しかし、何かが私に囁いたのです……『いくら貴族の振りをしようとも、お前は所詮、下男と老いた娼婦の子』と……『だから、お上品に振る舞ってないで自分のしたいように生きる』と……思えば……それは私の『心』の弱い部分が私自身を誘惑していたのでしょう……私はその誘惑に勝てなかった……なんとも愚かな男です……」

ベルムの目から光が消え始める。
間もなくベルムは永遠の眠りに就く……

「そうだな……お前は愚かだ。人に貴賤はない！ あるとすれば、それは己の『心』の在りようだ！ たとえ、誰の血が流れてようと
お前はブレイズフォード家の男なのだ！」

「ははは……う、嬉しゅう御座います……私は多分……兄上にそう
云って欲しかったのやも知れませぬ……」

ベルムの全身から力が抜けたように、くてつとベルーサ様に体ごと預けてきた。

そして最後の力を振り絞るように雪子姉様を呼んだ。

「おお、ユキコ殿……一つお願いがあります……」

「はい、拝聴致しましょう」

ベルムの言葉を聞き漏らすまいと、耳をそばに近づける。

「父上を……止めてくだされ……おぞましき実験の犠牲者たる兄弟が他にも……悲劇をこれ以上繰り返させぬよう……父上を……ユキコ殿にしか頼めぬこと……」

「お引き受け致します。必ずや貴方様のお父上を止めてご覧にいきましょう」

「ありがたい……報酬は……私の財産からお受け取りを……金貨百枚はくだらぬはず……」

まさかベルムは雪子姉様の裏稼業を知っている？

うつん、違う。死に瀕すること雪子姉様から『地獄代行人』としての匂いを嗅ぎとったのかも知れない。

ベルムは心残りが無くなったようで、まるで幼い子供のように微笑んだ。

「ベルム!!」

「最期に……私の人生に幕を降ろして下さったのが兄上とは……私は果報者に御座います」

ベルムは静かに瞼を閉じた。

「ベルム？ ベルム？ ベルム?!」

ベルーサ様は何度もベルムの体を揺すったけど、彼の命の灯火が消えている事が理解できたのか、号泣しながらベルムの名を叫んだ。いつの間にか桜花の目から涙が溢れていた。

桜花だけじゃない、フェイナンさんもネムスさんも月夜姉様もア

ランドラ様もベルムの死を悼んでいる。

雪子姉様の姿を搜すと、宵闇の中をゆっくりと歩いていた。

雪子姉様の向かう先には大きな湖があつて、その畔に豪華なお城が建っていた。

「雪子姉様……」

雪子姉様の背中を見て桜花には判った。

物凄く怒っている……ここまで怒っている雪子姉様を桜花は今まで見た事がなかった。

（姉様は許せないですね）

月夜姉様が後ろから桜花の両肩に手を置いた。

その手は優しく乗せられてたけど、月夜姉様の怒りが充分過ぎるほど伝わってきた。

桜花はベルーサ様のお父上の………確実な『死』を予感した。

Feynmanさんとベルムの決闘が終わったその夜、ネムスさんが歌を聴かせてくれた。

ベルムの事を思うと、とてもお祝いするって気持ちにもなれず、まるでお通夜のような雰囲気だったので、それを振り払おうとするネムスさんの心遣いだった。

あの後、ベルーサ様のお父上の訃報が届けられた。

彼は自分のサーベルを自らの胸に深く突き刺して果てたそうだよ。彼もまた罪悪感に苛まれていたのかも知れない。己のくだらない実験のせいで一人の人間を絶望の淵に追いやり、数多くの犠牲者を出した事で自分を責めていたのかも……

その証拠にベルムの暴走が始まって間もなく彼はどんな病に冒されようと医者と呼ばず、薬も飲もうともしなかったって記録にあった。彼なりの贖罪だったんだろうね。

彼の日記には、ベルムが殺めた人達の影が見えるとか、ベルムに犯された女性の悲鳴が聞こえるとか、幻覚や幻聴に悩まされている様子が生々しく書かれていた。

そこへ屋敷の警護を潜り抜けて、誰にも気付かれず彼の部屋に現われた雪子姉様に恫喝されてついに張り詰めていた糸が切れてしまったんだろうね。

「ブレイズフォード家当主もまた弱い人だったのよ。人の貴賤をそのような手段で試したのも、自分自身の存在価値を認識しなかったから……」

「自分に自信を持てなかった？」

桜花の問いかけに雪子姉様は侮蔑の“笑み”を浮かべた。

「この世界はね、男と女の他に第三の性が高確率で生まれるそうなのよ」

「第三の性？」

話の流れを断ち切るような雪子姉様の言葉に桜花は困惑する。

「男女の機能を併せ持つ完全なる雌雄同体。この世界の人間の二割が両性具有なんだそうよ」

「そうなんだ……」

「そしてブレイズフォード家当主も両性具有だったのよ」

思わぬ新事実に桜花達は何も云えなくなった。

「彼は昔、聖帝陛下に恋をしていたそうでね、何度も何度も自分を売り込んでいたらしいわ」

桜花はどうにも陰間（男色の意）しか連想できなかった。

「彼のしつこいくらいの自己主張にとうとう聖帝陛下は辟易されて、つい云ってしまったのよ」

「下がれ、下郎……」

聖都スチューデリアの中でも位が相当高かった彼はその言葉に動揺した。

自尊心は打ち砕かれ、惨めな思いをさせられたらしい。

「やがて聖帝陛下のお心を止めることを諦めた彼は『女』であることを捨てた。捨てざるを得なかった」

貴族は勿論、軍人や平民も側室に迎え入れているのに自分だけは歯牙にもかけられない。

かけられたのは下郎の二文字か。

その頃からブレイズフォード家当主は人の貴賤にこだわるようになっていったという。

陛下御自らの口から『下郎』と賜った彼は劣等感を抱くようになり、いつしか『下郎』は『下賤』へとすり替わっていったからだ。

「人の貴賤をどうこう云う前に彼は……『人』を捨ててしまっている事に気付いていなかったのよ」

「そしてベルムの暴走を知り、彼は己の所業が如何に人の道から外れていたのかをようやく思い知らされた」

アランドラ様が雪子姉様の言葉を引き継いだ。

「あのベルムも五年前までは実直な男で、人に貴賤無しと誰にも平等に接する貴族の鑑、帝室も見習うべしと我々に評価されていたのですよ。それがあのように豹変するとは……思えば彼なりの合図だったのかも知れませぬ。暴飲暴食にとどまっている段階で誰かが彼の苦しみを察していれば……」

アランドラ様は哀しげに溜息を吐いた。

「結局……この世でもっとも恐ろしい魔物は人の『心』そのもの……父様の遺された言葉通りね」

「人の『心』こそが魔物……なるほど、そう云えるかも知れませぬな」

アランドラ様の相槌を受けて雪子姉様は歌い続けるネムスさんに顔を向けて続ける。

「人の『心』は弱い……弱すぎる。だから時として誘惑に負ける。邪心に身を委ねてしまう……私も『闇』に堕ちている者として彼らの事は他人事ではない。一流派の免許皆伝を許されているとは云え、それで我が『心』まで強くなったとは思えない……否、私は全てにおいて覚悟が足りぬ未熟者……私もまた弱い。私もベルムと同じ道を辿らないという保証はない。が、幸運な事に私には月夜と桜花、そして巴という素晴らしい家族がいて私を支えてくれている」

「雪子姉様……」

桜花はその言葉に思わず雪子姉様に抱きついた。嬉しかったのは月夜姉様も同じだったみたいで、桜花の反対側から雪子姉様に抱きついていた。

「弱い者は弱いなりに支え合って生きていける……ブレイズフォード家の不幸はその支えが無かった事。弱き者は支えが無ければ僅かな切っ掛けですぐに堕ちてしまう。もともとこの世で真の意味で強い者などいないでしょうけど。身体的であれ、精神的であれ、どこかしら弱い部分があるものなのよ。逆に云えば弱いだけの人もいないのだけだね」

雪子姉様は再びネムスさんに顔を向ける。

「例えばネムス殿は戦闘能力には乏しいけど、彼の歌は絶品でしょう？ それに哀しい過去を自分なりに決着を付けて歌にできる精神的な強さは羨ましいものがあるわ」

「え？ 今、何て？」

ネムスさんは歌とギターを止めて、心底驚いたように雪子姉様を

見た。

「貴方の歌が絶品って云ったのよ」

『そ、そうじゃなくて!』

「ああ、貴方が強いって事? だって、そうじゃない。今の歌にしても歌詞に登場する、会った事もない男に嫁いで行った『あの娘』、実在するのでしょうか?」

『う、そうだよ……』

ネムスさんが動揺しているのは、赤くしたり青くしたり忙しい顔を見れば解る。

「歌詞もそうだけど歌っている貴方の声を聞けば、ネムス殿が『あの娘』の事が好きだった……いえ、今でも好きなのは解るもの。そんな悲恋を歌にできる貴方の『心』は誰よりも優しく強い。私は全てを破壊したいという『闇』に『心』が吞まれようとしている弱者……だから私はネムス殿の優しさが、『心』の強さが羨ましい。私のような邪悪な性根を持つ者には貴方の『心』が眩しいのよ」

『や、やめてくれ!』

突然、ネムスさんは強い口調で雪子姉様の言葉を遮った。

『わ、解った風にボクの事を強いなんて云わないでくれ! ボクにだって邪心はあるし、それに優しくなんてない!! 歌詞にある『あの娘』はボクの妹だ! そうだよ、ボクは確かに『あの娘』が好きさ! でも、ボクの恋は、兄でありながら妹に懸想する邪恋なん

だ！！』

ネムスさんはギターを床に落とすと、自分の部屋に向かって駆け出した。

『ボクは強くなんてない！！』

ネムスさんは泣いていた……

「ふう……怒らせちゃったわね。兄様曰く、『言葉は簡単に人を殺し、また癒し、生かす』、か……私もまだまだ修行が足りないわね」

乱暴に閉まるドアの音を聞いて雪子姉様はバツが悪そうに呟いた。

（まったくです。いつも云っていますが、言葉というものは頭の中でよく吟味してから口に乘せるべきです）

「月夜、苛めないで」

雪子姉様は苦笑して月夜姉様の頭を撫でた。

「なるほど、確かに人の『心』とは難しいものですな。此度のベルムの件、ハンムルの件、もう一人の『勇者』の件、『心』とは何たるかを少しは学べたような気がします」

「左様、『心』とはこの世でもっとも優しく、この世でもっとも恐ろしい魔物にもなり得る……このように」

雪子姉様は懷から一冊の本を取り出した。

「それが例の『觀察日誌』ですか？」

「ええ……いいえ、コレは最早『觀察日誌』ではありません……様々な人の怨念が宿り、邪悪な『付喪神』^{つくもがみ}と化しています」

雪子姉様がペラペラと頁を捲つていくのが気になって、桜花はそおつと覗き込んだ。

「ヒイ?!」

桜花は思わず情けない悲鳴を上げてしまった。
だって、ベルムの行動が書かれていたはずの『觀察日誌』は……
全ての頁に苦悶に歪められた『顔』があつたから……

「こ、コレは……?」

「桜花、コレは恐ろしいモノよ。この世にあつてはならぬモノ……
災いをもたらす“悪魔の書物”よ」

雪子姉様は今にも怨嗟の声を上げそうな『顔』を慰めるように優しく撫でている。

「桜花、覚えておきなさい。これこそ我が霞家当主に代々引き継がれてきた『お役目』……」

哀しげに柳眉を寄せて雪子姉様は『觀察日誌』を閉じると、上に放り投げた。

「せいっ!」

気合が発せられて大真典甲勢二尺六寸が『觀察日誌』を斬り裂くと、世にもおぞましい断末魔が聞こえたような気がした。

「妖魔九百八十一斬……南無八幡大菩薩」

雪子姉様が二尺六寸を納めると、空中で『觀察日誌』が燃え上がって床に落ちるまでには灰となって消えていた。

「貴女か巴、いずれは私を超えて霞家当主になる。その時まで、この世の悪を妖魔の形にして斬り捨てる……この『お役目』を覚えておいて」

「雪子姉様……」

桜花は哀しげな雪子姉様にこれ以上は何も云えなかった。

「もっとも、こんな『お役目』……私の代で終わりにしたいものだけれどね」

辛そうに微笑む雪子姉様に桜花は抱きしめなくなる衝動をかううじて堪える事ができた。

もう月夜姉様が雪子姉様を抱きしめているせいもあるんだけどね。物凄く強いのに、こんなにも庇護欲をそそられる雪子姉様って……

翌朝、アンカー亭は大騒ぎになっていた。

理由は簡単、ネムスさんがなくなっていたんだ。

しかも自分が魔界の王子である事と、刺客である事実を記した書き置きまで残していた。

桜花達の焦る横では青白い顔をした雪子姉様がベッドの上で、瞼をきつく閉じている……

雪子姉様はまったく動こうとはしなかった。

そんな雪子姉様の顔を月夜姉様があえて表情を消して濡れた手拭いで綺麗にしていた。

まったくの油断だった。剣客に、勇者にあるまじき失態だった。ネムスさん……いや、ネムスの穏やかな笑顔とまったく殺気というものに無縁そうな物腰に桜花達は騙されていたんだ。

大敗だった。完全に桜花達の敗北だった。

桜花はネムスの書き置きを読むアランドラ様の声を聞きながら、胸の中に湧き起こる感情を持て余していた。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

親愛なる人達へ。

ボクは大魔王エミルフォン第二十子・ネームレスと申します。否、“名無し”が申しますも何もないのですがそこはそれ。

昨今、魔界ではカスミ・ユキコの名を知らぬ者はなく、彼女に尊敬と畏怖の念を抱く魔族は少なくありません。

ユキコ殿の武勇にあやかろうと彼女の肖像画を持ち歩く武将もいれば、己の名を上げんと彼女の命を狙う兵士もおります。

ボクもその一人で、密かにユキコ殿暗殺の機を窺っております。その機とは昨晚、フェイナン殿の決闘が終わった直後です。

いかに稀代の剣客といえども、決闘が終われば油断が生じるだろうとの浅知恵を巡らせたからに他なりません。

ボクの唯一の武器は『無能』……これにより、ターゲットを油断させて毒殺する。

それがボクの暗殺の手口です。

しかし、しかしながら思うところがあつて刺客は廃業し、一人の吟遊詩人として生きていくことにしました。

ユキコ殿は私のことを『強い』と云つて下さいました。

実を云うとボクを『強い』と云つてくれたのはアランドラ君と彼女だけです。

親兄弟から『無能』と罵られながら生きてきたボクにとって、その言葉がどれだけ嬉しかったか。

だからボクは変わろうと決心したのです。

ボクは強くなるうと思つてます。それもユキコ殿やアランドラ君の横に立つて共に戦える程に己を鍛え直したいと考えています。

いつか必ず戻つて来ますので、その時は温かく迎えてくれると嬉しく思います。

つきましては、無敵の三姉妹と高貴なる皇子様にご忠告を……

この世界でも最強レベルの剣術と全てを見抜く『心の眼』を過信して、今回のような油断を二度と召されません事を。

その額の印はボクからの忠告と受け取って頂きたい思います。

追伸。

餞別代わりに愛用のギターを置いていきます。ボクと違って大事にしてください。

吟遊詩人ネムスより

[illegible]

そこまで聞いて、桜花の胸の中に秘めた感情が爆発した。

[illegible]

爆笑する桜花に釣られて、寝起きで青白かった雪子姉様も今は顔を赤くして大声で笑った。

「あははは♪ 本当ね！ この霞雪子、一世一代の不覚！ 大魔王

が第二十子、吟遊詩人ネムス、恐るべき刺客だったわ！」

見れば月夜姉様の肩が震えている。必死に笑いを堪えてるのが丸分かりだった。

月夜姉様が震える手で雪子姉様の額を拭いている。

そこには『名無しの刺客、ここに参上』と、この世界の文字で書かれているらしかった。

「我ら、雪月花の三姉妹、敗れたり！ やはり、『強さ』と『勝利』は千差万別！ 此度の大敗は良い教訓であつた！！」

雪子姉様は一頻り愉快そうに笑うと、ネムスの置き土産のギターを手にして爪弾いた。

早朝に相応しい穏やかな旋律が雪子姉様の手によって紡ぎ出されて、心地良い時間が流れた。

こんなに気持ちの良い敗北は生まれて初めてだった。

もしネムスに必殺の意志があれば雪子姉様の命はなかった事にゾツとする。

確かに悔しくないと言えは嘘になるけど、雪子姉様の云う通り桜花達にとって教訓を与えてくれた。

少なくとも同じ油断は二度としない。

書き置きにもあつたけど、ネムスはまた戻ってくるのかな？

戻ってきたら桜花達はどんな顔で出迎えるだろう？　楽しみなよ
うな、そうでないような？

でも、みんなネムスの歌が好きだから、きっと笑って迎えるんだ
ろうと思う。

だって雪子姉様もアランドラ様も「今日のお礼は倍にして返した
い」って云ってたしね。

これから桜花達の冒険はどんな出会いが待っているんだろう？
そして、桜花達はどこまで強くなれるのか？

それはまた次回の講釈にて。

時間は昨晚、日付が変わった直後まで遡る。

ブレイズフォード家当主ことエスパンタリオは苛立った様子でブ
ランデーを飲み干した。

ベルムの死は既に耳に入っている。だが、それで哀しむような人
間ではなかった。

問題は彼の実験が自分の思惑から大きく外れた結果に終わったこ
とだ。

「ありえぬ……ありえんぞ！　何故、ベルムが外道に堕ちベルーサ
めが真っ直ぐに育つのだ！！」

御年五十とは思えぬ女性的な高い声で不満をぶちまけていた。
流石にかつては風抜ける草原の如しと称えられた緑色の髪は色素

が抜けてきており、その顔に刻まれた皺は彼が生きてきた年月を物語っている。

それでもなお眉目秀麗と云える顔を焦躁に歪ませて、エスパンタリオは実験の失敗を悔やんでいた。

「これでは私の血筋が下賤であるという証明になってしまっではないか！　認められん！　そんなこと認められるものか！！」

「なるほど……娼婦に生ませた子がベルーサ殿で、ベルム殿こそが貴方様の血統でしたか」

「何者だ?!」

エスパンタリオの誰何に姿を現したのは、長身の女であった。

見たことのない厚手の布で作られた服を纏い、艶やかな黒髪をポニーテールにしている。

顔立ちは卑しくなく、むしろ高貴でさえある。まごうことなき美形だ。

目をきつく閉じている為か、苦悩する哲学者のごとく眉間に皺が寄っているが気にはならない。

だが知己の娘ではない。少なくとも彼に黒髪を持つ知り合いはいなかった。

「何者かと聞いておる」

「御子息からの使いに御座います」

「なんと?」

女はいつの間にかエスパンタリオの目前まで迫っていた。

「いやはや呆れたものですわね。貴方様のなさりようは鬼畜の所業に御座います。そんな貴方様の下で真人間が育つわけがありませんわ」

「何だと貴様!!」

エスパンタリオはサーベルを抜き放ち、女の眼前に切っ先を突きつける。

しかし女は動揺するでもなく、懷から手紙の束を取り出して床に放った。

「当主様も『女』ですね？ 聖帝陛下へ恋文を認めながら出すことが叶わずこうして後生大事にとっておく……その執着が貴方様を妖魔へと変貌させたのですね」

「だ、黙れ!!」

エスパンタリオは床にばら蒔かれたラブレターを必死に拾い集める。

女はその姿を冷ややかに『視』つめていた。

「聖帝陛下は、人を貴賤で測る貴方様の性根をご存知だったからこそ……貴方様を拒んだのです」

「黙れと云っておろう!!」

自分を蔑み、過去の恋まで持ち出されてエスパンタリオは頭に血が上ってしまったせいで気づけなかった。

これだけ大声を出しているのに拘わらず、護衛が誰一人来ないこ

とに気づかない。

「貴方様の実験に何の意味があつたのです？ 貴方様はただ多くの人を不幸にただけ……聖帝陛下への妄執が貴方様を暴走させた……違いますね。貴方様はただ下々の者達が幸せなのが許せなかつただけ」

違いますか、と問う女にエスパントリオはついに堪忍袋の緒が切れた。

「黙れ！ 黙れ！ 黙れい！！ 貴様に何が分かる？！ 我が愛は陛下に受け入れて貰えず、たかが平民如きが聖帝様の寵を得る！ この屈辱が分かるか？！」

短く風を斬る音が女の耳に届いた時には、サーベルの先端が女の右手で掴まれていた。

「分かりませんな。分かりたいとも思いません」

エスパントリオの手からサーベルが消えた。そう思った時には、彼の控えめな乳房の間に己のサーベルが刺さっていた。

胸に宿った激痛が灼熱となつて襲ってくる。

「貴方のくだらない実験のせいでどれだけの人間が不幸になつたと思つているの？」

女はエスパントリオの両手でサーベルの刀身を握らせると、更に深く貫いた。

「人に貴賤なし……貴方の御子息の言葉だけど、一つだけ例外があったわね」

苦痛に前のめりになったエスパンタリオの背中を女が踏みつけたせいで、ついにサーベルの先端が背中から飛び出した。

「下賤なのは貴方の性根よ。これから地獄で人としての在り方をよく考えることね」

エスパンタリオは答えない。答えられない。

「終わった恋をいつまでも引きずり、恋文を隠し持つ執念……さながら『文車妖妃』ね」

女は杖に仕込むべきではない豪刀を抜き放つ。

「……『文車妖妃』の介錯を奉る……妖魔九百八十斬、南無八幡大菩薩」

それがエスパンタリオがこの世で最期に聞いた言葉だった。

第拾漆章 雪月花の三姉妹、大敗を喫する（後書き）

フエイナンの一件はこれにて落着となりました。

しかし、もうファンタジーというより剣客小説ですね。

しかも勇者が寝泊りしているアンカー亭は、時代劇で言えば飯盛女と呼ばれる女郎がいる宿屋ですからね。勇者が拠点とする宿じゃないです。

さて、今回は『心』と『強さ』をテーマにしてみました。

どんな鍛え上げられた強者でも一瞬の油断が命取り、勝負の行方は解らない。

序盤から鬼神の如き強さを誇っていた雪子も今回、ついに完敗しました。

しかも敵は何の力を持たない吟遊詩人……雪子、一生の不覚です。更には前章では剣の達人ベルムに剣の素人フエイナンが「参った」を云わせる。

つまりは弱者でもやりようによっては強者から勝ちを拾える、強者も油断すれば敗れる。

そして、ブレイズフォード家の惨劇。

本当に人の『心』は怖いです。

変わりやすいですしね、私は老人ホームに勤務しているので余計に実感できるんです。

お年寄りのお話を聞くにつけ、様々な人生があるんだと思い知らされる訳なんですよね。

最後に『地獄代公人』としての雪子を登場させました。

バトルじゃなく暗殺ですから意外と難しいんですよ。

あと今回は三人称視点で暗殺シーンを書いていました。

勇者の冒険とは毛色が違うので、区別をつけるため試してみたいんです。

霞三姉妹は勇者であると同時に暗殺者でもあるので、たびたび今

回のような暗殺シーンが出ると思います。

第拾捌章 霞家の歴史（前書き）

巴視点となります。

休息がてらに霞家と霞流を巴に語らせているので、お話は進みません。

第卅拾捌章 電家の歴史

俺こと霞巴は今日も皆が寝静まった頃に一人起き出した。

その時、俺は鏡を見ないようにしている。

理由は簡単……いくら自分でも、否、自分だからこそ男が女物を着ている姿を見たくないからだ。

俺は寝間着を脱いでようやく姿見に映る自分と対面する。

鏡に映っているのは『妹』と同じ顔をした『男』で、半目でこちらを見つめている。

「今日も無駄に元気だな……まあ、ある意味地獄のような生活だからなあ」

鏡の中の俺は苦笑して己の業物を指で弾いた。

ふうむ、警策のつもりだったんだが、大人しくなるどころか益々元気なつて“鞘”から少し頭を覗かせる始末だ。

「まったく桜花も桜花だぜ」

鏡の中の俺は胸に手を置いて、幸せそうに眠る『妹』を感じながら情けない表情かおをしていた。

桜花が起きていようと寝ていようと、俺は『表』に出ない限り四六時中覚醒し続けている。

寝ることが出来ない俺は同時に己の『体』動かすことすらままならず暇を持て余す事になる。

だから桜花の目に映る情景、耳に入る音、舌で感じる味、肌が触れた様々な感触に愉しみを見出すより無かった。

初めこそ単なる暇潰しだったが、コレがなかなか面白い。

ただ“在るだけ”の俺にとって全てが良い刺激になってくれた。

桜花の奴は月夜姉の講義、躰が退屈だったようだが、俺には最大の娯楽だった。

知識を得られることが快感だった。

また剣術の稽古も楽しいものだ。俺自身は『体』を動かしていなかったが、技を会得する喜びと心地良い疲労感、桜花と共有する事ができた。

俺の知識欲は底が無い。ソレしか愉しみが無いってのもあったが、一度覚えたモノは完全に自分のモノにする事ができた。

まあ、それ故の弊害が今ここに出てるんだけどな……

桜花は基本的に雪子姉と一緒に風呂に入る。

勿論、目が不自由な雪子姉を手伝うって意味もあるが、虎視眈々と雪子姉を狙う月夜姉に対する牽制の意味もなきにしもあらずだ。

ソレが俺にとってどう弊害になるのかって？

解らないか？ さつきも云ったけど桜花の見たモノはそのまま俺が見たモノなんだって！

で、桜花が雪子姉と一緒に風呂に入ってる事は、だ……

は？ 羨ましい？ 冗談じゃねエやい！ 俺達はれっきとした姉^{きよ}弟^{うだい}だつての！

まあ、俺も十四、数え年なら十五歳だ。

世が世なら元服つつって大人の仲間入りしてる。時には劣情を抱く事もあるさ。

しかも一度見たモノは決して忘れることはない…… ああ、解ってくれてないな？ 地獄のような禁欲生活を……

おまけにだ。その桜花もたまに一人で隠れるように風呂に入る事がある。

理由はまあ、思春期にありがちな…… “一人遊び”さ。

それもまた俺に生き地獄を味わわせてくれる。

まあなんだ、やっぱりソレも共有するんだよ。感覚を……

我ながら鉄の自制心だと思うよ、実際……

否、雪彦兄あにイが煩惱に苦しむ俺に気付いて“一人遊び”を教えてくださいなかつたら、とづくに理性が飛んでたかも知れねエな。

おっと！ 下世話な話はこちらまでとして、『女』の中に在る『男』の俺なりの苦勞はコレで解つて貰えたと思いたい。

そんな俺も元々は桜花と双子として生を受けるはずだった。

しかし何の因果か俺は母親の胎内で桜花の体に吸収されてしまった。

お袋の腹の中にいた頃から既に物心がついていた俺は徐々に桜花に取り込まれていく課程で『恐怖』と同時に何故か『歡喜』を味わっていた。

やがて、すっかり桜花の中に包まれた俺はそれでも消える事なく『俺』であり続ける事ができた。

そして月日が流れ、急かされるように欺瞞と欲望に満ちた俗世に落とされて、産声を上げたのは俺じゃなかった。

「ほう、まずは女の子か！ もう一人はどっちかな？」

産湯で綺麗になった『俺』を抱き上げたのは今は亡き親父殿だった。

当時でもう三十も半ばを過ぎていたが、氣味が悪いほど白い肌は女のように潤っていた。

「そ、それがこの子のみでござる」

「は？ 順庵殿じゅんあんは双子と仰っていたではないか」

なんだか親父おやが笥庵きあんの藪医者やぶいしゃに捲し立てているせいで、咽喉のどの奥から景氣良く泣き声が上がった。

自分で出しておいてなんだが喧しいことこの上ない。

まるで自分以外の誰かに『体』を勝手に操られているようだ。否、この『体』にとって異物は俺だ。

俺は桜花に吸収されてなお自我を失わずに生き続けているが、『体』はやはり桜花のモノで俺に使用権は無いらしい。

あー、ちなみに筍庵つてのは誤字じゃないぜ？

藪以前に筍だ。年季の入った爺イのクセに未だ半端な知識と技量しか持ち合わせていない野郎には似合いの号だろう？

はつきり云って怪我をすりや月夜姉の方が手当が上手いし、病気になるや下手な薬を煎じられるよりも雪子姉の鍼治療の方が治りが早い。

雪子姉は知つての通り、雪彦兄イが道場を継ぐものと思っていて、餓鬼の頃は剣術修行にはあまり本腰を入れてなく鍼と按摩の勉強をしていた。

雪彦兄イが死んじまってからも、桜花が免許皆伝を許したら早々に道場を譲る腹積もりらしい。

おまけに独立しようとしているようで、人に頼んで盲目の人間を受け入れてくれて、尚且つ鍼医の開業を許可してくれそんな借家を探している。

もっとも独立なんて月夜姉が許しそうにないけどな。

仮に独立したらしたで月夜姉の性格じゃ付いて行くんだらうけど。

おっと！話が逸れた。

この世に生を受けてから俺というか桜花の面倒をよく見てくれたのはまだ四歳だった幼い雪彦兄イだった。

勿論、雪子姉も流石におしめの世話はできなかったものの、よく子守唄を歌ってくれた。

思えばその頃から雪彦兄イは俺の存在に気付いていたような気がする……

何故そう思うのか？

それは、たまに桜花の瞳の奥を覗き込もうとするかのように凝視して、「出ておいで？　一緒に遊ぼう？」と語りかけてきたからなんだ。

どうも雪彦兄イは人が気付かない、否、気付けない、むしろ気付いちやいけないモノが『視』えちまっていたらしい。

なにせ誰もいない部屋で虚空を見つめて愉しげに話をしてたり、石地藏を家に上げて滔々と説教してたり、墓地で無数の火の玉に囲まれて踊ってた事もあったしなあ……

それは置いといて雪子姉に『俺』の存在を明らかにされた時なんざ、途端に相好を崩して抱きしめてくるわ、脇の下に手を差し込んで高い高いをするわ、えらくはしゃいでいた。

「やはり出る事ができるではござらぬか、　今まで隠れていたとは人が悪いでござるよ、」

摩擦で火が出るんじゃないかと思うくらい頬擦りをしてくる雪彦兄イに俺が思わず衆道かと疑いを持ったのは秘密だ。

実際、雪彦兄イは女にモテるがそれ同様に男にも人気がある。

純粹に強くて気さくな性格が受けてる所もあるが、やはり女のように繊細な顔立ちのせいだろう。

門下生の連中は今でこそ「強くなるんだ」という確固とした目的で修業に励んでいるが、最初はほとんどの奴が雪子姉と雪彦兄イが目当てだった。

しかも雪彦兄イは男女の差別が悪い意味で全くない。

昔、衆道趣味の若い僧侶から告白されて、兄イがあっさりと承諾しちまった事件があった。

「友は多いに越したことはござらぬよ。もっとも恋仲に至るか否かは彼の努力次第でござるがな」

この言葉を聞いた日には流石に開いた口が塞がらなかった。

つまり雪彦兄イ自身が心底惚れられれば男色も構わないと云って
るって事だからな。

そう云えば俺に“一人遊び”を教えてくれた時も普通なら肉親と
しての義務感ないし嫌悪感が顔を見せる所を逆に嬉々としてたしな
あ……

もつとも雪彦兄イが特定の人物に対して嫌悪感を見せるなんて事
は無い。

元々の性格もあるが、剣士としての宿命……人を殺めた事がある
って事実が大きい。

我が霞家が代々受け継いできたものは何も剣術や兵法だけではな
い。人の世にある『悪』を妖魔の形にして斬り捨てる『お役目』が
ある。

それは『悪』として葬ってはならぬ存在を誅して『闇』から『闇』
へと消し、全ては“妖かし”の業とする霞家の『裏』にして『闇』

……

だけど、ソレは『正義』に依る行動じゃない。

どのような大義名分があろうとも『正義』の名において人殺しを
してはならぬ。人を殺すは『正義』に非ず。

だから我が霞家は『悪』である。『悪』が『悪』を斬り捨てる。

だから雪彦兄イは誰かを嫌う事はない。自分が『悪』であると自
覚しているからだ。

ただ誤解して欲しくはない。雪彦兄イは雪子姉とは逆に自分を卑
下するような人じゃなかった。

『悪』は『悪』なりに自分に課せられた『お役目』に誇りを持っ
ていた。

確かに悪党一人殺したとてソイツに殺された人は帰らない。奪わ
れた幸せが戻ってくる事もない。穢された純潔が無かった事になる
なんてあるはずもない。

だが残された家族は？ 恨んでも恨みきれぬ悪党が滅んだ事で溜

飲が下がる。憂いが消える。仇を討てた気持ちになれる。脅威が目の前からいなくなる。

これもまた一つの救いの形とならないだろうか？

奪われた家族と悪党の命、なるほど釣り合うはずがない。しかしそれで帳尻を合わせるのが世の倣いでもある。

そう、全ては死んだ者達の供養の為ではない。

明日を生きる人の為に雪彦兄ィは、雪子姉は凶刃を振るう。『お役目』を全うする『地獄代行人』として……

そういった意味では今回の旅はまさしく『地獄代行人』に相応しい仕事だろう。

一国を滅ぼした憎き魔將軍ヴェルフエゴールを『闇』に葬る必殺の刺客こそ勇者よりも肌に馴染む。

既に俺達は路銀と呼ぶには大仰な大金を貰っている。

そう、これは『正義』に非ず。勇者が魔族^{ワル}を金^{ワル}ずくで殺す契約に他ならない。

俺も桜花も聖剣に選ばれた勇者ではあるものの、身も蓋もなく云ってしまえばヴェルフエゴール抹殺の依頼を引き受けた刺客である事には違いねえ。

もう一度云うが我が霞家は『悪』である。凶刃を振るい弱者を『悪』から守る謂わば『必要悪』。

否、詭弁はよそう。結局俺は勇者を名乗る『悪』でしかないだろう。

「ふう……ようやく治まったか」

俺の在り方、家族、我が家の事と思考を巡らせているうちに業物は力を失って、頭も完全に“鞘”の中に消えていた。

俺は素早く道着に袖を通し袴を着けると足音を立てないように部屋から抜け出した。

本当なら禪も締めたいところなんだが桜花が嫌がるから着けられないので、どうにも収まりが悪い。

「雨こそ降っちゃいねえが雲は全然切れてないな……」

宿の中庭に出てしばらく暗黒の空を眺めていた俺だったが、冷たい夜風に吹かれたのを切っ掛けに視線を下ろして聖剣『月影』を構えた。

剣が空気を斬り裂く毎に足を前後に運ぶ。幼い頃から続けてきた基本的な素振り稽古だ。

これは俺も桜花も雪子姉さえも一日たりとも休んだことがない。

剣術にしろ徒手空拳にしろ強くなる為に近道はない。こうして愚直なまでに基本を積み重ねる以上に己を磨く事ができる稽古を俺は知らない。

確かに我が霞流は一撃必殺の秘剣が数多く存在する。

だが、いくら強力な必殺剣といえども基本が出来ていなければ使いこなすことはできない。

近頃、大切な素振り稽古を嫌がって手っ取り早く秘剣を教わりたいとほざく門下生がたまにいるが、そんなのは却下に決まっている。未熟者が使ったところで十の威力を持つ秘剣も一の威力すら出せないだろう。

もつともそんな奴が高度な技を会得できる訳はねえけどな。

逆に云えば基本が出来上がっている奴らの中には十の秘剣に独自

の工夫を凝らして十二にも十五にまでも引き上げている者もいる。そう、剣術の基礎が固まっていれば自分の腕が見えてくる。

自分を知ることができれば創意工夫をして自分に合った必殺剣を創作する事もできる。

そうだな……雪子姉を例に挙げてみようか？

雪子姉は知つての通り生来からの盲目だ。

だけど雪子姉はそんな苦しみに耐え、残る感覚を研ぎ澄まして“目”以上の空間認識能力を手に入れた。

その鼻は敵の位置を探り、その耳は敵の動きを読み、その肌は微妙な空気の流れを感じ取って敵の気配を知り、脅威の第六感が敵の全てを見通す。

この恐るべき能力、『心の眼』を体得するのに雪子姉がどれだけの凄まじい修練を積んだのか俺にはとてもじゃないが想像もつかない。

そしてその『心の眼』を体得した雪子姉ならではの秘剣が存在する。

ソレこそが先日、スタローグ家のエントと刑場の前で盗賊・赤鼻のグリークを倒した秘剣『野分』だ。

居合は元々片手剣である為、両手持ちより若干間合いに利が生じる。

だが『野分』は相手の呼吸を読み、先の先を取って間合いの外から跳びかかるように斬りつける。

それだけじゃない。剣先は勿論、腕を伸ばし上半身まで伸ばして一本の矢のように跳んでいくから雪子姉の間合いは更に伸びて、ただでさえ先手を取られてる敵は戸惑う事になる。

極めつけに『野分』の狙いは敵の首筋にある。首の重要な血管を捻るように斬りつけるので、決まれば僅かな傷でも大量に血が噴き出して雪子姉の勝利は確定する。

まさに一撃必殺の秘剣だ。

更に霞家には当主のみが会得を許される『霸王鬼門返し』と名付けられた最終奥義がある。

長い年月、あまたの妖魔の血を吸い続けた事で『妖刀』と化した雪子姉の愛刀、大真典甲勢二尺六寸、その『力』を解放するって事しか解らない奥義中の奥義。

『霸王鬼門返し』の名に相応しく、荒々しい激流の如く瞬く間に敵を飲み込んでしまう一撃滅殺を誇る霸王の剣だ。

この奥義の前には如何なる敵も生存が許されず、ドラゴンと呼ばれる強力な怪物さえも一撃で屠った事は記憶に新しいだろう。

だが俺には『霸王鬼門返し』が単に出鱈目な威力の技で終わらないような気がしてならない。事実、先日のアレは全開ではなかったはずだ。

何故、そう思うのかと云うと奥義に付けられた名前にある。名に“返し”とあるからには『返し技』が必ず存在するに違いないだろう。

敵を惑わすための虚偽という可能性も無いわけではないが、まさか奥義の名にそのようなハツタリを入れるなんて誇りを穢す真似はすまい。

つまり雪子姉はドラゴンを倒すのにも、本気ではあっただろうが全力を出していなかったと云う事になる。

考えたら背筋が寒くなつてきやがった……

まあ、雪子姉がそんな出鱈目な奥義や秘剣を使いこなす事ができるのは、ひとえに日々修行に明け暮れて鍛錬を積み重ねてきた結果にある。

だから俺も桜花も雪子姉に少しでも近づくには雪子姉の倍は努力をしなくちゃならない。

もつともその雪子姉自身が人の数倍頑張ってるんだけどな……

俺は勿論、桜花や月夜姉、それと門下生の連中が雪子姉を敬愛している理由がそこにある。

確かに雪子姉が課す稽古は厳しい物ばかりだ。

だが雪子姉は門下生に与えた課題以上の修行を自分にも課している。

門下生に稽古をつけながらも自身を鍛えているのだから不平など出ようはずがない。

しかも門下生一人一人の力量を見極めて把握し、それぞれに合った稽古を指示しているのだから頭が下がる。入門したばかりの奴は大抵はコレで感激する。

また気配りも出来る人で、仕事の合間に稽古に来る奉公人や人足などは稽古後、仕事に差し支えないよう体力を残して帰すから土族は勿論、平民も長続きする。

もっとも雪子姉に云わせると、「私達の日々の暮らしは門下生の指南料で成り立っている。だから仕事が出来なくなるまでしごくのは愚の骨頂よ」って事らしいがな。

それと当道場では厳しい稽古だけではなく、年に何度か食事会や茶の湯の会を催して日頃の疲れを癒したり、門下生を紅白に分けての剣術大会まで開いて愉しませている。

我が霞流の先人達が見たらさぞ嘆き悲しむだろうがこれも時代の流れだ。

次々と名のある流派が道場を畳んでいく中、生き残る為には“飴”も使うのが現当主霞雪子の方針だ。

ご維新後、年貢が銭になったり徴兵制度を始めたりと俺ら庶民の生活が苦しくなっていく中で無用の長物となりつつある剣術道場を持ち直すには綺麗事は云ってられねえからな。

雪子姉が強いだけでなく商才も長けていた事には本当に感謝している。おかげで剣術が続けられるんだからな。

結局、俺も剣術バカってところなんだろう。

さてと、素振りが千本越えた所で体が温まってきた俺は『月影』を帯に差すと居合の稽古を始めた。

どうもコイツは刀身の反りが強すぎて扱いづらいんだが、桜花の『日輪』を思えば贅沢な悩みなので不満は表に出さないようにしている。

俺は霞流居合の基本技『車輪』を何度も抜いた。この技はその名の通り己の体を軸にして車輪のように刃を振るい前面の敵を薙ぎ払う。

そして基本技ゆえに応用技も多く、突進しながら斬りつける『疾風』^{やて}や更に左右の敵へと方向を変えつつ斬る『旋風』^{つむじかせ}という技もある。

元々霞流には居合は無かったそうだ。

戦場で生まれた剣は鎧の隙間を突いたり、あるいは臂力をもって鎧ごと敵を叩き潰す、この二系統を武器としていた。

だが戦国の世であった頃、時の霞家当主——名を霞籐右衛門^{とうえもん}が武者修行の途中、小太刀の技を善く遣う富田流^{とだ}の一派と出会い、その技に魅せられた。

富田流とは元々三河（現在の愛知県東部）の中条流が越前（現在の福井県嶺北地方及び敦賀市）へと広まった剣法で、富田家一門に名人が現われたのでいつしか富田流と呼ばれるようになったものだ。籐右衛門はそれこそ地面に額を擦りつけんばかりに教えを請い、ついには入門を許されて大いに富田流の技を学んだ。

小太刀の技を使いこなすという事はそこの棒切れでも代用が効き、如何なる状況にも耐えうる剣術の完成を夢見る彼にとつてはまさに理想的な流派だ。

また富田流と云えば小太刀だけを連想しがちだが、戦国時代に生まれたとされる流派だ。槍や薙刀は勿論定寸の刀も遣えば棒術、柔の技まであった。

しかし入門したばかりの頃は女人の如しと伝えられる顔立ちと柔らかな物腰のせいで兄弟子達に『お藤^{ふじ}』と呼ばれ、からかわれながら顎で使われていたらしい。

だが、元々合戦の場で鍛え上げられていたその技と体は兄弟子達の嘲笑を物ともせず、木の根が雨水を吸い上げるが如く富田流の教えを自らの血肉と変えていった。

更に当代の霞家当主には剣客冥利に尽きる出会いが待っていた。

室町時代末期に居合を創始したとされる林崎甚助を祖とする林崎新夢想流、その遣い手が霞家当主が修行に明け暮れていた道場近くで行き倒れていたそうだ。

流派は違えど同じ剣の道を歩む者として、それ以前に同じ人間として放っておけず行き倒れの若い剣士を介抱する事になった。

世話を任されたのが一番の新参者である籐右衛門だったそうだ。

彼はその剣士の為に修行の時間が削られる事を厭うことなく甲斐甲斐しく世話をしたという。

むしろ彼の方が道場仲間を寄せ付けず、一人で世話をしていたと彼の遺した日記にはあった。

その理由は単純明快で、他の奴は知らないが俺としては好ましい

ものだ。

なんとその行き倒れの剣士は男に身をやつした女剣客だったのだ。自分を世話する籐右衛門を見た目から女と勘違いし、無防備に彼の目の前で着替えをした事で発覚したらしい。

聞けば居合の名人と謳われた父親を卑怯にも数人で闇討ちし、母親までも無慈悲に斬り捨てた挙げ句、道場の財産を食い潰した男達に復讐する為、旅をしていたと云う。

彼は憤った。

聞けば林崎甚助から直接薫陶を受け、田宮流の基礎を築いた田宮平兵衛重正と並ぶ名人と呼ばれる程の剣客を闇討ちにし、目の前の見目麗しい少女から、復讐、道場の復興と二重の意味で女の幸せを奪った男達に対し義憤を覚えたそうだった。

後は己が心の命ずるがままに動いた。籐右衛門は少女に助太刀として名乗りを上げ、武者修行の途次に知り合った忍者に繋ぎを取り、男達の探索を依頼した。

何でも、その忍者は己の一族の中でも上位にありながら忍術よりも槍が得意というまるで武将のような人だったそうで、その辺りも籐右衛門と意気投合した理由にあるらしい。

その間、籐右衛門は少女を介抱しながら敵討ちに備えて今まで以上に過酷な修行に励んだ。

その鬼気迫る様子に兄弟子達からは「弁天様が鍾馗様に化けた」と云われたそうだった。

一方、少女も元々復讐の為に居合で心身を鍛えていたからか順調に回復し、救われてから半月もする頃には素振り稽古くらいはできるようになっていた。

少女は何の益も得られない自分の助太刀にそこまで体を張ってくれる籐右衛門に困惑した。とても義憤の一言では説明がつかないと思っていたそうだった。

その理由については少女には語らなかったようだし、日記にも記

されてなかったが、まあ下衆の邪推を働かせれば容易に察せられた。やがて少女は、無欲に修行に励み、懸命に復讐の相手を捜す籐右衛門に次第に惹かれていった。

そして籐右衛門の方も……

そして、ついに少女の人生を狂わせた憎き男達の在所が知れた。

奴らは長篠（現在の愛知県新城市長篠）の合戦に参加して武名を上げんが為、信長の元へ向かっていると云う。

籐右衛門はすぐさま一人で長篠に向かい、男達を見つけると瞬く間に首領格の男を除いた全員を討ち果たし、首領を少女の待つ越前へと連れて帰った。

何故、籐右衛門が少女を残して単身長篠へと向かったのかって？ そりゃ仕方ないんだよ。何せその少女の腹ン中には籐右衛門の子供がいたんだからな。

少女の前に引つ立てられた男は正しく母親を無惨に殺し、父親を卑怯討ちした下手人だった。

男はそりゃ見苦しく命乞いをしたそうだ。

俺としてみりゃ、巫山戯るなつて云いたいだが、まあ遙か昔の話だから文句の云いようがねえ。

それに当の少女が許しちまったんだからな。

少女、後の霞永久子とわこは母親になりつつあったからな、復讐よりも一度は諦めていた女の幸せを選んだつて事さね。

復讐よりも一度は諦めていた女の幸せを選んでもくれた事が、彼女の血を引くこの身としては嬉しい、とは雪子姉の弁。

男は二度と武芸者を名乗れないように指を切断されてから解放された。

ま、今後、せめて農具を持てるようにと両の薬指と小指で勘弁してやったつてのが甘いと云うか優しいと云うか。

復讐が終わった籐右衛門と永久子は道場主に媒酌人を頼み、祝言を挙げた。

それは賑々しく酒宴が開かれ、二人は周囲に似合いの夫婦だと祝

福されたそうだ。

それから二人は夫婦二人三脚で剣術を磨き、子を育て、越前でも評判の剣客夫婦となった。

籐右衛門は自身の霞流を研鑽しつつ、富田流、林崎新夢想流を貪欲に吸収していった。

富田流の小太刀と林崎新夢想流の居合は殊の外相性が良かった。籐右衛門の剣はあつという間に高みへと押し上げられていった。

その後、彼が何年修業したのかは定かではないが、永久子が流行り病を得てあつという間に無くなったのが切っ掛けとなって越前から去り、どこぞの山中に籠もり荒行を始めようと決意をしたそうだ。そして決行当日、越前を去る際には子が三人、彼に従ったと伝えられている。

余談だが、彼の子供達の中には越前に残った者もあり、今でもその子孫が越前、いやさ福井県で平和に暮らしている。

さて、越の国を出た当代の霞家当主は更なる高みを目指して子供達と厳しい修業の毎日を送ったと云う。

彼は霞流剣術元来の実戦剣法に富田流と林崎新夢想流を組み込む事で三つの流派を一つとし、如何なる状況にも耐えうる最強剣を編み出す事に腐心した。

記録によると彼らは十年近くもの歳月、山の中で荒行を重ね、その課程で籐右衛門も視覚と聴覚を失ったがついには一撃必殺を旨とする真に実戦に通ずる剣法が完成した。

中でも当代の嫡男（記録では『孫兵衛』という名前らしい）に至っては、三尺（約九十センチメートル）近い胴田貫で苦もなく繊細な居合術を使いこなしたと伝えられている。

なんと、木々が密集している森の中で、真上に向かって胴田貫を抜き放ち、後ろを振り返り様に太刀を返して振り下ろすなんて神業をやったのけたと云う。

正に、如何なる状況においても剣を振るう事ができる、という謳い文句に恥じない精緻かつ力強い剣術が出来上がった

真の霞流剣術の完成を悟った籐右衛門は微笑みながら大往生を遂げ、残された子供達は野に下り、合戦場で霞流の名を高めていく。

折しも時勢は関ヶ原の合戦で小早川秀秋の裏切りにより西軍が総崩れとなつて石田勢が敗走した頃であり、間もなく徳川とくせんの世が訪れようとしていた。

やがて徳川が江戸に幕府を開くと霞家の先祖はこぞつて江戸に移り、開拓のどさくさに紛れて剣術道場を開くに至る。

そして現代、道場は雪子姉が担っている。

「ふう……ようやく『月影』にも慣れてきたな」

俺はこの異様に反り返った聖剣で満足いかないまでも及第点と云える居合を放てるようになった所で稽古を止めて汗を拭った。

まあ、聖剣と銘打っちゃいるがコイツは本来は『闇』の力を封じた容れ物に過ぎず、たまたま剣の形をしているから聖剣などと呼ばれてるんだけだな。

ナマクラじゃないのが救いだが、この嫌がらせに近い反りは何とか出来ないもんだったのか、と思わずにはいられない。

兎に角、それなりに修行の成果を得た俺は腰の聖剣よろしく欠伸混じりに背伸びをして後ろに反った。

「アダツ?!」

やけに長い欠伸が終わろうとしたその時、俺の額に鋭く尖った物が落ちてきやがった。

幸いソレが軽かった為に怪我とかはしなかったんだが、痛いものは痛い。

「あんだあ?」

闇の中で目をこらすと足下に菱形の宝石が落ちていた。どうやらコレが俺に当たったらしい。

だがこんな物、どこから? 空から降ってきた訳じゃあるまいし

……

「あん?」

空を見上げてアチコチ視線をさまよわせていると、宿の屋根の上に何か小さな影が見えたような気がした。

いや、見間違いじゃねえ。

星が見えないせいで見にくいけどどうやら誰かが俺の事を見つめているようだった。

しばらく屋根の上の曲者と睨み合いが続いていたが、相手は不意に背を向けると屋根の向こう側へと姿を消した。

「何だっ たんだ?」

俺は手の中にある黄色い宝石を見つめながら、さっきの奴の事を思い返していた。

よくは見えなかったものの、体の線が細かった事から女じゃないかと俺は推測したが、性別が解ったところで意味がなかったのてこ

れ以上の推測をやめた。

「大方、どこぞの蔵に忍び込んだケチな泥棒ってところか……」

俺は宝石を懷紙に包むと汗を流すために風呂場に向かった。

実は未だに俺達はアンカー亭に流連^{いつづけ}していたりする。

このところ波が高く運河を越える為の渡し船が出せないせいだ。だが、この足止めが俺達に幸運をもたらすことになるうとは思いませんでした。

その幸運とは如何なるものなのか？

そして俺が目にするものとは？

それはまた次回の講釈にて。

第壱拾捌章 霞家の歴史（後書き）

さて、今回は霞家の隠し球、巴の視点で、巴の出生の秘密や雪子の兄、雪彦の事、霞流の成り立ちを語ってみました。

巴もかなり特殊な存在ですが、今回のことで彼にも人間らしい感情があるってことを知って頂けたら筆者としては嬉しいです。

そして霞家の家族の事、霞流の事とスライドしていったのは、皆さんに主人公達の事をよく知って貰いたかったからです。

勇者としてはあるまじき考え方ではあるのですが、勇者といえども人、人だからこそ業があると、このような設定にしました。

やはり綺麗事だけじゃ何も出来ませんですね。RPGだって人様の家のタンスを漁ってるんだし（笑）

こんな出来ですが、一応歴史年表や剣術の文献と睨めっこしながら書いたので年月の矛盾はあまりないかと思えます。

第拾玖章 誇り高き狼との邂逅

俺は汗みどろの道着を着たまま着替えと手拭いを手に風呂場へと向かう。

アンカー亭の風呂場は午後から翌朝にかけていつでも利用できるように湯が沸いている。

清掃時間の午前は別として、深夜まで入浴できる理由は野暮を承知で口にすれば、女或いは男娼やろうを買った客がお楽しみたのしみの後の後に入るのだ。

ここの風呂場は男湯、女湯、そして母屋から隠れるように混浴がある。

俺は当然、男湯を利用するからそういった客とかち合う事はないだろう。

そんな考えが甘いと悟ったのは、扉を開けてすぐさま閉めた直後だった。

「最悪だ……」

俺は回れ右をすると風呂場が空くまで修行を再開する事に決めた。だが、風呂場の扉が開いて小麦色に焼けた腕が俺の肩を掴んだせいで今の素敵な考えを実行に移す事は断念せざるを得なかった。

振り返る暇もありやしねえ。

出来の悪い怪談よろしく無数の腕が俺を風呂場に引っ張り込んでくれやがった。

「これはこれは勇者様！ 入る早々出て行かれるとは寂しいではありませんか！」

今の芝居がかった声の主は俺と同じくアンカー亭の客で、一昨日

知り合つたばかりの商人を名乗る男だ。

ここ数日、悪天候に見舞われ運河を渡る事が出来ずに立ち往生している中、ふらりとアンカー亭に現われたコイツはコメルシアンテという国から来たと云った。

コメルシアンテは聖都スチューデリアの北東にあるシルクロードを思わせる長い長い街道の先に位置する国で、工業と商業が盛んで『最も富める国』と謳われている。

本人が云うには、『海の玄関口』として各国との貿易で利を得ているカイゼントーヤに集まる珍品奇品を買い集めて故郷で錦を飾んだそうだ。

その際、カイゼントーヤとコメルシアンテを海路で繋ぎ、楽に行き来が出来るようにして、互いに巨大な利を得られる貿易をしたいらしい。

“楽に”と云うのは、詳しくは知らないがコメルシアンテ周辺の海は暗礁が多く、坐礁事故が少なくない為に海上貿易が難しく、日数がかかって陸路を行くしかないそうだ。

目の前にいる男もここまで過酷な陸路を旅してきた為か、貴公子然とした細面に似合わない大小様々な傷が全身に走っていた。

何故、全身に傷があるのを解るのかって？

そりゃ解るよ。この野郎は藤蔓を編んで作られた椅子に素っ裸のまま堂々と座ってやがるんだからな。

その周りに五、六人の餓鬼（全員男だ）がいて、男に茶を淹れたり体を拭いたり大きな団扇で仰いだりと忙しく動き回っている。

そついや、さっき俺を引き込んだのもコイツらだったな。

「先客がいたから遠慮したまでだよ」

油断していたとはいえ、簡単に捕まった自分に少し腹を立てながらわざと不機嫌さを隠さずに答えた。

だが目の前の男はそんな俺の様子にニヤニヤ笑っただけで、組んで

いた足を組み替えながら俺を見つめている。

「フツ、男同士何を遠慮する事がありますか！ 見れば先程まで鍛錬をされていたご様子、早々に汗を流したいはずでは？」

ああ、確かによ、普通の宿泊客とかち合ったなら俺も遠慮はしねえよ。

けどよ、こんな夜遅くに数人の御稚児を連れた野郎と一緒になんざ御免だ。

餓鬼共はみんなアンカー亭の奉公人じゃねえか。

しかも全員肌が透ける薄い襦袢みてえな格好だ。

いくら俺が勇者でも、そんな中に入っていく勇氣は持ち合わせちゃいねえ。

気が付けば、餓鬼共は妙に期待を込めた表情で俺の事を見ていやる。

冗談じゃねえやい。そりや俺も人並みに助平なつもりだが、釜を掘る趣味も掘られる趣味も無いぜ。

「そりやあな？ だけど、人の愉しみを邪魔する程、俺は野暮じゃないつもりなんだ。終わったら声をかけてくれや」

内心、メチャクチャ動揺している事をおくびにも出さずにそれだけ云うと、右手をヒラヒラ振りながらさりげない動きで風呂場から脱出を敢行する。

ここにいたら確実に俺の身にのっぴきならない事態が起こるのは明白だ。

「おや、オウカ……否、トモ工殿も湯浴みですか？ 私も一汗かいたので一緒にしても宜しいか？」

アポスドルファって野郎はよっぽど俺が嫌いらしい。
無駄に爽やかな笑顔をしたアランドラ兄ィが俺の前に立ち塞がっていた。

「別に構やしねえよ」

俺は観念して風呂場へと戻る羽目になった。
救いはアランドラ兄ィから情事の残り香がしないことか。
この人もどつかで鍛錬していたんだろう。

さて、俺達は自称商人がはらせていた餓鬼に服の洗濯を頼むと
浴場へと足を踏み入れた。

四半刻（約三十分）もすれば綺麗になるから風呂に居てくれると
の事だ。

この世界には魔法なんて御伽噺みてえなモンが実際にあるから便利だ。

水を操る魔法で服に染み付いた汗や臭いまで根刮ぎ落とし、火を
操る魔法であっちゃん間に乾かす事ができるんだと。

剣術と同じで個人の才能がモノを云うらしいが、機会があれば教
わってみたいものだぜ。

「私で宜しければご教授しましょう。私は『闇』に属する魔法に素質がありましてな。恐らく『闇』の聖剣に選ばれたトモ工殿と相性

が良いはずです」

この世界の魔法は二系統あるそうで、星神教でいう自分に宿命を授けてくれる神と同じ属性の魔法が使えるようになる『宿星魔法』と、神羅万象あらゆるものに宿る精霊の力を借りて様々な効果を生み出す『精霊魔法』があるそう。

炎が出したきや火の精霊、物を凍らせたかったら氷の精霊の力を借りればいいらしい。

一見、『精霊魔法』の方が汎用性が高くて便利そうだが、いちいち火の精霊だ、木の精霊だの個別に契約をしなければならんそうで面倒な上に、上位の魔法を使いたければそれなりに位の高い精霊に認められるようになれば契約すらままならないんだと。

反面、『宿星魔法』は一点特化ではあるものの、知識と素質があれば餓鬼でも上位の魔法を使いこなせるようになるらしいし、仮に才能が無くでも鍛え続けることでそれなりの腕前にはなるそう。その辺は剣術修行と同じだな。

「アランドラ兄イの厚意は嬉しいけど、闇っていまいち言葉づらが悪いよな」

「そんなことはありませんぞ！」

外国の彫刻のように均整のとれた無駄のない体を石鹼の泡まみれにしながらアランドラ兄イは立ち上がった。

「我が守護神・『狼』の神々は『闇』と『安息』を司っています。確かに闇は容易に恐怖を齎しますが、それだけではないでしょう。気が昂っている時、目を閉じて闇の中にいれば鎮まっていくように安寧もまた与えてくれるのです」

御高説ごもつともだけどよ……目の前でぶらぶらさせないでくれ。

「そうですね……『闇』の魔法の中には人を眠らせるものもありま
すし、その発展型として悪夢を闇に塗り潰して安眠を与える優しい
魔法もあります。ですから闇にあまり悪いイメージを抱かないで
欲しいですよ」

「確かにそう聞くと悪いものじゃないように思えるな」

「逆に悪夢を見せる魔法もありますがね」

「やっぱ怖えよ。」

「冗談はさておき、トモエ殿にその気があれば、いつでも伝授致し
ますので」

「ああ、その時は頼むぜ。少しは興味が出てきたからな」

悪夢が消せるんなら、桜花がまたあの『盗賊』に襲われてもすぐ
に助けられるだろう。

「そうそう、『宿星魔法』を使うには星神教に入会して神々に宿命
を授けて頂く儀式が必要ですので、後で教会宛てに紹介状を認めて
おきましょう」

「こっちもこっちで面倒なんだな……」

俺は、誰に紹介状を宛てるか悩むアランドラ兄ィと湯船の中でさ
っきの商人とじゃれ合う餓鬼共の嬌声を聞き流しながら辟易するの
だった。

朝飯を食い終えて、今日こそ運河を渡れるか、とアランドラ兄いと空を眺めて天候談義に花を咲かせていると、何やらいかつい野郎達がアンカー亭にやって来た。

どうもフェイナン兄イが目的らしく、入り口でフェイナン兄イに対する罵声を口々にがなりたてやがった。

間を置かずに奥から当の本人が慌てて飛び出してくると男達は問答無用でフェイナン兄イを外に連れ出そうと取り囲んだ。

「おいおい、穏やかじゃねえな？ 営業妨害にしても他にやりようがあんだろ？」

俺は何故か羞恥と怒りの表情で顔を赤くしているアランドラ兄イを手で制して男達に声をかけた。

本当なら俺は既に『表』から引っ込んで桜花が『体』を使っているはずだが、どういった腹積もりなのか今日はずっと俺が『表』に出させてもらっている。

「何だ小僧？ これは我らが内々の話、無関係な者は引っ込んでろ！」

判りやすい破落戸（破落戸）のような恫喝に怯む俺じゃないが、“内々の話”ってのが気になった。

「そうはいくかい。アンタらが連れてこうとしてんのは俺の兄弟弟子でね、身内に危害を加えようってんならこちらとしても黙ってる訳にもいかねえんだよ」

俺の言葉に男達に動揺が走り、次の瞬間には全員が憤怒の形相で俺を睨んできたが、雪子姉の怒りを隠した微笑みと比べたらそよ風みたいなもんだ。

あの微笑みながら柔術で全身の関節を極めてくる雪子姉の怖さ……
…思い出すだに身の毛がよだちやがる。

「貴様、霞流とかいう奇っ怪な剣法を遣う輩の一味か?!」

「奇っ怪かどうかは知らねえが、確かに俺も霞流を遣うぜ」

そう答えるや男達の一人が怒りを押し殺すような声で俺に迫った。

「ほう、つまりフェイナンが我らを裏切った要因がここにいてって事か」

裏切るだア? 知り合ってまだ数日しか経ってねえがフェイナン兄イが人を裏切るなんて事が出来る人じゃねえのはよく判る。

「どついつこつたよ?」

「フェイナンは元々は牙狼月光剣の門下生、そして今はソレを捨て、霞流を名乗っている。彼らはその事を云ってるのですよ」

俺に疑問に答えたのはアランドラ兄イだった。

なるほどね、つまりコイツらもその牙狼月光剣の遣い手で、霞流に鞍替えしたフェイナン兄イを恨んでるってわけかい。

「おお！　そこにおわすはまさにアランドラ皇子ではありませぬか！　貴方様もこのフェイナンに思うところがおりでしょう！」

男達はアランドラ兄イの姿を認めると途端に相好を崩した。

逆にアランドラ兄イの機嫌はますます急降下していき、連中を刺すように睨んでいる。

「堕ちたな……」

「は？」

アランドラ兄イの吐き捨てる物云いに男達はキョトンとしている。

「フェイナンが牙狼月光剣を捨て、霞流の門を叩いたのは指導者の教えに感銘を受けたからであって、決して裏切りではない。よしんばそうであったとしてもだ。ソレはフェイナン個人が決めた事であって、師匠も認めた事だ。お前達が口を出す事ではないだろう！」

「し、しかしフェイナンはかつて世界征服を目論んだ邪悪な預言者・ドゥールフェザーを倒した『運河の七戦鬼』の一人・ファンガズ様の子！　そして我ら牙狼月光剣に多大な恩恵を与えておきながら今更他流に行くなど以ての外ではありませぬか！」

分かりやすいな。

要は英雄の血を引き、恐らく他の門弟よりも指南料を多く納めているフェイナン兄イがいなくなる事が嫌な訳か……

確かにフェイナン兄イが牙狼月光剣の道場から去れば箔と金を同時に失う事になるだろうが、なんか考え方が俗物的で気に入らねえ。

「つまりフェイナン兄イそのものより余禄を失う事が嫌ってか？
テメエら何の為に稽古をしてるんだい？」

「ぐっ……黙れ小僧！ 兎に角、先輩である我らに断りもなく道場を去ったこやつ根性を叩き直さなければ示しがつかん！」

「あん？ さっきアランドラ兄イが師匠の許可を得たつつてたじやねえか？ それなのにアンタらが口出しをするのか？ それとも何かい？ 牙狼月光剣つてのは師匠よりも門下生の方が偉いんかい？ どうなんだよ？」

俺の言葉に男達は顔を真っ赤に染めて全身が振るえていやがる。
今にも斬りかかってきそうだ。

だが、あまり挑発的な事を云うのも程々にしないとかな？

牙狼月光剣の侮辱はアランドラ兄イへの侮辱も同義だしな。

「若輩者から云われるのも業腹だろうが、アンタらが門下生が減る事なんざ気にする道理などねえだろ？ 牙狼月光剣は攻防に長けた素晴らしい剣法だ。それゆえ体得が難しいんだろ？ だったらこんな事してねえで道場に帰って修行しろ」

「うむ、今のは本来、私が云うべき事であるがトモ工殿の云う通りだ。フェイナンの意志は固い。ならば、ここで無為な時間を過ごすより道場へ戻るが良い」

男達はしばらく俺とフェイナン兄イを睨んでいたが、アランドラ兄イにまで諭されたのが効いたのか悔しげに踵を返した。

しかし、そこで間の悪い人がやって来ちまった……

「いったい何の騒ぎ？ 厨房にまで声が届いているわよ？」

道着にエプロンというなんとも珍妙な姿の雪子姉が現われた。

ここ数日、悪天候により運河を渡る為の船が出せず、足止めを食ってアンカー亭に流連する事になつちまつたのは前述した通りだ。オーナーは過日の件を恩と感じたのか、宿代はいらないと云つてくれ、雪子姉もそれを受け入れていた。

剣術で金を稼ぐとは、こういう事なのだそうだ。

雪子姉は、妹がブレイズフォード家に嫁ぐとこで大貴族の後ろ盾に得たフェイナン兄イはこの先金貨を何百枚も稼げるようになったのだから、それくらい安いものだと言つていた。

商人は物を売り、芸者は芸を売り、剣客は剣の腕を売る。

「だって、ひもじい思いはしたくないもの。『武士は食わねど高楊枝』ってのはね。別に貧しくても痩せ我慢しろって意味じゃないのよ？ 人前では弱気な事を云うな、弱気な姿勢を見せるなって教えるのだから」

この人は一生食いつばぐれないなと思つた瞬間だった。

しかし何が起こるか分からない旅だ。

だから路銀を稼ぐ為に俺達は日々フェイナン兄イを鍛え、宿の雑用をする事になった。

俺はあまり『表』に出る事はないので桜花が得意の裁縫で旅人の破けた服を繕つたり、子供の面倒を見たりして小銭を稼いでいた。

そして雪子姉と月夜姉は厨房に入り、料理の仕込みを手伝う事にした。月夜姉は毎日俺らの食事を用意してくれていた事からすぐに仕事に慣れた。

雪子姉は流石に盲目とあつて調味料の配置が解らない為、料理を仕上げることは困難と判断されて、魚や貝類の下処理を任された。

しかし流石は剣の達人と云うべきか、目の見える普通の料理人と比べても遜色ない卸し方だそうだ。むしろ並の料理人よりも綺麗に

捌くらしい。

「ユ、ユキコ師範……」

フェイナン兄イの不用意な一言のせいで去りかけた男達が物凄い形相で戻って来やがった。

「師範?! まさかこの女が霞流の主か? フェイナン、貴様、この女の色香に迷った訳ではあるまいな?」

「そんな訳ないでしょう! 私は思うところがあつて霞流の門を叩いたのです!」

男達とフェイナン兄イとの遣り取りに雪子姉は初めはキョトンとしていたが、不毛な云い争いを聞いているうちに眉間に皺が寄って眉が吊り上がっていった。

「貴方達は宿屋の入り口で何を争っているのですか? それではお客様が入りたくても入れないではありませんか! フェイナン殿、貴方もここの跡取りなら自重をすべきです! それから誰かは存じませぬが、その物腰から剣を嗜まれている様子、そんな方々が稚拙な言葉を使うものではありません!」

雪子姉の言葉にフェイナン兄イはもとよりあの荒くれた男達も呆気にと取られて大人しくなった。

「いかにも我らは牙狼月光剣のヴェアヴォルフ道場の門弟であるが……なにゆえ我らを剣士と見たな? コレこの通り皆剣を携えておらぬのに」

今まで黙っていた頭目と思しき男が困惑げに問うと、雪子姉は無邪気に微笑んで見せた。

「いえ、先程から貴方達の足の動きを聞くと如何にも剣士らしい足捌きでしたので……それに実を申せば牙狼だの月光だのと聞こえましたゆえにね」

「いや、恐れ入った。しかし足の動きを聞くとはいささか奇妙な……
……もしか、そなた？」

「はい、お察しの通り、私は生来、光が見えませぬ」

雪子姉の言葉を受けて男達に動揺が走った。

「そなたの事は、女の身で道場主を務めていると聞いてはいたが、まさか盲目であつたとは……」

「ええ、それゆえ門人達にも家族にも迷惑をかけ通していささか心苦しゅうござるが、皆の協力を得てなんとか道場を切り回していますわ」

雪子姉は優雅に微笑むとエプロンを外して、いつの間にかそばに來ていた月夜姉に渡した。

「貴方達の云い分は大体察しがつきます。フエイン殿自身の選択とはいえそちらの兄弟弟子を奪った事には違いありません。このままでは貴方達も抜いた刃を納めるわけには参りますまい。宜しゅうござる。同道いたしますので、貴方達の道場へ案内を願います」

これには男達も目を丸くした。

だってそうだろう？ 場合によっては自分達のせいで霞流と牙狼月光剣との抗争にまで発展しかねないんだからな。

「ユキコ殿？ 本当に行くのですか？ 確かに我が師は人格者ではありませんが、門人達の中には気性の荒い者も少なからず存在します。それと云うのも各地で問題を起こす悪童達を集め、剣術を通して彼らを更正させる目的で師は道場を開いているからです。つまりヴェアヴォルフ道場が剣術道場であると同時に帝室からも助成金を出している更正施設でもある事を意味しています」

なるほど、つまり目の前にいる男達もそういった悪童達同様に教育されたクチってところか。

「あら？ 私の霞流道場にも気の荒い人足や大工、侠客や先の話にも出てきた更正目的の悪童も多数おりますわ。ですから心配には及びません。私とて伊達に荒くれ者やそれ以上にタチの悪い老獪な妖僧を相手にしていませんからね」

雪子姉はいたずらっぽく笑う。

「それに目的は先方への挨拶ですから、余程の事がない限りは霞流と牙狼月光剣が相争う事態にはならないと思いますわ」

確かに雪子姉はこういった礼儀を重んじる人だが、道場をやめるやめないはさっきのからの話にあるように本人の意志なんだからそんな挨拶なんて無用だろう。

恐らく自分達が異世界から来た異邦人である事も本来不要な挨拶へと駆り立てているのかもしれない。

「ユキコ師範、またも面倒事に巻き込んでしまい、申し訳ありませ

ん」

「お気になさらずに。それにたまには他の道場を見学するのも良い修行になりますわ」

謝るフエイナン兄イに身内でもドキリとするほどの艶っぽい笑顔を向けると、先程の男に再び案内を請う。

「承知した……ついて来られよ」

男はゆっくりと歩き始めた。

いやはや、針の筵つてのはこの事だろう。
ヴェアヴォルフ道場に着くや否や、俺達は道場へ通されて稽古をしている彼らの視線に晒されていた。

しかし異世界だろうと他流だろうと素振りが基本なのは変わらないみてえだな。

皆、熱心に木製の大剣と小刀を振り回している。

思うに逆手に持った小刀で防御、牽制をして大剣で仕留めるって剣法らしい。

結構、面白いかも知れねえな。

「如何かな？ 当道場は？」

かけられた穏やかな声に、そちらを見ると立派な顎髭をたくわえたガタイの良いオッサンが木剣を片手に愛想良く笑っていた。何気なく立っているように見えるが、腰はどっしりとしており、丸太のような足は根でも張っているかのように安定していやがる。もし戦えば良くて相討ち、いや確実に俺が負けるだろうな。恐らくはこのオッサンがこの道場の主だろう。

「ええ、皆の「強くなろう」という熱心さが伝わってきますし、何より活気に満ちているのが好ましい」

「そう云って頂けるとこちらとしても嬉しい限りだ。申し遅れたが、俺が当道場の主・ケグルネク「ヴェアヴォルフでござる」

「霞流剣術師範・霞雪子で御座います。此度、そちらのご高弟に無理を申したことをお詫びいたします」

雪子姉が名乗るや否や、俺らに向いていた視線に殺気が込められた。

だが、雪子姉もケグルネクのオッサンも平然としてやがる。月夜姉までも涼しい顔で茶を啜っている。

「なんのなんの！ むしろ詫びねばならぬのは俺の方でござる。あの莫迦共の勝手な振る舞い、師として恥ずかしい」

「いいえ、形だけ見れば私は兄弟弟子を奪ったようなものですからね。恨まれても仕方がないと思いますわ」

雪子姉の涼しげな微笑みに周りの連中の顔が赤く染まっちまってる。殺気なんて完全に霧散してやがるぜ。

まったく修業が足りねえ奴らだ……すまん。俺も正直、頬が火照ってる。

「話はフェイナンから聞いておる。奴がここを去ったのは奴自身が決めた事。こちらが恨むのは筋違いでござる」

ケグルネクのオッサンはドカツと床に座ると髭に覆われた顎をポリポリ掻きながら続ける。

「それからな、ユキコ殿」

「はい」

「そなたがその事で当道場に詫びに来られるのもまた筋違いでござる。フェイナンはここを去った。そしてそなたの流派の門を叩いた。ただ、それだけよ」

「……ははっ」

ケグルネクのオッサンに云われて雪子姉は頭を下げた。
デカいなあ……今まで俺の最終目標は雪子姉だったが、ケグルネクのオッサンの器量もまた見習うべきだ。

俺が勝手に感心していると、不意にケグルネクのオッサンが立ち上がり、門人達に声をかけて道場の両脇へと下がらせた。

「さて、折角来て貰って何の持て成しもせずに帰すのはちと当道場の沽券に関わる。そこでだ……」

ケグルネクのオッサンは弟子達から二人の名を呼んだ。
呼ばれてオッサンの横に現われたのは、さっきアンカー亭に来た

男達の頭目と長い銀色の髪を雪子姉のように頭の後ろで縛った長身の男だった。

「如何かな？ ユキコ殿もここで少し汗を流して行かれぬか？」

そう来たか。

だが、ケグルネクのオッサンの顔にあるのは他流の女を打ちのめそうという狡猾な表情じゃなかった。

むしろこの左右に控えている二人の為に心を鬼にしてるって感じだ。

「この者達は当道場でも抜きん出た存在でござる。しかし他流とは仕合った事がないゆえ、ユキコ殿に一手御指南願えれば幸いにござる」

そこまで云ってオッサンは雪子姉の顔を見る。

雪子姉は穏やかに微笑んだまま座して動いていなかったが、全身に気が巡らせていつでも戦える状態になっていた。

霞流は如何なる状況にも対応できる剣術だ。つまり今のように入れたまま瞬時に敵を斬る技も存在する。

雪子姉は既に万全の体勢を取っているんだ。

「ユキコ殿？」

今まで黙っていたアランドラ兄イが雪子姉の返事を促す。

「幸いなのは私の方です。他流に触れるという事はそれだけで十分な修行になり申す。ましてやご指南頂けるとはこの霞雪子、一剣客としてこれに勝る喜びはありません」

そう答えると雪子姉は立ち上がって愛用の杖を帯に挟んだ。

「決まりでござるな。お前達もユキコ殿の胸を借りて剣術の厳しさを改めて知れ！」

「ハッ！！」

師の激励に左右の男達が前に出る。

雪子姉の方も前に出て体内の気を充実させる。

「霞流剣術師範・霞雪子！ 牙狼月光剣の高弟二人より一手ご指南賜わりまする！！」

こうして霞流と牙狼月光剣との他流試合が始まった。

まったく、どうしてこうなるんだろうなあ？

基本的に雪子姉も剣術の仕合が好きなんだから仕方ないけどよ。むしろ心配なのが雪子姉がやりすぎて二人に大怪我をさせないかって事なんだが、いざとなったら俺とアランドラ兄ィで止めれば良いか。

それより気になるのがあの銀髪の兄ちゃんだ。さつきからアランドラ兄ィに蔑みの視線を送ってるし、アランドラ兄ィも意図的に無視してるのがありありと解る。

いったい二人は如何なる実力を持っているのか？

銀髪とアランドラ兄ィとの間にはどのような関わりが隠されているのか？

それはまた次回の講釈にて。

第壱拾玖章 誇り高き狼との邂逅（後書き）

霞流、他流道場に赴くのを巻。

異世界の剣術の一つ、牙狼月光剣と他流試合をすることになりました。

果たして試合の結果は如何に？ といった所でしうか。

それと、ずっと剣客小説もどきを書いてましたが、今回異世界の魔法について説明を書いてみました。しかし、私の拙い脳みそで考えたものですし、ざっと書いてしまった感もありますので皆様に伝わったか気になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7065x/>

雪月花日月抄

2011年11月18日23時24分発行